魔術学院騒動記

いさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔術学院騒動記

【コード】

N0052L

【作者名】

いん

【あらすじ】

ウィズムント魔術学院には隔離教室と呼ばれるクラスが存在している。問題児ばかりのそのクラスに編入する事となった優等生のリーユン。彼の平和な学院生活はその日から一変する事に……。

第一話 「隔離教室」 第一幕（前書き）

成績優秀なリーユニルルデイヴァイサーが、何故か隔離教室の異名を取るドール教室に編入することに。

第一話 「隔離教室」 第一幕

科学の代わりに魔導が発達し、翼の生えた者、獣の姿に変わる者、そして竜が共に暮らす世界、セフィラ。そこに存在する六つの大陸の中で最大の面積を誇るルドレイドの南東にはオーファン大海と呼ばれる海が広がっている。ルドレイド大陸から船で丸一日の距離に小さな大陸が浮かんでいた。大陸と呼ぶにはあまりにも小さなその島は、島全体で一つの国家を形成している事から大陸として扱われている。国の名はウィズムント。魔法大国と冠される新興の国だ。

この小さな大国が他国と同等に渡り合えている理由の一つとして人材の質の高さが挙げられる。魔国ウィズムントには土地の三分の一を使用した巨大な施設がある。それが『ウィズムント魔術学院』だ。世界各国から優秀な魔術師を教師として招き入れ、生徒の指導に当たらせている。そうして育て上げられた優秀な魔術師は世に出て様々な活躍をし、その結果、短期間の内に魔国の地位を飛躍的に向上させた。

二つ目の理由。それは魔術学院の研究機関で日夜開発される様々な道具である。中でも魔導器と呼ばれる物が魔国に莫大な利益をもたらした。高度な技術力と多種多様な魔術の知識とが必要とされる魔導器の開発は、現段階では魔国の専売特許であった為だ。

およそ上記の様な理由で、この小さな魔法大国ウィズムントは各国から一目置かれているのである。

季節は春である。

ウィズムントではこの時期になると国中がにわかには活気付く。理由は簡単で、魔術学院の新たな年度が始まるからであるが、国民の八割近くが学院と何らかの関係を持っていると言っただからそれも

領ける話である。港には他国からの入学者を乗せた船が続々と到着し、益々新しい季節の到来を告げていた。賑やかなのは街中のみに限らず、学院内でも慌ただしい空気が流れていた。

院生が住まう寮内も、外に負けず劣らずの喧騒に包まれている。一年間世話になった部屋を清掃し、新たに一年世話になる部屋へと荷物を運ぶ。毎年この時期恒例の部屋替えである。寮の部屋は教室単位で固められる為、進級する者、退学を余儀なくされた者、特別な理由で同学年内の別教室に移る者、理由は様々だがこの時期は必ず誰かしらが部屋を移る事になる。

荷物を纏めた箱が三個並べて置いてあるだけの部屋。その中央に佇んで感傷に浸っている少年も部屋替え組の一人だ。少しくすんだ金色の髪に、蒼色の眸。雪に閉ざされた北方のローズル大陸に多く見られる人種である。十七と言ふ年よりも幼く見える小柄な体躯を深紅のローブに包んだ少年は、一番身近にある箱をよるめきながらも何とか持ち上げ、落とさぬよう留意して入り口に置いてある小さな台車へ丁寧に乗せる。学院に入って七年。その間に学んだ事は全てこの一つの箱に詰め込まれている。それは少年の宝物、と言うよりは少年の青春そのものであった。その箱の上に生活用品や衣類の入った箱を積み上げると、少年は今一度自室であった部屋を振り返った。

「二年間、お世話になりました」

そう呟いて頭を下げた後、踵を返して部屋を後にする。扉を閉めると同時、聞き慣れた声が少年を呼び止めた。

「リーユン！ リーユン！！ルルデイヴアイサー！！」

リーユンと呼ばれた小柄な少年が声の聞こえた右手へ視線を巡らせると、黒髪に黒い瞳という典型的なウィズムント人である友人、ジユン＝エンシェンが慌てて駆け寄って来る姿が視界に飛び込んで来た。

「どうしたの？ そんなに慌てて……」

普段は落ち着いていて、大人びて見える彼が珍しく動転している

のに怪訝な表情を浮かべ、リーユンは浅く首を傾がせる。リーユンより頭一つ分大きいジユンは、友人の顔を覗き込んで顔を寄せると低く押し殺した声で告げた。

「隔離教室」

「は？」

リーユンの首の角度が更に増す。

ウィズムント魔術学院には幾つかの教室がある。教室と言うと授業を受ける部屋そのものを指す場合もあるが、この学院では主にクラス、学級の事を教室と呼んでいる。担任一人につき生徒八名前後それが平均的な教室の人数だ。平均的、と表現するからには勿論其れに当て嵌まらない例外が存在する訳で、ジユンが口にした隔離教室も其れに該当する。正しくはドール教室と呼ばれるその教室は、カイリッドール教師と四名の生徒で形成されていた。

リーユンが全く事情を飲み込めていないらしい事に苛々して、ジユンは短く整えている黒髪を掻き混ぜ、不機嫌な表情で口を開く。

「お前、次のクラス割りが発表されたの、未だ見てないのか？」

「え、うん。鍵を返しに行くついでに見ようと思って……」

リーユンは答えながらも嫌な予感を感じていた。普通に考えれば絶対にあり得ないその予感は、友人の口から事実としてリーユンに告げられるのであった。

「お前、……隔離教室編入になってたぞ」

言い難そうなジユンの言葉が脳に浸透するのに少々時間を要したが、その意味をしっかりと理解すると同時にリーユンはその場に力無く座り込んでしまった。

ドール教室が隔離教室の異称で呼ばれているのには相応の理由がある。カイリッドール教師含め、教室の皆が一癖も二癖もある要注意人物ばかりなのだ。更に言えば実力は並大抵の者では適わないと言っただから尚のこと性質が悪い。つい先月も学院の施設の一つである格闘訓練道場を半壊させたともっぱらの噂だ。理由は公にはされていないが、どうも隔離教室生徒間の模擬試合が原因であるらし

い。たまたま近くに居合わせた教師が止めに入ったが、その教師は全治二週間という怪我を負ったそうだ。現在格闘訓練道場はほぼ復旧しているが、本格的な使用許可が下りるのはもう少し先になりそうだった。

そこで、疑問が生じる訳である。

品行方正で非の打ち所のない優秀な生徒であるリーユン＝ルルデイヴァイサーが何故隔離教室編入なのか。

ウィズムント魔術学院を正式に卒業するには一般基礎学年を三年、下級教室を二年、中級教室を二年、上級教室を三年、一度も留年せずに通ったとしても十年は掛かる。通常は昇級テストの度に一、二度は落ちるものであるが、リーユンは一度も試験に落ちることなく最短で上級教室まで駆け上ったのだ。才能も実力も、其れを活かす機転もあるが、決して奢る訳でもなく肅々と自己鍛錬を続けてきた。

(その結果が……隔離……)

リーユンが、いや、リーユンだけではなく、彼を知る者皆が目を疑うのも頷けるであろう。

温み始めた風が深緑の香りを運んでくる。呆然と座り込む少年にも、難しい顔で心配そうに友人を見つめる少年にも、等しく其れは訪れる。

季節は春である。

「納得いきません」

ウィズムント魔術学院本館の南、学院主要施設の玄関口にもあたるこの南棟の一室で、不服を隠しきれない声音が発せられた。其れを受け止めるのは部屋の主、白髪が少し交ざり始めた黒髪と黒い瞳、純白のローブに身を包んだ四十代前半のウィズムント人の壮年だ。中級教室の一つを受け持つ魔術師キリ＝メイシャーは、数日前まで自分の教え子であった少年を見やる。

「納得、いかないかね」

リーユンの言葉を反芻するのは愉快そうな声。キリは口端を持ち上げて、相変わらずの飄々とした態度でリーユンに対峙する。その普段と変わりのない姿がこの時ばかりは憎らしい。リーユンは珍しくキリに食って掛かった。

「いくわけがないでしょう。どうして僕を隔離教室に……いえ、ドール教室に推薦したんですか」

教師の前で思わず俗称を使ってしまった事を恥じ、リーユンは視線を僅かに伏せて言い直す。そんなリーユンに苦笑を零しつつも、優しい眼差しを湛えてキリが口を開く。

「カイリッドールは優秀な魔術師だよ。何せ、数少ない黒魔術師ブラックウィザードの称号を与えられた人物だからね」

そうなのである。カイリッドールは全世界に二十名程しか居ない黒の地位を持つている。魔法大国と謳われるウィズムントでも、黒と冠される人物は七名しか居ない。

この色による階級分けは魔国ウィズムントが中心となって査定と認定を行うが、主要国の殆どが階級分けを受け入れている。要するに、上位の地位を得た魔術師は何処の国へ赴いても其れ相応の特別な扱いを受けられると言うことだ。階級は十段階で、一位から黒、白、青、赤、緑、紫、七と八位が茶、九と十位が黄とされている。ウィズムント魔術学院を卒業すれば青の位までは得ることが出来るが、それ以上となると並大抵のことでは認定されない。勿論、学院を卒業する事自体が難関である事にも述べた通りで、青位以上の魔術師は数える程しか存在しない。魔術学院院长は黒位の上、銀位を冠しているが、それはまた別の機会に語ることにしよう。

リーユン＝ルディヴァイサーは気を落ち着かせる為に大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出した。

「……上級教室の黒魔術師ならMEM＝シャウレインドッティ教師が居られるじゃないですか」

声を荒げない様に抑えている為に、リーユンの幼さの残る声は低

く掠れている。リーユンの次の教師はメム「シャウレインドツティ
であろう、という予想は万人が考えていた事で、リーユンも例に漏
れず誰に言われた訳でもないがそう思っていた。キリは何人かの同
僚にも聞かれた問いを耳にし、髭を蓄えた口元に笑みを浮かべて座
り心地の良い椅子から立ち上がる。数歩リーユンへと歩みを進め、
おもむろに少年の頭部へゴツゴツと骨張った大きな手を乗せた。

「リーユン。彼は、……カイリ教師はな、お前にとって今一番必要
な事を教えてくれる」

キリは我が子を慈しむかの様な眼差しでリーユンを見つめ、柔ら
かな金糸を優しく撫でる。

「私では上手く教えてやれん事だ」

そのキリ教師らしからぬ台詞の内容と語気の弱さに、リーユンは
思わず恩師の顔をまじまじと見つめてしまった。リーユンが中級教
室で二年間教わって知ったキリ「メイシャー」という教師は、兎に角
強靱で厳格な人だと言ったことだった。もちろん厳しいだけではなく、
生徒各人に適切な対応をしてくれる気配りの人でもあり、何より己
自身に一番厳しい人でもあった。

そんなキリ教師が自分では教えられないと断言する事は、リーユ
ンにとって驚き以外の何物でもない。そして恩師の口からそんな言
葉を引き出してしまったのは他でもないリーユンだ。

(……そうだ。先生が意味もなくドール教室に僕を推薦する筈が無
いじゃないか。何時だって生徒のことを一番に考えて下さっている
のに、確かめた訳でもない噂を鵜呑みにして食って掛かるなんて……
。僕は何て失礼な事を)

血の気が引く音が聞こえるのではないかと思う程に、頭に上って
いた熱が一気に下がっていく。リーユンは慌てて頭を垂れた。二年
間の恩有る相手に暴言を吐いて、謝っただけで許される問題でもな
いとは思うものの、謝らずには居れなかった。

「キリ先生が僕を思ってお決めになった事なのに、差し出がましい
ことを言っただけで申し訳ございませんでした」

リーユンは恥ずかしさと申し訳なさのあまり耳まで赤くし、情けなくて涙まで溢れそう、尚のこと頭を深く下げる。

「……ふう……」

キリがやれやれとでも言いたそうな溜息を吐いた。その後、リーユンはゴツゴツとした大きな手に頬をつねられ、顔を上げさせられる。

「……い、……痛いです……」

両頬を引かれ、唇が歪んだ状態では上手く発音出来ずに間抜けな声で苦痛を訴えるが、キリはジツとリーユンを見下ろし、頬をつまんだまま蓄えられた口髭を揺らして言葉を紡ぐ。

「お前の良い所は素直でよく気が付き、決して驕らない所だ。しかしな、長所と短所は紙一重だという事をよく覚えておきなさい」

厳格な口調で告げたキリは、そこで漸くリーユンの頬を解放する。リーユンはひりひりと痛みを訴える頬を両手で包み、見上げる姿勢で体格の良い教師と視線を合わせた。キリは普段通りの余裕の笑みを浮かべて続ける。

「まあ、隔離教室の名前は伊達じゃないからな。それなりの覚悟はして行く事だ」

結局噂は本当なんだと、痛む頬を撫でながらリーユンは思う。ただ、噂に隠されている何事かがあるのもまた事実らしい。その本質を知っているからこそ、キリは隔離教室へリーユンを推薦したのだろう。

（なら、僕がすべき事はひとつだ）

リーユンはそれを見てやろうと決心した。キリは自分にならば成し遂げられると信じているはずだ。その期待に応えることがキリに対する恩返しになるだろう。

リーユンは気を引き締めると、直立の姿勢を取ってしっかりとした声で告げる。

「二年間、厳しい教師に鍛えて頂きましたから、簡単には根を上げませんよ」

リーユンにもいつもの笑顔が戻ってきていた。キリは頑張れと伝える代わりに僅かに頷いてみせる。師と弟子は視線を交わし合い、暫し、二年間で培ってきた時間の流れを思う。

「……お時間を取らせて済みませんでした。先生、二年間ありがとうございました」

心からの感謝を伝え、失礼しますと暇の挨拶を口にしながらもう一度頭を下げ、キリ教師の部屋を後にする。荷物を載せた小さな台車を引きながら向かう先は、隔離教室と呼ばれる小さな建物。これからリーユンが三年間学び、寝泊まりする事になる曲者の巣窟である。

第一話 「隔離教室」 第二幕

魔法大国ウィズムントの国土の三分の一を占める施設「ウィズムント魔術学院」。その魔術学院には本館と幾つかの別館が存在し、本館には大きく分けて五つの校舎が建てられている。

正門を潜つてすぐの南棟には一般事務受付や応接室、職員室、各教師の私室、客の為の宿泊施設等が詠えられている。東棟には学院生徒達の寮や学院食堂、オープンテラス、文具や勉強に必要な道具類の購買部、書店、図書館、スポーツジム等の娯楽施設といった、生活に密着したスペースが造られている。

そして西棟だが、ここは棟と呼ぶよりは体育館と表現した方が分かり易い様に思う。所謂、実技実践の為の闘技施設だ。屋内に格闘訓練道場と魔術訓練道場が一つずつと、屋外に大小四つの闘技場が用意されている。それから北棟。ここは授業を行う為の校舎だ。各教師に最低一部屋ずつ、実験室や特別講義用として使用される多目的ルーム等、合わせて約七十程の部屋が用意されている。

それら東西南北の校舎に囲まれ、更に厳重な警備に護られてそびえ立つのが中央棟、最新の設備が整った研究室だ。此処はウィズムントにとって心臓部であり重要な収入源でもある。棟内部には様々な実験施設、研究室、それから研究員が寝泊まりする為の仮眠室が設置されている。

さて、問題のドール教室、通称隔離教室だが、この教室は特別に建物を丸々一つ与えられている。その建物は学院の北西奥、緑の木々が生い茂った辺りにぼつんと建築されていた。

リーユニールルデイヴァイサーは二階建ての木造校舎を見上げ、本日何度目かの溜息を吐く。リーユニが学院に入学して七年目。初めて目にした隔離教室は、良く言えば古めかしい、悪く言えばおんぼろという様な代物であった。

荷物を載せた台車を傍らに置き、軽く呼吸を整えて気持ちを整め

る。そうしてリーユンは意を決した様子で扉を開けようとドアノブに手を伸ばす。

ドロ……。

ノブに触れるか触れないかと言う所で、扉の鍵穴からゲル状の物体が溢れ出て来た。

「う……わ……ッ!?」

リーユンは咄嗟に腕を引くと同時に、数歩後退って扉との距離を置く。ゲル状の物体は徐々に質量を増していき、直径が三十センチを越えた辺りでボトリと鈍い音を立てて地面へ降り立った。薄緑色をした半透明で半液状のそれはプルプルと細かく震えながら左右に揺れ動いたかと思うと、いきなりリーユン目掛けて跳躍する。リーユンは落ちて着いて体内に魔力を満たし、魔術を発動させる為の術式を練り上げる。魔力を有する者同士が知覚できる赤を基調とした色彩の公式がリーユンの周囲で複雑に絡み合い、一瞬の内に編み上げられていく。赤は益々鮮やかな輝きを放ち、力強い魔力の手応えが満ちるのを見計らって、リーユンは魔術を発動させる呪を口にする。

「ファイアーボール！」

前方へ突き出した両手の平から燃えさかる炎の玉が放たれる。炎はゴウと唸りを上げてゲル状の生物を包み込み、一際大きく炎を揺らがせた後にふつと消えて無くなった。

「何で……スライムが……」

炭と化した生物と木造の扉を交互に見比べて、リーユンはごくりと唾を飲み込んだ。隔離教室の中は魔物や魔法生物で溢れかえっているのかも知れない。そんな不安がリーユンの頭を過ぎるが、二、三度頭を振る事で無理矢理追い払う。

今度は先程よりも慎重にノブを掴むと、そつと、用心深くノブを回して扉を開いていく。

「……失礼します」

訪問の挨拶を控えめに伝えたり、リオンは、扉と壁の隙間から中を覗き込んで思わず固まってしまった。魔物や魔法生物で溢れかえっている方がある意味マシだったかも知れない。

リオンは現状を確認しようとして扉を完全に開き、改めて視界に飛び込む惨状に目を奪われる。

エントランスであるはずのそのスペースは十分な広さを有しているにもかかわらず、完全なる物置と化していたのだ。辛うじて二階へ続く階段と左右の扉への道が開かれてはいたが、実験器具やら書物やら、どう見てもガラクタとしか思えない様な物やらが絶妙なバランスで積み重ねられている。当然、何時崩れてもおかしくない有様だ。

リオンは再び溜息を吐いた。溜息の数だけ幸せが逃げるという迷信が本当ならば、これから此処で生活する三年間は間違いなくリオンの幸福を根こそぎ奪っていくであろうと思われた。

カイリッドール教師や隔離教室の生徒達と出会う前から疲れ果ててしまったリオンだが、此処で呆けていても仕方がないと思い直して項垂れ気味だった顎先を上げ、口を開く。

「ドール先生はいらっしゃいますか？」

リオンは普段よりも幾分大きめの声音でカイリッドール教師を呼ぶ。待たされる事数秒。ダダダダツと二階の通路を走る音が聞こえたかと思うと、エントランス正面の階段から転がり落ちる様な勢いで子供が駆け寄ってきた。

十歳くらいの外見をした少年はくりくりとした黄金色の眸を更に丸く大きく見開いて、好奇心丸出しでリオンを見上げる。少年の薄い水色の髪からは二本の角が覗いていて、背後では同色の尾がゆらゆらと揺れ動いていた。竜族である。

竜族はルドレイド大陸の最西端、ギムリギムル山脈に住んでいる種族だ。標高四千メートル以上の山々が連なるギムリギムル山脈の頂は平らになっており、鬱蒼とした森に覆われている。其処では数種の竜族が小さな小競り合いを起こしてはいるものの、比較的平和

に共存しているらしい。少数民族である彼らは他種族との交流を極端に嫌う為に詳しい生息は知られていない。

リーユンの目の前にいる少年は竜族の中でも更に希少な小竜族と呼ばれる一族だ。竜族は得てして人よりも長命である訳だが、小竜族はそれに輪を掛けて長寿な種族であった。それ故に不老長寿を欲しがると欲深い人間に乱獲され、以来人里に出る者は居らず、ギムリギムルにしか生息していないと言われていた。が、やはり中には変わり者も存在するらしく、好き好んで人の多いウィズムントまで出て来ては魔術を習ったりもする訳である。

リーユンは記憶の中から隔離教室生徒のデータを探す。小竜族と言うだけでも話題に上がると言うのに、尚且つ隔離教室生徒の中でもトップを争う問題児とくれば思い出すのは容易かった。

「クウ＝ラ＝ルウ君、ですよね」

リーユンの呼び掛けに、小竜族の少年はこくこくと幼い仕草で頷いた。可愛らしい小柄な外見と見た目を裏切らない子供らしい所作からは、噂に聞く様な問題を起こすなんて俄には信じ難かった。しかし現実には格闘訓練道場は半壊している訳だから、用心するに越した事はない。

リーユンは相手に分からない程度に身構えながらカイリ＝ドール教師の所在を尋ねた。

「今年度からドール教室でお世話になるリーユン＝ルルデイヴァイサーです。カイリ＝ドール教師に挨拶がしたいんですが、何処に居られるか教えて頂けますか？」

「なーんだ。誰かが問題でも起こしたのかと期待したのに。ちえっ。まだ俺が一番ポイント高いんじゃない。何でみんなもつとこっ……」

丁寧な問いに対して返されたのは、あからさまに興味を失った表情と投げやりな言葉だった。ルウは一頻りぶつぶつ言った後で、思い出した様にリーユンを見上げて見るからに面倒臭いと言った様子でぼそつと呟く。

「ああ、カイリ先生な。……ソコ」

リーユンはルウの視線を辿って「ソコ」と示された場所を見る。階段の横、他と変わらず荷物が山積みになっている一角。唯一他と違う所を上げると言われれば、何時から埋もれていたのかは分からないナマモノらしき腕が荷物の隙間から生えている所だろうか。

「……ッ！！？」

一瞬思考が凍ってしまったリーユンだったが、慌てて荷物の山へ駆け寄ってその腕を掴むと、埋もれた人物を引っ張り出そうと努力する。しかし直ぐに崩れそうな見た目とは裏腹に荷物の山はビクともせず、カイリッドール教師を引きずり出す事は不可能だった。

「ドール先生、しつかりして下さい！」

救助が不可能だと悟ったリーユンは掴んだ腕を揺さ振りながら大声で呼び掛ける作戦に変更した。黒魔術師と呼ばれる程の教師なのだから、気が付きさえすれば自力で何とか脱出してくれるだろう。しかし、その行為は直ぐに横から遮られた。

「それじゃあ何時まで経っても起きないよ。どいてな」

小竜族のクウ＝ラ＝ルウだ。ルウはリーユンを横へ押し退けると、唐突に魔術を編み始めた。リーユンが止める暇もない程の驚異的なスピードで紫紺の術式を編み上げたルウは、右手を前方へ、つまりは自分の師が埋まっている山へ向けて術を発動させる為の言葉を嬉々として紡ぐ。

「ライトニングボルト！」

ルウの右手から凄まじい電流が迸る。まるで激しくのたうつ蛇の様に光が錯綜しながら「ソコ」に直撃した。リーユンは急いで編み上げた魔術の防壁で身を守ったが、それでも両腕が感電した様に痺れている。まともに喰らったら……と思うとぞっとする。

電流と光が収まると、吹き飛んだ荷物が辺り一面に散らばり落ちる。最初に見た時と殆ど代わり映えしないと言ってしまえばそれまでなのだが、ただ一つ驚いた事に、あれだけの電撃を喰らっているにもかかわらず、書物等には一切焦げや傷が付いた様子が無かった。（対魔術防御が掛けられているのか？）

リーユンは無傷の荷物達に興味を引かれつつも、今一番の心配事に視線を向ける。荷物が吹き飛んでばかりと空いた空間。其処には黒い衣服に身を包んだ一人の男がだらしなく転がっていた。恐らく、いや、間違いなくこの人物が黒魔術師であり上級教室担任、カイリ＝ドール教師なのであろう。

伸ばしているのかただ単に切るのが面倒で伸びてしまったのか、肩に届く程のぼさぼさの黒髪、ウイズムント人にしては色白の肌、程良く鍛えられた長身。パツと見た所心配する様な傷や火傷は無さそうだった。……頬が少し煤けてはいたが。

「だ……大丈夫、……なの？」

リーユンは視線をカイリ＝ドールに注いだまま、恐る恐ると言った様子で隣に立つ問題児に問い掛けた。

「大丈夫だろ。此処までやれば流石にちゃんと目を覚ますって」

クウ＝ラ＝ルウのずれた返答にリーユンが再度口を開こうとした所で、むくりとカイリ＝ドールが上半身を起こした。カイリはボーンと周辺を見回して、目の前の少年二人を見比べて頭を掻く。ぼさぼさの黒髪が更に鳥の巣の様相を呈し始めるのを、リーユンはただ黙って眺めつつカイリ＝ドール教師の第一声を緊張の面持ちで待った。

やがて何事か思い至ったらしいカイリ＝ドールはポンと両手を打つと、視線をリーユンへ向けて思いの外しっかりとした声音で告げる。

「何時軟派したのか全然覚えて無いんだが、職場まで押しかけられるのは困るな。仕事が終わってからならおじさん喜んでお付き合……くおはあッ！」

カイリの寝言を遮ったのはルウの右手から放たれた魔術だった。「こら、変態教師。とうとう男の教え子にまで手を出すつもりか。目エ覚ませ」

魔術の直撃を喰らって後ろに仰け反った首をかくんと正面に戻すと、カイリは両手で長い前髪を掻き上げて後ろへ撫で付けた。かな

り整った顔立ちを不快そうに歪めてルウを睨み付ける。

「お前、また室内で魔術をぶっ放したな。しかも二度も」

「お、起きない先生が悪いんだろ！」

ルウは憮然と言い返すがカイリは全く取り合う様子無く、ポケットからメモ帳とペンを取り出して「クウ＝ラ＝ルウ +1」と書き付けた。

「理不尽だ！ 新入りに親切にただけなのに、何でプラスが付くんだよ！」

尚も言い募るルウの抗議を完全に無視してカイリはゆっくりと立ち上がると、衣服の埃を叩いて払い、リーユンの正面に立った。口の端を持ち上げどこことなく邪悪な微笑を浮かべ、リーユンに右手を差し出して握手を求める。

「ようこそ、隔離教室へ」

「初めまして、リーユン＝ルルデイヴァイサーです。お世話になります。よろしくご指導お願いします」

自ら蔑称を使う教師に面喰らいながらも、リーユンは自分も右手を持ち上げて握手に応じ、挨拶の言葉を口にする。台詞の語尾に合わせて頭を下げようとしたのだが、カイリにジッと眼を見つめられてタイミングを逃してしまった。さぞや居心地の悪そうな表情を浮かべて居たのだろう。カイリはポンとリーユンの頭に手を乗せて苦笑を零した。

「キリの教え子か。……俺は堅苦しいのは苦しいから嫌いなんだ。ま、気軽にいこうぜ」

それからまだ抗議を続けているルウや、いつそ清々しい程に散らかっているエントランスへ視線を向けて、

「じゃないと身が持たないぞ。俺からの最初の教えだ」

と、肩を竦めながら付け加える。リーユンはその言葉を肯定するかそんな事は無いと否定の言葉を紡ぐか迷ったものの、結局は素直に頷く事しか出来なかった。

「で、お前の部屋とか此処での授業とか生活とかについてなんだが

……。そろそろタキが帰ってくる頃だからそいつに聞いてくれ」

「タキ……」

リーユンは聞き覚えのある名前に記憶を手繰る。案の定ルウと同様に直ぐ引つ掛かった。タキィヤンフウ。長い黒髪を綺麗に結い上げ、真つ直ぐに背筋を伸ばして立つ姿が印象的な美少女だ。

彼女の姿を脳裏に思い描いた所で、パンツと乱暴に扉が開け放たれる。勢い良く開いた木製の扉は壁に当たって悲鳴を上げるが、それを掻き消す大声を上げるのは先程リーユンの脳裏に居た美少女だ。せつかくの整った顔が台無しになる位に凶悪な表情を滲ませ、少女は愛らしい薄桃の唇を開いて悲痛に叫んだ。

「マリアンヌちゃんが居ないわ！！」

第一話 「隔離教室」 第三幕

マリアン又ちゃんが居ない。

それがとてつもなく重大な事柄であるかのように黒髪の美少女、タキィヤンフウは言った。しかしながら少女が期待していた反応が返される事はなく、新顔の一人は事態が飲み込めずに呆然と少女を見つめ、師匠は全く興味を示さず大きな欠伸を一つ零し、同級生の一人に至っては少女の登場にさえ気付いていないかの様に五月蠅く喚いている。

タキィヤンフウは怒りのあまりワナワナと震える四肢を何とか抑え、もう一度口を開いた。

「マリアン又ちゃんが居ないのよ」

先の叫びよりは抑えられた、落ち着いた声音の第二声ではあつたが、タキの怒りの度合いが先程よりも上がっているであろう事は容として知れた。リーユンはどう対応して良いのか分からず、助けを求める様に隣に立つ長身の教師を見上げる。リーユンの視線に気付いたのかは不明だが、カイリはタキの背後を指で指し示して欠伸を噛み殺しながら不明瞭な言葉を紡ぐ。

「マリアン又なら其処で消し炭になってるぞ」

冷たい風が三人の間を吹き抜けた。実際には風など吹いてはいないのだが、タキの立つ扉の辺りから底冷えする様なオーラが流れてくるのだ。先程までタキの登場に気付かず喚いていたルウも押し黙る程の、殺気。

「俺じゃないぞ!？」

ルウがハツと我に返り自身の潔白を叫ぶ。どうやらルウはかなりの前科があるらしく、タキの視線と殺気は主にルウに注がれていた。呆気に取られていたリーユンだったが、ルウが濡れ衣を着せられそうになっているのを黙って見ている訳にはいかない。リーユンは一

歩踏み出してルウとタキの間に割って入ると、真っ直ぐにタキを見つめてから頭を下げた。

「ごめんなさい。スライムを燃やしたのは僕です」

リーユンの言葉を聞いた瞬間、タキが一気に魔力を編み上げる。冷静さを欠いた乱雑な術式であったが、感情が籠もっている分編み込まれた魔力は半端ではない。リーユンは反射的に防御の魔術を展開させようと魔力を満たす。

「そこまで」

カイリッドールのやる気のない声と同時にタキが編み上げていた術式が唐突に弾けて消える。リーユンが溜めていた魔力も同様に何処かへと四散した。どうやらカイリが何かしたらしい。タキは怒りの持つて行き場を無くし、キツと鋭くカイリを睨み付けた。

「タキ、もうすぐ飯の時間だからそれまでに此処のルールをリーユンに教えておいてくれ」

タキの視線など何処吹く風で意に介さず、空気を読まない言葉を一方的に伝えるだけ伝えると、カイリは踵を返して隣の部屋へ通じる扉へ歩む。ルウもチャンスとばかりにカイリの影に隠れる様にして隣室へと消えていった。

再び居心地の悪い沈黙が場を支配する。今度の沈黙を破ったのはタキだった。

「……先生が消えた方が娯楽室。その向かいの扉が食堂。荷物で隠れてるけど階段の横には応接室に行く扉もあるわ」

先程までの雰囲気とは打って変わった淡々とした口調で扉を指差しながら語るタキだったが、挑む様な眼差しはずっとリーユンに注がれている。

(どうやら此処ではドール教師は絶対的な存在らしい)

リーユンは少なからず衝撃を受けていた。普通教師というのは教室では絶対的な存在であるのだが、隔離教室の問題児達の暴れっぷりからカイリッドール教師は生徒達から侮られていると思っていたのだ。

でも、だとしたら何故隔離教室の生徒達は問題を起こすのだろうか。リーユンは考えに没頭しかけたが、タキが二階へと続く階段を上り始めたので其方に意識を向ける。

「ついてきて」

階段の中程まで上った所でタキが振り返って言う。リーユンは荷物を載せた小さな荷台を抱えると、黙ってタキの後を付いて上った。階段を上ると左右に廊下が伸びていて、右手側の廊下に四つ、左手側の廊下にも四つ、左手側廊下の奥、突き当たりに一つ扉が付いていた。合計九つの部屋のうち六つが使用中らしく、扉にプレートが下げられている。

リーユンが何とか重い荷物を二階の廊下に下ろした所で、タキが説明を開始した。

「右側の通路は女の子の部屋だから、近寄ったら容赦なくぶっ飛ばすわよ。左側の空いている部屋なら好きな所を使つと良いわ。必要最低限の家具は設置されてるから」

リーユンは言われるままに左の廊下を進む。突き当りと手前の部屋が使用中で、階段上って直ぐの部屋のプレートには「クウ＝ラ＝ルウ」、奥のプレートには「カイリ＝ドール」と記されていた。リーユンは迷う事無くカイリ＝ドール教師の隣の部屋を選ぶ。ルウの隣だと落ち着いて休めないと判断したからだ。

奥から二つ目の扉を開けるのを見たタキが「まあ、そうでしょうね」と呟いたのを聞いて、自分の選択肢は正しかったのだとリーユンは安堵の呼気を零す。

部屋は予想以上の広さだった。東棟の寮部屋を二つ並べた感じの縦長の部屋は、一見しただけで必要最低限以上の家具が揃えられているのが分かる。部屋に入って右手に浴室に続く扉、左手には大きな本棚が二つ、これまた大きなクローゼットが一つ、机と座り心地の良さそうな椅子のセット、手足を広げて寝ても余裕がありそうな寝台、ふかふかの絨毯、通信用の魔導器らしき物まで設置されている。

「びつくりしたでしょ。外見はおんぼろだけど、中は最先端の技術が導入されてるのよ」

タキはリーユンを押し退けて部屋へ入ると、壁に設置されている半球状の魔導器に指先を触れさせ、

「この魔導器一つで空調や床暖房や通信その他諸々が出来るから、後でマニュアルでも読むといいわ」

と視線も合わさずに告げるタキの言葉はやはり友好的とは呼べないものだったが、リーユンは首肯を返して振り返るタキへ視線を戻す。タキは真つ直ぐにリーユンと眼差しを重ね、指を突き付けて言った。「それから、一番奥の『立入禁止』のプレートが掛かった部屋には絶対に入っちゃダメよ。ここで生活する上で決して破ってはいけない約束の一つだから」

「わかった」

リーユンは一言だけ口にし、大人しく頷いた。何故入ってはいけないのか理由を尋ねても教えて貰えそうになかったからだ。タキは指折り数えながら『決して破ってはいけない約束』の他項目について語り始めた。簡単に纏めると以下の通りだ。

- 1、立入禁止の部屋には入らない
- 2、警告ポイントが最高値の者は校舎の掃除をする
- 3、朝、昼、晩の食事は決められた時間に共に取る
- 4、割り振られた当番をサボらない

これさえ守っていれば後の事は結構どうでも良いらしい。何故『騒ぎを起こすな』という項目を作らないのかリーユンは不思議で仕方が無かったが、取り敢えずはその四項目を頭の中へ叩き込んだ。

「……ところで、当番ってというのは？」

リーユンが控えめな口調で疑問を口にする、タキはあからさまに嫌な表情を作って見せた。

「私、あなたを許したわけじゃないのよ？ 気安く話しかけないで欲しいわ。細かい事は他の人に聞いてちょうだい」

そう言つてのけると、タキはスカートのポケットを探り、白い布を

取り出してリーユンに向けて勢いよく叩き付けた。

「リーユン＝ルルデイヴァイサー、あなたに決闘を申し込むわ！
可愛いマリアン又ちゃんの敵は取らせてもらうわよ！」

そう啖呵を切って、タキは振り返りもせずには部屋を出て行く。一人取り残されたリーユンは押し付けられた白いハンカチを握り締めて啞然とするしかなかった。

「来た早々災難だなあ」

いつの間にも其処に居たのか、カイリ＝ドールがドアの隙間から中を覗き込んでいる。

「ドール先生……。これって、手袋の間違いですよ。この場合決闘は成立するのでしょうか」

リーユンはひらりと白いハンカチを両手で摘んで開いてみせる。確かにそれは正方形の布だった。

「……難しい問題だ。取り敢えずそれは俺がタキに返しておいてやる。決闘を受けるかどうかは、お前が決める」

カイリは手を伸ばし、リーユンからハンカチを受け取ると無造作に折り畳んでポケットに仕舞い込む。リーユンはそれを見届けてから顔を上げてカイリ＝ドールと視線を合わせた。

「成立するなら決闘は受けます。じゃないと、彼女は納得しないでしょう？」

リーユンの返答を聞いて、カイリは何とも言えない表情を作った。微笑というか、苦笑というか、呆れ顔というか……。

「お前がそう言うのなら決闘は成立だ。俺が証人になるっ」

リーユン＝ルルデイヴァイサーは「お願いします」という気持ちと「ご迷惑をお掛けします」という謝罪を込めて頭を下げる。カイリは嫌そうに手を振ってその仕草を止めさせると、扉横の壁に凭れ掛かってリーユンを見下ろした。

「で、タキからはちゃんと説明を受けたんだな？」

「はい。最低限のルールは聞いたと思います」

「そうか。なら三つ目のルールを破らないように食堂へ移動するぞ」

カイリィドールは壁に預けていた体重を両足に戻し、踵を返してリーユンに背を向ける。リーユンは荷物を部屋の隅へ置き、深紅の口ブを脱ぐと急いでカイリの後を追った。

階段を下りきったところで、クウィラィルウが娯楽室から姿を現す。カイリは既に食堂へ入っていったようで、エントランスにはリーユンとルウの二人だけだ。ルウは周囲を警戒した様子で見回してから、リーユンの傍に寄って背伸びをし、

「リーユン、気を付けろよ。タキはああ見えて結構強いぜ」と、耳元でぼそぼそと注意を促す。ルウはそれだけを告げるとさっさと食堂に続く扉を開けて中へと消えていった。

タキィヤンフウは強いんだろう、とリーユンも思う。先ほど見せられた魔力から察するに、魔術が発動していたら並の教師でも敵わない程の威力だったのではないだろうか。ただ魔力が強い分、精密さとスピード、安定性に欠ける。そこを突けばリーユンには十分勝ち目があるように思えた。

「リーユン！ みんなを紹介するから早く来い」

扉向こうからカイリィドールの声が聞こえ、リーユンは慌てて食堂への扉を潜る。中には十人掛けくらいの大きなダイニングテーブルが置かれ、椅子は八脚、整然と並べられている。テーブルの上には清潔そうな白いクロスが敷かれ、美味しそうな料理が四人分と何とも形容しがたい料理が一人分、野菜のみの料理が一人分用意されていた。上座にカイリィドール、その左隣にクウィラィルウ、更に左隣は空席だ。カイリの向かい席には黒髪の青年が座り、ルウの向かいがタキィヤンフウ、そしてまた空席が続く。手前の二つの空席にはごく普通の料理と野菜のみの料理が並べられている。ルウの隣か、タキの隣か、果たしてどちらの席に座るべきかと逡巡していれば、カイリィドールに座れとルウの隣を勧められた。リーユンが席に着くと、奥の、恐らくはキッチンであろう場所から金髪を腰まで伸ばした細身の女性が現れた。揺れればさらさらと音を立てそうな柔らかな金糸の髪、翠色の眼は切れ長で、白皙の頬、高い鼻梁、整った

目鼻立ち、目の覚めるような美貌の持ち主とは彼女のことを言うの
だろう。

タキと同様に凜とした雰囲気を持つてはいるが、彼女のように天
真爛漫な感じではなく神秘性が漂うのはその尖った耳の所為だろう
か。

その女性が椅子に腰を下ろしたところで、カイリッドールが話し
始める。

「リーユンの事はみんな知っているだろうから紹介は省く。ルウと
タキも良いとして、ケイ」

金の髪が柔らかく流れる。ケイと呼ばれたエルフ族の女性が軽く会
釈をしたからだ。その所作に思わず見惚れていたリーユンも、ハッ
とした様子で会釈を返す。どうやら挨拶はそれで終わりらしく、カ
イリッドールは次の人物紹介に移った。

「で、こつちがユエールイエン」

長めの黒髪を後ろへ撫で付けた青年が軽く片手を上げて挨拶する。
リーユンは先と同様に会釈で応えた。

エルフ族のケイとウィズムント人のユエールイエン。この二人は
ルウやタキの様な騒動を起こしているという噂をあまり聞かない。
とは言っても二人と比べてと言うだけで、それなりに話題に上るこ
ともあるようだ。ケイとユエの二人はルウやタキが起こす問題に巻
き込まれているような印象も受ける。

「さて、食事の前にみんなに言っておきたい事がある」

一通り自己紹介を終えた後、カイリッドールは真面目な表情でそう
前置きする。当然何事かと皆がカイリに視線を集中させ、そのタイ
ミングを見計らってカイリッドールは告げた。

「明日ー 時にタキィヤンフウとリーユンィルルデイヴァイサ
ーの決闘を行う。場所は第三闘技場で立会人は俺だ」

「明日!?!」

五人が異口同音に驚きを表したのは言うまでもない。

第一話 「隔離教室」 第三幕（後書き）

一頁の文字数制限が40000字なので一話を一纏めに投稿しておりましたが、しおり機能がついている事もあり、サイトでの掲載スタイルと同様に幕毎にページを変更させて頂きました。

第一話 「隔離教室」 第四幕

麗らかな春の陽気。太陽はまだ空の真上には達していない所為か、少し肌寒いと感じる涼やかな風が吹き抜ける。魔術学院本館の西側に建てられた石造りの屋外闘技場の一つ、収容人数二千人ほどの第三闘技場客席には三人の人物が座っていた。一人は水色の髪から小振りな角を覗かせた小竜族のクウ「ラ」ルウ、もう一人は長い金の髪を持つエルフ族のケイ、三人目は白髪が混ざり始めた体躯の良い教師キリ「メイシャー」だ。

「早く始まんないかなあ」

落ち着きなく手足をばたつかせるルウに、ケイが冷やかな視線を送る。それに気付いたルウは悪寒を感じ、ぴたりと動きを止めて行儀良く席に座りなおした。

「何がおかしいんですか」

二人の一連のやり取りを見ていたキリが、ケイの左隣でくつくつと忍び笑いを漏らしている。ケイは柳眉を顰めて咎める様な響きで問い掛けた。

「いや、お前も成長したと思ってな」

キリの台詞を聞き、ケイの眉間に刻まれた皺は僅かに深さを増して不快さを露にする。元担任を相手にするというのは何かとやり難い様に思う。その感情を『気恥ずかしい』と表現するのだということケイはまだ知らない。

ケイは左右の観客を完全に無視することにして、闘技場中央に立つ三人に意識を向ける。タキ「ヤンフ」は長い黒髪が邪魔にならないうようにきつちりと結び上げ、身動きの取り易そうな短いスカートとスパッツ、ノースリーブに上腕まで覆う手袋を身に纏っている。彼女に対峙して立つフリーユン「ル」ルディヴァイサーは学院から支給されている濃紺の格闘用スーツを着込み、右手には革製の手袋を嵌めていた。

「最初に言っておくが」

と、カイリ「ドールが言葉を紡ぎつつ二人の生徒を見比べる。一晩経っても怒りは治まらなかつたらしく、タキはかなり気が高ぶっているようだ。逆にリーユンの方は今から決闘を行うとは思えない程の落ち着きを見せている。決して表には出してはいないが、カイリ「ドールは正直この決闘を楽しんでいた。タキが怒りを抑えてきちんと魔力をコントロールできるかどうか、リーユンの素質はどの程度のものなのか。本当は近い内に模擬試合を行いたかったのだが、一月ほど前に格闘訓練道場を一つ破壊したばかりだったので、事務局側はドール教室への道場及び闘技場貸し出しを禁止していた。

しかし決闘となると話は別だった。ウィズムントでは決闘は神聖視されていて、何を置いても優先すべき物という風潮がある。それ故に色々とルールはあるのだが、白魔術師キリ「メイシャー監視の下という条件付ではあったものの今回のタキの決闘は事務局側に受理された。

カイリは言葉を続ける

「どちらが勝っても恨み言は無しだ。怪我をしようが装備が痛もうが責任を問う事は出来ない。マリアンヌの事も勝負が付いたら以後は引き摺らない、いいな？」

二人が頷くのを確認し、カイリ「ドールは数歩後ろへ下がる。タキが重心を落として魔力を蓄え、戦闘体制に入る。リーユンは静かに目を閉じて戦闘をシミュレートしている様だ。二人の気力と緊張が徐々に高まっていくのが分かる。それが臨界点に達した瞬間を見計らって、絶妙のタイミングでカイリが宣言した。

「始め！」

試合開始の声と同時に二人は魔力を編み始める。大方の予想通り、魔術を構築する速さはリーユンの方が上だった。先日タキが術式を組み立てる所を見ていたリーユンはスピードで勝負するつもりらしく、初級の簡単な魔術を先制で放つ。

「ファイアーボール！」

リーユンの周囲に朱と赤のグラデーションを纏う光が満ち、それが急速に右手へと収束し、燃え盛る火球となって一直線にタキへ向かって突き進んでいく。火球がタキに届くよりも前、彼女の魔術もまた完成する。

「アクアヴェール！」

地面から突如として現れた水の膜に阻まれて、火球はタキに届く前にかき消されてしまった。周囲には蒸発した水が満ちて淡く景色を揺らがせ、互いの姿をぼやけさせる。リーユンが先制攻撃を仕掛けてくると読んでいたタキは始めから防御用の魔術を編んでいたらしい。しかし、それも計算の内だったリーユンは既に次の術を完成させていた。消えきらない水膜と蒸気に揺らぐ空気の向こう、淡いブラウンの術式を纏うリーユンの姿が見える。

「ストーンブラスト！」

リーユンの声に応えるかのように、術式は無数の飛礫となってタキへ降り注ぐ。背後へ飛んで避けるだろうとのリーユンの予想に反して、タキは石飛礫の中を突っ切ってリーユンに肉薄する。無論全ての飛礫を避けきれるはずもなくタキは軽い裂傷を幾つか負ったが、勢いを衰えさせずにリーユンに鋭い右蹴りを放った。

「たあっ！」

タキの可愛らしい外見から直接打撃に来るとは思っていなかったリーユンは、両腕を交差させて受け止めるので精一杯だった。左脇を庇う腕に重い一打が打ち込まれる。

「!？」

思いの外強烈な衝撃を受けたリーユンは息を詰め、数メートル後方へ飛ばされる。痺れた腕を気に留める暇もなく、体制を立て直したところにすかさずタキの魔術が追い討ちを掛ける。

「ウインドカッター！」

淡い緑の術式が鋭い真空の刃となってリーユンに襲い掛かる。石畳を蹴り付けて横へ飛び、かわし切れなかった鎌鼬が腕に当たるものの、衣服を僅かに傷付けるのみであることを見て取る。大した威力

が無い事に気付いたリーユンは、一時的に身体能力を向上させる為に魔力を自らの両足へと集中させた。リーユンは大きく踏み込んでしっかりと足裏に地面を捉え、驚異的なスピードで前方へ走り出す。タキが放った鎌鼬は次に大きな魔術を編み上げる為の時間稼ぎであったが、速く放とうとした為にリーユンを足止め出来る程の十分な魔力を編む事が出来なかった様だ。

強力な魔術の構成を始めていたタキはリーユンの突撃に対応出来ず、まともに体当たりを受けてしまった。しかし、編み始めていた魔術を解く事はせずに術式を少しだけ変更して発動させる。

「スネークバインド！」

リーユンの足元から数本の蔦が伸び上がり、身体を絡め取ろうと襲い掛かる。リーユンは追撃を諦めて後方へと飛び、蔦から逃れた。その隙にタキは身を起こして再び構えを取る。二人は一定の距離を保ちながら互いの次の出方を伺う。

ヒュウつとルウが口笛を鳴らした。

「リーユンってばなかなかやるじゃん。あのタキ相手に負けてない。タキの実力を良く知るルウが楽しそうに感想を紡ぐのを聞いて、キリィメイシャーは苦笑を漏らした。

「あの子はMEMIIシャウレインドツティの再来と言われているんだ。もつと高度な魔術だつて扱える。……面白くなるのはこれからだろう。」

MEMIIシャウレインドツティの再来と聞いて、クウIIラIIルウはまじまじとリーユンを凝視した。ケイも珍しくその表情に驚きの色を滲ませている。上級教室の一つを担当しているMEMIIシャウレインドツティ教師は数少ない黒魔術師の一人である。彼女はありとあらゆる魔術に精通しており、それらの術式を自由自在に構成する事から『幻想の魔女』の二つ名で呼ばれていた。しかし、通常は全ての魔術を自在に操る事は難しい。術者本人が生まれ持つ属性と反する術は一般的に相性が悪いとされているのだが、MEMIIシャウレインドツティにはそれが無いと言われている。

「リーユンにも苦手な属性が無い、と言うのですか？」
ケイの呟きにキリィメイシャーが補足する。

「正確には得手も不得手も無いと言っ所だ。مم教師程どの魔術にも長けている訳ではない。まあ、今後の成長が楽しみではあるがね」
その成長の責任を負う事となったカイリィドルは二人の戦いを静かに観察していた。悪く無い、と思う。タキはすっかり魔力をコントロールして冷静に対処しているし、リーユンは状況に応じて多様な魔術を使い分けている。実力も拮抗している様で、思ったよりも良い試合だ。

「アイスニードル！」

リーユンの前方三十センチ程先の地面から、突撃してきたタキ目掛けて無数の氷の棘が伸びる。

「ファイアーウォール！」

タキは通常ならば防御に用いる筈の炎の壁を氷の棘にぶつけて相殺させようと目論むが、動きながらの魔術構築は難しく十分な威力を發揮させることが出来ない。タキは右拳に魔力を込めて溶け残った氷を打ち砕いた。接近戦に持ち込めば魔力の高い自分の方が有利なのだ。しかし壊した氷の向こうには標的の姿が見当たらない。どこへ消えたのかと視線が惑い、怯んだ隙を逃がさずに、リーユンが横合いから掌打を喰らわせる。

「きゃっ！」

腕に強い衝撃を受け、タキがザザアツと地面を転がる。急いで立ち上がるものの、疲労とダメージで息が上がってしまった。魔術を唱えるには呼吸を整えて魔力を練り、正確に術式を組み立てる必要がある。今の状況ではそうそう魔術を唱える事は出来ないだろう。

タキは焦り始めた。

自分の魔力であればもっと簡単に勝てると思っていたのだが、どうやら甘かったようだ。タキは前方の小柄な少年を睨み付ける。リーユンは呼吸を乱す事も無く次の魔術構成に入り始めていたが、流石に疲労はしているようで前髪が汗で額に張り付いていた。それでも、

リーユンが放つ魔術は次第に強力な物となっていく。

「セイントアロー！」

前方へ伸ばしたリーユンの右腕の先から二本の光の矢が出現した。タキは魔力を体内に蓄えて全身の身体能力を向上させ、リーユンの魔術をどうにかかわしていく。かわしつつ距離を縮めようと何度と無く接近を試みるが、リーユンはそれを難無く魔術で牽制して来る。タキは接近戦に持ち込む事も落ち着いて魔術を構築する事も出来ずにただ逃げ回るしかない。

（勝負有り、か）

カイリッドールはリーユンルルディヴァイサーの魔術の多彩さに舌を巻いていた。MEM「シャウレインドツティの再来と謳われてはいても、相性の悪い魔術でもそれなりに扱えるというだけの事だ。高をくくっていたのだが、リーユンの唱える魔術はどれも平均以上の威力を発揮しており、また、突出して秀でていているという魔術もなかった。どうやら本当に属性に対する得手不得手が無い様だ。それに、

（戦闘の運び方と相手の行動の読みも悪くない）

威力ではタキに及ばない事を認め、相手よりも勝っているスピードで勝負した点。相手が魔術を避けるのかそれとも魔術で応戦するのかという読み。判断ミスの際も適切に対処できる洞察力と落ち着き。そして自らの疲れを見せずに高度な魔術を立て続けに使用することで相手を精神的に追い詰め、疲労を誘う戦術。

戦い方としてはオーソドックスな、言ってしまうえば面白味に欠ける戦いではあるが、それ故に確かで効果的だと言えよう。実際にタキ「ヤンフウは必要以上に疲労しているように見える。ダメージの蓄積はあるにしても、強大な魔力を誇るタキがたったあれだけの魔術を使用しただけでそれ程疲労するとは考え難い。確実にタキは追い詰められている。対峙しているとリーユンの魔力が無尽蔵であるかの如く見えて焦りを覚えることだろう。そして焦りが焦りを呼び、冷静な判断力を損ない、余計な疲労を被る事となる。そうなるとも

う駄目だ。完全な悪循環である。

しかしながら、人一倍負けず嫌いなタキにはまだ諦めた様子が無い。焦りは見えているがしつかりとリーユンの動きを観察し、隙を窺っているのが分かる。今の劣勢を逆転するには有りつ丈の魔力を込めた得意の一撃必殺しかない。タキは焦りと戦いながらも必死にリーユンの動きを追い、隙を探る。

「サンダーストーム！」

リーユンが雷の上級魔術を構成する。よく晴れた春の穏やかな空に突如として紫の放電が走り、落雷が空気を引き裂いてタキの立っている地面に突き刺さる。その数五本。タキが地面を転がりながら直撃を避けたその刹那、彼女は見逃さなかった。リーユンが試合開始後初めて荒い息を吐いたのを。

（今しかない）

タキはポロポロになりながらも残された魔力を振り絞り、彼女が扱える魔術の中でも最大の威力を誇る術式を編み始めた。魔力を持つ者ならば見える術式の数字や記号がタキの周囲を取り囲んでいく。赤と黄色の美しい魔力の織物。

（早く、早く、もっと早くっ！）

タキは普段の倍に近い速さで複雑で緻密な術式を編み上げていく。リーユンは急いで呼吸を整え、タキに対抗出来る魔力を体内に溜め込み始めた。炎の魔術に対抗するには水の防御魔術を構成するべきだ。そう考えたリーユンが術式を編み始めようとした瞬間、その場の空気が突如として変化する。強大な魔力の奔流とでも表現するのが相応しい程の魔力がタキから流出しているのだ。

「タキ！」

（いかん、コントロールを失ったか）

カイリッドールが慌てて止めに入ろうとするが、今から魔力を練っていたのでは到底防御が間に合わない。それでも防御壁を構成するために意識を集中させるが、それよりも早くリーユンが魔力を編み始めた。彼にしては随分と乱雑な構成ではあったが、込められた魔

力の量とスピードを考えれば驚異的な物と言えるだろう。

タキィヤンフウとリーユンルルディヴァイサーの魔術は同時に完成した。

『エクスプロージョン!!』

激しい熱風と爆音。

視界が、鮮やかな赤に埋め尽くされた……。

第一話 「隔離教室」 第四幕（後書き）

一頁の文字数制限が40000字なので一話を一纏めに投稿しておりましたが、しおり機能がついている事もあり、サイトでの掲載スタイルと同様に幕毎にページを変更させて頂きました。

第一話 「隔離教室」 第五幕

窓から差し込む西日が真っ白な部屋を暖かな橙色に染め上げる。

その眩しさに目が覚めたリーユンはゆっくりと上半身を起こし、軽い眩暈に眸を閉ざす。やや記憶が混乱しているようでリーユンは自分が何故寝台に寝かされているのかと怪訝そうに首を傾がせる。部屋の中を見回し、ここが西棟医務室である事を確認すると、痛む身体を無理矢理動かして寝台から降り立った。

（ああ、そうだ。決闘を申し込まれたんだった）

包帯を巻かれた自分の身体を見下ろして、炎の上級魔術、エクस्पロージョンをぶつけ合った事を思い出す。

「目、覚めたか」

リーユンが驚いて声の聞こえた方向へ視線を巡らせれば、医務室に備えられているソファに見覚えのある人物が座っていた。短く整えられた黒髪に切れ長の黒い瞳、中級教室のひとつ、キリィメイシャ教師の下で一緒に学んだジュン「エンシエン」である。彼はソファから立ち上がるとリーユンの傍らまでゆっくりと足を運び、立ち止まる。リーユンは友人に心配を掛けないようにいつも通りの笑みを浮かべようとして、失敗した。ジュンは自分よりも背の低いリーユンを見下ろし、怒気を孕んだ声音を押し出した。

「何、やってんだよ……！」

リーユンにはジュンの怒りの理由も言葉の意味も理解出来ず、蒼い双眸を睜って驚愕と困惑とを露にする。ジュンはそれすらも怒りの要因だとも言っ様に、更に言い募り、

「第三闘技場破壊するなんて、何考えてんだよ！」

ジュンの語気の強さと告げられた言葉に、リーユンは言葉を失って怒りで紅潮した友人の顔を見つめる。炎の上級魔術であるエクस्पロージョンを、しかも片方は暴走した魔力で、もう片方はあらゆる箇所が破綻した威力重視の術式でぶつけ合ったのだ。第三闘技場レ

ベルの対魔術防御では防ぎ切れる筈も無いのは明白だった。そう考えてリーユンはふと疑問に思い、自分が負った怪我の具合を確かめる。対魔術防御を吹き飛ばす程の爆発の中に居た割には、火傷や怪我は軽度の物だったのだ。

「聞いているのか、リーユン！」

ジユンの苛立ちを含む声が、俯き加減で考えに没頭していたリーユンの意識を呼び戻す。

メイシャー教室で1、2を争う相手であったリーユンはジユンにとって親友と呼べる存在だった。リーユンにとってもジユンは一番親しい相手であり、お互い良きライバルとして認め合っていた。メイシャー教室に入ってから二年間、ジユンはマイペースのリーユンに呆れ、からかう事はあっても怒る事など決して無かった。

けれど今、ジユンは容赦の無い怒りをリーユンにぶつけている。

「隔離教室の奴らと一緒に何やってんだって聞いてるんだ」
リーユンが何かを言わなければと口を開くが、言葉は出て来ない。あれは事務局側から許可の出ている正式な決闘だったと伝えても、第三闘技場を破壊した事実には変わらない。隔離教室の問題児、タキヤンフウとリーユン＝ルルデイヴァイサーの放った魔術が原因である事も覆しようの無い事実である。

リーユンはただ黙っている事しか出来なかった。

「何とか言えよ！ 言い訳位してみせろ」

ジユンが右拳で医務室の壁を力任せに殴りつける。それでも、リーユンにはジユンに伝えるべき相応しい言葉を見つけない事が出ない。ジユンは黙ったままのリーユンに更に言い募ろうと口を開くが、何を言っても無駄と思ったのか言葉を飲み込み、掠れた声で一言だけ告げた。

「……見損なつた」

ジユンはリーユンから視線を逸らし、そのまま振り返る事無く医務室を後にする。残されたリーユンはジユンの去った扉をただ黙ってじっと見つめる事しか出来なかった。

「あんなの気にすることないわよ」

いつから二人の遣り取りを聞いていたのか、タキ「ヤンフウが寝台のひとつに腰掛けてリーユンを見ていた。タキも身体の彼方此方に包帯を巻かっていたが、リーユンと同じく軽傷で済んでいるようだ。リーユンはタキの向かいの寝台へ腰掛けて、先程から気に掛かっていた疑問を尋ねてみた。

「何故僕らの怪我はこんなに軽く済んでいるんでしょうか」

唐突な言葉にタキはきよとんと双眸を瞬かせてリーユンを見つめ、直ぐに可笑しそうに笑い出す。

「呆れた。あなた、友達に怒鳴られている間ずっとそんなことを考えていたの？」

笑うたびに傷が痛むのか、時折顔を顰めてはいるが、それでもしばらくタキの笑いは止まりそうに無かった。そうやって笑顔を浮かべているのがタキにはよく似合っている、とリーユンはぼんやりと思う。綺麗に結び上げられていた黒髪は今は緩くウェーブを描いて背中に流れていて、ガーゼの貼られた頬が痛々しくはあったがその表情には晴れやかな笑顔が浮かべられている。スライム云々と言っていた時とはまるで別人だ。

「軽傷で済んだのは、カイリ先生のお陰だと思っわ。それ以外には考えられないもの」

やっと笑いを収めたタキが自らの右手に巻かれた包帯を見ながら答える。そしてその右手をリーユンの眼前へ差し出し、微笑を浮かべた。

「今回の決闘は私の負け。完敗だったわ。マリアン又ちゃんの事はこれでお終い。以後は仲良くやりましょうね」

リーユンは差し出されたタキの右手が痛まない程度に軽く握って握手に応える。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

リーユンの返事に笑顔を返し、タキは勢いをつけて寝台から立ち上がる。

「私、先に教室に戻ってるわね。いつまでもダサい病人服なんて着てられないわ」

じゃあね、とタキが軽やかな足取りで医務室を出て行く。一人残されたリーユンは動く気になれず、そのまま寝台に横になって静かに目を閉じた。魔術学院で学んできた七年間で一番忙しい一日だった気がする。色々な事がありすぎて少し疲れてしまった様だ。

「ジュン……どうしてあんなに怒ったんだろう……」

ぼつりと呟いた台詞は沈み行く太陽と共に誰に聞かれることも無く静かに何処かへと消えていく。橙色から茜色を経て、やがて薄紫が訪れ、医務室がゆっくりと暗闇に包まれていった。

それからしばらくして、二人の人物がリーユンの眠る医務室を訪れる。

「全くお前は無茶ばかりする」

ハスキーな女性の声と共に医務室の扉が静かに開かれる。現れたのは長い金色の髪と蒼い瞳を持つ女性だった。スタイルの良い身体を飾り気の無いシンプルな漆黒のローブに包み込み、細長い煙管で紫煙を燻らせている。女性に続いて医務室に入ってきたのは中途半端に伸ばされた黒髪と長身の持ち主、カイリッドール教師だ。

「MEM、医務室は禁煙だぞ」

カイリに非難に満ちた視線を投げ掛けられ、MEMはシャウレインドゥテイ教師は右手に持つ煙管を暫し見つめ、次に教室内を見回した。「ここには灰皿が無いようだ。火種を床に落とすわけにもいかんのだろっ」

そう言っって何食わぬ顔で煙管を嗜む。MEMがヘビースモーカーと呼ばれる類の愛煙家である事は有名だ。カイリは溜息を吐いて説得を諦め、薬品棚から消毒液やワセリン等を取り出して机に広げる。カイリが両袖を捲り上げると焼け爛れた両腕が露になった。その両腕で手際よく火傷痕を消毒し、ワセリンを塗っていくが、ガーゼを当てて包帯を巻く段階になってカイリは助けを求めてMEMを見やる。「手伝ってくれると非常に有り難いんだが」

メムは一度大きく息を吸って紫煙を肺腑へ巡らせ、フーツとカイリに向けて吹き掛けた。

「大莫迦者」

それだけを呟くとメムは煙管をカイリに預け、焼け爛れた両腕に包帯を巻いていく。カイリは手際よく巻かれた包帯を確認してメムへ煙管を返し、捲り上げた袖を元に戻した。そうする事で包帯は衣服に隠れて怪我をした痕跡は全く見受けられなくなる。そんなカイリの様子を眺めながらメムは静かに言葉を紡ぐ。

「闘技場、見たよ。明日から一週間うちの教室で使用する予定だったんだが……」

「それは……済まなかったな」

カイリは一瞬困惑の表情を浮かべて髪を掻き上げながら謝罪を述べた。しかしメム「シャウレインドッティは首をゆつくりと横に振り、カイリの謝罪を拒否する。

「そうじゃない。第三闘技場が使用不可能になった代わりに第一闘技場を使用出来るようになった。公式戦でしか使えない闘技場で模擬戦が出来るんだ。寧ろ感謝しているよ」

メムの台詞にカイリは心底嫌そうな表情を作る。メムらしいと言えばそれまでなのだが、カイリとしてはやはり釈然としないものが残るわけで。

「別に、お前の為にやったわけじゃないんだぞ」

カイリが机に肘を乗せて頼杖をつきながらメムから視線を背ける。

その拗ねた様子に苦笑を滲ませ、メムが煙管を口に運ぶ。

「それは十分承知している」

それからメムは非常に言い辛そうに口籠ると、ロープの隠しから一枚の紙切れを取り出した。カイリは怪訝な顔でそれを受け取り、丁寧に広げて目を通し、……固まった。

「第三闘技場の修理費を給料から引くそうだ」

メムが淡々とした口調で紙に記されている内容を要約して話す。格闘訓練道場の修理費も給料から引かれる事になっていたので、これ

から半年間減給されるといふ訳だ。

「ご愁傷様……」

メムは同情の眼差しでカイリィドールを見つめる。カイリィはがっくりと項垂れて財布の中身と今後の出費を想って密かに涙した。

溜息を吐く教師をよそに、リーユンは穏やかな眠りの中にあつた。暗闇の中にほろ苦い紫の煙が漂い、静かに春の夜は更けていく。

リーユンィルルデイヴァイサーの上級教室生活はこうして幕を開けたのだつた。

〈 隔離教室 終 〉

第一話 「隔離教室」 第五幕（後書き）

一頁の文字数制限が40000字なので一話を一纏めに投稿しておりましたが、しおり機能がついている事もあり、サイトでの掲載スタイルと同様に幕毎にページを変更させて頂きました。

第二話 「黒き書」 第一幕（前書き）

新学期が始まりカイリッドール教師から最初に与えられた課題は、黒い本に掛けられた魔術を解く事だった。

第二話 「黒き書」 第一幕

四月も二週目に入り、ウィズムント魔術学院の新学期が本格的に始動した。各教室では今学期のカリキュラム等が担当教師によつて発表され、早速其れに従つて授業を開始している教室も少なくはない。しかしながらウィズムント魔術学院本館北西奥に位置するドー
ル教室、通称隔離教室では春休みと変わらない風景が繰り広げられている。今学期から上級教室であるドー
ル教室に編入となつたり
ユン＝ルルデイヴァイサーが今後の授業方針を聞く間も無く、カイ
リ＝ドル教師は朝から出かけてしまつたのだ。仕方がないのでリ
ーユンは最近の日課であるエントランスの片付けを始めたのだが、
十分もしない内に作業の手を止める事となる。

「見てみてリーユン、マリアン又ちゃん二号よ」

二階から軽やかな足取りで駆け下りてきたのはクラスメイトのタキ
＝ヤンフウだ。彼女の腕の中には、美少女には相応しいとは言えな
い緑色で半透明で半液状の物体が大切そうに抱えられている。ここ
二、三日部屋に閉じこもつて何をしていたのかと思えば、魔法生物
の製造に勤しんでいたらしい。

「また、造つたの？」

リーユンは呆れを悟られまいとして如何にか口元に笑みを貼り付け
たが、微かに吐息の混ざる声音がその努力を打ち消していた。タキ
が其れに気付かない筈も無く、少々ムツとした様子でリーユンに近
付くと腕の中のマリアン又ちゃん二号を彼の眼前へと突きつけ、

「このマリアン又ちゃん二号はね、以前のマリアン又ちゃんとは性
能が違うのよ！」

と、勢い良く言つてのけ、一枚の紙片を取り出してマリアン又ちゃん
二号のぷるんとしたボディに突っ込んだ。半透明の体液に包み込
まれた紙切れが徐々に溶かされていき、跡形も無く消え失せるのに
ものの数秒も掛からない。二人の視線が見守る中、突然マリアン又

ちゃん二号が小刻みに震えて声を発し始める。

「おはよう。わたしはマリアン又ちゃん二号です。よろしくね」

半液状の魔法生物が可愛らしい声で可愛らしく挨拶をしても気味が悪いだけだとリーユンなどは思う訳だが、タキにとってはそうではないらしい。自慢げに胸を張り、リーユンのコメントを待っている。「えっと……」

リーユンは取り敢えずの時間稼ぎにそれだけを口にすると、改めてじっくりとマリアン又ちゃん二号を観察した。……残念ながらもどう見ても不定形モンスターアモルフラスの代表格であるスライムだ。可愛らしい声に似合いの顔も身体も唇も無く、勿論脳や声帯といったものも見当たらない。

「どうやって喋ってるの？」

何とか話題を見付け出し、リーユンはホッと胸を撫で下ろしつつタキに尋ねると、待つてましたと言わんばかりに彼女の瞳が輝きだす。振る話題を間違えたかと些か後悔の念を抱いても後の祭り。

「この子はね、溶かした紙に書かれている文章を話すことができるの。製造過程で使用した雷の魔力で文面を読み取って、動力源として利用した風の精霊、風蟲シルフが体液を振動させることによって空気を震わせて音を出しているわけ。その上驚くべき事に一度読み込んだ情報はロストする事無く半永久的に蓄積されていくのよ！」

タキの淀み無く流れる口調に圧倒され、リーユンは少々後退さる。

そんなリーユンの様子を気に掛ける事も無く、タキの説明は益々ヒートアップの一途を辿り、

「でもね、でもね。何と言っても今回一番苦労したのが精霊を固定する事なの。風蟲をマリアン又ちゃん二号に留めて置くのに錬金術書やら論文やら魔導書やら読み漁って、材料集めに奔走して、ほんっと大変だったのよ！ で、どうやって固定したかというとな……」
延々と続きそうだったタキの台詞を遮ったのはいつの間にか彼女の背後に佇んでいたユエールイエンだ。長身のユエは二人を見下ろす姿勢で凄む。

「冗談でしょう!? 今週中に全部書き写すなんて無理に決まってるじゃない!」

タキの抗議は尤もな話で、『ハイマンの錬金術書』は一冊五百頁を軽く超える分厚い書物で『魔導器全集』も使える使えないに拘らず一年間に開発された魔導器の設計図、製造までの研究論文、製造に携わった人物の履歴等事細かに書かれているのだ。ちなみに魔導器は年間五十個前後は開発されている。その中で使い物になるのは一個あるか無いかという所なのだが……。

ユエは抗議を続けるタキを一睨みして黙らせ、大きな欠伸を零しながら娯楽室へ向かって歩いていく。ドアを開き、身体を半ばほど部屋へ進ませたところで一度振り返り、

「俺なら四日で終わらせられるけどね」

との捨て台詞を残し、扉の閉まる音を伴って完全に姿を消した。

ユエの姿がエントランスから見えなくなり、リーユンは怒りに震えて娯楽室へ続く扉を睨み付けているタキに疑問に思ったことを口に出す。

「タキがああいう無茶を言われて本気で逆らわないのって、意外だ」

普段のタキならばまず間違いなく力に訴えてでも嫌だと主張していたのではないかと思うリーユンである。今回も完全に大人しく承諾したとは言えないのだが、それでも結局は課題を受け入れた事に驚きとともに疑問が生じる。失礼な言い方だが、ユエ・ルイエンは背が高いがお世辞にも鍛えられているとは言えない身体つきで、魔力が強いようにも見えない。確かに先輩にあたる人物ではあるが対等な立場であるはずのクラスメイトであり、無理難題を吹っかけられる立場にある訳でもないし、書物だって買い直したほうが断然早い。タキはううと小さく唸っていたが、不思議そうに首を傾げているリーユンに視線を転じて彼にしか聞こえないくらいの小声で答える。

「リーユンはまだあいつの怖さを知らないのよね。あー、何であいつが私のお目付け役なのかしら」

タキはさめざめと嘆いたと思っただら意を決した様にマリアン又ちゃん二号を抱え直して二階へ続く階段を駆け上っていった。

「三日で仕上げてやるんだからああ　　ッ！」

タキの気合の咆哮がエントランスに響き渡る。リーユンが呆然とタキの背中を見送っていると、ドアの開く音がして娯楽室からユエが顔を覗かせた。

「相変わらず負けず嫌いで扱い易い奴だねえ」

笑いを抑えようとしているのだろうが、ユエの両肩が小刻みに震えているのがリーユンにも分かる。リーユンはどう対応すべきかを悩み、結局はエントランスの清掃に戻るのが一番良いと判断し、そのように行動を開始する。床に散らばっている本を拾い上げては壁際に丁寧に積み重ね、階段横の応接室兼書斎へと続く道の開拓に勤しむ。リーユンの様子をしばらく黙って見守っていたユエだったが、ふと何事かを思い立った様子で「リーユン」と声を掛ける。

「何ですか？」

リーユンは丁度数冊の本を抱えて身を起こしたところで、本が落ちないよう抱え直してからユエを振り返る。小首を傾げて不思議そうな表情を浮かべるリーユンを、ユエは娯楽室のドアから上半身を覗かせた姿勢で見つめ、にこやかな笑みを浮かべて手招く。

「片付けは一先ず中断して、少し話をしないか」

「ええ、構いませんけど」

怪訝さを隠せないリーユンを気にした様子もなく、ユエは扉を開け放ってリーユンを室内へ促す。リーユンが勧められるままに広い娯楽室内へ踏み入れ、ソファに腰を下ろしたのを確認してから、ユエは向かいのソファに身を預けた。柔らかな革張りの座面が長身のユエの体重を受け止めて小さく軋む。背凭れにぐったりと沈み込むユエとは対照的に、リーユンは膝に本を乗せたまま行儀良く背筋を伸ばして座っている

「えと、それで、話って何でしょうか？」

リーユンが落ち着かない様子で恐る恐る話を切り出す。ユエは眠そ

うにも見える眼差しをリーユンへ注ぎ、片眉を僅か持ち上げて笑みを見せ、

「いや、色々聞きたい事があるんじゃないかと思つてね」

そう紡いだユエはリーユンからの言葉を待つかの如く一度唇を閉ざす。リーユンは改めてこのドール教室の事を考え、確かに解らない事だらけであると再認識するに至る。初級、下級、中級と経験してきたクラスとは余りにも何もかもが違いすぎていて、何から問えばいいのかも咄嗟には思い浮かばない始末だ。ユエはリーユンが思考を巡らせている間も静かに言葉を待つてくれている。本当ならばしっかりと睡眠を取りたいだろうに、態々リーユンの事を気に掛けて時間を作ってくれているのだろう。リーユンはユエの好意に感謝し、ありがたく甘えさせてもらうことにした。

「ドール教室の授業カリキュラムってどうなってるんですか？」

授業開始初日だというのに、ドール教室の担当教師、カイリィドールは出掛けてしまつて教室には居ない。かといって事前に何をしろと提示されているわけでもなく、本来ならば授業中だというのに皆好き勝手動いているのだ。こんな事は今まで経験したことは勿論、聞いたこともなく、リーユンは戸惑うばかりだったのだが、クラスメイトを見ていると普段の様子と変わらない。クラスメイトには事前に何か宿題が出されていて、リーユンにだけ伝え忘れたのだろうかとの思考も過ぎるのだが……、

「適当、かな」

リーユンの淡い期待はあっけなく碎かれる事となる。ユエは軽く肩を竦ませ、困った表情を作るリーユンに続けて言葉を投げ掛ける。

「一応俺がタキの、ケイガルウの面倒を見る事になつてるけどね。」

リーユンの事は特に何も言われていないから、先生が直接指導するつもりで居るんだとは思つよ」

ユエは小さく欠伸を噛み殺し、目元に落ちかかる黒髪を掻き上げる。余り日に焼けていないのだろう白い手指は細長く、思いのほか繊細な動きを見せるので、リーユンの視線はつい彼の手を追つてしまう。

「まあ、ここの基本は『自分の学びたい事を好きに学べ』だから、リーユンが今一番興味を持っていて分野を調べればいい。わからない事があれば俺やケイに聞くといいよ」

そう言つて穏やかに微笑むユエ「ルイエンは隔離教室に在籍している問題児だとは到底思えない。事実、彼の魔導器開発における業績は素晴らしい物だと聞く。隔離教室を設立する切欠となつたのが、ドール教室の記念すべき一人目の生徒である彼だと言う噂は果たして本当なのだろうか。

リーユンは内心に沸き起こつた疑問を隠し、ユエに頭を下げて「その時はよろしく願います」と礼儀正しく伝え、しばし逡巡を経てから躊躇いがちに口を開く。設立当初からここに居るユエならば知っているのかも知れない。

「あの、二階の立入禁止の部屋には何かがあるんでしょうか」

ユエの視線は自然と天井へ流れる。アイボリーの淡い落ち着いた色彩の天井の向こうには、件の立入禁止の部屋がある。ユエが鼻から小さく呼吸を吐き出し、眉尻を下げた笑みでリーユンに向き直る。

「それは俺も知らないんだよね」

ユエは姿勢を前傾へ保ち、腿に両肘を突いて掌で顎を支えた。そうすると視線が低くなり、僅かにリーユンが見下ろす体勢となる。居心地が悪そうに身動ぐリーユンをユエは楽しげに見上げ、

「あの部屋の事を知りたいなら、直接カイリ先生に聞くのがいいよ。……聞けたら、だけどね」

ユエは吐息の混ざる声で続け、それを聞いたリーユンも少しばかり難しい表情を滲ませる。数少ないルールに組み込まれている事から、余程干渉されたくない部屋なのだろうと言う事は理解できる。考え込んでしまつたリーユンへ「気にしない方がいいよ」とユエが声を掛け、話題を変える。

「他に、聞きたいことはあるかな？」

リーユンは少し考えてからもう一つだけ質問させてもらう事にした。「えっと、ユエさんはどうしてこの校舎で寝泊りしないんですか？」

純粋な疑問を口に出したリーユンへ、ユエは何処か遠くを映す黒い眸を差し向ける。心なしかその背中に哀愁が見える様な気もする。

「俺の部屋、階段上って右手側にあるんだよねえ」

激しく脱力した様子のユエへ、リーユンは同情の眼差しを送った。その一言で理解してしまったのだ。二階の右手側というと、タキが初日に「右側の通路は女の子の部屋だから、近寄ったら容赦なくぶっ飛ばすわよ」と言っていた、あの右手側だ。自室があるからといって男のユエが近付くとどうなるのかは想像に難くない。それがいくら不条理で理不尽なことであっても、彼女には関係ないのだ。

「研究棟にも部屋を貰ってるし、こっちに居る事もあまり無いから問題は無いよ」

ユエは相変わらず穏やかな口調で眠そうに目を擦り、ソファから立ち上がったて大きく伸びをした。

「珈琲を淹れるけれど、リーユンも飲むかい？」

「あ、僕がやりますから、座っててください」

ユエに尋ねられ、リーユンは本をテーブルへ置いて慌てて立ち上がる。流石にそこまでして貰うのは申し訳なくもあり、ユエの返事も聞かずに娯楽室を抜けて盛大に散らかっているエントランスを通り、台所へ向かう。リーユンも何度が食事当番をこなしている内にどこに何が置いてあるのかは大体把握してきている。台所に入ると鍋に水を入れて火に掛け、食器棚から珈琲豆と珈琲ミル、食器を取り出して支度にかかる。豆をミルに入れてハンドルを回していると、キツチンに珈琲の香ばしく馨しい香りが広がっていく。豆はカイリッドールの特性ブレンドらしく、数種類の珈琲豆が一定の割合で混ぜり合っている。毎日の食事メニューもカイリが考えているらしい。食事時間の一時間前には台所にレシピが貼られていて、複雑な下拵えが必要なものはその準備も既に完了していたりする。妙なところに拘りを持っているのだなとリーユンは感心したものだっただ。

水が沸騰して湯気を立て始めたので、リーユンはポットとカップ

を暖めてから、お湯をポットに移した。銀盆に湯の満たされたポットと食器類とドリツパー、挽き終えた豆、シュガーポット、ミルクピッチャーを乗せて慎重に持ち上げ、娯楽室へ戻ろうとするのだが、食堂を出たところで校舎が凄まじい衝撃を受けて大きく揺れる。突然の揺れに対応できず、リーユンはトレイを引っ繰り返してしまった。ガチャンと耳障りな音を立てて食器が割れるのと同時、

「痛つてええええええ

ッ！！！！！」

と、クウッラッルウの盛大な絶叫が響き渡る。リーユンは次第にこうした出来事に慣れてきている自分を感じながら、何が起きたのかを確認するために外へ続く扉を開いた。

第二話 「黒き書」 第二幕

扉を開けてまず初めにリーユン＝ルルディヴァイサーの視界に飛び込んできたのは陽の光を受けて煌く金。続いて風を孕んで柔らかく靡く淡い緑の衣。肌の露出がほとんど無い長い上衣のその衣装はエルフ族が好んで身に纏う物だ。ケイは校舎前の広いスペースで何事も無かったかの如く涼やかな面持ちで佇み、校舎側を眺めていた。リーユンがケイの視線の先を追うと、其処には校舎の壁に逆さまの状態で凭れ掛かっているクウ＝ラ＝ルウの姿が確認できる。

「もうお終いですか？」

静寂を取り戻した朝の空気を震わせるケイの声音は酷く冷たくて、どこか緊張を孕んで響く。ケイは隙の無い優雅な所作で着衣の裾を払い、痛みを耐えて身を丸めているルウから視線を外してリーユンへ向き直る。普段の柔らかな物腰からは想像出来ない殺気めいた気配を感じ、リーユンは驚きのあまり蒼い双眸を睜り、視線を合わせたまま逸らせなくなる。

「リーユンも稽古を付けて欲しいのでしょうか」

手合わせをこなして気持ちが高揚しているのだろうか、ケイはリーユンに対して好戦的な言葉を投げかける。そのケイらしからぬ様子にリーユンは戸惑いを覚えるばかりでろくに言葉も返せなかった。そんなリーユンの表情や所作を眺めていたケイだったが、ふと何事かに気付いた様子で翠の双眸をリーユンの背後、開け放たれたままの扉へ流す。

「珈琲の香りがしますね」

確認するような響きで紡ぎながら、ケイがリーユンに視線を戻す。リーユンは其処でハッと我に返り、

「あ、ト、トレイを引っ繰り返してしまっ」

早口で返答し、慌てて踵を返す。その直ぐ後ろにケイが続き、リーユンの横を素早くすり抜けて床に散らばった破片を拾い始める。

「あの、僕がやりますから」

リーユンも急ぎケイの傍らにしゃがみ込み、一緒に破片を拾う作業に取り掛かる。ケイはリーユンの手元を見、次いでその視線をリーユンの蒼い双眸へ向けて怪訝そうな表情を浮かべた。

「どうしてですか？ 先程の音に驚いて落としてしまったのでしょう。なら私の所為です」

ケイは淡々とした口調で事実を語り、視線を手元へ落として破片拾いの作業に戻る。リーユンはその端整な横顔に暫し視線を奪われていたが、ケイが言葉を続けようとして唇が動くのを見れば、何となく罰の悪いような、罪悪感めいた心情を抱いて視線を逸らす。そんなリーユンの様子には気が付かず、ケイはひとつ小さく息を吐き、常の如くの穏やかな声音で話し始めた。

「此処は私が片付けますから、ルウの様子を見てきて頂けませんか。ルウは私に看られるのが煩わしい様ですので」

そう紡ぐケイの微笑はどこか寂しげにも見え、リーユンは「わかりました」と告げて拾った破片をトレイへ乗せ、その場をケイに任せて再び校舎の外へ足を向ける。

外に出て直ぐ壁際を確認すれば、クウ＝ラ＝ルウの小柄な体は逆さまではなく、天地正しい状態で腹部を抱えて蹲っていた。どうやらしこたま腹部を殴られたか蹴られたかしたらしい。ルウはリーユンが近づく気配を知って顔を上げ、黄金色の眸にその姿を捉えると無理矢理口の端を持ち上げて笑って見せた。

「まあた負けちまった」

明らかに強がりと分かる悔しげな色を双眸に滲ませ、ルウがゆつくりと立ち上がる。土の付いた衣服を乱暴な所作で払い、リーユンの元まで自力で歩いて近付くと眼前にて歩みを止める。小柄なルウが俯いてしまえばリーユンからその表情を伺うことは出来ず、身動きすら止めてしまった姿に心配そうな眼差しを送って何か声を掛けようと言葉を探す。

「ルウ、……大丈夫？」

問い掛けながら、リーユンは上体を屈めてルウの様子を詳しく見ようとす。心なしルウの小さな両肩が小刻みに震えている様に見える。リーユンは言葉を失い、ケイに負けたことが余程ショックだったのだろうか、それとも震えが来るほど痛みが酷いのだろうかと思考を巡らせる。暫し押し黙ってルウを眺めていたリーユンだったが、ルウが唐突に叫び出した事で思考の中断を余儀なくされた。

「くっそ

！！次はぜってえ勝つ！！！」

誓いの雄叫びだ。ルウは気合の入った遠吠えを済ませると、一人スツキリした様子でリーユンの横を通って校舎の中へ消えて行く。何だかとてもなく疲れた心地になったリーユンも仕方なくルウの後に続いて屋内へ入り込む。後ろ手にドアを閉めて視線を上げると、丁度ケイが食堂の扉を潜って姿を消すところだった。

「ルウ、飲み物を入れて来るから娯楽室で待つてて」

ルウは大丈夫そうだと判断したリーユンはそれだけを告げると、ケイの片付けを手伝おうと食堂へ向かう。扉を開き、ダイニングを抜けてキッチンへ入れば、ケイは破片を捨てて新しい豆とカップとを四人分支度していた。リーユンは静かにケイの隣まで進み、僅かばかり見上げる位置にあるケイの相貌に視線を移し、ルウは大丈夫そうであった旨を伝える。ケイは水を満たした鍋を火にかけたところで一度動きを止め、ゆっくりとした仕草でリーユンを振り返り、不思議そうな表情で浅く首を傾がせる。金の髪がさらりと流れた。

「そんなはずは無いのですが」

「そんなはずは無い……って、いったい何をしたんですか？」

ケイから返された言葉を聞き、リーユンは答えを知りたい様な知りたくない様な複雑な心境で訊ねる。ケイは鍋から離れた手を口元へ運び、思案気な面持ちを浮かべて幾分言い難そうな様子で言葉を紡ぐ。

「元々小竜族というのは身体能力に優れているものですが、ルウはセンスが良いのでしょうか。近頃は手加減する余裕もなく、先程もつい容赦なく蹴ってしまっています」

ケイの容赦のない蹴りとは如何程の物かをリーユンは知らない。しかしながら校舎の振動と言い、頑丈なルウが蹲って暫く悶絶していた事と言い、かなりの物なのだろう事は想像に難くない。可憐な容貌の者が多く存在すると言われるエルフ族が好戦的であると初耳だった。リーユン＝ルルデヴィアイサーが知っているエルフ族は自然を愛し動物を愛し、破壊を厭い、平和を好み、精霊を従えて自然と共に生きる、人よりは精霊に近い種族であると言う何かの書物の受け売りだった。しかしながら実際この世界の人々の多くはリーユンと同じイメージを抱いている事だろう。

リーユンの思考を遮る様に、ケイが言葉を続ける。

「ルウ本人が大丈夫と言っているのなら、きっと大丈夫なのでしょう。小竜族ですし」

一人で納得した様子を見せ、ケイは珈琲の支度を済ませてトレイを手に持ち、娯楽室へ歩き出す。キッチンに取り残されたリーユンは華奢なケイの背を見送り、深々と溜息を吐いた。

「……やっぱりケイさんもドール教室に居るくらいだから、普通じゃないのかな」

「リーユン？」

口中で呟いた小さな声が届いた筈はないのだが、キッチンを抜けたところで急にケイが振り向いて声を掛けてきた。リーユンは心臓が飛び出るかと思うほどに驚愕し、伏せていた視線を慌ててケイへ向ける。

「な、何ですか？」

「いえ、今日の食事当番はリーユンですので忘れないようにと伝えようと思っただけなのですが。どうかしましたか？……汗を掻いていますね。体調が優れませんか？」

ケイがキッチンへ舞い戻り、心配そうにリーユンの顔を覗き込む。透き通るような翠玉の眸が間近に迫り、リーユンは気恥ずかしさから思わず視線を逃がして足元を見下ろした。

「だっ、大丈夫です。あの、それ、僕が運びます」

リーユンはケイの手から奪う様にしてトレイを受け取ると、ケイの横をすり抜けて足早に娯楽室へ向かう。今度はケイがキッチンに取り残される形となり、不思議そうに首を傾がせながらもそれ以上の追求をする事無く、彼女もまたリーユンに続いてキッチンを後にした。

リーユンが娯楽室の扉を開けて中に入り込むと、ユエは半ば程夢の世界へ旅立っているようだった。肘掛と背凭れの間に挟まる様に身を傾がせ、瞼を閉ざして呼吸の度に体を僅かに上下させている。ルウはその向かい、リーユンが腰掛けていたソファにちょこんと大人しく座っていた。リーユンはルウの右隣へ腰を下ろし、トレイをテーブルへ置いて食器を並べていく。手際よく四人分の珈琲をカップへ注ぎいれ、香ばしい香り漂う珈琲を四人の前へ並べた。

「ルウ、熱いから気を付けてね」

「ん」

ルウはリーユンから受け取った珈琲に砂糖とミルクを大量に放り込み、忠告通り火傷しないようにと留意し、吹き冷ましながら慎重に飲み始めた。ケイは一人掛けのソファに身を預け、ブラックのままの珈琲を優雅に口に運ぶ。伏せられた双眸の縁を飾る長い睫毛が揺れ、白皙の滑らかな頬に影を落としている。リーユンはついつい見惚れてしまっていた視線を無理やり外し、対面に座るユエの姿を視界に入れる。ユエは既に四分の三程夢の世界へ旅立っているようだった。

リーユンは小さな溜息を吐き出して、砂糖とミルクとを適量入れた珈琲を静かに喉に流し込む。口当たりが良く、程よい苦味と豊かな香味、砂糖とミルクを加えたことよって心地よい甘味がそれに混ざり、リーユンの口腔に広がる。思わず口元が綻ぶ美味しさは気持ちりをリラックスさせてくれた。カイリッドールがブレンドしたという珈琲は今まで飲んだ事のある珈琲の中でも群を抜いて美味しい。何より、人と味覚の異なるエルフ族のケイや、小竜族のクウ＝ラ＝ルウでさえ美味しいと言って好んで飲むのだから、カイリの珈琲へ

の拘り具合が良く解る。

と、突然隣席のルウが盛大に噎せ始めた。慌てて飲んだ珈琲が気管に入ったのだろうかと思ひ、リーユンはカップをテーブルへ置いてルウの小さな背中をさすり、ハンカチを取り出してその口許を拭う。

「……ッ、ゲホッ！」

ルウがきつく双眸を閉ざし、眉間に深く皺を刻んで苦悶の表情を浮かべ、一際激しく咳き込み始める。どうにも様子がおかしい。リーユンが事の異常さに幾分険しい面持ちとなり、一度ルウの口許を拭い取った時、手元のハンカチが真っ赤に染まっている事に気付いた。「ルウ!?」

リーユンの驚いた様子に、ケイとユエも何事かと咳き込むルウへ視線を向け、そして、慌てるでもなく再び珈琲カップに口を付けた。無事を問う声も心配する様子も無い二人に、流石のリーユンも思わず非難の声を投げ付ける。

「ちよつと、落ち着いて珈琲を飲んでいる場合ですか!? ルウが血を吐いたんですよ！」

あまりの事に混乱をきたし、半ば泣きそうな様子でリーユンがルウの口許を拭い、背を撫でて、せめて呼吸を少しでも楽にしようと奮闘している。その様子を相変わらず眠りの国へ片足を突っ込んでいるユエが眠そうな眸で眺めやり、

「小竜族つてのは元々の治癒能力が高いから、一晩経てば大概の怪我や病気は治るんだよ。だから下手に人間用の薬を与えたりして悪化させるよりは、横になって安静にしてる方が良いんだ」

ユエの意見は最もかも知れないが、リーユンは二人の態度があまりにも冷たい気がして尚も言い募ろうと口を開く。

「確かにそうかも知れないですけど、でも、だからってそんな」

「竜族は怪我や病気などで体が弱ると、炎の精霊、サラマンダー火蜥蜴の活動が

活発になります。そうなると私では近付く事が出来ません。……リ

ーユンも、あまり近付かない方が良いでしょう。熱病に掛かると手の施

しようもありませんから」

リーユンの台詞に静かな、言い聞かせるような声を被せたのはケイだった。ケイはそれだけを口にする、珈琲カップとポットの乗ったトレイを手にしてソファを立ち、娯楽室を後にする。ユエ「ルイエンはケイとリーユン」ルルデイヴァイサーの遣り取りを困った様な笑みを浮かべて眺めていたが、やはりケイと同様、珈琲を干した後、「安静にしてるよ」とだけ告げてカップを片付けに部屋を出て行く。リーユンは何とも複雑な面持ちで長身の背中が扉の向こうへ消えるのを眺めた。

「リーユンも、離れた方が良さぞ」

咳が多少落ち着いたのか、掠れた声音でそう訴えるのは、血を吐いた当の本人、クウ「ラ」ルウだ。

「そんな事出来るわけないよ」

リーユンは何を馬鹿な事を、とでも言いたそうな口振りで拒否するものの、ならばとルウはソファから体を起こして立ち上がり「じゃあ俺が出て行く」と扉に向かって歩き出そうとする。しかし案の定足元は覚束無い様子で、しっかりと体重を支え切れずに小さな体がぐらりと傾ぐ。リーユンが慌ててルウの身体を支えようと手を伸ばすが、ルウは何を思ったか支えの手をかわして綺麗な前転をかまし、すちゃっと立ち上がるとポーズまで決めて見せた。

「な？　へーき、へーき。リーユンは心配し過ぎなんだよ」

つい先ほど喀血したとは思えないはきはきとした口調で笑い、ルウはリーユンに背を向けると、ひらりと手を振ってエントランスへ消えて行った。

娯楽室の扉を完全に閉め切ってリーユンの心配そうな視線を遮った所で、ルウの小さな身体がふわりと宙へ持ち上げられる。黄金色の丸い双眸をより丸くするのも束の間、抱き留める腕の主を視認するよりも先に独特の気配でそれと感じ取り、口端を引き上げる生意気そうな笑みを浮かべて軽口を叩く。

「新学期早々何処行ってたんだよ、この不良教師」

珍しくきちんとした身形で外出していた不良教師ことカイリィドールは、無言のままルウを抱えて二階へ続く階段を上って行く。ルウがけほけほと小さな咳を繰り返す度に、カイリの式典用の正式な礼装に赤い染みが広がった。ルウはそれを気にしてなるべくカイリから身体を離そうとするのだが、カイリはルウの身体をしっかりと右腕で支え、左手で頭部を抱え込む様にして肩口へ押し付け、なるべく振動を伝えないようにと意識しているのが解る慎重さで幼い身を運んだ。流石にルウもそれ以上抵抗する気力も無く、大人しく運ばれるに任せて二階へ移り、通路の左手側、一番手前のルウの自室へ向かう。カイリが扉を開け放ち、一步室内へ踏み入れた所で、ぽつりとルウが呟いた。

「なあ、先生」

「何だ？」

直ぐに続きを口にする気配の無いルウを促し、カイリは小柄な身体を静かに寝台へと横たわらせ、損傷したらしい腹部へ右手をかざす。カイリィドールの内側から淡い蒼碧の魔力が溢れ、複雑で緻密な式が編み上げられて行くに従ってルウの腹腔を苛む痛みが和らぐ。楽になる呼吸を感じながら、ルウは金色の双眸を閉ざしてぶっさら棒に先ほどの台詞の続きを零した。

「……何でもねえ」

ルウの言葉には負けた事に対する悔しさか、手間を掛けさせた事に対する申し訳なさか、はつきりとした事は解らないが、苦々しい色が滲んでいる。カイリは「そうか」とだけ返して立ち上がり、魔力を収束させて暫くルウの様子を見下ろしていたが、癒しの魔術がきちんと作用したと知れば、薄水色の髪を撫で、何も言わずにルウの部屋を後にする。

カイリィドールが部屋を出るのを見計らっていた様なタイミングで、いや、実際カイリがルウの部屋へ入るのを見て、ずっと廊下で待っていたのだろう長身が、彼らの担任へ声を掛けた。

「先生。ケイも診てやってくれませんか」

「やれやれ」

ユエ「ルイエンの言葉に、カイリはのんびりとした口調で紡いで肩を竦ませるものの、その態度とは裏腹に、血の付着した衣服のまま幾分急いた足取りでケイの部屋へ向かう。階段の前を通り、右手側通路の一番手前の扉前で立ち止まると、おもむろに右足を持ち上げてドガアツと扉を蹴り付けた。余程頑丈な造りをしているらしい木製の扉はビクともしなかったが、部屋の主が驚くには十分な騒音と衝撃が出た事だろう。

「タアーキ！ 出て来い！！」

蹴りだけでは足りないと思っただか、カイリは扉越しに声を張り上げてタキ「ヤンフウへ呼び掛ける。直ぐさま「うるさいわねっ！！」という少女の声が廊下に響き、勢い良く扉が開け放たれる。扉の向こうに現れたタキはユエの出した課題を片付けていた所なのだろう、少々赤くなつた目は剣呑で、苛立ちもあらわにカイリへ怒鳴り返そうと口を開き、きよとんと茶色の双眸を瞬かせた。視線の先は不自然な染みを作るローブの肩口へ注がれている。

「何があつたの？」

「ケイが、ちよつとな」

仄かに滲む血臭にも気づいたタキは、神妙な様子でカイリに問い掛ける。カイリは相変わらず飄々とした態度を崩さないが、説明する間も惜しむ様子で天井を指差し、

「だから、天井のアレをどうにかしてくれ」

と、タキへ手短かに用件を伝える。カイリの人差し指が指し示す先には、三者の様子をじっと眺める一つの視線があつた。その眸は大きな丸いレンズで出来ており、三十センチ程の白くて丸い頭部に付いている。頭部はつるりとした金属的な光沢を帯び、同じ素材で出来ているのだろう四足の獣じみた胴体を持っていた。四肢を天井へ付き、逆さの姿勢でぶら下がって侵入者を排除しようと待機しているそれに、タキが視線を送る。

「サイエスくん六号、先生は通してもいいわよ」

白い四足の物体、サイエスクン六号はタキの命令に反応し、丸いレ
ンズの視線をカイリから外し、ユエの上へ注ぐ。

「向こうに部屋を持つている俺は相変わらず進入禁止なのか」

ユエの物言いたげなぼやきは聞こえない振りで、タキは心配そうな
表情を浮かべてカイリを見上げる。

「ケイは大丈夫なの？」

カイリはタキの心配を「いつもの体調不良だ」と軽い声音で流し、
通路一番奥にあるケイの自室へ向かった。

第二話 「黒き書」 第三幕

程なくして、コンコンと軽く扉を叩く音がケイの自室内に響き、部屋の主人は身体を沈めていたソファから立ち上がる。足音は絨毯に吸収されて殆ど何の物音も無いままに扉まで近付き、ケイは相手を確認せずに扉を開いた。誰何の声を掛けずとも、先程の騒音と大声とで誰が訪れるかは容易く想像出来たし、それが無くとも彼が部屋を訪れるだろう事は今までの経験上予想が出来ていた。そして、扉を開いた先には案の定、黒いローブを纏ったカイリドールの長身が佇んでいる。

「お帰りになられたんですね」

早朝から所用で校舎を出ていた教師に対し、ケイは常であれば労いの響きを纏う台詞を、今回ばかりは抑揚の無い声音で紡ぎ出す。平静を装おうとしての硬い所作である事は長い付き合いであれば其れと知れ、カイリは右手を持ち上げて軽くケイの頭部を叩く。

「痛いです」

何もかもを見透かされていると解っては居ても、ケイは平気な振りで非難の声を紡ぎ、翠の双眸を呆れ顔のカイリへ真つ直ぐ注ぐ。カイリはケイの頑なな様子にこれ見よがしな溜息を零し、ケイの頭に乘せた手を僅かにずらして額に触れ、

「体温が上がってるぞ」

と、手指や掌に伝わる彼女の体温が通常よりも高い事を指摘する。

「平気です」

ケイは右足を引いてカイリの掌から逃れ、硬い声音で尚も自身の無事を訴える。空中に取り残された右手を所在無さ気に引き戻し、カイリはがしがしと自らの黒髪を掻き乱した。

「ケイ、火蜥蜴の影響を受けてるのは見りゃ解るんだ。精霊力を調整しないと身体が弱って行くだけだぞ」

「調整なら自分で出来ます」

「だが時間が掛かり過ぎる」

言い募るケイを、カイリはぴしゃりと切って捨てる。ケイは事実を指摘する教師の声に咄嗟に言い返すべき言葉が見付けられず、睨み付けるかの如く視線を強める。折れる様子は全く無い。カイリは落ち着いた黒い双眸を逸らさずにケイを見やって言葉を続けた。

「確かに、ルウに怪我をさせたのはお前だ」

ケイは思わず眼差しを揺るがせ、そつと瞼を伏せてカイリの胸元へ視線を落とす。手加減が出来ずに内臓を損傷させてしまう程に蹴り付けた事など初めてで、ケイは激しい自責の念に駆られていたのだ。「其処で責任を感じるのはいんだがな。お前が苦しんだところで喜ぶのはちよつとアブナイ趣味の奴等だけ……」

全てを言い終えるよりも先、鋭く空を切る音がしてケイの右足踵がカイリの眼前に迫る。寸止めされた蹴りに言葉を止め、カイリは洒落にならんと乾いた笑いを発しながらケイを宥めに掛かる。

「あゝ……ははは、……ま、まあ、なんだ。上手くやれる奴がやった方が効率が良いだろう。そう言う訳だから大人しく治させろ」

双眸据わらせたままではあったが、ケイがゆっくりと足を下ろしたのを確認し、カイリはホツとした様子でケイに一歩近付いた。しかしあくまでケイは教師の手出しを拒み、カイリが近付いた分だけ背後に下がって距離を置く。

「誰にも気付かせなければ良いのでしょうか。自分で治します」

「あーそうですか。はいはい解った、解りました。好きにしろ」

ケイの頑なな態度にはカイリもお手上げの様子で、拗ねたとも呆れたと取れる口調と態度とで右手を投げ遣りに左右に振る。ケイはカイリの仕草に少々ムツとしながらも、諦めてくれた事に安堵していた。

「食事は部屋へ運ぶようにタキに言っておくから、さっさとベッドに横になれ」

「……、…はい」

明らかに子供扱いされていると分かるカイリの言葉は癪に障るが、

これ以上反発する方が余程子供っぽい気がして、ケイは大人しく言われるままにクローゼットへ向かう。戸を開いて薄手の寝間着を取り出し、体型の隠れる丈の長い上着を脱ぎ落とす。淡く薄青色色彩の布地が柔らかく揺らいでケイの腕に収まり、左腕に上衣を引つ掛けたまま、ケイは中に着ていた着衣に手を掛ける。そこで不意に背後を振り返り、突き刺さる様な冷めた眼差しで、未だ室内に佇む人物を見やった。

「何時まで其処に居るつもりですか」

声を掛けられたカイリは「え？」と一瞬驚いた表情を浮かべ、質問の意図に思い至って誤魔化す様な笑みを浮かべ、

「あ、いや、出て行くよ、うん。あははは」

と、わざとらしく笑いながらポンポンとケイの肩を叩き、一目散に部屋を出て行った。扉を開けて逃げるカイリを追う様にして、ケイの周囲で暴れていた火蜥蜴が離れて行くのが解る。ケイは思わず呆気にとられた様子で担任を見送り、「やられた」と悔しげな、諦めにも似た声音で呟いた。

その頃、娯楽室に一人取り残されたリーユンは少し温くなり始めた珈琲を一口含んでは溜息を吐く行為を繰り返していた。隔離教室担任カイリドールはもちろんの事、其処に集う生徒達ですらリーユン＝ルルディヴァイサーの理解の範疇を軽く超えている。新学期初日から生徒に無断で外出する教師。怪しげな魔法生物マジッククリチャーを創造しては愛でている少女。頼れる大人かと思えば怪我人を冷たく放置する男。全く捉え所の無いエルフ族の女性。やる事が万事滅茶苦茶な小竜族の少年。彼らを正しく理解するには一体どれ程の時間が掛かる事だろうか。いや、そもそも理解できる日など来るのだろうか。

リーユンは何度目かの溜息を吐いた。それから、自分を鼓舞する様に小さな声で呟く。

「キリ先生の期待に応えなくちゃ」

出来るのだろうかと結果を気にする暇があるなら、出来るように努

力する。リーユンは中級教室在籍時の担任であるキリィメイシャーの教えを心の中で繰り返し、「よし」と気合を入れて立ち上がると、使用した食器類を手に持って食堂へ移動した。手際よく珈琲カップやポットを洗って片付け、何時の間にかキッチンボードに貼り付けられているレシピに目を通す。メモの一番最初には使用する調理器具や食材、調味料が分量と共に書かれていて、まずはそれを一通り準備する。次にメニューを確認して出来上がりを予想すると、後はレシピに書かれている手順通りに動き、最後に味を見れば料理は完成である。

リーユンの几帳面な性格がよく表れた、丁寧に盛り付けられた料理。ダイニングテーブルへ運んで、普段皆が座る位置に合わせてそれぞれの料理を並べていく。

季節の野菜と新鮮な魚介類のサラダ。鶏肉を柔らかく煮込んだクリームシチュー。香草を添えた白身魚のムニエル。ケイ用には季節の野菜のシーザーサラダ。数種類の豆を使ったスープ。特製スパイスで程よく焼きあがった根菜のソテー。ルウ用はと言うと、何とも形容し辛い料理ばかりなのだが、しいて説明しようとするとな次の通りだ。ニガヨモギとマンドレイクっぽい茄子科の植物を混ぜ込んだハンバーグ。ペヨーテやセレウス・ペルビアヌス・モンストロサス、カラシコエ等に似た数種類のサボテンらしき植物のシチュー。後は何だかよく分からないハート型をした穀物で作ったオムライスに煮詰めた蜂蜜を掛けた物。使用した調味料も匂いのきつい物が多く、食べる気を削ぐようなものばかりだった。

「……ルウを理解出来る日は来るのかな」

そんな不安を胸に抱きつつ、リーユンが手際良くテーブルを飾り、最後にふっくらと焼き上がったパンをバスケットに入れて運ぶ頃には、クラスメイトと教師は各々定められた席に着いていた。その顔触れの中には先程娯楽室で見た苦しそうな顔とは打って変わった元気そうな様子のルウの姿もあったので、リーユンは小竜族の治癒力の高さに目を丸くしつつも無事である事に深く安堵の吐息を零す。

それと同時に小竜族の事をよく知りもしないのに偉そうにケイとユ工を非難してしまった自分を情けなく思う気持ちも沸いて来て、少々複雑な面持ちを浮かべたまま静かに席に着く。しかしながらそんなリーユンの気持ちを知ってか知らずか、当の本人たちは全く気にした様子も無く、至って普段通りの態度だったのでリーユンはほんの少しだけ気が楽になった。

一つのテーブルを囲んで皆で手作りの料理を食べる行為、所謂食卓を囲むというこの風景も少しは見慣れてきた気のするリーユンだったが、やはり団欒めいた時間には未だ多少の気恥ずかしさが残る。自分が食事当番の時は尚更だ。リーユンは知らず知らずの内に、料理を口へ運ぼうとしていたカイリをジッと視線で追っていた。フォークに刺された瑞々しい香草と、温かな湯気を立てる白身魚とが今まさにカイリの口に放り込まれようとした刹那、食事の為に開かれていたその唇が動いた。

「いくら俺の唇が魅力的だからといって、そんなに凝視するもんじやないぞ?」

リーユンがぎよっとして視線を上げると、真っ直ぐにリーユンを見つめながら意地の悪い微笑を湛えるカイリと目が合い、リーユンの顔にさつと朱の色が滲む。

「……………」

担任のあまりの発言に返す言葉も思い浮かばず絶句してしまったりリーユンを、ルウとユ工がにやにやと笑いながら眺めている。その傍らでケイは黙々と食事を進め、タキは呆れ顔でからかわれたリーユンから意地悪な師へと視線を移し、

「食事が美味しいなら美味しいって、ちゃんと素直に言ったらどう?」

そう言っただけはスプーンでホワイトシチューを掬い、口中で軟らかく解ける野菜を味わってから言葉を続けた。

「うん、美味しい。きっちりレシピ通りに作るのなんて、リーユンくらいよね」

「うんうん。俺、ユエが当番の時は安心して食べねえもん」

ルウが口の周りを良く判らない食べ物でベタベタに汚しながら、満面の笑みを浮かべて美味しそうに謎な料理を頬張っている。テーブルに点々とスープやタレが落ちていたりとかかなり行儀が悪いのだが、あまりにも幸せそうに食べるので皆注意する気力が殺がれてしまうのだ。悪びれる事無く至福の一時と言った具合に食べ続けるルウをじっと睨み付け、ユエが唸る様に問い質す。

「それはどういう意味だ」

「記憶に無い、とか言ったら怒るわよ？」

すかさずタキがルウの援護に入る。

「ユエが食事に変な薬を盛った所為で、ケイがあんな事になっちゃったんじゃない」

「その話はもう止めて下さい」

一人会話に混ざらず食事に専念していたケイだったが、自分の話題となった所でガツクリと項垂れて額に手を当てた。リーユンは眼前で繰り広げられる会話について行けずに、取り敢えず食事を取る事に意識を向ける。ケイの身に一体何が遭ったのかを訊ねてみたい衝動に駆られはしたが、ケイの様子を見る限りでは教えて貰えそうに無いだろうと思われた。

三人の言い合いは止まる所を知らず、ヒートアップして次々と信じられない話題が上る。タキが作成したカレーを食べる筈が逆にカレーに食べられそうになって大惨事だったとか、ユエが作成したデザートを食べたら全身が甘ったるくなって虫やら動物やらに追い掛け回されたとか、ルウの作成したロールキャベツを食べたら原因不明の高熱が続いて生死の狭間を彷徨ったとか……。リーユンは今の所、彼らの料理を口にして無事で済んでいる事を心の底から神に感謝した。

「ケイは勝手に肉を抜いたりするし、味付けが薄過ぎるし、て言うか調味料使っていないし、タキは調味料間違い分量間違い当たり前だし、たまに訳の判らない素材と合成して魔法生物^{マジッククリチャー}出て来るし、ユエ

は全部大雑把で適当過ぎるし、何時一服盛られるかわかんねえし」
ルウが不満を一気に打ち撒けると、ユエが負けじと反論を入れる。
「ちよつと待て。ルウは他人の事言えないだろう。俺達の食事にモ
ンスターの肉とか毒草なんか入れるんじゃない」
「何でだよ。美味しいんだから良いじゃねえか」
「美味しくない。硬い、臭い、えぐい！」
「んだとー!? やんのか、ユエ！」
「ほほう、俺様に喧嘩を売るとは良い度胸だねえ。教育してやろう
じゃないの」

視線を絡ませて火花を散らし、睨み合う事暫し。ルウとユエの二人
は物凄い勢いで食事を口の中へ掻き込み始めた。租借もおざなりに
ガツガツと音がしそうな勢いで食べ続ける二人にひたすら圧倒され
るだけのリーユンだったが、カイリとケイ、タキの三人が落ち着い
て食事を取り続けているのを確認すると、自分もそれに倣う事にし
た。先達の真似をする事がこの教室に慣れる一番の近道である。三
人が慌てないと言う事は、きっと大した事にはならないのだろうと、
リーユンは自分に言い聞かせる。

「ごちそうさま！」
ルウとユエは同時にガチャンと食器を鳴らして勢い良く椅子から立
ち上がると、競う様にして自分で使用した食器を重ねてキッチンへ
運んで行く。その様子を終始楽しげに眺めながら食事をしてきたカ
イリは、食器を片付け終わってキッチンから急ぎ食堂へ戻ってきた
二人に声を掛けた。

「二人とも、どうやって決着をつけるつもりなんだ？」
「そんなの決まってるんだろ？」
ルウがカイリを振り返ってびしっと指を突き付ける。

「肉・弾・戦！」
「そんな野蛮な事はしない。カードゲームで勝負だ」
ルウの高らかな宣言に、すかさずユエが訂正を入れた。ルウは不服
そうにユエを睨み上げ、ユエは余裕の笑みを浮かべてルウを見下ろ

す。そんな教え子二人の遣り取りを、カイリは心底上機嫌な笑顔で眺めていて、カイリの異様に楽しそうな様子に気付いてしまったケイとタキはとてつもなく嫌な予感を感じてお互いに目配せをし合う。カイリがこんな風に嬉しそうな顔をする時は決まって良からぬ事を企んでいるのだと言う事を、ケイとタキは過去の経験から知っている。

睨み合いを続けていた男二人も、はた、とカイリの様子に気が付いた。引き攣った表情を浮かべながら自分を見つめてくる教え子達に、より一層、輝かしいばかりの笑顔を向けてカイリ「ドール教師が言う。

「決着をつけるのに、良い方法があるんだがな」

「な……何デスカ……？」

本心では聞きたくないのだが、聞かなければ聞かないで後が怖いという心境から、ユエが皆を代表して引き攣った表情のまま尋ねると、カイリはテーブルの上にドサリと五冊の本を放り出した。本はどれもしつかりとした黒い装丁で、タイトルも何も書かれてはいない。カイリは然程大きくは無いB5サイズ程度のその本を一冊手に取ると、軽く掌で弾ませたりして弄びながら教え子達の顔を殊更ゆつくりと見回す。

「どうせ競うなら五人でやれ。その方が絶対面白い。優勝者には俺からビッグなプレゼントも進呈しよう」

ルウ、ユエ、タキはあからさまに嫌そうな顔をカイリへ向け、ケイは自分には無関係だと言わんばかりの無表情を作っている。リーユンはと言うと、唐突過ぎる展開について行けずに戸惑うしか出来ない。ルウとユエの言い争いから何をどうすれば五人で競い合うという話になるのか、そもそもそんな事より今期の授業カリキュラムはどうなっているのか。止まる思考の中、カイリの言葉だけがあまりにも解り易くて容易に意識に浸透する。

「なあに、ルールは簡単だ。この本を誰よりも早く読めば良い」
宙に放り投げた本を掌に受け止め、カイリ「ドールは口端を引き上

げて邪悪に笑った。拒否の言葉は誰の口からも発されず、五人は何故か担任の思い付きらしい競技で競い合う事となったのである。

第二話 「黒き書」 第四幕

カイリッドール教師から生徒達に一冊ずつ渡された黒い本には魔術による錠が施されていた。よくよく見れば魔力を編み上げて作られた術式が確認出来るのだが、一見してそれと分らないような創りになっている。細く細く繕り上げられた魔力が様々な属性を帯び、緻密で複雑な文様を描いていた。リーユン＝ルルディヴァイサーは知り得る限りの解術を試してみたが、どれも手応えすら無く、空しく消えていく。やはり広く一般的に普及している既存の術式ではなく、オリジナルの施錠魔術であるらしい。

「うーん」

リーユンは小さく唸って、眼前に近付けて眺めていた黒い本を机の上へ戻した。空けた両手を頭上へ持ち上げ、椅子の背凭れに寄り掛かる様にして大きく伸びをし、そのままの姿勢で視線だけ横へ流して寝心地の良いベッドを占領している人物をジトーツと胡乱な眼差しで眺めた。当の本人は見られている等と思わずに、いや、見られていてもきつと気にはしないのだろうが、水色の尻尾をゆらゆらと一定のリズムで揺らしながら黒い本を枕にしている。

「ルウ、どうして僕の部屋でくつろいでるの」

リーユンの呆れた声音に反応し、小竜族のクウ＝ラ＝ルウはまるで小動物のような俊敏さでガバツと上体を起こし、キラキラと期待に輝く眼差しでリーユンを見つめる。余程暇だったらしい。リーユンは呆れて小さく溜息を吐くと、持ち上げていた腕を下ろして椅子から立ち上がり、ベッドへ向かう。ベッドの傍らに辿り着けばクルリと後ろを向いて縁に腰を下ろし、リーユンが小さく振動するマットの感触を受け止めて居る僅かな間に、ルウもリーユンの隣に移動して改めて彼の顔を覗き込む。

「で、何かわかったか？」

ルウの期待に満ちた双眸と声音とに、リーユンは先程よりも大きく目

の吐息を零すと額に手の平を当てて隣に座るルウを視界に収める。

「人に聞いてたら、課題にも競争にもならないと思うんだけど」

「こんなの元々俺に不利じゃねえか。ヒントくらい教えてくれても罰は当たらねえと思うぞ。なあなあリーユン、良いだろそんなくらい」

ルウは幼い容姿に似つかわしい仕草と口調でリーユンの服の袖を掴んでぐいぐいと引つ張る。小さな子供のお強請りを無碍にも出来ず、リーユンは「仕方がないなあ」と吐息混じりに呟いて、つい先刻までルウの枕になっていた黒い本を手に取った。

「うん、やっぱり僕の本とは違った魔術が掛けられてるね。ほら、よく見て。この術式、所々不自然に欠けてる所がある」

リーユンは黒い本の表紙をルウの眼前へ差し出し、逆の手で該当箇所を指差しながら説明する。

「おお、言われて見ればそうだな」

ジツと術式を追っていたルウが納得したのを確認すると、リーユンは本をルウへ返却しながら話を続けた。

「多分だけど、皆がそれぞれ苦手だと思う事が鍵になってるんじゃないかなあ」

「苦手つーと、俺は水属性の魔術だな。あれ、でもこの本、水属性の魔術が使われてねえぞ？ うん」

「そう、ルウは水が苦手だよな、だから、水属性が使われてないのには意味があると思うんだ」

ルウはリーユンの言葉を聞きながら、黒い本を眼前に近付けて隅々までじっくりと観察し始めた。僅かな糸口を見付けた途端、真剣に取り組み始めたルウの様子が可愛らしくて、リーユンはふと表情を和らげて笑みを浮かべ、ルウの邪魔にならない様に静かに机へ戻った。リーユンも机上に投げ出していた黒い本の解術に再び取り組もうとして、やわらかいクッションの椅子に腰掛ける。

リーユンに手渡された黒い本はルウの物とは逆にびっしりと術式に覆われている。通常、解術と言うと魔力で描かれた術式の綻びや

合わせ目を見付け、其処から式を逆に編んでいく感覚で魔術を無効化していくのだが、この施錠魔術はそう言った繋ぎ目や隙間、綻びが一切見当たらなかつた。一見して、かなり高レベルの魔術師が術を施したのだろうと解る。

「これ、カイリ先生が掛けたのかな」

暫くあれこれと調べてみるが、やはり取っ掛かりになる様な場所が見付からない。試しに無理矢理こじ開けようと力任せに魔力を術式に流し込んでみてもみたが、綻ぶどころか歪みすらせず、面白いくらいに手応えが無い。がちがちに編み込まれた術式はビクともせず、緻密で美しい模様を描き続けている。

「わかつたあつー!」

術式の解読に集中しきっていたリーユンは、突然のルウの叫び声に驚いて振り返る。

「リーユン、俺わかつたぞ！ パズルだ、パズル。欠けた部分に水を補ってやりやいいんだ！」

ルウは正解らしきに辿り着けた事で興奮も露わに早口で捲くし立てると、ベッドから飛び降りて早速術式を編み始めた。

「え、ちよつと、ルウツ!？」

リーユンは自室で魔術を使用されては困ると慌てて止めようとしたのだが、ルウの作り上げた術式を見て、術に介入してまで発動を阻止する危険を冒すまでも無いと、傍観する事にした。速さだけは一人前のかなり大雑把な術式は式として成り立つには不完全で、案の定魔術は発動せず、何の反応も示さない。リーユンは心底ホツとした後、やや厳しい顔つきでルウに詰め寄った。

「ルウ、所構わず魔術を乱用しちゃだめだよ。ちよつとしたミスでも魔術は失敗するんだから、苦手な魔術なら尚更慎重に場所を考え使わなくちゃ」

ルウは不貞腐れた様なしかめっ面を作り、優等生らしい尤もな言葉を聞いていたが、リーユンの台詞が途切れた所でポツリと呟いた。

「でも、手応えはあつたんだ」

「え？」

思わず聞き返してしまつたリーユンだったが、ルウの小さな呟きの意味を一瞬遅れてはつきりと理解した瞬間、本能的に身構えると同時、ザッバアアアア　　ンと盛大な水音が室内を満たす。

「……………」

リーユンは無言でがっくりと肩を落とす、頭を垂れて立ち尽くした。ぼたぼたと前髪から、衣服から、雫が零れ落ちて絨毯の上に滴り落ちるのを何となく眺めてみる。リーユンの前には彼と同じように全身ずぶ濡れとなつたルウが勢いよく頭部を左右に振つて、犬猫の様に水を払いながら何やら喚いている。

「うっわ、最低！ 何だよこれ、全身びしょ濡れじゃねえかつ！ しかもこの水生温いし……って、しょっぺえ！！ これ水じゃねえや、海水だ！ あー、何かそうわかると急にベタベタしてきた気がするう。なあ、リーユン、風呂借りて良いか？」

ただの水なら自然乾燥させる気満々だったルウだが、塩まみれになるのは流石に頂けないと思つたか、リーユンに視線を転じて問い掛ける。その瞬間、ジツと床の一点を見つめて動かないリーユンの姿を捉え、ルウは顔を引き攣らせて凍り付いた。

「あ……あの、リーユン？」

腰が引き気味になるルウ。その場から逃げ出したくなるのを無理矢理堪えて、恐る恐るといつた様子でリーユンに声を掛ける。ぼんやりと一点を見詰めていたリーユンはふつと顔を起こしてルウを見ると、「ああ……」と反応を示した。

「お風呂……お風呂ね。うん、どうぞ、自由に使つてくれて良いよ」「お、おう。ありがと。あの、わざとじゃないんだ。マジで。反省してる。悪かつた。謝る。今度から魔術使う時は気い付けるから。うん。えと、じゃあ、風呂、借りるな？」

どこか茫洋とした様子のリーユンに得体の知れない不安を覚え、ルウはしどろもどろになりながら謝罪を繰り返して、そそくさと逃げる様にバスルームに飛び込んだ。

一人びしょ濡れの室内に取り残されたリーユンは大きく息を吸い込んでから、殊更ゆっくりと吐き出し、深呼吸をする事で少しだけ平静を取り戻す。落ち着いて自室を見回せば、ふかふかのベッドと絨毯、クッション、ドアの側に掛けてあった真紅のローブ、机の上に出してあったレポート類が駄目になってしまっているのが分かるが、普段から整理整頓をしていたのでその他には特に被害はなさそうだった。リーユンはもう一度だけ溜息を吐いて、水浸しになった机の上の書籍の中から黒い本を手にとった。表紙に残っていた塩水が流れ落ち、水を吸ってふやけたレポート用紙の上で弾ける。万国共通の常識として、書籍に水は厳禁である。今回の課題はリタイアせざるを得ないと思うと、リーユンは盛大に溜息を吐きたい心持ちになる。取り敢えずこのままにしておくのも忍びないので、クローゼットからタオルを取り出して黒い本を包み、丁寧に水分を取り除いていく。

「…………あれ？」

黒い本から水気を綺麗に拭き取ると、タオルの中からは表紙も中のページもふやける事無く濡れる前と変わらない綺麗な姿が現れた。

「防水加工、かぁ」

今回の様なトラブルを見越していたのか、本一つに高度な技術を施すカイリッドール教師に呆れとも尊敬ともつかない溜息を零し、リーユンは改めて黒い本に見入る。先程まで手も足も出ない程に綺麗に編み上げられていた術式が、今は微かに綻んでいる。

(これって、もしかして…………?)

リーユンは一つの結論を導き出すと、急いでバスルームに駆け込んだ。洗面台の排水溝へ栓をし、蛇口を目一杯捻って勢い良く水を飛び出させ、洗面台に透明な液体が満ちていくのを黙って待つ。そのリーユンの様子をシャワーを使っていたルウが、カーテンを少し開いて窺っていた。ルウはリーユンが怒っている訳ではない事を知ると、少し躊躇いつつも好奇心に負けて声を掛ける。

「リーユン、何やってんだ？」

リーユンは視線を伏せて洗面台を見下ろし、水が溜まった事を確認して蛇口を締めながら言葉のみを返す。

「分かったんだ、解術の方法が。……見てて」

そう言うのとリーユンは洗面台の中で揺ら揺らと波打つ水に、黒い本を静かに浸した。ルウも身を乗り出し、興味津々の態で洗面台を覗き込む。水の中で黒い本の影が揺れ動くのを暫く眺めていると、徐々に黒い装丁が青い光を帯びていき、やがて光が最大にまで満ちたのだらう、パンツと軽やかな音を立てて術式が弾けた。

「おお!？」

ルウが驚きの声を上げるのを聞きながら、リーユンは水の中に沈む黒い本を注視する。本は何事も無かったかの様に元の黒い装丁のまま、澄んだ真水の中に沈んで涼しげに揺らいている。リーユンはそつと黒い本を水の中から取り出すと、手早くタオルで拭って施錠の魔術を確認した。

「なあ、早く開けてみるよ」

ルウがじれったそうに声を掛けるが、リーユンはゆっくりと首を左右へ振って本を開こうとはしなかった。怪訝そうな表情を浮かべるルウに視線を移し、手にした本を示してリーユンが答える。

「僕に渡された本は魔術が何重にも掛けられているみたい」

「げえ、めんどくせえ」

ルウが心底嫌そうな顔でぼやき、我が物顔でリーユンのバスタオルを拝借し、大雑把に身体を拭いた。そのままバスタオルを頭から被つてすっぽりと身体を包み込む。

「んじゃ、着替えてから先生に部屋の事伝えて来る。その間にリーユンもシャワー浴びといた方がいいぞ」

「うん、そうさせてもらうよ。でも、ちょっと待って」

リーユンは黒い本を洗面台備え付けの棚に置くと、盛大に水を滴らせているルウの髪の毛を拭きにかかる。

「いいよ、別に。ちよつとくらい濡れててもへーきだって」

「駄目だよ。ちよつとどころか、全然拭けてなかったし、風邪引い

「ちゃつよ」

「むっ」

リーユンの部屋びしょ濡れ事件の事もあってあまり逆らうのもまずいと思ったのか、ルウは大人しくリーユンに頭部を差し出し、髪を拭いてもらう事にする。時々角にタオルが引つ掛かって拭きにくそうにしながらも何とか拭き終わると、リーユンはルウの肩にバスタオルを掛ける。これでよしと視線を起こした先、薄水色の髪の中から覗く二本の角が視界に飛び込み、リーユンは思わず惚けた様子でルウの頭部に視線を奪われる。

「……」

ルウが視線に気付いてリーユンを見上げ、その動きで角が僅かに遠ざかり、リーユンは我に返って視線を黄金色の双眸へ落とす。

「あ、ごめん。間近で竜族の角を見たのなんて初めてで、つい」

「……リーユンにだったら幾らでも見せてやるよ」

リーユンの率直な謝罪の言葉を受け、ルウはニツと笑って言葉を返し、素早い動きで踵を返してバスルームを出て行く。

「じゃ、先生に言っとくから」

「うん、よろしく」

元気良く去って行くルウの背を見送りながら、リーユンは先程のルウの態度を思い出していた。自分を見上げた時に見せたルウらしからぬ冷めた眼差しと表情。

「ルウに嫌な思いさせちゃったな」

きつと今までに何度も興味本位の不躡な視線を浴びせられて来たのだろう。人里では滅多に見かける事の無い珍しい小竜族だと分かっていたのだから、もう少し気を付けて接して然るべきだった。ルウは直ぐにいつも通りの笑顔を見せてくれたけれど、

「次から気を付けよう」

リーユンは声に出して自分を戒めると、ルウのアドバイスに従って何はともあれ海水を洗い流す事にした。ルウが魔術を失敗したおかげで黒い本の解術の方向性も分かった事だし、水浸しの部屋に関し

てはカイリ先生が取り計らってくれるだろうし、当面リーユンがすべき事と言ったら身なりを整えて担任なり清掃業者なりを迎える準備をする事しかない。つまり、入浴だ。冷たく濡れた衣服を脱ぎ、暖かなシャワーに打たれる時間はリーユンに与えられた数少ない穏やかな時間の一つだ。

リーユンは一日で数えるほどしかない安らぎの時に感謝しつつ、思う存分満喫した。

第二話 「黒き書」 第五幕

リーユンがシャワールームから出てラフな部屋着に着替え、室内に備え付けられている魔導器の故障の有無を調べていると、コンコンとドアを叩く音が響く。

「はい」

手短に返事を返して扉前に移動し、静かに扉を開いた先にはルウに呼ばれたのであろうカイリ「ドール教師の姿があった。カイリはリーユンと一度視線を重ね、無言で室内をぐるりと見回すと、おもむるに紙とペンを取り出して「クウ「ルウ+2」「リーユン「ルデイヴァイサー+1」と書き付ける。カイリはメモとペンをポケットへ仕舞いながら、

「まあ、何だ。ホント新学期早々災難だな」

と、まるで他人事の口調で言うのと、室内に踏み入れて壁際に設置されている魔導器に手を触れる。リーユンは魔導器が壊れていないかどうか心配で、カイリの様子を黙って見つめた。カイリは暫く色々と作動させてから、魔導器に手を触れたまま呟く。

「ふむ、念の為メンテナンスして貰うか」

そうして今度はリーユンに向き直り、

「問題なく作動するから壊れてはいないみたいだが、明日クリーニング業者と一緒に魔導師も呼んでおく。今日はもう遅いから、ルウの部屋にでも泊めてもらえ」

とだけ告げ、リーユンの髪をぼんと撫でてさっさと奥の自室へ引っ込んでしまった。

「ルウの部屋かあ」

リーユンは何となく湧き上がる嫌な予感に、知らず吐息混じりの言葉を紡ぐ。脳裏にはドール教室のエントランスや応接室の惨状が鮮明に浮かび上がり、その光景を打ち消そうとするかの様に勢い良く頭部を左右へ振って映像を振り払う。

「カイリ先生が泊めて貰えって言うくらいだから、きっと大丈夫……だよ」

己に言い聞かせる言葉を紡ぎ、歯磨きを済ませ、寝間着に着替えてからリーユンは自室を後にすると、階段横のクウ＝ラ＝ルウの部屋の前まで移動する。どんな光景が繰り広げられていようと平常心を保てる様に扉の前で一呼吸置いてから軽くノックの音を響かせると、「ういー」という気の抜けた返事と共に直ぐにも扉は開かれた。「ういっす。入って」

ひよこりとドアの隙間から姿を現したルウはリーユンを招き入れるために扉を大きく開き、さっさと自分のベッドへ直行する。ルウの体格にはかなり大きなその寝台によじ登り、片側を空けて横になると空いたスペースをぼむぼむと叩く。

「ちよつと狭いけど、ま、我慢してくれ」

それからルウは布団を頭まで被り、「おやすみ」と続けてあつさり眠りへ落ちていった。

「あ、うん、お休み」

取り残された感のあるリーユンは部屋に踏み入れて直ぐの場所で立ち尽くしていたが、ふと我に返って室内に目を向ける。其処には想像していた様な惨状は無く、予想外にきちんと整えられていた。流石に男の子であるから多少雑然とした様子はあるのだが、一般的と呼べる生活感のある部屋だ。置物類がなかなか个性的でリーユンの興味を引いたのだが、持ち主が眠っている間に勝手に触れる訳にもいかず、リーユンはまた今度話を聞かせて貰う事にしてルウの隣に潜り込んだ。少年二人で眠ってもまだ余裕のある広い寝台。寝易い体勢を取り、気持ち良さそうに寝息を立てるルウの身体に上掛けを引き上げて、リーユンもまた双眸を閉ざして眠りへと落ちる。

翌朝、朝食を食べ終える頃にクリーニング業者がやって来て水浸しになってしまったリーユンの部屋の清掃を始めたので、リーユンは黒い本と古雑誌を持って教室の外へ移動した。人通りの所為で自然と踏み固められて道となった出入り口に程近い場所、茶色い土が

剥き出しの其処へぐしゃぐしゃに千切って丸めた古雑誌で小さな山を作る。リーユンは紙の山を前にして静かに目を閉ざし、ゆっくりと呼吸を繰り返して体内の魔力を練り上げる。やがて紅蓮の色彩纏う緻密な術式がリーユンの周囲に描かれ始め、

「ファイアーボール」

気体と温度に干渉する式の構築と魔術を発動させる為のキーワードが揃って、リーユンの指先から威力を最小限に抑えた炎の魔術が発露する。小さな火球は指先から放たれて真っ直ぐに紙の山へ向かって進み、古雑誌であった物を瞬く間に赤々と燃え盛る炎で覆い尽くした。

「さて、と」

リーユンは集中を解き、パチパチと爆ぜる火を見つめる。黒い本を抱える腕には自然と力が籠もり、これから行おうとしている事に対して惑いを覚えている事に改めて気が付く。

「これで火属性の魔術が解除出来るはずなんだ」

リーユンの蒼い眸が揺れる炎から手元へ流れ、意を決した様子で力イリから渡された黒い装丁の本を炎の中へ投げ入れた。炎はみるみる内に黒い本を包み込み、新たな可燃物を得た事で更に勢いを増して燃え上がる。赤々とした炎に照らされるリーユンの顔は不安と期待が入り混じった複雑な表情を浮かべ、徐々に勢いを衰えさせていく炎をじっと見つめている。やがて炎は下火となり、最後に細かい煙を空へ立ち上らせてから完全に消え去り、後には真っ黒な灰燼だけが残される。リーユンが近くの本木の根元から細い枝を一本拾い上げて枝先でそっと燃えカスを探ると、長方形の形を残したままの黒い本が現れた。リーユンは身を屈ませて慎重に本を拾い上げ、灰を払い落とす。黒い本は少しも焦げる事無く、炎に投じる前と同じ姿形を保ってリーユンの手の中に納まっている。

「よかったあ」

確認した所、魔術の鍵はまた一つ解除されている。

「順調に解けてるみたいだねえ」

リーユンがのんびりとした口調の聞き覚えのある声に振り返ると、クラスメイトのユエ「ルイエンが右手に大きな鞆を、左手に黒い本を携えて立っていた。リーユンは身体ごとユエに向き直り、「おはようございます」と小さく会釈をしてから手にしていた本をユエにも確認出来る様に持ち上げてみせる。

「もう少しで中を見れそうです」

「そうか、頑張ってるね。俺は今回の勝負は負け確定だよ」

謎解きが順調に進んでいるのだろうと解る嬉し気な様子で微笑むリーユンに、ユエは欠伸を堪えながら右手に持っている荷物を軽く揺すって抱え直し、疲れを隠し切れない声で言う。リーユンはユエの台詞にきょとんと双眸を瞬かせ、首を傾がせて長身のユエを見上げる。

「解き方は解っているんですか？」

「ああ、こつやって……」

ユエは言葉と同時に左手の黒い本を持ち上げ、張り巡らされた緻密な術式をリーユンに見せる。術式は幾つかの小さな円形と直線とで描かれていて、ユエが青く発色する円の一つに指を添えて水属性に練り上げた魔力を流し込むと、式の一部がそれに同調して青い色彩を帯びていく。

「一定量の魔力を一定時間流し続けると解術出来るんだけど、生憎と俺には時間が無くてね」

そう言つて苦笑を浮かべるユエに、リーユンはふと脳裏に浮かんだ考えを告げようと口を開く。ユエはそれを本を持った左手を振る事で遮り、

「分かってるよ。俺を休ませようという意味合いも含んでいるという事は。でも、同じ研究チームの魔導師に迷惑を掛ける訳にもいかないからね」

ユエは口元を緩めて小さな笑みを浮かべ、リーユンに軽く手を振って歩き出す。

「じゃ、研究棟に行つて来るよ」

「あ、はい。頑張ってください」

リーユンは他に何か言葉を掛けようかと思ったものの、適切な言葉が思い浮かばずにそれだけを去っていくユエの背中に投げ掛けた。背は高いがひよろりとした印象を受ける姿が木々の向こうに消えるのを見届け、リーユンは視線を手元の黒い本へ戻す。

（そう言えば他の二人は解き方が分かったのかな？）

リーユンは足元の焚き火跡を処理してから木造校舎に戻り、エントランスを抜けて娯楽室へ向かう。部屋へ続く扉を開き、一歩中へ足を踏み入れた所で、リーユンは思わずその足を止めた。娯楽室の三人掛けソファの上でケイが黒い本を抱えた姿で横になって眠っていたのだ。

「ケイ……さん？」

リーユンは知らず小さくなってしまふ声音で遠慮がちに名を呼んでみるが、ケイは心地良さそうな寝息を紡いで眠り続け、起きる気配が無い。春眠暁を覚えずとの言葉を体言したかの様な陽気が、白いレースの遮光カーテンを通して柔らかく室内を満たしている。緑豊かなウイズムントの午前の日差しに、鳥の囀り、そよそよとカーテンを揺らす春風。眠くなる気持ちは非常によく分かるが、年頃の男女が共同生活をする場でこれは、あまりにも無防備ではないだろうか。

リーユンは起こすべきだとは思いつつも、起こすのが申し訳ない様な気もしてそっとケイに近付き、暫しの逡巡を経てからもう一度声を掛ける。

「ケイさん、こんな所で眠っていると、風邪を引きますよ？」

声を掛けて暫く待ってみても反応は無い。リーユンはケイの肩を揺すって起こそうと手を伸ばすが、どうしても触れることが出来ずに右手が宙を彷徨った。

さらさらと音を立てそうな艶やかな金色の髪は陽の光で煌き、白磁を思わせる滑らかな頬に数本流れ、細く白い首筋や柔らかかな淡い緑の衣服に包まれた肢体を飾っている。小さな顔にバランス良く収

まつた目鼻や唇はまるで有名な芸術家が仕上げた彫像の様に繊細な造形だ。手足は細くしなやかで、優雅な気品溢れる純度の高い水晶の様な女性である。と、過去散々男性に賛美されてきたケイであったが、そんなケイに対して抱いたリーユンの感想はと言うと、

（ゆで卵みたいだ）

で、あつた。きっと白く艶やかで滑らかな、小さな卵形の形の良い相貌であると言う事を表現したかったのだろう。伏せられた双眸を縁取る長い睫毛が頬に影を落としている。すつと鼻筋の通った鼻梁、化粧気が無い筈なのに淡い桜色を纏う口唇。

リーユンは何故か動悸が激しくなってくる心臓に戸惑い、慌てて本格的にケイを起こしに掛かった。

「ケイさん！ 起きてください！！」

二度目の呼び掛けで、ケイは微かに眉を顰めてからゆっくりと瞼を開いた。その双眸をまともに受け止めて、リーユンの心臓は一際大きく脈打ち、驚きに蒼い眼を瞪る。普段は翡翠色のケイの瞳が濡れた様に鮮やかな、毒々しい血の色をしていたからだ。ケイはリーユンの態度に気付いた様子も無く、ソファの座面に預けていた上体を起こして右手で軽く額を押さえ、意識が完全に目覚めるのを待つ。

そうして、ケイが漸くリーユンを振り向いた時には、その双眸は常の翠色に戻っていた。さっきのはただの見間違いか、光の加減で偶々そう見えただけか、怪訝さを滲ませた眼差しでリーユンはじつとケイの瞳を覗き込む。

「……リーユン？」

微かに眉根を寄せて、今度はケイが不思議そうにリーユンの名を口にする。ハッと我に返ったリーユンは吐息が触れ合う程に近い位置にまで顔を寄せていた事に気が付いて、耳までを赤く染めながら慌てて後退さる。

「あ、いえ、すみません、何でもありません」

パニックに陥ったリーユンは、気の利いた言い訳の一つも思い浮かばず、ただ謝罪の言葉と何でもない誤魔化す事しか出来ない。ま

ともに視線を合わすのも気恥ずかしくて、リーユンは俯いてぼそぼそと呟くのが精一杯だった。ケイは緩やかな仕草で怪訝そうに首を傾がせながらもそれ以上言及はせず、髪と衣服とを軽く整えてソファに座り直し、右手で一度ソファの座面を叩いて立ちっぱなしのリーユンに座るようにと促す。リーユンはまだまごついた様子だったが、ケイに請われるまま少しばかり距離を保ってケイの隣に腰を下ろした

「カイリ先生の課題は解けましたか？」

ケイの穏やかな声が鳥の囀りに混ざる。自然と視線は互いの膝の上に乗ったそれぞれの黒い本へと落ち、リーユンは一度深呼吸をして気持ちを落ち着けてから口を開いた。

「後もう一息つて所です。解き方の方向性は分かったので、多分今日中には開けると思えます」

リーユンは自分の声が震えていない事に安堵しながら、二つの鍵を解除した黒い本をケイに示してみせる。リーユンに与えられた黒い本は水と火の鍵が消え、現在は緑と黄の術式が緩やかに絡み合っているだけである。リーユンの言葉に浅い頷きを返し、ケイはふと苦笑めいた微笑を浮かべて膝上の黒い本をそつと撫でた。

「頑張っていますね。私は解けるとすれば明日になりそうです。今日はもう疲れてしまいました」

黒い本の表紙。その中心から放射線と円とを組み合わせて編まれた術式の上を、ケイの細い指が辿る。中心点は必要以上に強固に術式が絡み合い、かなり強力な魔力を用いなければ解けない様に見えた。「それが、ケイさんの苦手な事ですか」

ぽつりと独り言めいたリーユンの呟きに、ケイは笑みと首肯を返して黒い本をテーブルの上へ逃がす。

「エルフ族は元来魔力が強くはありませんから、少ない魔力を素早く一点に集中する事で威力の増大を図る方法を学んでいます。今回の課題は、その確認の為でしょうね」

静かに黒い本へ注いでいた翠の眼差しが、リーユンへと向けられた。

「クリア基準は厳しいですが、あの人は私達ならば出来ると思つてこの課題を出しているのでしょうか」

吐息交じりの言葉ではあつたが、カイリィドール教師をあの人と呼ぶケイの口調は酷く穏やかで優しい物だつた。その瞬間リーユンが不意に感じた呼吸が苦しくなるような感覚の正体を探るのを遮る様に、凜とした気の強そうな少女の声が二人の会話に割つて入る。

「まったく、迷惑な話よね！」

驚いて振り返るリーユンの視界に、白と薄桃を基調とした可愛らしい私服を身に纏う黒髪の美少女が映り込む。タキィヤンフウだ。彼女は手に持った黒い本を親の敵とでも言うかの如く睨み付けながら娯楽室へ入つて来る所だつた。タキの後に続いて、その足元を半透明で半液状で薄緑色のスライム、マリアン又ちゃん二号が楽しげに可愛らしい歌声を披露しながらプルプルと身を震わせて歩いて歩く。

「タキ、調子はどう？」

タキとマリアン又ちゃん二号の両極端な様子が可笑しくて、リーユンは思わず笑いを零してタキに声を掛けた。タキは直ぐには答えず、ケイとリーユンが座るソファの向かいに腰を下ろし、手にしていた黒い本を乱暴にテーブルの上へ放り投げる。

「これ、ホントに苛々するわ。簡単に言うつと迷路なんだけど、フェイクが多過ぎなのよ。同じ様な術式の繰り返しでいい加減飽きて来るし、正しいルートへのヒントも全然無いし、十分くらい解き進めてから間違いの道だつて分かると、もう、ほんつつつとつとつに、ぶっ飛ばしたくなるわ」

早口で不平不満をまくし立てるタキの口調が、後半になるにつれて迫力を増していく。心底辟易している様子がありありと分かつて、リーユンとケイは思わず目を合わせ、タキの課題の意味を正しく理解した。

リーユンは視線をタキへ戻し、それから無造作に放り出されたタキの黒い本を覗き込む。細く縊られた魔力が緻密な術式を描いているが、もう三分の二程は攻略されている様に見える。苛々しても精

神の集中を乱さず、細く繊細な術式を読み解いていく作業は短気なタキには酷く骨が折れる作業だろう事は容易に想像出来る。リーユンは納得したのと同時に、自分に与えられた課題の種類が他の四人と明らかに違うと言う事に初めて気が付いた。火の精霊、火蜥蜴サラマンダーの加護を強く受ける小竜族のクウ＝ラ＝ルウは苦手な水属性のコントロール。知識は豊富だが実技実践は苦手らしいユエ＝ルイエンは安定した魔力の操作と持久力の向上。生まれ付き魔力をあまり持たないエルフ族のケイは効率良く、効果的に魔力を扱う技術の訓練。強い魔力を秘めてはいるが、短気でむら気のあるタキは精神の安定と魔力の制御。五人の中でリーユンだけが技能や技術、身体的な訓練ではなくて発想と閃きを必要とする物だった。

ドール教室に入ったばかりで仕方の無い事なのかも知れないが、やはり多少は気落ちしてしまうものだろう。リーユンはそつと小さな吐息を零し、四人と同じラインに立つにはどの位の時間が必要だろうかと考える。そうしてリーユンが思考に沈んでいる間にも、タキは小休止を終えて放り出した黒い本の解術に再度挑戦し始めていた。が、一分も立たない内に黒い本はタキの手を離れる事になる。

「いやあああ！！！！ 一時間掛けて解いた術式が間違いのルートだったなんてー！！ もうやってらんないわよっ！ こんな物！！！！」盛大な叫びと共に黒い本が宙を舞う。タキの手を離れた黒い本は綺麗な放物線を描き、タキの頭上を越えて壁に打ち当たり、軌道を変えてソファの後ろへ落ちていく。三人の視界から消えた黒い本は、残念な事に、硬い装丁の丈夫な書物が床とぶつかる音が響くのを予想していた三人の思い通りにはならなかった。数瞬の沈黙が降り落ち、黒い本が床に落ちない事を怪訝に思う三つの眼差しが交差する。タキはソファに座ったまま後ろを覗き込み、リーユンとケイはソファから立ち上がってタキに僅か遅れて惨状を目の当たりにした。

黒い本は半透明で半液状で薄緑色をした物体にすっぽりと包み込まれている。

「あ……」

三人は綺麗に重なった音を呟く他には、暫し呆然とマリアンヌちゃん二号に視線を注ぐ事しか出来なかった。

第二話 「黒き書」 第六幕

リーユン＝ルルデイヴァイサー、タキ＝ヤンフウ、ケイの三人が勢いよく娯楽室の扉を開け放ち、ドール教室を抜け出したのは、タキの黒い本がマリアンヌちゃん二号に飲まれて直ぐの事だった。タキとケイを先に外へ送り出し、続いて屋外へ逃れたリーユンは急ぎ校舎の扉を閉めて右手に意識を集中させる。体内を廻る魔力を練る数瞬の間に、リーユンは先日タキから受けたスライムに関する説明を思い出していた。風の精霊、風靈シルクを核に、雷の魔力で定着させている。簡単に言えばその様な事だったと思う。リーユンの魔力は土の属性を帯びて淡い橙と茶のグラデーションへ変化して行き、緻密な式を描き出す。

「ロツク！」

術式が形を成し、淡い光が強くなると同時にリーユンが施錠の魔術を発動させた。キンとした甲高い音が響き、木製の扉中央から茶色を帯びた式が放射状に広がって、扉は完全に固定される。急いで発動させた魔術ではあるがそれなりの衝撃にも耐え得る強度である事を確認すると、三人は漸くホツと胸を撫で下ろした。

「それにしても、何がどうなったら、ああなるのかしら」

つい先ほど目の当たりにした出来事を反芻している様子で、タキが唸りながら言葉を紡ぐ。リーユンはまるで他人事の様なタキの台詞に思わず彼女を振り返った。

「そんなの、作ったタキが分からない物を僕が理解出来るわけないだろう？」

扉に鍵を掛けて多少の時間稼ぎなら出来るが、当然ながら根本的な解決にはならない。どうにかしてアレを元に戻す方法を考えなければならぬのに、魔法生物マジッククリチャーの事に疎いリーユンが幾ら思考を巡らそうとも良い案が浮かぶ筈も無く、結果、苛立ちと焦燥のままにタキに対しての言葉は少々きつい語調となってしまう。

そうこうしている間にも、硬く閉ざされた扉の向こう側から何か
が体当たりをしているらしい音が響き始める。幾分粘着質な音を纏
いながらドーンドーンと扉が叩かれる度に古い木造の扉は軋んだ悲
鳴を上げ、壁ごとごとっそりと破られるのではないかと思う程に大き
く撓む。

「ど、どうしようっ」

タキとリーユンは今にも蝶番が弾け飛びそうな扉を見ながら、何か
打開策は無いものかと必死に知識を総動員して見るものの、やはり
これと言った案は思い浮かばない。ケイはと言うと、ふと空を見上
げて太陽の位置が中天に差し掛かるうとしている事を確認し、大き
く息を吸い込んだ。昼食の時間までは後一時間と言った所だろう。
となると、彼は多分あそこに居る。ケイは腹に力を込め、ありった
けの声を張り上げて現状を解決してくれそうな人物の名を呼ぶ。

「先生！ カイリ先生！！」

体当たりによる扉の軋みは益々大きくなっている。切羽詰ったケイ
の呼び掛けとは対象的に、のんびりとした仕草と声とでカイリド
ールがダイニングの窓を開けた。

「何だあ？ この、さつきからドンドンと煩いのはケイか？」

騒々しい事を嫌うエルフ族が珍しい、とでも言わんばかりの様子で
開け放たれた窓からボサボサの黒髪が、続いてカイリの顔が現れる。
窓枠に腕を掛ける姿勢で扉前に居る三人を眺めるカイリの手にもモ
とペンが握られている事から、昼のメニューを貼り出す所だったの
だろうと予想出来る。ケイの読みは正しかった。

「先生、大変なの！」

タキがカイリへ身を乗り出し、勢い込んで説明しようとした矢先、
蝶番が拉げて弾け飛び、物凄まじい地響きを立てて校舎の扉が倒さ
れた。重量のある木製の扉がズシンと鈍い音を立てて地面に叩きつ
けられ、乾いた砂煙がもうもうと舞い上がる。薄茶色に染まる視界
の向こうには、半透明で半液状で薄緑色をした物体、マリアンヌち
ゃん二号がぶるぶると身体を震わせながら姿を現した。但しそれは

タキが両腕で抱き上げていた時の姿とは程遠く、長身のカイリですら見上げる程の大きさに成長している。

「いやああああああ！ 更に大きくなってるううう！!?」

タキは悲鳴を上げると共に踵を返し、一目散に逃げ出した。校舎内と外界を隔てる扉が無くなった入り口から、スライムがドロリと抜け出そうとする動きを見せるのに気付き、ケイとリーユンもタキを追って小道を駆け出す。マリアン又ちゃん二号は巨大な身体を震わせ、重力に負けて多少型崩れを起こしながらも三人の後に続いて移動していく。

流石に事の成り行きに付いて行けず、呆然と三人と一匹を見送ってしまつたカイリではあつたが、入り口前や小道に残されたスライムの破片と、盛大に壊されてしまつた扉とを交互に見やつて溜息を吐いた。この分ではエントランスや室内も酷い物だろう。

「クリーニング業者には、直せんわなあ」

扉を支えていた蝶番は歪んで壊れてしまつているし、扉の枠や壁も撓んで罅が入つている。窓枠に乗せた腕に体重を掛け、ぐつたりと凭れ掛かるカイリの横からひよこりと水色の髪が現れ、クウ＝ラ＝ルウが興味深そうに外を眺める。

「何が直せないって？」

何やらとっても楽しそうに金色の双眸をキラキラさせている教え子を見やり、カイリはまた小さな吐息を零す。説明を伝えるのも億劫になつてしまつたのか、手にしたペン先を校舎の入り口へ差し向ける事で何があつたのかを教え、嬉々として「すげえ」と騒ぎ始めるルウにうんざりした半眼を送る。あからさまに楽しんでる姿はカイリの既知である人物の姿と重なり、尚更カイリの気鬱を煽るのだつた。

「あゝ、そう言えば、もうすぐあいつも来るんだつたな」

クリーニング業者と共に手配したその人物に辟易としながらも、カイリはルウに向かって一つの頼み事を伝える。ルウが二つ返事です承したのは何が起つたのか見に行きたいからであるのは明白だつ

だが、敢えて其処は突っ込まずにカイリはルウを見送った。

「何だかんだで仲は良いよな」

担当教師がちょっぴり寂しい思いをしているなんて想像する余裕はこれっぽっちも無い全力疾走中の三名は、現在ひたすら道なりに逃走していた。二メートル程の幅の小道は綺麗にレンガで舗装されており、両サイドには春らしい青々とした木々が植えられている。街路樹として植えられたそれらの木々の向こうは、多少手を加えられてはいるもののほぼ自然のままの姿を残す森林である。木漏れ日が穏やかに降り注ぎ、腐葉土が積み重なった柔らかな地面に枝葉が作り出す複雑な影を落としている。鳥の囀りと吹き渡る爽やかな風、時折姿を見せる小動物が見る者の心を和ませてくれる事だろう。しかし、自然を愛でる余裕すらも、今の三人には無いのである。

「ねえ、タキ。このまま行くと、カフェテリアに出ちゃうよ？」

スライムの足は予想以上に速い。少しでも足を緩めると追いつかれてしまいそうだ。リーユンは荒い呼吸の合間に先頭を行くタキに声を掛ける。昼時のカフェには多くの生徒が集まっているだろう事は容易く想像出来て、皆を巻き込んでしまわないかとリーユンは気がではない。しかしながら狭い小道で三人同時に魔術を扱うのは難しい。その上、火系の魔術を得意とするタキは森林が傍にあつては思うように戦えない

「わ、分かってる……わよ。でも、広い所に、出ない……事には、何も、出来ない、じゃない」

タキも苦しげに、途切れがちな言葉を怒鳴って返す。

「そりゃ、そうかも知れないけど」

「っと、お喋りは、お終い。出るわよ」

T字の突き当たり、街路樹や森林の向こうには白い彫刻の施された噴水が微かに見える。其処を右に曲がれば途端に視界が開け、学生で賑わうカフェテラスが確認出来る。白を基調とした二階建てのカフェテリアは一階二階合わせて店内300席、カフェテラス80席とかなりの生徒を収容出来ることから人気の店舗となっている。

昼前の時間は特に顕著で、カフェテリアは楽しげに語らう生徒の姿でゴった返していた。

「そこ、どきなさあーいーい!!!」

生徒たちの喧騒に負けない程の怒鳴り声を上げながら、タキが全力疾走の勢いのままひた走る。生徒たちは何事かとタキを振り返り、ケイ、リーユンと順に姿を確認して後、一斉にピタリと動きを止めた。そしてその一瞬後、カフェテリアが恐慌状態に陥ったのは言うまでもない。

「きゃあああああーいーい!!!」

「うわああああああああ!!!」

「また隔離教室かよおおーい!!!」

口々に悲鳴や怒声、罵声を上げながら逃げ惑う人々の中で、一人落ち着いてこちらを観察する視線を感じてリーユンは一瞬足を止める。「ちよつと、リーユン、何してるのよ」

立ち止まるリーユンに気付き、タキは咄嗟に彼の腕を掴んで走り出す。リーユンは引つ張られて多少バランスを崩しそうになりつつも再度駆け出したが、その視線はある人物の姿に注がれ続けていた。

「ジュン……」

短く整えられた黒髪に、きつめの黒い瞳。リーユンよりも多少背の高い、典型的なウィズムント人である元クラスメイト、ジュン＝エンシエン。少年から青年に差し掛かる途中のしなやかな腕が持ち上がり、鮮やかな緑を帯びた術式が彼の足元から風が巻き起こるように渦を描いて伸び上がる。無駄の無い式が整然と宙に編み上げられ、ジュンの高らかな宣言と共に発動する。

「ウインドカッター!」

勢い良く振り下ろされた腕の動きに合わせ、真空の刃が空を切って走る。タキ、ケイ、リーユンの三人はこちらに向けて放たれた魔術に驚いて、反射的に左右に飛び退いた。ジュンが作り出した鎌鼬は三人の頭上を越え、マリアンヌちゃん二号の身体を大きく挟り取って切り裂いた。スライムの核となる部分を吹き飛ばされ、マリアン

又ちゃん二号がズルズルと崩れ落ちていく。その様子を啞然として見ていたタキであったが、無言のままジュンに向かつて歩き出したかと思うと、右手を振り上げて力一杯その頬を引つ叩いた。手の平が丁度良い角度で頬に当たったらしく、パァン！ と小気味の良い音が周囲に響く。

「何すんだよ！」

「なんて事するのよ！！！」

二人の声が重なった、と言うよりは、ジュンの抗議の声がタキの怒声に遮られた形となった。ジュンは礼を言われるならまだしも何故叩かれなければならぬのかと、タキの理解不能な言動に理不尽さを感じるより先に「はあ？」と間の抜けた声を上げてしまった。当のタキは怒りの形相で唇を震わせ、眸に涙まで滲ませていたのだ。

「よくもマリアン又ちゃん二号を壊してくれたわね！」

「何わけのわかんねえ事言ってるんだ。俺はお前らが追われてたから助けてやったんだろ！？」

「誰もそんな事頼んでないわよ！」

いきなり喧々囂々と言い争いを始めた二人に周囲は呆気に取られた。リーユンはクラスメイトと元クラスメイトのやり取りをおろおろ見守るしか出来なかつたが、ケイは何事かを小さく呟きながら、喧嘩する二人の元へ駆け寄っていく。

「汝、自由なる旅人よ。今ひと時駆ける足を止め、我に力を与え給え」

突然間に割って入るケイに、ジュンのみならずタキも驚いて言葉を飲み込む。長い金の髪がふわりと風を孕んで揺れ、伶俐な横顔が二人の視界に映る。喧嘩を仲裁に入った訳ではない事は、彼女の翠の双眸がタキとジュンの二人ではなく真つ直ぐ一点に注がれている事からも明らかだった。緊張した空気にタキもジュンもリーユンも改めて身構え、ケイの視線の先で横たわるマリアン又ちゃん二号の残骸を見やる。

「古より受け継がれし盟約に従いて、我が召喚に応えよ。風蠱^{シルフ}！」

ケイの言葉が終わると同時に一陣の風が巻き起こる。続けてケイは召喚した精霊に命令を下す。

「捕獲してください」

ケイの表情には僅かに焦りが表れている。三人にはケイが何に對して警戒しているのかが分からず、変わり果てた姿で横たわるマリアン又ちゃん二号を注視するものの、特に変わった所は見付けられないで居た。

「ちょっとケイ、いったいどうしたって言うのよ」

タキが焦れて声を掛けると、ケイは鋭い語調で極短く答える。

「精霊が暴走しています」

その言葉に思い当たることがあったのはタキだ。ジュンとリーユンが訳が分からず視線を交わすのに対し、タキはハツとして先ほどジュンの魔術で吹き飛ばされたマリアン又ちゃん二号の核を探す。楕円形の緑色をしたカプセルは鎌鼬によって切り裂かれ、破れたゴム鞠の様に空洞の内側を覗かせていた。

「苦勞して閉じ込めた風靈が……」

ケイはタキの嘆きなど聞こえていない様子で、真剣な眼差しで前方を睨んでいる。リーユンもケイの視線の動きを頼りに注意深く空間を観察すると、確かに、空気の流れが不自然な動きを見せている気がした。ジュンも不穏な風の動きを察知したのか、静かに様子を伺っている。精霊の姿を視認出来ない三人は、事の成り行きを見守るしかない。

「風靈！」

ケイが悲鳴に近い悲痛な叫び声を上げると共に、カフェテラスの道に面した場所に置いてあった白い机と椅子とが、ザツクリと鋭い爪で引き裂かれたように破損した。眼に見えぬ狂爪はそのまま周辺の机や椅子をバラバラに切り裂き、薙ぎ倒しながら暴れ回る。強風が吹き荒れ、再び人々の悲鳴が上がった。遠巻きに様子を見ていた生徒は皆散り散りに逃げ去って行き、カフェテラスにはリーユン達四人の姿だけが残される。

「皆さんも逃げてください」

ケイは視線を前方へ据えたまま、静かに、しかし有無を言わさぬ口調で三人に告げた。だがジューンはきっぱりとそれを拒絶する。

「ふざけんな。女一人を残して逃げられるか」

言いざま魔力を練り上げ、素早く術式を編み上げていく。淡いベージュとブラウンのグラデーションを纏う術式がジューンを包み込み、茶系の光が一際強く輝いた時、ジューンの魔術が完成する。

「スネークバインド！」

キーワードである言葉を発し、ジューンは魔術を発動させた。カフェテラス一帯の地面から幾本もの蔦が早送り映像の如く勢い良く成長して伸び上がり、破壊されるテーブルの動きで凡その検討を付け、風蠱が居るであろうその場所を取り囲む様にして絡み合う。リーユンは元同級生が以前よりも眼に見えて魔術の扱いが巧くなっている事に驚いた。中級教室を出てまだ然程経っていないと言いつのに、彼は確実に、それも飛躍的に成長している。蔦はその物が意思を持っているかの様に整然と動き、確実に風蠱を追い込んで囲い込む。リーユンは友人の手練に舌を巻いた。元より発動後の魔術のコントロールには長けていた彼だが、此処まで自分の思うとおりに操作するにはかなりの集中力と必要に応じて式を書き換えるセンスとを必要とする。彼の成長を素直に嬉しく思う傍らで、リーユン自身は上級教室に入ってから成長出来ていないのではないかと、胸が痛んだ。

「見えないなら、全部覆つちまえば良いんだよ」

リーユンの気持ちに気付いているのかいないのか、ジューンは好戦的な眼差しで魔術を扱うが、捕らえたと思った瞬間、魔術によって作り出された蔦は内側から切り刻まれてフツと宙に掻き消えた。

「全然だめだめじゃないの！」

「うるせえ」

ジューンはタキの怒声に言い返し、すぐさま新たな魔術を発動させようと魔力を練り始める。しかしジューンの術式が完成するよりも先に、暴走した風蠱が四人に向かって突っ込んでくる。際どい所でケイが

三人を突き飛ばし、風靈の突進を避けた。四人が立っていた場所には鋭い爪痕が深々と刻まれ、素早く立ち上がって体勢を立て直した四人は、見えない攻撃に冷たい汗が背を伝うのを感じていた。

「来ます！」

ケイが鋭く叫び、風靈が向かってくる方角を示す。リーユン、タキ、ジユンの三人は注意深く周囲の空気を見ながら、ケイの指示に従って逃げ回るしか出来なかった。比較的直線の動きが多い事がせめてもの救いだ。数度目の突進を避けながら、ケイは酷く焦っていた。自分一人ならば何とか出来たかも知れないが、周囲の人間に気を使いなから暴走した精霊を消滅させるのは不可能に近い。このまま不毛な鬼ごっこで体力と集中力とを消耗するのは得策ではない。その時、焦りを募らせる四人の耳に、のんびりとした声が届いた。

「おー、やってるやってる〜」

妙に間延びした聞きなれないその声は、小柄な青年から発されたらしい。長い黒髪を後ろで縛り、黒いローブに身を包んで少し離れた場所から四人の様子を眺めている。深い知性を湛える黒い瞳が悪戯好きな幼子の様にキラリと光った。

「楽しそうだね〜」

何処を如何見ればそんな感想が抱けるのか、風靈の攻撃を避けることで精一杯の四人には突っ込みを入れる余裕すらない。青年の言葉に続いて、今度は聞きなれた子供の声が聞こえた。

「うわ、派手にやらかしてるなあ！」

クウゥラァルウの声も何故かと言うか案の定と言うか酷く愉しげで、キラキラと輝く瞳でズタボロになったカフェテラスを眺めている。

第二話 「黒き書」 第七幕

リーユン⇨ルルデイヴァイサー、タキ⇨ヤンフウ、ケイ、ジユン⇨エンシエンの四人は必死に風^{シルフ}の攻撃から逃げ惑いつつ、新たに現れた二人の人物を見て驚きの声を上げる。

「ルウに、フェイ⇨マオシー!？」

何故こんな所に、しかも隔離教室で、二を争う問題児クウ⇨ラ⇨ルウと共に居るのか。不思議な取り合わせに戸惑う四人を尻目に、当の本人は至つて自然な様子でそこに存在し、笑顔を浮かべていた。

黒魔導師フェイ⇨マオシー。魔国フィズムントのみならず、国外でもその名を轟かせる有名人である。彼の発明した魔導器は生活に密着した便利な物が多く、彼の功績によってウイズムントの生活水準は大幅にアップしたと言われている。その為ウイズムント国民からの人気は高く、ウイズムントの政治を執り行う六人の執政官の一人に選出されていた。

そんな雲の上の人物には決して見えない年若い小柄な青年は、自分の名前を言い当てられた事に満足そうな頷きを返し、傍らに佇む小竜族のクウ⇨ラ⇨ルウの肩に手を置いて言葉を促す。ルウはフェイの顔を見上げて一つ首肯を見せてから、クラスメイトに向き直る。

「これ、カイリ先生が持つてけてさ」

そう言つてルウが逃げ惑う四人に投げて寄越したのは、騒動の元凶である例の黒い本だった。立派な装丁の黒い本は綺麗な放物線を描いて四人の元へと届き、風^{シルフ}の攻撃を避けざま、リーユンがその手に受け止める。しかしながら今現在これを渡される意図がさっぱり分からず、四人は、特に黒い本が何であるかを知らないジユンは不思議そうに首を捻る。黒い本に施された術式を見るに、どうやらリーユンに与えられた物である事は分かるものの、タキは皆を代表して率直な疑問をルウへ投げ掛ける。

「で、これをどうしろつて言うのよっ!」

狂った風靈の暴走は止まらず、タキは突進を避ける為に慌てて倒壊したテーブルを飛び越える。木製の机や椅子がバラバラと碎け落ちる音と、暴風の音、四人の慌しい足音が周辺に響く中、タキの声に言葉を返したのはルウではなくフェイだった。

「それを考えるのが、君たち生徒の勉強じゃないのかな？」

フェイは穏やかな口調でそれだけを答えると、近くに転がっていた無傷の椅子を引き起こし、長いロープの裾を払ってゆったりと座面に腰を降ろす。タキは完全に傍観の体勢に入ったフェイを一度睨み付けたが、意味がないと悟ったか、ただ単に余所見をしている余裕がなかったからか、直ぐにフェイの存在を意識から追い出して風靈に集中する。縦横無尽に吹き荒れる風は捕らえ所が無く、捕獲はもとより視認するのも困難な精霊を相手にするにはケイの指示だけが頼りだった。

そんな中、リーユンがふいにケイの傍に駆け寄り、暴走中の風靈に関しての説明を求める。ケイは風靈の動きを皆に教えながら、その合間に手短かにリーユンへ現状を伝えた。曰く、風靈は狂ってしまったている事。

狂った精霊は消滅させなければならない事。

「もし、何か強い衝撃を与える事が出来たら、精霊が正気に返ったりはしませんか？」

重ねられるリーユンの問い掛けを受け、ケイは風靈の軌道を指示し、荒れ狂う突風に長い髪を靡かせながら、正直に答える。

「分かりません。可能性は無いとは言えませんが」

「なら、やってみる価値はありますよね」

力強いその声にケイが何事かを言う前に、リーユンは軽やかに踵を返してタキの元へ移る。リーユンが何か閃いたらしいと知り、タキは避ける動きを最小限に抑えて彼の言葉を聞く為に耳を傾けた。

「タキ、僕と風靈を包み込める位の大きなシールドを張れる？ かなり強度が必要なんだけど」

「それでこの状況をどうにか出来るって言うなら、やるわよ」

他に方法が思い付く訳でもなし、タキはリーユンと視線を交わして深く頷く。リーユンは「ありがとう」とタキに礼と笑みとを返し、次に傍観を決め込んでいたルウに対して声を張り上げる。

「ルウ！ タキがシールドを張ったら、その中を水で一杯に満たして欲しいんだ。頼める？」

仲間外れめいた寂しさを感じていたルウは二つ返事で快諾し、リーユンに向けて右手の親指をピツと立て、偉そうな態度と不遜な笑みにて首肯を見せる。リーユンはそれを確認すると、ケイへ視線を戻した。

「精霊が見えるケイさんには、僕をガードして欲しいんです」

ケイはリーユンがやろうとしている事が分かったのか、リーユンが大事そうに抱えている黒い本を一瞥してから少々険しい表情でリーユンの蒼い瞳を覗き込む。リーユンの瞳に迷いは無い。タキもルウもケイも、それぞれの役割を果たしてくれろと信じているのだろう。ケイは険しい表情を崩さないままではあったが、黙ってリーユンの指示に従う事を了承した。しかし、そんな遣り取りに不服を露にしたのはジュン「エンシエンだ。

「隔離教室のお前らだけに任せておくのは不安だ」

歯に衣着せぬ率直な意見はいかにもジュンらしく、リーユンは思わず懐かしさに笑みが込み上げる。ちよつとした擦れ違いがあっても魔術の腕が上がって置いて行かれたとしても、彼が彼である事に変わりはない。ましてや一月やそこら離れただけで別人になんてなり様筈も無い。ならばきつとまた、以前の様な関係に戻れる筈だ。その為にリーユンがすべき事はただ一つ。再びジュン「エンシエンに友と認めて貰える様な立派な人物になれば良い。

「ジュン。あまり隔離教室ほくらを侮らない方がいいよ」

宣戦布告めいた台詞はその第一歩。リーユンの言葉にルウが面白いとでも言いたげに噓し立てる様な口笛を鳴らし、タキとケイも視線を交して頷き合った。

「それじゃあいくわよ。みんな、下がってー！」

タキの言葉と共に、ケイとルウ、ジュンの三人はタキの立つ位置よりも後ろへ一斉に飛び退く。リーユンのみが皆とは反対に、風蠱の移動と共に舞い上がる白い木片に向かって走り出した。

タキはリーユンと風蠱の動きを追いながら、慎重に魔力を練り上げていく。白く強烈な光を纏う術式が、左右に広げたタキの両手を軸にして空中に展開される。タキは最後の一文を宙に書き記し、両手を前方へ向けて高らかな声音で魔術を発動した。

「プロテクト・シールド！」

キインと空気が裂け、分断される音と共に、リーユンと風蠱を中心にオープンテラスの半ばを覆う直径十メートル程の巨大なドーム型防壁が出現する。基本的に無色透明であるその壁は、物質化された魔力の揺らぎによってシャボン玉の様な虹色の遊色を見せている。タキは細心の注意を払いながら魔力をコントロールし、揺らぎを最小限に抑えて防壁を保ち続ける。防壁が大きければ大きいほど、それに比例して壁の強度を均一に保つのは困難を極める。薄っすらと額に汗を滲ませながら最終的な調整を済ませ、タキはルウへと視線を向けた。

「ルウ！」

力強く鋭い声は、タキに余裕が無い事を如実に表している。ルウはそんな彼女にニヤリと笑みを見せながら「おうよ」と気安い調子で請け負い、右手を高々と頭上へ掲げる。足元から勢い良く吹き上がるのは彼が編み上げる淡い水色の術式だ。

「ウォーター・スウォーム！」

魔術発動の為のキーワードが響き渡ると同時、タキが作り上げたドーム状の防壁の内側に大量の水が出現する。巨大な半球は瞬く間に水に満たされ、内部に居たりーユンと風蠱を飲み込んだ。身体に纏わりつく液体が多少生温かった事にはこの際目を瞑る事にして、リーユンは呼吸を止め、体内へ魔力を蓄えて運動能力の向上を図る。隙間無く水で満たされた防壁内の空間では風蠱が動く度にコポコポと細かい気泡が軌跡を作るので、位置と行動の予測を立てるのが容

易となる。動きも空気中を駆ける時とは比べ物にならない程に遅くなっている。しかしながらそれはリーユンにも当て嵌まる事で、運動能力が増したとは言え、水中を魚の様に泳ぐとはいかない。

「汝、清らなる乙女よ。溢るる恵みの一滴を我が友へと与え給え」
ケイは水の精霊、水乙女ウンディーネに呼び掛け、リーユンの呼吸を助ける精霊術を行使する。水中に居ながらも肺呼吸が出来る様になった事に始めは戸惑うものの、ケイの術のお陰だと気付いたリーユンは心の内で礼を述べ、小さな気泡の発生源へと意識を向ける。風靈は相変わらず狂った様に無秩序な動きを繰り返してリーユンを翻弄するが、彼は水中という悪条件にも関わらず小規模な魔術を巧みに扱い、次第に風靈を防壁の傍まで追い詰めていく。

「そこだっ！」

地面近くにまで移動した風靈の頭上と左右に向け、気体を操作して作り出した真空の刃を放つ。水中を突き進むウィンド・カッターと地面、防壁によって、風靈は上下左右、後方の逃げ場を失い、残された前方へ逃れるしかなかった。風靈が居た空間を掠める様に放たれた風の刃の一部は地面に、一部はタキが支える魔術の壁に打ち当たって火花を散らす。硬い防壁を削り取る耳障りな音と共に、術師であるタキにも衝撃が伝わる。タキは何事か文句を言ったようであるが、防壁と大量の水とで外界から阻まれたリーユンには届かない。例え聞こえたとしても反応している余裕は無かっただろう。水中特有のぼやけた様な音に注意深く耳を傾けながら、やっとの事で己の真下へ誘導した風靈へ向けて黒い本を力一杯投げつけた。風靈と黒い本が水中を動く度、泡が弾けるこぼこぼと言う音が耳に届く。黒い本は狙いを過たず、見事風靈に命中したらしい。眩い緑の閃光が水に満たされたドーム内のみならず、オープンカフェ全体を包み込む。その衝撃たるや凄まじく、リーユンが黒い本を水や火に投じた時とは比べ物にならない程で、ケイはありったけの魔力を込めてリーユンを守る為の防壁を編み上げた。激しい圧力がリーユンを襲う。ケイが展開したシールドで守られているとは言え、息が詰まるほどの圧迫感だ。

無論それは大量の水を支えていた壁にも襲い掛かる。タキは歯を食いしばり、顎先から汗を滴らせて何とか防壁を保持しようとするが、魔術の壁は次第に罅割れていき、最早崩壊寸前だった。

「だめっ、壁が持たないわ！」

タキはこれ以上防壁を保つ事が不可能だと判断すると、自ら魔術を解く。壁が砕け散った箇所的一点から一気に圧力が放出するよりは、崩壊をコントロールして衝撃を緩和させる方が安全だ。タキが防壁を消した瞬間、ドーム状に留まっていた水が怒涛の勢いで四方八方へと流れ出す。ドームの中央に居たりーユンも、水の流れと共に地面へ落下する。瞬く間に近づく地面に激突しそうになり、りーユンは思わず硬く目を閉ざした。

「……………」

が、いつまで経っても叩き付けられる衝撃は訪れず、何かに支えられている感触を知って恐る恐る目を開ける。足元では一メートル程の高さを保って水浸しになった土が見えている。風塵によって散々破壊されたテーブルや椅子は押し流され、泥水に浸っている。周囲を一望したりーユンはゆっくりと視線を巡らせ、規則的に肌を撫でる力強い風と羽音を確認しようとして頭上を見上げた。りーユンの金髪と同じく水に濡れた水色の髪と角、金色の瞳、勝ち気な表情が視界に入る。

「お疲れさん」

ニヤリとした笑みで労いの言葉を掛けてくれるのは小竜族のクウ「ラ」ルウだ。

「ありがとう、助かったよ」

りーユンも表情を和らげると、笑顔でルウへ礼を述べる。ルウに支えられながらゆっくりと地面に降り立ち、水を滴らせる前髪を掻き上げる。振り返ればルウが背中から生えた薄水色の比翼を仕舞っている所だ。翼の痕跡は跡形も無く、常人と変わらない肩甲骨が布地の隙間から覗いている。

「それって、ホントに出し入れ自由なんだね」

生まれて初めて竜族の一部変身トランスを見て、リーユンは感心したように吐息を零す。ルウが「もち」と悪戯が成功した子供の様な笑みでリーユンを見上げた所で、水害から避難していたタキとケイが二人の下へ駆け付ける。

「リーユン！ 無事で良かった」

タキは気軽な様子で会話を交わす二人を見やり、リーユンに怪我が無い事を確認すると、ホッと胸を撫で下ろした。ケイもタキと同様安堵の表情を浮かべたが、直ぐに表情を改めて少しばかり諫める口調となってリーユンに向き直る。

「本当に、貴方は無茶をしますね」

リーユンはケイの口調の中に落胆の響きが無い事を感じ取り、視線を真つ直ぐにケイの翠の双眸へ注いで問い掛けた。

「ケイさん。風靈シルフはどうなりました？」

「正気を取り戻して精霊界へ帰って行きました」

ケイは一度視線を伏せて息を吐き出すと、厳しかった表情を崩して微笑を浮かべ、濡れて冷たくなったリーユンの両手を取る。

「普通なら狂ってしまった精霊は消滅させるしか手が無いのですが、リーユンは風靈を正気に戻してくれました。森の民を代表してお礼を言わせてください。ありがとうございます、リーユン」

無茶をしでかした事に対する心配や小言は早々に切り上げ、ケイは心底感謝している旨をリーユンに伝える。戸惑ったのはリーユンだ。「え、いえ、あの、僕は、そんな、大した事はしてないです」

しつかりと握り込まれた両手からケイの暖かな体温が伝わってくる。温かった水はすっかりと冷えてリーユンの体温を奪っていたが、みるみる体温が上昇して行くのが解る。リーユンは北方に住まうシユネーヴ人特有の白い肌を朱色に染め、しどろもどろになりながら首を左右に振って恐縮する。そんな二人の様子をタキがじとっ眺めていたが、リーユンもケイも気が付く気配は無い。

「やれやれ、今年のドール教室は今まで以上に楽しい事になりそうだね」

無事を喜び合う生徒と半壊したカフェテリアと、水浸しとなった周辺を眺めてしみじみと呟いたのは傍観に徹していたフェイ「マオシ」だ。彼は水の被害に遭うことも無く、僅かな水音を伴う足音を立てながら歩み、茶色い泥水に浸っていた黒い本を拾い上げる。黒い装丁は淡いブラウンの優しい光に包まれ、ポンと軽やかに弾ける音を立てて元の黒い姿を取り戻す。

「リーユン君、忘れ物だよ」

フェイの言葉に振り向いたリーユンは、こちらに向けて放り投げられた黒い本を両手で受け止める。カイリ「ドール」教師から手渡された当初はびつしりと緻密な術式で覆われていた黒い本。今は全ての術式が解かれていて、黒い本を戒める力は何も無い。リーユンは水で濡れた上着の裾を固く絞り、黒い本に付着した泥を丁寧に拭き取った。

「なあ、早く開けるよ」

施錠の魔術が消滅している事に気付いたルウが興味津々にリーユンの手元を覗き込む。タキは乱れてしまった髪と衣服を整え、大きく伸びをしながら大して残念そうには見えない様子でぼやく。

「あゝあ、今回はリーユンの一人勝ちね」

「偶然だよ」

リーユンはタキに困った様に眉尻を下げる笑みで言葉を返す。実際、黒い本を直接水に浸したり火にくべたり、風をぶつけたりなんて、ルウの魔術が失敗する事故が無ければ気付けたかどうかすら疑わしい。

「運も実力の内という言葉もあるよ」

フェイが四人から少し離れた位置に立ってやんわりと言い聞かせる口調でリーユンに告げる。その目はもつと自信を持ってでも言っているように思えて、リーユンにはにかみながらも頷きを返す。それから改めてルウ、タキ、ケイの三人に向き直り、黒い本に手を掛けた。

「それじゃあ、開けるね」

ルウがゴクリと喉を鳴らして黒い本とリーユンの手元を注視する。タキもリーユンの隣に立って黒い本の表紙が捲られるのを今か今かと待ち侘びる。ケイも身を乗り出す様な事はしなかったが、やはり気にはなるらしくて翠の視線を皆と同じ様に注いでいた。リーユンも緊張した面持ちの中に好奇を覗かせ、ドキドキしながら右手でそつと黒い本の表紙を開こうとして、急に「あ」と声を上げた。動きを止めたリーユンにお預けを食らった形となったルウは不満を露にぶーぶーと文句を言うが、リーユンは周囲を見回して気になる事柄を誰にとも無く問い掛ける。

「ジュンは？」

風蠱との応酬やらルウの変身やら、黒い本の解術やらが重なった所為で、ジュンが居なくなつた事に気が付かなかった。リーユンはしきりに辺りを見回すものの、既に見える範囲にはジュンの姿は見つけられない。

「彼なら、不機嫌そうな顔をしながら帰つたよ」

リーユンの疑問に答えるフェイは、クスクスと楽しげな笑いを零しながらジュンが立ち去つたらしい方角へ視線を向ける。リーユンも通い慣れた東棟の方角に顔を向け、前年度、中級教室でのクラスメイトであり親友と呼べる相手でもあつたジュン「エンシエンの事を考えた。いつか、以前の様に親しく話せる日が来るのだろうか。問題児の代名詞でもある隔離教室、カイリ「ドール教室に編入させられた自分と、押しも押されもせぬ黒魔術師、幻想の魔女メモ「シャウレインドツテイ教室に編入出来た彼とでは友として釣り合いが取れないと言われれば其れまでだが、それがジュンのわだかまりの原因ではない事くらい、リーユンにだって分かる。リーユンは早く黒い本を開けるようにせがむルウや、自分の事を心配そうに気遣ってくれるタキとケイへ視線を戻した。ドール教室の生徒は確かに変わっているし、やる事なす事滅茶苦茶ではある。けれど実力も有るし、それを悪用する様な悪い人間ではない。彼らのことを良く知れば、きつとジュンだけでなく学院の皆も彼らの事を好きになつてくれる

んじゃないだろうか。

リーユンは物思いに耽っていた思考を切り替え、皆に笑みを見せて改めて黒い本に手を掛ける。

「開けるよ」

皆が息を呑む気配がする。リーユンも手元に意識を向け、慎重に黒い本を開いていった。

「……………」

リーユンの手によって厚く丈夫な黒い装丁の表紙が持ち上げられ、閉ざされていた内側のページが露となる。中を見たカイリッドールの生徒たちは興味津々だった表情を凍りつかせて一様に押し黙り、動きを止めた。フェイはそんな彼らの様子を一步離れた場所から観察していたが、必死に堪えていた笑いを抑えきれずにとろとろ盛大に噴き出し、大笑いを始めてしまった。

「あつははははは！ 白紙のまま本を渡すなんて、カイリらしいよねえ」

そうなのである。フェイの言葉通り、満を持して開かれた黒い本は全くの白紙だったのだ。リーユン、ルウ、タキ、ケイの四人はシヨックから立ち直れていない様子でのろのろとフェイへ視線を送る。

「その本……て言うか、ノートはとても高価な物でね、軽く二百年は風化する事無く保管できるんだ。しっかりとコンディションに気をつけていれば四百年は大丈夫って言う代物さ。カイリの論文用につて僕があげた物なんだけど、白紙のまま君たちに託したつて事は、後世に残せる物を書けつて言う事なんじゃないかな」

未だ笑いの気配が治まらないらしいフェイの声は揺れて聞き取りにくいものだったが、四人の耳はしっぴかりその意味合いを捉え、笑い続けるフェイから手元にある黒い本へ視線を戻し、それから四人顔を見合わせる。

「先生はこれを『読め』つて言つたわよね？」

タキの発言を受けて、三人は無言のまましっぴかりと頷きを見せる。それを確認したタキは難しそうに眉間に皺を寄せ、

「つまり、私たちにカイリ先生と同等かそれ以上の論文を書けつて
いう事なのかしら」

と、独り言の様に言葉を続ける。それを受けてケイが吐息混じりに
答えた。

「論文でなくてもあの人が楽しめる物なら何でも良いのではないで
しょうか」

「んなの、先生に直接聞きに行くっきゃねえだろ」

中身が分かってしまえば何と言う事はない。興味が失せたらしいル
ウが投げやりな口調で会話に混ざる。リーユンは「そうだね」と答
えながらも、意識は腕に抱えた真つ白なノートに向けられている。

これから先、二百年以上も残せる物。

リーユンはもう各々が好きな事を話し出している三人と、今此処
には居ないユエールイエンとカイリ「ドール教師の顔を思い浮かべ
た。中級教室までのそれなりに忙しく充実してはいたけれども平穏
と呼べた日常。そんな生活とは全然違った毎日を送らせてくれてい
る人々。彼らの事を、彼らとの生活で気付けた事を、彼らと触れ合
う事で変わっていく自分の事を、書き綴っていくのも良いかも知れ
ない。

リーユンは本を閉じて大切に抱きかかえると、にっこりと微笑ん
で言った。

「帰ろう、ドール教室に」

第三話 「秘薬」 第一幕（前書き）

ドール教室で1、2を争う問題児、クウゥラゥルウが出掛けているのに街が静かすぎる？ と言う事で、リーユンがおつかいっいでに捜しに出る事に。

第三話 「秘薬」 第一幕

六の月に入り、麗らかだった陽気は日差しを強め、晴れ渡った日の昼間は薄っすらと汗ばむ程の気温となり始めた。大陸では梅雨が訪れ、湿度の高い蒸し暑い日々が続いていると聞くけれど、ここウイズムントでは長雨の気配も無く、乾いた空気の中で青の色を深めた空と薄く水色に染まる雲、街中もどこかほんのりと青く染まっているのが確認出来る。原因はこの時期にウイズムントを吹き抜ける青い風だ。一際風の強い日に何処からか運ばれてくる粒子の細かい青い砂が青風の正体なのだが、その砂が何処から飛んで来るのかは誰にも分かっていない。言い伝えによると遙か昔、竜族が住んでいたと言われる浮遊島から運ばれて来ていると言われているが、其れを確かめたという話も聞かず、あくまでも伝承の域を出ない話である。

リーユン＝ルルディヴァイサーは手にしていた魔術書から視線を上げると、風に叩かれて微かに音を立てる娯楽室の窓を見た。窓枠と硝子を支える為に十字に渡された木枠の隅に、僅かに青い砂が溜まっている。リーユンの生まれた北方のローズル大陸は年間を通して雪に覆われ、白銀の世界に慣れていたリーユンには初めて訪れたウイズムントの桜も五月の陽気も、六月の青風も夏の日差しも、全てが物珍しいものとして映っていたのを思い出す。八年目の今となってはもう毎年の見慣れた風物詩として感じられるようになっては居るものの、伝説の島から運ばれるという青い砂も、其れによって薄青く染まる街並みも、何処か神秘的な雰囲気を感じている様に思える。

じつと窓の外に視線を注ぐリーユンに気付いたのか、クラスメイトの一人、タキ＝ヤンフウも読んでいた魔導書から視線を外し、リーユンの眺めている先を辿って外の景色を視界に映す。

「嫌な季節が来ちゃったわね」

青く染まる風景に気付いた途端、タキは眉間に皺を寄せ、あからさまに不機嫌な表情を浮かべて忌々しそうに呟いた。リーユンはタキの所感に驚き、数度瞬いて彼女の横顔を見る。先にも述べたとおり、リーユンは薄青く染まる街並みを美しいとは思えども嫌いだと感じたことは一度も無い。実際この時期は観光客の姿がちらほらと目に留まる事も多いくらいで、否定的な意見と言うものを今までに聞いたことがない。何故嫌な季節だと思うのか理由を考えてみるもの、全く見当が付かないので大人しくタキに訊ねてみる事にした。

「この季節の何が嫌なの？」

「そんなの決まってるじゃない」

問いかけられたタキは外に向けていた視線をちらりとリーユンへ移し、手元の魔導書に戻す。決まっていると云いつつも続きを語る気配は無く、ページを繰る音を響かせて「ケイだって嫌なはずよ、ねえ？」とケイに話を振る。魔導書に集中しだしたタキに代わり、同じく読書に勤しんでいたケイがふと視線を起こし、タキを、続いてリーユンを見つめる。

「そうですね。この季節は外を歩くと髪や衣服が砂に塗れてしましますから」

ケイの言葉を受けて、リーユンは昨日の外出時の事を思い出した。砂避けの為にフードを被っていたとは言え、細かな青い砂は容易く髪に絡んで柔らかかな筈の髪はごわごわになり、衣服も砂っぽくなつてざらついた肌触りを伝える。けれどもそれはこの季節ならば当たり前の事であるし、リーユンはそう言う物だと思つて別段に気にした事は無かった。しかし女性は、特にタキやケイは髪が長いし、衣服もドレープが豊かでふわふわと柔らかかな物が多いし、砂塗れになると手入れが大変そうである。大いに納得出来る理由を受けて、リーユンは「なるほど」と紡ぐと共に、改めて女性の大変さを実感する。疑問が解決した所でケイもリーユンも魔術書の読解に意識を戻し、娯楽室には二度目の沈黙が訪れ、風が硝子戸を叩く音だけが響く。

暫く黙々と魔術書や魔導書を読み耽っていた三人だったが、いち早く読了したケイがパタンと小さな音を立てて本を閉ざし、独白めいた小さな呟きを漏らした。

「遅いですね」

ケイは既に読み終えていた一冊目の魔術書の上に、読んだばかりの書物を丁寧に乗せる。タキもケイに倣って本を閉じるとテーブルの上へ放り投げる。こちらは読み終わった訳ではなく、ただ単に飽きただけの様だった。タキは形良く整えられた薄桃の爪が飾る指先で魔導書の縁を撫で、ピンと弾く。

「そうね。遅いのはいつもの事と言えばいつもの事なんだけど」

ケイの話題に乗りかかる声音には明らかに面白がっている響きが混ざっており、タキが退屈な読書に飽き飽きしていたのが良く判る。

リーユンも娯楽室の壁に掛けられた幻陽計（注：日時計を模した魔導器）を見て、少しだけ眉根を寄せる。幻陽計の円盤の中心に立つ柱。そこから伸びる影は間も無く午後5時を示そうとしている。確かに、少し遅すぎるかも知れない。

「僕、ちよつと探してくる」

リーユンは読みかけの魔術書に棊を挟み、テーブルの上に置いて立ち上がると、直ぐに扉へ向かって歩き出す。その背中にタキが慌てて声を掛けた。娯楽室からエントランスへ続くドアのノブに手を掛けた体勢でリーユンが何事かと振り返る。

「どうしたの？」

「街まで出るなら、買って来て欲しい物があるの」

タキは両手を胸の前で組み合わせ、小首を傾がせてとびきりの笑顔を見せる。軽くアップにした髪が柔らかく肩の辺りで揺れ、「駄目？」と上目で見つめられて一瞬ドキツとしたリーユンだ。

「駄目……って言うか」

内容が内容だけに即答はし辛く、リーユンは軽く咳払いをして間を置き、

「無理だよ、タキ。タキが必要な物って僕にはさっぱり分からない

物ばかりだ」

魔導は専門外のリーユンである。魔導に用いる実験器具や材料などが分かる筈も無いし、ましてや女の子の衣類や装飾品となれば完全にお手上げである。そんなリーユンに更に笑みを振り撒きながらタキが言葉を重ねる。

「大丈夫よ。注文している物を買ってきてくれるだけでいいから」
タキのその台詞を受けて、傍観を決め込んでいたケイが反応を示した。ぼんやりと窓の外を眺めていた翠の眼差しをタキへ送り、緩く首を傾げさせ、

「それは、私が以前頼んでいた物ですか？」

ケイの問い掛けに、タキはこくこくと二度程頷いて答える。

「もちろん。まあ、それだけじゃないけどね」

タキの返答にケイは浅く眉根を寄せて少し困った表情を作ると、窓の外をもう一度眺めてからリーユンに向かって頭を下げた。

「私からもお願いします。買って来ていただけないでしょうか」

丁寧に頭を下げられてしまったは無下に断る事などリーユンに出来る筈も無く、注文した品が書かれた二枚にわたるメモと大量の紙幣をタキから手渡され、送り出される運びとなった。

「いつてらっしょい」

「お気を付けて」

「……行って来ます」

一応玄関まで付いて来てくれた二人に見送られ、リーユンは防砂用に羽織った薄手のケープを口許まで引き上げると、玄関のドアを押し開いて隔離教室を後にした。

外はと言うと、相変わらず風は止む気配を見せず、周囲の景色をうつすらと青く染め上げている。

「綺麗だと、思うんだけどな……」

ドール教室の古びた校舎と周囲を取り囲む森林が、薄青い膜を通して見える様はどこか神秘的な趣がある。リーユンは双眸を細めて咳きを零し、校舎に背を向けて歩き始めた。青に煙る小道を眺めなが

ら歩いていると、いつも白一色だった故郷の風景がリーユンの脳裏を過ぎる。一年中雪に覆われ、寒くて、食べ物もろくに無い、そんな国だった。そのくせ、と言うよりも、その所為だろうかと今では考える様になったのだが、内戦が絶え無い国でもあった。いつも広い国の何処かで争いがあり、家族で身を寄せ合って怯えて暮らしていた。

リーユンは頭を数度振り、思考を止めた。いつもこの時期になると故郷を思い出すのは、この青い風が今は無き竜達の故郷から来る物だからだろうか、リーユンは取り留めの無い思考を漂わせながら学園の敷地を進む。実際に青い風の正体が解明された訳ではないが、リーユンはその言い伝えを信じていた。

遙か昔、その卓越した知能と身体能力とで栄華を極めた竜族達。彼らは人々が見上げる高み、神々の領域である天に竜達が住まう為の島を創造した。実際の処、天空は神々の住まいなどではなく、竜族は神と出会う事無く空を我が物顔で駆け、誰憚る事無く天空を支配した。時が経つにつれて彼らは空を制しただけでは飽き足らず、自らが神であるかの如く振る舞い始めた。地に住まう人々や獣人を征服し、神々ではなく竜族を崇める様にと強要していった。それが神々の逆鱗に触れた。怒り狂った神々は竜族の住まい、浮遊島から色彩を奪い、色鮮やかで煌びやかだった彼らの国は一瞬にして灰色の暗い世界へ変貌した。竜達は恐れおののいて島からの脱出を試みるも、穏やかだった空は神々の怒りの如く雷雨で荒れ狂い、最早脱出は不可能だった。無理に島を出ようとした竜はたちまちの内に嵐に吞まれて一人残らず行方不明となった。そして、完全に閉じ込められた竜達は次々と病に倒れた。竜熱病。火蜥蜴サラマンダーの力が強く作用する場所に長時間居るとかかる病であるが、竜族と特別親しく接した人間が極稀にかかる程度の珍しいもので、元々火蜥蜴と相性の良い竜族がかかる事など皆無と言っても良い。非常に珍しい病であるが故に竜達の間にも対処法は知られておらず、半年の短い期間の間に竜達はその数を激減させた。

やがて、一人の若い竜が神々に祈りを捧げた。

罪は私が一人で背負いましょう。ですから、どうか、一族への天罰をお収め下さい。

若い竜の嘆願を聞き入れた神々は浮遊島の色彩を戻し、荒れ狂う空を鎮めると、彼以外の竜達を地上へ送り届けた。そして、一人残った若い竜の色彩を奪った。火竜族の特徴である緋色の美しい髪と比翼は白く変貌し、竜族の証である金色の瞳は夜の海を思わせる黒曜に染まった。それから神々は誰にも見つからないように、誰も訪れる者の無いように、浮遊島を空と同じ青色に染め上げた。その浮遊島が風化して青い風となっている、と言うのが伝説の詳細である。

一族の罪を一身に受けた若い火竜がどうなったかと言うと、彼はその後神々の使いとして働くようになった。その献身的な働きに、神々は五十年に一度だけ一族の元へ訪れることを若い竜に許した。若い竜はやがて皆から白竜と呼ばれる存在になる。

現在も五十年に一度の白竜の飛来は続いており、竜族の住まう西方の山、ギムリギムル山脈では盛大な祭りが行われているそうだ。そう言えば、今年の夏にも白竜祭があるとルウが騒いでいたのをリーユンは思い出す。

学院の広すぎる敷地を抜け、リーユン＝ルルディヴァイサーは西門から続く道を進んで真っ直ぐ商店街へ向かう。途中、辺りを見回しながらクウ＝ラ＝ルウの姿を探すが、それらしい人影は見当たらない。

「いったい何所まで出掛けたんだろう」

商店街に着いてからもルウの立ち寄りそうな店を覗きながら歩いてみたが、平和その物な商店街の姿が見られただけで、結局ルウを見付ける事が出来ないままタキに頼まれた目的の店まで来てしまった。商店街の路地に入った所にあるこの店は、絶版になったような古い書物や魔導の実験器具から怪しい薬まで何でも揃うとの事で、タキ＝ヤンフウお気に入りの一店である。

リーユンは店の扉に下げられているモンスターの一部らしき干物

の存在に怯えながら、そつと扉を開いて中を覗いてみた。店内もリーユンには理解し難いモノ達で溢れ返っていたが、それなりに秩序立てて整頓はされているらしかった。一見乱雑に見えるのは所狭しと商品が並べられている所為だろう。

「あそこのエントランスに比べれば、どこもマシかも知れない」

リーユンは少し情けない様な気持ちになりながら店内へ足を踏み入れた。漢方薬に似た独特の匂いが鼻につく。

「どなたかいらっしやいませんか？」

雑然とした店内はとても静かで、人の気配が感じられない。静寂を破るのが何となく躊躇われて、リーユンは抑えた声量で店主、または店員が居ないかと尋ねてみる。すると、突然何の気配も無かった後頭部の辺りから声を掛けられて、リーユンは驚きのあまり文字通り飛び上がった。

「そんなに驚く事無いにやー」

天井に空いた穴から逆さまに顔を覗かせる眼鏡の青年が大げさに悲しんでいる。青年は四角い穴の縁を両手で掴み、おそらくは倉庫として使っているのだろう天井裏から逆上がりの逆再生の要領で音もなく地面に降り立った。背を向けていた姿勢からくるりとリーユンに向き直り、青年は小首を傾がせる。

「さて、今日は何の御用かにやー」

青年は軽く折り曲げた人差し指の関節でずれた眼鏡を押し上げながらリーユンに尋ねる。青灰の柔らかな猫毛からは、髪と同色の獣毛に覆われた三角の耳が覗いている。背後にはゆらゆらと細長い尾が揺れ動いていて、青年が虎人族である事を如実に物語っていた。リーユンは自分よりも少しだけ空に近い位置にある青年の顔を見上げながら、タキに頼まれてやって来た事を告げる。

「タキィヤンフウの名義で注文していた商品を受け取りに来ました」

「タキちゃんのお遣いなんだにやー。大変にやー」

店主と思しき青年は言葉とは裏腹に、大して大変そうではないのんびりとした口調で話しながら、店の奥へ進んで扉の向こうへ消える。

暫くガタガタと物音がしたかと思うと、青年は両腕に大きな箱を二つ抱えて戻って来た。

「中を確認して欲しいにやー」

恐らくはこれも売り物なのだろうアンティーク調のテーブルの上に、青年は荷物を乗せ、上の箱を横にずらして並べ置く。それから箱の蓋を開け、中に納められていた麻の薬袋を一つ手に取って、袋に書かれた文字が確認出来る様にリーユンへ示す。リーユンは慌てて口ブのポケットからタキに預かったメモを取り出し、示される商品とメモに書かれた商品とを照会していく。リーユンが魔導に不慣れだろう事を見越して、虎人族の青年は一つ一つ商品名を教えてくれるのだが、リーユンは正直な所、示された商品と商品名が合っているかどうかすら分らない有様だった。リーユンはメモをテーブルに広げ、青年にも手伝って貰いながらどうにか全ての商品が揃っている事を確認すると、青年と二人で商品を箱の中に戻し、代金を支払う。厚みのあった紙幣は数枚のコインに化けてしまったが、かなり貴重な物もあった様なのでこんな物なのだろう。リーユンはタキの金銭感覚を心配したが、実際の所今一番心を占める心配事はこの大量の荷物を持って帰る自分の身の事であった。

「気を付けて帰るにやー」

のほほんとした青年に見送られ、リーユンは箱を抱え上げてふらふらと店を抜ける。開いた状態で扉を抑えてくれる青年へ「ありがとうございます」と礼を伝え、夕闇に染まりつつある通りへ向かう。商店街に出る直前の路地で足を止めて壁に凭れ掛かり、箱の底を右腿で揺すり上げ、少しだけ休息を取る。

「あの人が持つてる時はもう少し軽そうに見えたのになあ」

スマートに見えてもやはり獣人は獣人であるらしい。人間よりは力が強いようだ。

「ルウがまだ見つかってないけど、一度教室まで戻らないとダメかな」

リーユンは抱えた荷物に視線を落とす。流石にこれを抱えて人を探

し歩く自信は無い。かと言ってここから教室までの道程が容易いか
と言われるとそんな筈も無くて、リーユンは思わず溜息を吐いて途
方に暮れた様子で空を見上げるのであった。

第三話 「秘薬」 第二幕

暫く空を見上げて呆けていたリーユンだったが、そうして立ち止まって居ては何時まで経つても教室には辿り着けないと自らに言い聞かせ、荷物を抱え直すと狭い路地から広い商店街へ移動する。風が強い所為か普段よりは人通りが少ない事に感謝しながら、リーユンは一歩一歩慎重に歩を進めた。四、五分も歩いただろうか。商店街の半ばを過ぎた辺りでリーユンを呼び止める声がある。

「リーユン＝ルルデイヴァイサー君？」

自信の無さそうな語尾上がりになるのは、リーユンの顔が箱に隠されて確認し辛いからだろう。自分の名を耳にして、リーユンはその場で足を止める。何とか声の主を捜そうと首を巡らせるが、二つ重ねた荷物の所為で視界が遮られていて思うように相手を見付けられないで居た。オロオロと立ち往生しているリーユンを見かねたのであろう呼び声の主は、二段に重ねられていた箱の一つを取り上げ、互いの姿が確認出来る状況を作り出す

「こんにちは、リーユン君」

先程の語尾上がりとは違い、はつきりとリーユンだと知つての言葉。リーユンは開けた視界の向こうに声の主を確認すると、あっと小さく驚きの声を上げた。

「ウォフリー先生」

人の良さそうな微笑を湛えていたその青年は、リーユンに名を呼ばれた事に少し嬉しそうに笑みを深くした。赤茶けた髪は清潔に短く整えられており、幾分尻の垂れ下った焦げ茶色の瞳はいつも微笑んでいるように見える。口元も柔らかく笑みを滲ませていて彼の人懐こい性格を良く表していたが、それに加えて両頬の辺りにあるそばかすが彼の表情に幼い愛敬を添えていた。

ウォフリー教師。正確にはレイルズ＝フェリオット＝ウォフリーと言つ名のこの青年は、ウィズムント魔術学院一般基礎学年を受け

持つ青魔術師である。一般基礎学年とは言え、青魔術師がクラスを任されるのは異例の事だ。通常は白以上の色冠を持つ魔術師や魔導師に師事し、白の位を戴いて初めて教壇に立つ事が出来るのだ。つまり青魔術師の身でありながら教鞭を振るう事が出来るウォフリーは、大変優秀な魔術師である。単純に考えればただ其れだけの話なのだが、なまじ彼の実家がルドレイド大陸の砂漠を牛耳る貴族である為に、言われない誹謗中傷を受ける事もしばはあるようだった。けれど青年はそんな様子を微塵も見せる事無く、いつも微笑みを絶やす事が無い。それは今現在も変わらずリーユンに向けられていた。目の前の人物が何者であるかを知ってリーユンは少なからず緊張を覚えたが、ウォフリーは全く気にした様子も無く少しおどけた口調で話し掛ける。

「君に名前を覚えて貰えているなんて、光栄だね」

それからウォフリーはリーユンの隣に並ぶように立ち位置を変え、箱を一つ抱えたまま商店街を学院へ向けて歩き出す。

「私も丁度学院へ帰る所だから、運ぶのを手伝うよ」

顔と名前が一致するのはお互いある程度学院内で名が知れ渡っているからと言うだけで、決して親しいとは言えない相手からの突然の申し出に驚いたリーユンであったが、それも一瞬の事で、有り難く彼の申し出を受け取る事にした。「ありがとうございます」と礼の言葉と笑みを返し、リーユンは半分の重さになった荷物を抱え直すと、先に歩き出したウォフリーの後を追う。隣に並んで歩きながら来た時同様周囲を気にしながら歩くリーユンに、ウォフリーが怪訝そうに尋ねた。

「まだ何か買いい足りない物でも？」

既に一人では運びきれない量の荷物を抱え、更に何かを探していれば怪訝に思っただけだろう。リーユンは気恥ずかしさに幾分視線を伏せて答える。

「いえ、昼に出掛けたきり、ルウが戻って来ないものですから」

「ああ、あの元気な小竜族の少年か。まだ明るいし、どこかで遊ん

でいるんじゃないかな？」

視線を周囲へ巡らせ、夕日に染まる商店街を眺めるウォフリーは極々一般的な意見を述べる。青砂の所為で普段より人通りは少ないとは言え、夕飯の買い出しや飲食店の夜の営業準備等でまだまだ活気のある時間帯である。リーユンは何とも言えない曖昧な表情で小さく笑みを浮かべるだけだ。普通ならウォフリーの意見は正しい。元気の良過ぎる子供　実際にはリーユンよりも年上であるが　そんな遊びたい盛りの少年が、昼に出掛けて夕方前に帰って来ないからと言って心配する方がどうかしている。しかし、ことクウ＝ラ＝ルウに関してはそう楽観的に考えるわけにはいかないのである。何せトラブルメーカーである。それも筋金入りの。ルウは行く先々で面倒事に首を突っ込んで騒動を大きくするのを生き甲斐にしているような節がある。そんなルウが出掛けてかれこれ四時間が経とうとしていた。それなのにウイズムントは平和なのだ。普段なら多かれ少なかれもう何事か騒動が起きていても可笑しくは無い。否、起きていなければ可笑しい時間であるのに、喧噪のけの字も聞こえて来ない。本当に何かしらの偶然が重なり、その上聖なる五神の御加護があつたのなら今のこの平和も頷けるのだろうが、生憎とそういった奇跡の様な可能性を素直に信じる事は出来なかった。となれば残る答えは限られてくる。誰かがルウをきちんと監視指導しているか、ルウの身に何かあつたか、だ。この二つもそうそう考えられる事柄ではないが、ルウが出掛けていてウイズムントが平和である事を説明するには、他に良い理由が思い浮かばなかった。

（その二つでより可能性が高いのは、ルウの身に何かが起こった、
なんだけど）

リーユンは小さく溜息を吐いた。どこかの黒魔術師のようにただどこかで寝こけている、という落ちである事を切に願う。

暗く沈んだように見えるリーユンを、ウォフリーは微笑を浮かべた優しい眼差しで見つめる。

「友達が心配なんだね。荷物を事務室に預けたら私も一緒に捜そう」

ウオフリーの申し出に驚いたのはリーユンだ。思わずその場に足を止め、蒼い眼を大きくしてウオフリーの姿を眺める。

「あ、いえ、僕の思い過ごしかも知れませんが、先生にそこまでしていただく訳には」

荷物を持って貰った上に人捜しまで手伝わせるのは流石に躊躇われた。リーユンは本当に申し訳なさそうな表情を浮かべ、謝罪の言葉を続ける。

「せっかくのご厚意なのに、すみません」

リーユンを困らせた訳では無かったのだろう。ウオフリーも立ち止まり、慌てて首を横に振り、

「とんでもない、謝るのはこちらの方だ。友人を心配するのは当然の事なのに、無責任な事を言ってしまった。だから、私の事は気にしないでいいから、手伝わせて貰えないかな。人捜しなら人手は多い方が良さだろうか？」

謝罪の言葉と、優しく言い聞かせる様に続く言葉とに、リーユンは幾分表情を緩ませた。小さな島国とは言え、ウイズムント国内を一人で探索するのは無謀だ。ウオフリーの申し出は非常にありがたい物だった。

「すみません」

リーユンは先程とは違った意味での謝罪を口にする。それを聞いたウオフリーは満足そうに頷いて、「少し急ごうか」と歩を速めた。

二人はウイズムント魔術学院に到着するや否や、直ぐに南棟の事務室へ向かう。受付の女性に荷物の宅配と伝言を頼むと、早々に来た道に戻った。門に辿り着いた頃には辺りは紫に染め上げられ、夜の色彩に変わろうとしている。

「彼の行きそうな場所に心当たりは？」

ウオフリーの質問を受け、リーユンは一瞬言葉に詰まる。それからチラリとウオフリーを見上げると、言い難そうに答えた。

「騒ぎの起きそうな所、です」

「成程」

リーユンの返答にきよとんとした表情を見せたウオフリーであったが、彼もクウ＝ラ＝ルウの噂ぐらいは知っている。尾ひれや背びれ、ついでに胸びれや腹びれまで付いていたと仮定しても、ルウの起こしてきた数々の騒動は決して小さく無い。

「取り敢えず人通りの多そうな場所を捜そう。私はもう一度商店街をあたってみる」

リーユンはウオフリーの言葉に頷き、

「僕は港の方へ行ってみます」

と伝えてウイズムントの中央通りを右方向へ曲がった。港の方面、ウイズムントの南西には、旅行者や漁師たちを対象にしている宿を兼ねた酒場が数件ある。多少いかがわしい店も建ち並ぶその界隈は、徐々に賑わいを見せ始める時間帯となっていた。太陽はその姿を海の向こうへ隠し、残照が水平線を赤々と燃え上がらせている。七色のグラデーシオンは濃紺が優位を示し、街には明かりが灯り始めていた。厳めしい漁師たちや華やかに着飾った女性が歩くその通りでは、小柄な少年であるリーユンはかなり浮いて見える。その上学院支給の赤いローブに防砂用のケープをきつちりと着込んだ姿はいかにも優等生で、既に少なくとも数の視線を集めている。

「真つ暗になる前に見付けて帰ろう」

リーユンは小さく口の中でつぶやくと、喧噪を抜けて更に港へ向かって走った。賑やかな界隈を抜けて暫く行くと潮の香りが漂って来る。船で運ばれて来た、またはこれから運び出す積み荷を一時保管する倉庫が立ち並ぶ一画まで来ると、リーユンは不意に足を止めた。

カラ……カラカラ……。

風が吹くのに合わせて何か転がる音が聞こえる。リーユンは息を殺して音が聞こえる方角へ慎重に歩を進めた。倉庫と倉庫の間、行き止まりとなっている細い道の入り口付近に、それは転がっていた。手の平サイズの大きさの透明な瓶。蓋が開いていて、風に吹かれて転がる度に入っていた青い砂が少しずつ零れ落ちていた。その小瓶には見覚えがあった。ルウが青い砂を集めては詰め込んで

いた瓶だ。もうすぐ瓶が一杯になるからと言って昼間に出かけて行ったのだが、今は半分程に量が減っている。周囲には既にクウ＝ラ＝ルウの気配は無い。リーユンは転がる瓶を拾い上げ、零れてしまった砂を可能な限り元に戻すと、瓶にしっかりと蓋をしてローブのポケットへ仕舞い込んだ。

ここでルウの身に何か起きたのは確かなのだが、誰かから話を聞こうにも、今この倉庫街にはリーユン以外に人が居ない。リーユンはこれからどうすれば良いのか分からずその場に立ち尽くし、すっかり日が沈んでしまった倉庫街が街燈で淡く照らし出されていく様子を刹那の時間眺めていた。しかしながら茫然とした意識は近づく人の気配を知ってすぐに働き出し、物音を立てない様に素早く倉庫と倉庫の間の細い路地に身を隠す。やがて単調なリズムの足音と共に現れた人物を確認すると、リーユンはホッと肩の力を抜いて、知らずに詰めていた息を吐き出した。

「ウオフリー先生」

「ああ、リーユン君、此処に居たか」

ウオフリーも声音に幾分安堵の色を滲ませるが、その表情は緊張感を隠せずに居た。互い早足で距離を削り、手短に報告を交わす。

「残念ながら、ルウ君を見付ける事は出来なかったよ。けれど、目撃証言は得られた」

リーユンはそこで一度言葉を区切るウオフリーを急かすように視線を重ねる。嫌な予感を感じているのだろうと言う事はその表情からも分かり、ウオフリーは沈痛な面持ちで先の言葉を口にする。

「商店街を誰かと一緒に歩いている所を見ていた人が居たんだ」

「誰かって誰ですか!」

リーユンは堪らず声を上げた。その何者かがルウを何処かへ連れ去ったに違いないのだ。倉庫街近辺には魔術を使用した形跡は無かった。ろくに抵抗も出来ないままルウが連れ去られるなんて、相手は余程魔術に精通した者なのだろう。そんな人物は魔国ウィズムントにおいてもそうそう居るものではない。リーユンは険しい顔つきで

ウオフリーの言葉を待った。

「リーユン君、落ち着いて聞いてくれ」

ウオフリーはそう前置きしてから、静かに続ける。

「商店街での目撃者は数名居てね。その皆が同じ事を言っていたよ。小竜族の少年と並んで歩いていたのは、黒髪の、ウイズムント人の少年。たぶん君がよく知る人物だ」

やけに唇が乾いて仕方がないのは、青い砂や潮風の所為だけではないのだろう。リーユンはウオフリーの言葉をすぐに理解する事が出来ず、震える唇を舐めて少し湿らせてから、漸く小さな声で呟いた。
「まさか」

笑い飛ばしたい気持ちを、掠れた声が裏切る。ルウを連れ去れる程の実力の持ち主で、街の人に名前や顔を覚えられる程には有名で、ウイズムント人の少年で、リーユンのよく知る人物と言えば、心当たりは一人しか居ない。正義感の強い生真面目な少年の姿がリーユンの脳裏に浮かぶ。俄かには信じ難い事ではあるが、目的や理由の如何は兎も角、彼にならば犯行は可能なのだ。

「嘘、ですよ、ウオフリー先生」

リーユンはその客観的な事実を認めたくなくて、縋る様にウオフリーを見上げる。

「だって、そんな事して、彼に何の意味があるんですか？」

ウオフリーは宥める手付きでリーユンの肩に触れ、静かに、けれどリーユンが聞きたくないと思っっているだろう言葉をゆっくりと口に出した。

「彼が何を思って行動したかは私には解らないけれど、ルウ君と歩いていたのはジュン」エンシェンだったと、皆が言っていたよ」

第三話 「秘薬」 第三幕

ウィズムント魔術学院北側に位置するドール教室、通称隔離教室と呼ばれる木造校舎のエントランスで、つい先程事務員に届けられたばかりの荷物を見下ろしながら、タキ「ヤンフウは仁王立ちしていた。

「どう思う、ケイ？」

タキは荷物をジツと凝視したまま、背後に佇むエルフ族の女性に声を掛ける。ケイは口元に指を宛がい、少しの間思索してから慎重に口を開いた。

「本格的にルウの身を案じた方が良さそうですね」

事務員に言付けられたリー「ユニ」ルルディヴァイサーの伝言は、ルウが見付からないのもう暫くレイルズ「フェリオット」ウオフリ「教師と一緒に搜索すると言うものだった。

「まったく、こんな大変な時に限って居ないんだから、あのぐうたら教師は！」

今日も今日とて飯時以外に姿を見せない担当教師に対し、タキはこぞとばかりにぶちぶち暴言を吐き続ける。ケイはそんなタキを困った様子で眺め、

「上級教室担任と黒魔術師と言う二つの立場があるのですから、何かと忙しいんですよ」

「どうせシャウレインドツティ教師とデートでもしてるんですよ。

あの二人、事ある毎に一緒に居るじゃない」

タキはケイの諷める口調の語尾に言葉を被せて勢いよく振り返り、ズイツとケイに詰め寄った。

「あんな卑怯でだらしない男のどこが良いのよ」

長命のエルフ族から見ればタキの様な少女は赤子にも近い年齢であるが、こと男女間の恋愛となると人や獣人の方が積極的で、盛んである様に思える。教師と生徒という立場であるうと、今の良好な関

係を続けていたいと願うケイにとっては、カイリ「ドールとMEM」
シャウレインドツテイの交友は考えたくない類の事だ。ストリート
なタキの問いを受け、ケイは少々ウンザリした面持ちで吐息を零し
た。

「彼は卑怯でも何でもありません。それに、私が誰をどの様に好き
になろうとタキには関係がないでしょう」

ケイはタキの視線から逃れるように顔を背けると、抑揚のない冷た
い声で不毛な会話を打ち切る。

「そんな事より、私達もルウを捜しましょう。タキはユエを呼んで
来てください。その間に私は火蜥蜴を召喚してルウを追跡する準備
をします」

まだ何か言いたげな表情でケイを見ていたタキであったが、「わか
ったわ」と力無く呟くと一度自室へ戻り、薄手の外套を羽織ってか
ら玄関の扉を開いた。其のまま無言で出て行こうとするタキを見つ
めていたケイだったが、慌ててその背中へ声を掛ける。

「タキ」

名を呼ばれ、ノロノロと振り返ったタキの視界に、寂しげな微笑を
浮かべるケイの姿が映る。ケイが時々見せるその表情が、タキには
堪らなく辛かった。そんな切ない表情を浮かべるのはカイリ「ド
ールに関する事だけだと、タキだけが知っている。知っていてどうに
も出来ない自分が齒痒く、タキはキュツと下唇を噛んだ。

「タキ、心配を掛けて、申し訳ありません」

こんな時にタキは自分とケイとの差を思い知らされる。元々感情の
起伏が少ないエルフ族はどんな時でも対応が理知的で大人で、タキ
はそれを羨ましく思いながらも同時にとてももどかしく感じていた。
ケイとは対照的に、タキは唐突に沸き起こる激しい感情を抑える事
が出来ない。説明のしようが無い激情に任せて行動するのも、タキ
がタキたる所以である。謝罪の言葉を紡ぐケイに向き直り、タキは
大きく息を吸い込んだ。

「バカ!!!」

肺に取り込んだ酸素を全て使ったかのような大声でケイを怒鳴り付けると、タキは一気に捲し立てる。

「ケイってホントにおバカさんだわ。なんでそこで謝れるのよ。バカじゃないの。大バカじゃないの。そんなだから心配なんじゃない……ねえ、ケイお願いよ。絶対に一人で泣かないで。泣く時は私が傍に居るから。頼り無いかも知れないけど、それでもケイの事が心配なの。だから、約束して。絶対よ？」

勢いに任せて放たれたタキの言葉は次第に真摯な色を帯び、驚きに瞠られていたケイの双眸がゆっくりと細められ、笑みの形を取る。

ケイは右手を伸ばしてタキの髪を撫で、

「タキの事を頼り無いと思った事は一度もありません。ありがとうございます」

「うん。ありがとう。それから、ごめんなさい」

柔らかな髪を梳くケイの手に、タキは漸くホッとした様子で笑みを見せる。謝罪の言葉を素直に伝えるタキへ、ケイも緩く首を振って答えた。

「お互い様です。気にしないで下さい」

二人は笑みを交わし合い、元気を取り戻したタキは勢いを付けて身を翻す。

「それじゃ、ユエを呼んで来るわね」

一度肩越しに振り返り、タキは軽やかな足取りで隔離教室を出て行った。木製の扉が小さく軋んだ音を立てながら閉ざされ、タキの姿が完全に見えなくなると、ケイは階段を足早に上って自室へ急ぐ。

階段を登りきって右手へ続く廊下。タキⅡヤンフウの部屋、空き部屋、ユエⅡルイエンの部屋と順に通り過ぎ、一番奥の自室の扉を開く。女性の部屋にしては細々とした雑貨が置かれていない、すつきりと整えられた部屋だ。ケイは机の引き出しから緻密な銀細工のネックレスを一つ取り出して、チェーン部分を指に絡ませる。チェーンから下がるペンダントトップは炎を象った物で、火蜥蜴を使役する事があまり得意ではないエルフ族が彼らを従える為、あるいは自

らの身を火蜥蜴から護る為に身につける物だった。ケイは手の平に乗せたペンダントトップを握り締め、戸口に掛けていたロープを手早く羽織って再びエントランスへ舞い戻る。玄關の扉を開け、もう夜と呼んで差支えない暗さを纏う屋外へ出ると、近くに落ちていた枯れ枝を拾い上げた。ケイは魔力を練り上げ、手元を覆う程度の小さな術式を編み上げる。魔力で描かれた式に力が充実するのを見計らい、ケイは魔術を発動させるキーワードを口に出す。

「テインダー」

ケイの呟きに呼応して赤い球状の式が光を帯びる。一瞬後には術式は跡形もなく消え去り、代わりに枯れ枝の先端に小さな灯火が現れた。ケイは右腕を真つ直ぐに伸ばして小枝を掲げ、体温を移して幾分温かさを感じる左手の銀細工を炎に翳し、精霊語を紡ぐ。

「汝、猛々しき破壊の化身よ。荒れ狂う御魂を収め、その卑しき姿を我が前に示せ」

枯れ枝の先端で小さく揺らいでいた炎が枝からはがれる様に空中へ舞い上がる。炎はくるりと一度円を描いて回転すると、そのままケイの眼前で静止した。その炎は燃え盛る蜥蜴のような爬虫類の姿をしているのだが、一般人の眼では捉える事は出来ない。ケイは用を終えた木切れを捨て、目の前に浮かぶ火蜥蜴を険しい表情で見据えながら精霊語で話しかけた。

「小竜族の少年は何処ですか」

炎の精霊は身に纏う火炎を一度噴き上げると、低く静かな声を発する。

「我に尋ねておるのか？」

「他に誰が居ますか？」

ケイはとぼけた様な火蜥蜴の返答に業を煮やし、元より険しかった眼差しをより冷やかに細めて問いを返す。普段のケイらしからぬ物言いはエルフ族が森林を焼き払う破壊の象徴である火蜥蜴を毛嫌いしているからなのだが、それは火蜥蜴にしても同様である。

「ふん、エルフというのは礼儀知らずが多いと見える」

口から炎をちろちろと吐きながら、火蜥蜴が言う。赤々と燃え盛る炎の奥で、鋭い眼差しが油断無くケイとケイの手元で鈍く光る銀細工に注がれていた。ケイは強い炎の力に眩暈を覚えながらも、毅然とした態度で言い放つ。

「貴方を召喚したのは私です。命令に従いなさい」
精霊使いらしく威厳のある声音。それでも火蜥蜴は不遜な態度を崩す事は無い。

「断る、と言ったら？」

低い声音に滲むのは明らかな嘲笑。鋭い牙が並ぶ口にニタアと下品な笑みを浮かべる火蜥蜴に、ケイは蔑む様な眼差しを送り、左手に持ったペンダントトップを胸元へ宛がい、魔力を全身へ満たし始めた。

「あくまでも反抗すると言っのならば、力尽くまで従わせるまでです」

「面白い」

言葉と同時に、火蜥蜴も一際盛大に炎を吹き上げると、今にもケイに飛び掛らんばかりに身構えた。丁度その瞬間、

「ケイさん！」

小道を曲がってドール教室へ戻って来たリーユンが、ケイに声を掛けた。突然の乱入者に驚いたケイと火蜥蜴は思わず身を強張らせて勢い良くリーユンを振り返る。その尋常ではない様子に目を瞬かせたのはリーユンだ。

「な、何ですか？」

リーユンの視界には一人緊張した面持ちで佇むケイの姿しか映っていない。驚かせてしまっただろうかと申し訳なさに眉尻を下げるリーユンに、ケイはバツの悪そうな様子で「いえ」とだけ小さく紡ぐ。咄嗟に口を突いて出た否定に続く言葉を探すものの、適当な言葉が思い浮かばず、ついチラと火蜥蜴に一瞥を送る。火蜥蜴は先程までとは打って変わり、白けた表情でリーユンを観察している。リーユンはケイが何も無い中空を見ている事に気が付くと、ケイに尋ねた。「もしかして、そこに精霊が居るんですか？」

精霊を感じる事の出来ない人間にとって、その存在は御伽噺の世界だ。リーユンは思わず目を凝らして暗闇の中に浮かぶ精霊を見付けようと試みる。ケイはそんなリーユンの姿に小さく笑み、微かに頷いて口を開く。

「炎の精霊、サラマンダー火蜥蜴です。小竜族は炎の精霊力を強く帯びる種族ですから、彼の気配を探すには火蜥蜴が最適でしょう」

それを聞いたリーユンはパツと表情を明るくすると、火蜥蜴が居るのであるう場所へ視線を向け、頭を下げる。

「ルウの場所まで案内してもらえますね。ありがとうございます」

リーユンの素直な言葉と態度に、ケイは自分の好悪よりもルウの身を優先させるべきだと自らに言い聞かせ、一度深く呼吸をしてから火蜥蜴へ向き直る。精霊への命令は精霊語で行うのが常であり、ケイはリーユンには理解出来ない不可思議な響きの言葉で火蜥蜴に告げた。

「案内をお願いします」

火蜥蜴は暫し無言のままリーユンを見つめ続けていたが、小さな笑いを零し、「よかろう」と一言紡いで小道を勢い良く進み始める。

ケイが急ぎ後を追って走るのをリーユンも慌てて追いかけて、横に並んだ時に初めてケイの顔色が悪い事に気付いた。始めは夜闇が青白い月明かりか、もしくは青い風の所為かと考えていたリーユンだが、普段は体重を感じさせない軽やかなケイの足取りが、今はやや重い様にも見受けられる。

「ケイさん。大丈夫ですか？」

心配げに掛けられたリーユンの声に、ケイは微笑を浮かべて応える。ケイの視線は先導する火蜥蜴に注がれたままであったが、リーユンはその横顔に微かな拒絶を感じてそれ以上何も言えずに押し黙ってしまった。ケイはと言うと、そんなリーユンの様子に気付いてはいないのだが、軽い自己嫌悪と酷くなりつつある眩暈の為にリーユンを気遣う余裕が無い。

二人はただ黙々と火蜥蜴の後を追って走り、途中タキ達と合流してウィズムント魔術学院を抜ける。もうすっかりと日の落ちた時間帯であるのに、隔離教室の生徒が慌てた様子で出掛けて行くのを見て、守衛が嫌な予感を覚えたのは言うまでも無い。四人は学院を出た後、ウィズムントを縦断する大通りへ抜けてひたすら南方向へ走った。大通りとは言え店終いの店舗も多く、周囲の様子は比較的静かで、何事か騒動が起きた様子は無い。

「俺の貴重な休憩時間が……」

ユエが最後尾で大げさに嘆きながら走るのを、タキが振り返って冷たい視線で見やる。

「もう、うるさいわね。ユエはルウが心配じゃないの？」

タキの台詞に剣呑な響きを感じ取ったユエはわざとらしく辺りを見回し始め、真面目ぶって眉間に皺を寄せて見せた。

「あーあー、心配だなあ」

ユエの空々しい台詞にタキの機嫌はますます悪くなるのだが、ユエは然程気にしていないようだ。二人がそんな遣り取りをしている間にも、火蜥蜴はどんどん大通りを進み、途中横道に入り込んだりしながらも一定の方角へ向かって居るらしい事が解かる。

「このまま行くと、砂浜に出るわね」

タキの言葉通り、四人は住宅街を抜けて砂浜へ続く道を走る。波の音が聞こえ始めたところで、不意にケイが足を止めた。火蜥蜴がこれ以上水の気配が強い場所には進めないと告げたからなのだが、ケイ以外の他の三名に精霊の言葉が聞こえる筈も無く、急に立ち止まったケイにぶつかりそうになる。危うい所でドミノ倒しになるのを免れた三人は、各々心配や疑問や非難を込めた視線でケイを見た。説明を求める視線には流石に気が付き、走った事で乱れた長い金の髪を片手で軽く整え、ケイが手短かに説明を伝える。

「火蜥蜴はこれ以上海へ近付く事が出来ません」

それから火蜥蜴に向き直り、三人には理解出来ない言語で何事かを呟くと、火蜥蜴は現れた時と同じ様に宙を一回転して夜空へ溶ける

ようにして消え去った。

「この先に、ルウが居ます」

ケイは大きく息を吐いてから言葉を吐き出した。本人は普段通りの調子で出したつもりなのだろうが、そのあまりに辛そうな声を聞いてユエとタキも漸くケイの体調が思わしくない事に気が付く。

「おい、また熱が出るんじゃないのか」

ユエがケイの背に右手を添えて支えながら尋ねた。ケイは「平気です」とだけ答えてユエの腕から離れると、砂浜へ向けて歩き出す。残された三人はどうしたものかと顔を見合わせるものの、結局は何も出来ずに黙ってケイの後に続いた。

砂浜と道路を区切る防波堤を下りると、四人は砂浜の異常さにギョツとして前方を注視した。砂浜と、海の浅い部分の一部を覆う形で半端ではなく大きな魔術壁マジックシールドが構築されていたのだ。その魔術壁は通常の術と異なり、周囲からの視線を避けるような細工が施されていた。魔術壁へ入り込む光を屈折させているのだろう。外からでは内部の様子がはっきりとは分からない様になっている。昼間なら多少ぼやける程度であり効果は無いのだろうが、陽が沈んだ夜、周囲に明かりの乏しい浜辺ならば内部の様子を窺い知る事はなかなか難しい。四人は慎重に巨大な壁に歩み寄ると、中を見ようと黒々とした魔術壁の曲面に顔を近付けた。刹那、
ベチャ……。

と、実際にはそんな音は聞こえなかったのだが、壁の内側にベツタリと張り付いた顔を見て、四人の脳裏にはそんな擬音が過ぎる。ガラスに押し付けられた時の様に歪んだ顔は見慣れた物では無かったが、その水色の髪と金色の瞳、髪の間隙からちよこんと覗いた二本の角には見覚えがあった。

「ルウ!?」

四人はほぼ同時に叫びながら、壁の内側に激突したままの姿でずると滑り落ちるルウを追いかけてその場にしゃがみ込む。

「ルウ、一体何があったの?」

リーユンが魔術壁を叩いて呼び掛けるが、壁の中には声が届かないらしく、ルウはすばやく立ち上がると壁から離れて中央へ向かって駆けて行く。その小さな背に竜族特有の羽が現れているのを見て、ユエが眉を顰めた。ルウの姿はすぐに黒くくすんで見えなくなる。

「変身トランスしてるな」

ユエの呟きに、三人は視線を凝らしてルウと対峙しているであろう相手の姿を捜す。外からではシルエットのようにしか見えないのだが、ルウが変身して戦わねばならない様な強敵だとは思えない少年の様な体躯の持ち主だった。ユエ、ケイ、タキが分かったのはそこまでだったが、リーユンには相手是谁であるのか分かった様で、サツと顔色を変える。術式を編む時の立ち姿や走り出す瞬間の重心の落とし方。それらはリーユンにとってとてもよく見知った物だった。

「……ジユン」

リーユンはウオフリーから聞かされた事柄が真実であると知り、喉の奥で唸る様に親友の名を呼ぶと、魔術壁に押し付けた右手をギョツと固く握り締めた。

第三話 「秘薬」 第四幕

ユエールイエン、ケイ、タキキャンフウの三人はリーユンルルデイヴァイサーの眩きに気付いて、しゃがみ込んだままのリーユンに視線を向ける。

「ジユンって、確かシャウレインドッテイ教室のアイツよね」

タキがマリアン又ちゃん二号暴走事件の際にジユンエンシエンと出会った時の事を苛立たしく思い起こしながらリーユンに問い掛けるが、リーユンは愕然と魔術壁の中を凝視したまま動かない。気の短いタキは答えないリーユンをさっさと無視して立ち上がると、魔術壁を破壊する為に右手に魔力を集中させ、カ一杯壁を殴り始めた。

「おい、無茶をするな」

ユエが慌ててタキの腕を掴み、止めさせようとするものの、タキはユエの手を乱暴に振り払って魔術壁を殴り続ける。

「なんなのよ、アイツ。何考えてるのよ」

怒り心頭と言った様子のタキを止めるのは無理だと悟ったユエは一度リーユンに視線を向けるが、こちらも呆然と座り込んでいて使い物にならないと判断したのか、ケイへ視線を移した。ケイも平気な振りをしているがかなり消耗しているのが分かる。ほんの僅かの間逡巡したユエだったが、ケイに何事か耳打ちするとその場を離れていく。ユエからの伝言を受けたケイはリーユンの隣に膝をつくど、パンツと軽くリーユンの頬を叩く。叩かれた左頬を無意識の仕草で押さえたリーユンは、両目を瞬かせて何事かとケイに視線を注いだ。

「ユエが魔術壁を破壊します。呆けている暇はありませんよ」

澄んだ翠の瞳に見つめられて多少気持ちが落ち着いたらしい。リーユンはケイにすっかり頷き返し、勢いよく立ち上がってユエの姿を捜す。ユエは何処に仕舞い込んでいたのか、ゆったりとした衣服のいたる所から魔導器の部品を取り出しては組み立てていた。パイプの様な筒状の棒を三本繋げて長い一本の棒を作り、曲線を描く板を

幾つも取り付け、複雑に絡み合うコードを先に組み立てた棒や板に設置された接栓座に差し込んで、大小様々な魔石を手際よく嵌めていく。

「よし」

最後の魔石をカチリと嵌め込んで固定し、ユエが魔術壁を振り仰ぐ。完成した魔導器は右腕から右肩、胸の辺りまでを覆うような作りになっていた。ユエはヘッドギアのような形状をした頭部パーツに手を伸ばし、グラスを眼前に引き下げると、本体とコードで接続されたグローブを右手に装着する。グローブにも台座が組み込まれ、磨き込まれた半球状の小さな魔石が幾つも輝いていた。それなりに重量がありそうな魔導器を軽く揺すり上げて改めて担ぎ直し、ユエは最終的な接続具合を確認する。組み上げられた魔導器は肩パーツや頭部パーツを除けば、全長およそ二三センチ、直径二センチ程の円筒形をしていた。

あからさまに嫌な予感がする。

ユエは嬉しそうに魔導器の滑らかな表面をポンポンと叩くと、こちらを不安そうに窺うリーユンを安心させるかの如く笑いかけた。

「まだ一度も実験した事が無い試作品なんだけど、相手に不足は無いねえ」

不安を煽る様な台詞を言うや否や、ユエは魔導器の筒先を魔術壁へ向けると、右手の平のグローブをギュッと鳴らし、指先を魔石へ触れさせる。石の輝きが増し、魔力が注ぎ込まれていく様子が分かる。本体の表面に光が走り、取り付けられた魔石が順に点灯して行き、魔導器が作動する時に発するキーンという独特の高い音が砂浜に響き始めた。

「消し飛ばええええっ!!」

「!!!!!!?」

思わずユエの行動に見入っていたリーユンだったが、楽しそうでありながら酷く物騒なユエの台詞で我に返り、慌ててケイとタキをそれぞれの腕に抱える。魔力を両足に込めて脚力を増強し、強く砂を

蹴ってその場を飛び退いた。円筒形の魔導器から放射された青白い光線は魔術壁にぶつかると激しいスパークを発生させる。黒く淀んだ魔術壁の表面を眩い光が錯綜し、半球を描く曲面には徐々に罅が走り出す。ユエが更に魔力を注げば放射光は勢いを増し、壁を打ち破り、魔術壁は粉々に砕けて派手な音を立て、崩壊した。ユエは魔導器の操作を止め、魔術壁が散っていく様子を満足そうに眺めながら頷く。

「やっぱり俺は天才だなあ」

などと自画自賛に耽っていた最中、魔導器のコードが数本バシツと音を立ててコネクタ部分から弾け、黒煙が四、五本細く立ち上った。響いていた魔導器の作動音も低く鈍くなり、やがて魔導器は完全に沈黙を保つ。

「……………」

六対の視線がユエに突き刺さる。

六対。

その違和感に最初に気が付いたのはリーユンだった。魔術壁破壊の様子を見守っていたリーユンとタキ、ケイの三人。それから突然の出来事に戦闘を中断して驚愕の表情を浮かべているジユンとルウの二人。そして、岩陰に隠れるようにしてこちらの様子を窺っていた人物が一人。

リーユンがそちらに向かって駆け出そうとするよりも早く、ルウが行動を起こした。瞬時にして小柄な体を覆う白紫の術式が輝く。

「ライトニングボルト！」

前方へ突き出されたルウの右手から、勢いよく紫電が放たれた。闇を切り裂くように水平に光が突き進む先には、黒煙を噴き上げる魔導器を取り外そうと四苦八苦しているユエの姿がある。まさかルウがそういった行動に出るとは予想していなかったリーユン達だ。驚きのあまり咄嗟に身体が動かず、慌てて防御の魔術を創造し始めるものの、ルウの魔術を防ぐのには到底間に合わない。

「ユエ……！」

タキの悲鳴に近い声が響くと同時、ユエの身体を包み込むように足下の砂が盛り上がる。砂の壁は雷撃を全て受け止め、放電してしまつた後に静かに崩れ去つた。防御の魔術を發動したのはジユンだ。魔術を阻止されたルウは再び標的をジユンに定めると、猛然と駆けだして鋭い右蹴りを放つ。

「…っ、リーユン！ アイツを捕まえる！！」

ルウの攻撃を後方へ飛んでかわしながら、ジユンが叫ぶ。その意図を理解しかねるリーユンをタキが厳しい声音で促した。

「行くわよ、リーユン」

普段の調子を取り戻したタキは踵を返し、岩場から逃げ出した人物を慌てて追い掛ける。リーユンも未だ困惑の表情を浮かべながらもタキの後に続いて海岸を走る。夜の闇に二人の姿が飲まれていくのを横目で見送りながら、ジユンは魔術で鳶を出現させてルウの動きを止めようとする。しかし変身状態トランスのルウは動きが素早く、地面から幾本も伸びて絡め取るうと追い縋る鳶を、四肢と羽を使って容易く避けていた。飛びかかる鳶の群を潜り抜け、とうとうルウがジユンに肉薄する。ジユンの眼前に飛び込む鮮やかな水色の色彩と冷たい金の双眸。咄嗟に両腕を交差させて防御姿勢を取るジユンを、ルウは口端を吊り上げて嗤つた。黄金色の瞳が楽しげに細められる。次の瞬間、強烈な右ストレートを喰らつて吹き飛んだジユンは、砂浜を二転三転してから何とか立ち上がった。

「こつちは手加減してるつてのに、こんのクソガキが」

ルウの拳を有る程度いなした筈なのに、攻撃を受け止めた両腕は痺れて感覚が薄い。受け身でも殺しきれなかったダメージが忌々しく、ジユンは顔を顰めて毒突く。

「大丈夫ですか？」

柔らかな声に気付いて視線を動かせば、ジユンの前方に彼を庇うようにして立つケイの姿が見えた。頼りない月光の中でも其れと分かる程の蒼白な顔。ジユンは感覚の戻りつつある右腕でケイを押し退け、

「あんたよりはよっぽど大丈夫だ、下がってる。……おい、そこのおっさん」

後半、やや張り上げた声で、何とか魔導器を外し終えたユエに呼び掛ける。

「おっさんって、傷付くなあ。何か期待してるようだから言っておくけど、俺が魔導器無しで何か出来るわけも無いでしょうが」

おっさん呼ばわりされたユエは案の定嫌そうな表情を浮かべ、筒状の魔導器を杖の様に右手で支えてどこか偉そうに長身を反らす。開き直ったようなユエの物言いに、「はあ？」とジユンが説明を求めるとも無理のない話だった。

「彼は、魔術を扱えません」

ジユンの疑問にサラリと答えたのはルウを牽制しているケイだ。ジユンは心底驚いたらしく、一瞬警戒も忘れてマジマジとユエを眺める。

「嘘だろお」

ドール教室のユエ＝ルイエンと言えば、問題児としては言わずもがなではあるが魔導師としてもそれなりに名が知られている。隔離教室に所属してはいても赤の色冠は伊達ではなく、ウィズムントが誇る稀代の黒魔導師フェイ＝マオシーとの共同開発の話が持ち上がっているのは有名な話だった。魔石と呼ばれる魔力の伝導率が良い石に術式を組み込み、石に魔力を流すだけで知識のない者でも魔術を扱えるようにと考えられたのが魔導器だ。そんな魔導器の開発には少なくとも魔術の知識、扱い方は備えていなければならないべき物である。

「呆けている暇はありませんよ」

放心したようなジユンにケイが鋭く声を掛けた。ジユンは切迫した声に促され、慌ててルウに向き直る。ルウはその小柄な身体の何処に魔力を蓄えているのか、眩い紫の魔力をオーラの様に全身に纏い、上位魔術の発動準備を始めたところだった。魔力は徐々に濃度を増し、細く縞られた魔力がルウの足元から驚異的なスピードで術式を描き上げていく。

「まずいな」

ジューンはルウの魔術を止める為、急いでストーンブラストの魔術を発動させた。土属性の基礎的な魔術は呼吸と等しい気安さで編み上げられ、ジューンの周囲には瞬く間に石の飛礫が出現した。小さな石飛礫は見えない力に押し出され、猛スピードでルウに襲いかかる。飛礫が空を裂く音に続いて鳴り響くのはスパーク音。ルウが纏う濃密な魔力は石飛礫を物ともせず完成に近づいていく。

術者を怯ませる以外の方法で構築中の魔術を阻止するのは難しい。ジューンは舌打ちしたい心持ちでルウを睨み、隣に立つケイへ尋ねる。「どうすんだよ、アレ」

「手加減無用でいきます」

間髪を入れずに応じたケイの姿が陽炎の様にゆらりと消えたかと思うと、瞬きする程度のほんの一瞬の後にはルウの目の前にまで距離を詰めていた。ケイの眼前には地面に突っ伏して伸びているルウの姿がある。

「何だ、何が起こったんだ？」

いつの間にも移動して来たのか、ユエが緊張感のないのんびりとした声でジューンの背後から問いを投げた。頭上から聞こえる声に不機嫌になりつつも、ジューンは先ほど目撃した事柄を見たままに伝える。

「あれは、魔力で脚力の増強をしたな。一瞬の内に間合いを詰めて鳩尾に蹴りを一発。身体がくの字になった所で顎を蹴り上げて、返す動きで側頭部に踵を落としてた。……あの女、見かけによらずえげつねーのな」

手加減無用と宣言してはいたが、仮にもクラスメート相手に対してあの情け容赦の無い猛攻はどうなのか。いかにもたおやかで儂げなエルフ族然とした容姿からはかけ離れた行動には、隔離教室生徒のハチャメチャ振りを知っているジューンをもってしても度肝を抜かれた感覚が拭えない。

「格闘技でケイに勝てる子はそうそう居ないだろうねえ」

再び頭上から届くユエの声に、ジューンは眉間に皺を寄せた。挑発と

も揶揄ともつかない楽しげなユエの声はジユンの神経を逆撫でする。わざとそんな音を出しているのだと気付かせる程度に演技的なのも気に食わないし、ユエの音が頭上から降ってくるのも腹立たしい。「すぐに追い抜いてやる」

そう吐き捨てたジユンのセリフははたしてどちらに対してのものか。ジユンは衣服に付いた砂を払い落して踵を返す。

「リーユンを待たなくてもいいのかい？」

「そのチビを鎖にでも繋いでおけ、とだけ伝えてくれ」

振り返らずに返されたジユンの無然とした声に、ユエは思わず嘔き出した。

「子守をさせて悪かったね。伝言はちゃんと伝えておくよ」

砂を踏んで歩くジユンの足音が遠ざかるのに、新たな足音が重なる。ジユンと入れ違いに砂浜に姿を現したのはレイルズ「フェリオット」ウオフリーだ。必死に走って来たのだろう、ケイとルウの元へ辿り着いた時には汗だくで息も切れ切れになっていた。

「だ……大丈夫、かい……？」

ウオフリーは乱れた呼吸の合間にケイへ気遣う言葉を掛け、「大丈夫です」と告げるケイへ小さく笑みを返してから、深く呼吸を繰り返して息を落ち着けると、倒れたままのルウを抱き起こす。ジユンは出来るだけルウを傷付けないように手加減していたが流石に全く傷を負わせないという事は不可能だったらしく、ルウの衣服は所々破れ、肌には血が滲んでいた。ウオフリーは懐からハンカチを取り出して、そつとルウの傷口を拭う。砂を払い、血を拭き取る動作の間、ウオフリーは今一度ケイを見上げて心配そうに問い掛けた。

「君も相当参っている様に見えるけど、本当に大丈夫？」

ケイは今度は頷くのみで、直ぐに視線をユエへ向ける。心配そうな眼差しでケイを見ていたユエだったが、ケイの紡ぐ次の言葉を聞いて険しい表情に変わる。

「ユエ、先ほどの岩場の人影は、やはりロン「セファン」でしょうか」
嫌な名前を聞いたと言わんばかりにユエは片方の眉を跳ね上げ、思

案気な面持ちでタキとリーユンが消えた方角を見やる。ウォフリーはそんな二人の遣り取りに怪訝さを隠さず首を傾がせ、

「セファン教師が、どうかしたんですか？」

と、問い掛けるものの、ケイとユエはその質問には答えず、未だ意識を失ったまま動かないルウに視線を落とした。

第三話 「秘薬」 第五幕

「ロン＝セファン教師がなぜ？」

リーユンは人影を見失わないように前を見ながら、隣を並走する夕キへ問い掛けた。

「なぜ？ そんなの決まってるじゃない。不老不死が欲しいからよ」
乱れる呼吸の間に夕キが吐き捨てる。

「秘薬……」

リーユンは自らが口にしたその響きの恐ろしさに、胸の内を冷たい手で撫でられた様な寒気を感じて小さく身を震わせる。

今よりも少し前の時代。小竜族は不老不死の秘薬の材料として狩られ、その数を激減させた事があった。しかしそれはもう五十年以上も昔の話である。今現在は不老不死の秘薬など迷信だと知れ渡り、小竜族を狩る者はいないはずだ。

しかし、夕キはリーユンの反論をきつい口調で一蹴した。

「本当にそう思ってるの？ 世の中には禁忌を破る人間なんて大勢いるわ」

鋭い視線を前方の逃亡者へ据えながら、夕キは続ける。

「カイリ先生には口止めされてたけど、セファンは以前からしつこくルウを狙っていたの。いい加減頭に来たから力一杯のしてやったのに、まだ懲りてないみたいね。やっぱりあの時止めを刺しておくんだっただわ」

不意に、リーユンは三の月に起こった格闘訓練道場半壊事件を思い出した。あの時暴走した夕キとルウを止めようとして怪我をした教師が居たが、その教師の名前はロン＝セファンではなかったか？

「あの格闘訓練道場半壊事件って、もしかして……？」
リーユンの言葉に夕キが頷く。

「そうよ。ルウを狙って卑怯な手を使って来たから、反撃したのよ。本当なら半年は立ち上がれないくらいの重傷だったのに、カイリ先

生が院長に頼み込んで治癒の術を使ってもらったの。そのおかげで一週間なんて短い時間で仕事に復帰できたのに、まったく、恩知らずにも程があるわ」

リーユンは今の会話で一つ疑問が解けたと思った。隔離教室の絶対に守らなければならぬルールの中に「騒動を起こさない」という項目が無いのは、身を守る際の魔術の行使を制限しない為なのだ。しかしそこでまた新たな疑問が浮かぶ。何故真実を公表しないのか。迷信に踊らされて私欲の為に生徒を襲った人物を治療までして庇うのは何故か。再犯の可能性は十分に予見出来る筈だ。

リーユンの疑問に気付いているのかいないのか、タキは静かにリーユンの横顔を眺めていたが、唐突に立ち止まると瞬時に紅の術式を纏い、勢いよく前方へ火球の魔術を放った。静かな港の倉庫街に炎の燃え盛る音が響き、一刹那周囲を赤く染め上げた火の玉は石畳を黒く焦がして弾けて消える。人影は足を止め、足元で炸裂した魔術を一度眺めてから、背後をゆっくりと振り返った。逃亡者と追跡者達は、視線の先に互いに見知った姿を確かめる。

「鬼ごっこは終わりよ、セファン」

タキの鋭く睨みつける眼差しを受けても、ロンセファンは焦った素振りすら見せない。日に焼けない青白い顔を嗤いの形に歪め、呆れの色を眼差しに乘せてタキとリーユンに対峙する。

「やれやれ。また私の邪魔をするのですか」

セファンの小馬鹿にしたような口調に、案の定タキが食ってかかる。「当たり前でしょ！ そつちこそ、いい加減に諦めなさいよ！」

タキの全身から赤い魔力がゆらりと陽炎の様に立ち上った。リーユンはタキの脇に控え、二人の様子を静かに観察する。

「今日という今日は、引導を渡してあげるわ！！」

言うなり駆け出したタキに続いて、リーユンもセファンへ向かって走った。タキの編む術式を追う様にリーユンも同じ式を構築し、二人ほぼ同時にファイアーボールを放つ。セファンは薄い笑いを崩す事無くアクアヴェールを発動させると、襲い来る二つの火球を水の

膜で防ぎ、難なく消滅させる。炎が消えるのを確認すると直ぐに魔術を解除して攻撃の為の術式構成に移った。氷の属性を帯びた魔力が青白く輝く文字列となり、空間を書き換えていく。セファンの編み上げる術を見て取ったリーユンは駆ける足を止め、炎の壁を作るべく術式を編み始める。タキは全身に魔力を満たしながら、突進を止める気配はない。

「アイスニードル」

術式を描き終えたセファンの静かな言葉に呼応して、突如石畳から生えた無数の棘がタキを押し包み、貫こうと襲いかかる。

「ファイアーウォール！」

鋭い氷の切っ先がタキに届く前、リーユンの放った炎の壁が氷の棘を包み込む。高温の炎は瞬時に氷を溶かして水へ変え、炎の壁もまた役目を終えて空気に溶けるように消え失せた。氷と炎とが目まぐるしく変わる視界の中、タキの靴底が溶けた水を跳ね上げ、力強く地面を蹴りつけてセファンに肉薄する。

「……セファン！」

タキの右手に魔力が籠もる。右拳にありったけの力を集中し、勢い良く振り下ろす僅かな時間の間に、セファンは次の魔術を完成させる。タキの眼前に右手の平を広げ、セファンは勝ち誇ったかの様に口端を持ち上げた。

「セイントアロー」

タキの眼前でセファンの掌中に光が収束する。光の球が育ち、レーザーの様に打ち出される様子がスローモーションの様にタキの目に映る。反射的に逃げようと身体が動くよりも先に、光の矢がタキを貫くだろう事はタキ自身良く分かっていた。死を間近に感じて覚える恐怖。本能的な部分で両腕を交差させて防御の態勢を取るが、零距離に近い至近距離で頭部にセイントアローを食らえば無事では済まない。間違いない、セファンは何の躊躇いも無しにタキを殺すつもりだった。

タキはギョツときつく目を瞑って光の矢が放たれる瞬間を待った

が、訪れたのは身を貫く痛みではなく、激しいスパークと衝撃波だった。後方に飛ばされたタキを、リーユンがしっかりと受け止める。「マジックシールドか……」

セファンは傷を負って血に濡れた右手の平を眺めながら呟いた。「なるほど……。リーユン＝ルルディヴァイサー。なかなか楽しませてくれる」

痛みを感じていないかのように、セファンの表情は変わらず笑みを形作っている。リーユンは視線をセファンから外さないまま、腕の中のタキに囁き掛けた。

「タキ、立てる？」

タキは血の気の引いた白い顔をしていたが、唇を引き結んで頷くと、リーユンに預けていた体重を自分の両足で支える。

「平気よ」

短い返答はタキの強がりである事は明白だった。それでもタキを守りながらリーユン一人でどうにかできる相手ではないので、今は気付かない振りをするしかない。リーユンはタキより一步セファンに近い位置で構え、重心を落として身体中に魔力を巡らせる。セファンはそんな臨戦態勢のリーユンを観察しながらニヤツと笑った。

「私を見逃す気はないか」

リーユンはセファンの一挙手一投足に注視しながら、澱みのない声で言い放つ。

「大人しく投降してください」

「残念。交渉は決裂のようだ」

セファンは答えると同時に術式を編み始めた。冷たく蒼白い輝きを放つ式が宙に浮かび上がる。複雑で緻密なその文字列はリーユンにも見覚えがあった。直ぐさまリーユンも術式を展開する。全身に満たした魔力を細く縊り上げ、空中に文字を描き出す。薄蒼と淡い橙の光が周囲を染め上げる。

先に術式を完成させたのはセファンだ。

「アイスコフィン！」

セファンが魔術を発動させる為の下位古代語ローエンシェントを唱えると、リーユンの足元からビシビシと音を立てながら氷が這い上がってくる。しかしリーユンは落ち着いた様子で術式を編み続けた。両者共高度な魔術を展開していて、タキの技術では術への介入が難しい。下手に手を出せば魔術の暴走を引き起こしてしまうだろう。足元から次第に凍っていくリーユンを前にして、それでも短気なタキが手を出さずに済んだのは、リーユンが首元まで凍らされながらもタキに向けて大丈夫だと笑みを見せたからだ。

リーユンは大丈夫だ。

そう理解出来れば思考も回るようになる。リーユンが構築していた魔術、あれは短時間ながらも物質を其のまま保存出来るという新しく生み出されたばかりの試作的魔術だ。リーユンが昼頃読んでいた魔術書が、確かそんな類のものだった様に覚えている。

「シャウレインドツテイの再来と言う割には、大した事はないな」セファンの笑い声が倉庫街に響く。魔術の発動に間に合わず、頭の先まで氷漬けになったリーユンを笑いながら、ゆっくりと距離を詰めていく。氷の棺で身の内まで凍ったリーユンを完全に破壊しようと、セファンは拳に魔力を込める。

「リーユンから離れなさいよ！ ファイアーボール！！」

タキの手の平から放たれた火球は、あっさりとセファンにかわされた。それでもタキは次々とセファンへ向けて火球を撃ち出す。炎の球は周囲を赤々と照らし、石畳を焦がし、熱風を作る。しかし怒りに任せて撃っているのだろうタキの攻撃は狙いも甘く、セファンは呆れた様子でタキを眺め、溜息を吐いた。

「何度やっても無駄だ。君こそいい加減に諦めたらどうだ。大人しくしているのなら、リーユン共々ひと思いに殺してやるわ」

「誰があんたなんか殺されるもんですか！」

休む事無くファイアーボールを撃ち続けるタキに、セファンが舌打ちする。あまり騒ぎすぎると人が来てしまう。セファンは幾度目かの火球をかわすと、強力な魔術で一気に二人とも片付けてしまおう

と術式を編み上げる。コントロールの甘いファイアーボール程度ならかわしながらでも術を展開出来るだろうと思つての行動だったが、セファンが術の構築を始めるのを待っていたかのように、タキもまた別の式を展開し始めた。複雑な魔術でない分、タキの方が発動は早い。

「ファイアーランス！」

伸ばされたタキの右腕に絡み付いた炎は、螺旋を描いて二本の槍を形成する。燃え盛る火槍が解き放たれ、空を裂きながらセファンへ向けて突き進む。

「小賢しい」

セファンは吐き捨てると構築途中の術式を書き換え、素早くアクアヴェールを発動させた。身を守る為の水の膜は二本の槍を飲み込み、炎の勢いを殺し、消火していく。火槍が中程まで消えた所で、リーユンの声が響いた。

「アイスニードル！」

セファンを守る為の水の膜が凍り付き、今度は術者自身を攻撃する為に鋭い棘を幾本も伸ばして襲いかかる。セファンは素早く後方に飛び退くが、至近からの不意打ちは流石に避け切れず、両の腕に傷を負った。紺の衣服に血が滲み、ジワジワと黒く染まっていく。熱された空気の中、焦げた匂いに混ざる鉄錆のような生々しい血の匂い。リーユンは刹那息を止め、タキと並んでセファンを窺いながらゆっくりと息を吐き出した。一人と二人は十分に距離を取り、向かい合う。

「そうか。あのファイアーボールは氷を溶かす為だったか……」

セファンは不健康な色の顔を僅かに歪め、タキとリーユンを睨み付ける。セファンが何か行動を起こす前に、リーユンは容赦なく魔術を浴びせかけた。それに合わせるようにタキも魔術を発動させる。

「ウインドカッター」

「ファイアーランス！」

真空の刃が炎を孕んでセファンに襲い掛かる。火槍は風に煽られ、

更に勢いを増して燃え盛りながら目標に向かう。セファンは痛みを堪えて意識を集中させ、魔術を構築しながら鎌鼬を数個かわすと、アイスブレイズの魔術を発動させた。地面から大きな鎌状の氷の刃が幾本も伸び上がり、鎌鼬と火槍を粉碎していく。

「白の色冠しきかんは、伊達じゃないってわけね……」

立て続けに魔術を放った所為で乱れる呼吸をどうにか落ち着け、タキが忌々しそうに呟く。

「でも、そろそろ打ち止めのはずだよ」

リーユンの言葉通り、セファンはかなり疲労が激しいようで肩を下させて荒い息を吐いていた。リーユンは威嚇の為に殊更魔力を放出させながら、今一度セファンへ降伏を促す。

「もう一度訊きます。投降する気はありますか？」

セファンの返答は術式を編む事で返された。リーユンもありつただけの魔力を込めて上位魔術を創り上げる。セファンが声を張り上げ、魔術を放った。

「ブリザード！」

広げられた両手から氷雪の嵐が巻き起こる。雷が暴風に乗る、猛烈なスピードでリーユンとタキに襲い掛かった。身を切るような冷たい風と、実際に皮膚を切り裂く雷の中で、リーユンはタキを腕の中に庇いながら魔術を完成させる。

「イグニション！」

氷嵐に負け無い様に、半ば叫ぶ様に声を張り上げ、リーユンが右腕で周囲を薙ぎ払うと、一瞬倉庫街一帯が明るく照らし出された。雷の一粒一粒が発火して炎に包まれ、瞬時に蒸発したのだ。

「……驚いた。まさか赤魔術師レッドウイザード如きがこれ程高度な魔術を扱えるとは……」

セファンは笑みを消し、真摯な眼差しでリーユンを見る。

「リーユン＝ルルデイヴァイサー。私と一緒に来る気はないか」

唐突に雰囲気が変わったセファンと告げられるその言葉に、リーユンは怪訝な表情を浮かべた。そう言われて「はい行きます」と大人

しくついて行くとも思っているのだろうか。リーユンの心情に答える様に、セファンは言葉を続ける。

「リーユン。君はこの世界をどう思う。ウィズムントが平和な国だという事は私も認めるが、一步外へ出ればどうだ。ローズル大陸出身の君なら分かるだろう。世界は争いに満ちている。罪のない人々が間近に存在する死に怯えて暮らしている。私の仕える御方はその争いを無くそうとしているのだ。だがそれには多くの時間と、優秀な人材が必要だ」

セファンはそこで一度言葉を区切り、ジツとリーユンの青い双眸を見つめながら先程と同じ意味合いの言葉を口にする。

「私と来なさい、リーユン」

その有無を言わせぬ強い語調と迫力に、リーユンは恐怖を覚えて一步後退った。この人は危険だ。脳が警告を発している。けれど、セファンの手を取れと囁く声も聞こえるのだ。彼の言葉に嘘は無い。平和なウィズムントで暮らしていても、時々悪夢を見て飛び起きる事がある。決して忘れる事の出来ない幼い日の情景。それは今まさにこの瞬間も、昔と変わらず繰り返り広げられているのだろう。セファンはそれを無くそうと言うのだ。

「綺麗事ばかり言ってるんじゃないわよ！ あんた達だって結局やることは一緒でしょ！！」

セファンの言い分に憤慨した様子でタキが吼える。

「不老不死を得る為にルウを、多くの小竜族を犠牲にして、争いを起こす国を力でねじ伏せる。それで永遠にセフィラを支配するの？

他のどの国よりも、あんた達の方がよっぽど性質が悪いわよ！」

「出しゃばるな、小娘」

セファンは傷付いた左手を持ち上げ、タキへ向けて魔術を発動させた。

「ウォーターズウォーム」

青い術式が発光し、中空に巨大な水の塊が出現すると同時、それらはタキ目掛けて襲い掛かる。あっという間にタキの身は水の中に捕

らわれ、水圧が容赦なくその細い身体を締め上げる。肺が圧迫され、堪らずタキの口から空気が漏れた。

「タキ！」

リーユンが呼ぶ声を遠くに聞きながら、タキは身体の力が抜けていくのを感じていた。息が苦しい。耳の奥がガンガンうるさい。手足が言う事を利かない。術を発動させようにも、落ち着いて魔力を練る事すら出来ない有様だった。

「セファン、交渉は決裂です。タキを解放しておとなしく投降してください」

リーユンは一瞬でもセファンの言葉に惑わされた事を恥じる。その所為でタキを危険な目に遭わせてしまった。高度な魔術を使用した疲労はあるものの、今は泣き言を言っている場合ではないと、リーユンは魔力を振り絞ってセファンに対峙する。セファンはリーユンが抗戦すると見て取り、僅かに眼差しを細めて溜息を吐いた。

「残念だ」

セファンに降伏する気が無いらしい事が分かると、リーユンはさすがに魔術を編み上げる。

「ストーンブラスト！」

リーユンの周囲を取り囲むように無数の石飛礫が現れ、次々とセファン目掛けて飛んでいく。セファンはそれを紙一重でかわしながら、次の魔術を発動させる為にタキを拘束していた水の魔術を解除した。生き物の様に蠢いていた大量の水が浮力を失い、盛大な水音を立てて石畳に叩き付けられる。地面に投げ出されたタキは激しく咳き込んではいるものの何とか無事の様だ。タキの様子を横目で確認したリーユンは急いでスネークバインドの魔術を構築する。敷き詰められた石畳を割って、太い蔦がセファンを絡め取ろうと踊り掛かる。だがセファンは迫り来る蔦を避ける素振りも見せず、ただ真つ直ぐにタキの方へと右腕を伸ばした。その意図を理解したリーユンはスネークバインドの標的をセファンからタキへ変え、自らもタキへ向けて駆け出した。セファンの周囲が淡い紫紺に輝き、魔術が完成す

る。

「ライトニングバインド」

セファンの足元から網の目状に雷電が迸る。先のウォーターズウォームによって濡れた地面を紫電が勢い良く走り抜け、タキに迫る。リーユンはタキに駆け寄って濡れたその身体をきつく抱き締めると、鳶で二人の身を包み込む。鳶は幾重にも絡み合い、電流から二人を守る絶縁体の役割を果たす。暫くして雷網が消え去ったのを確認すると、リーユンは鳶を消し、水浸しになった地面に降り立った。其処にはもうセファンの姿は無い。二人は港から遠ざかる小型の船を黙ってみている事しか出来なかった。

「逃がしちゃったね……」

リーユンが申し訳なさそうに小さな声で呟く。タキは視線をもう見えぬ船へ向けたまま首を左右へ振り、珍しく力の無い声で言った。

「私が足手まといになつたからだわ」

タキは視線を足元へ落として唇を噛む。悔しい思いをしているのはリーユンも一緒だった。リーユンは無言でタキの冷えた手を握り、顔を上げて暗い海に臨む。タキもまたリーユンの手を握り返してキツと視線を起こした。セファンがウィズムントの地を踏む事はもう二度と無いだろう。今回はこれで良しとしよう。けれど、もしかまた出会う事があればその時は……。

二人はユエに声を掛けられるまで、船影の消えた水平線を見続けた。

第三話 「秘薬」 第六幕

リーユン「ルルデイヴァイサーとタキ「ヤンフウは、ユエ「ルイエんに連れられて砂浜へと戻ってきた。砂浜ではレイルズ「フェリオット「ウオフリー教師によつてクウ「ラ「ルウの怪我の手当てがされており、その横ではケイが今にも倒れそうな程に青白い顔をして何事か思索していた。

「それじゃあ、戻ろうかねえ」

ユエが場の空気にそぐわない酷くのんびりとした口調で皆に声を掛け、手当ての済んだルウを軽々と抱き上げる。リーユンは具合の悪そうなケイの傍らへ駆け寄り、その身体を支えて歩くのを手伝った。ケイは今度ばかりは大人しく助けられる事にしたようで、黙ってリーユンの肩に手を置いて歩く。タキはその様子を離れた場所から眺めていたが、ふいと視線を逸らして小走りで先を行くユエを追い駆け、ルウを抱えて歩くその足を軽く蹴飛ばした。

「……………」

ユエが無言でタキを見下ろす。タキはぶすつとした不貞腐れた表情でそっぽを向いていた。ユエは多少歩くスピードを落としてタキに歩調を合わせ、ずぶ濡れになったタキの頭部へ向けて問い掛ける。

「先輩にいきなり蹴りを入れるとは、一体全体どういう見だろかね」

「私は疲れてるの。先輩風吹かすならおんぶくらいしなさいよ」

ユエは再び無言でタキを見下ろすが、タキは足元に視線を落としたままユエを見ようともしない。ただ背後の気配を探っているのだから事は傍らにいるユエには見て取れた。背後からは三つの足音が聞こえている。ケイとリーユンとウオフリーだ。ユエは前方に視線を戻すと、溜息混じりにタキに言った。

「俺が荷物抱えてるの、見えてる？」

「そんなちびっこいの、居ても居なくても一緒でしょ」

「あのねえ。お前そんなずぶ濡れで……あーもう、分かったよ」

落ち込みまくっているタキを見るのは非常に珍しい事だったので、ユエは思わずタキの我侭を承諾してしまった。ルウを抱えたままタキに背を向けてしゃがみ込むユエの背中に、タキは遠慮なく覆い被さる。濡れて冷えた身体にユエの暖かな体温が伝わってくる。ユエは片手でルウを、もう片手でタキを器用に支えながら、軽く勢いを付けて立ち上がった。

「よっこらしよっ……うお、重っ……！」

タキはユエの言葉を阻止する為、首に回した腕に力を込める。

「つて、こら、タキ。首絞まつてる、首絞まつてるッ！」

かなり本気で切羽詰ったユエの声に満足したのか、タキは両腕の力を抜いてユエの肩に縋る形に戻す。ユエはわざとらしく溜息を吐いて歩き出した。

そんな二人の遣り取りを背後からついて歩く三人は微笑ましく見ている。

「タキとユエつてすごく仲がいいですね」

リーユンの言葉を聞いて、多少体調がましになっただけらしいケイが穏やかな表情で頷く。

「あの二人は兄妹みたいなものですから」

ケイの台詞に反応したのはウォフリーだった。

「私から見れば君たちは全員仲の良い兄弟みたいに見えるけどね」

「え？」と、リーユンがウォフリーを振り返ると、

「ぎゃあー！」

「いつてえー！」

「あはははははっ！」

と、ルウ、ユエ、タキの声が同時に聞こえ、リーユンは背後に向けた顔を直ぐに正面へ向ける事になった。ルウはユエの腕から放り出されて地面に打ち付けたらしい頭をさすり、ユエは顔面を押さえてしゃがみ込み、タキはユエの背中から降りてそんな二人の様子を見て笑い転げている。

「ど、どうしたの？」

リーユンとケイ、ウオフリーの三人は、ルウ、ユエ、タキに追い付いた所で歩みを止める。リーユンは青い眼を瞬かせて声を掛けると、タキが笑いすぎて零れるらしい涙を拭いながら振り返った。

「ルウが、目が覚めた途端、ユエの顔を思いつき殴り飛ばしたのよ」

「え、まだ操られてるの!？」

リーユンが更に驚愕に目を瞪り、ルウに駆け寄ろうとするのをタキ手を振って止める。

「あは、違う違う。ルウはただ、ユエの顔にびっくりしただけなの……ぷっ」

話している内にその衝撃の瞬間を思い出したのか、タキは堪らず噴き出して、お腹を押さえながら前屈みになって笑い続ける。リーユンは安堵しつつもほんの少しだけ脱力して、痛がる二人を心配そうに見下ろした。

「うう、操られて味方を襲って、拳句の果てに気を失って眠りこけるルウを優しく運んでやってる人間に対する態度か、これが」

ユエが顔を押しさえる指の隙間から恨めしげなくもった声でぶつぶつ呟くのを聞いて、ルウがハッと顔を上げる。それから神妙な顔をして首を右に傾け、すっかり暗くなってしまった空を見上げ、目を閉じて俯き、恐る恐る視線だけをユエへ向ける。どうやら今までの出来事を反芻し、しつかりと思いついたらしい。

「あー……、えーつとー……、……悪かった」

ルウは軽く飛び跳ねるようにして立ち上がり、しゃがみ込んだままのユエに近付いてその肩にぼんと手を置いて謝罪の言葉を紡ぐ。

「でもな、目が覚めていきなりユエの顔がどアップであつたら、誰だつてびびって殴りたくなるって」

「失礼な! 目覚めと共にこの俺様の麗しい顔を拝めるなんて、これ以上ない程の至福の一時じゃないか」

冗談なのか本気なのか分からないユエの抗議に、ルウは不服そうな

視線を送って言った。

「えー、マジキモイ」

その一言で更にタキの笑い声が大きくなり、ユエの抗議も益々ヒートアップしそうになったので、リーユンはこれ以上街中で騒ぐのはまずかるうとルウに話し掛ける。

「あ、そうだ、ルウ。あの、えっと……。そう！　これを港の倉庫街で拾ったんだけど」

何とか話題を見つけ出したリーユンは、ローブのポケットに仕舞い込んであった小瓶を取り出した。

「あー！　俺の青い砂！」

ルウはリーユンの手元を指差して叫ぶと、小走りに駆け寄って小瓶を受け取る。小さな両手で大事そうに瓶を握み、目の高さまで持ち上げてじっくりと観察する。

「出来る限り零れた分を拾い集めたんだけど、少し減っちゃったね。ごめんね」

以前見せて貰った時よりも明らかに砂の嵩が減っているのが分かり、リーユンは申し訳なさそうに謝罪の声を掛ける。ルウはと言うと、何故謝られるのか分からないとばかりに驚いて、勢い良く首を横に振った。

「リーユンが謝ることねーよ。セファンの気配に気付かなかった俺が悪いんだ。せっかくジユンが手伝ってくれたのになあ」

「え？　ジユンが？」

予想外の言葉を聞いて、リーユンが目を丸くする。

「そうなんだよ」

リーユンの声に肯定を返し、ルウが楽しそうに話し始める。

「あいつさー、イイ奴だよなあ。おもしろーし。最初はもっとお堅いやな奴だと思ってたけど、話してみたら全然イメージ違うのな」
そう言っつてルウはけらけらと笑い出す。リーユンはルウとジユンが仲良くなっている事に純粹に驚いたが、同時に嬉しく思った。

「そっか、ジユンが……」

自分にとって大切な人達が仲良くしてくれるのは、素直に嬉しいものだ。リーユンは自然と浮かぶ笑みに頬を緩め、ルウの頭を撫でた。そんなリーユンに近付いて、顔面パンチから立ち直ったユエがそつと耳打ちする。

「そのジュンからの伝言なんだけど」

笑いを含んだ声音で告げられた内容に、リーユンは思わず噴き出してしまった。人にはそうやって言うくせに、自分は親切にも砂拾いまで手伝っているのだから、ジュンは本当に良い奴だとリーユンは改めて思う。

「今度は僕も砂拾いを手伝うよ。ジュンも呼んで三人でやればすぐ瓶いっぱいになるよ」

リーユンの言葉に、すっかり調子を取り戻したルウが飛び上がって喜んだ。

「っしや、これで白竜祭までに瓶十個達成できるぜ！」

どうやらルウは今年の夏に故郷で開催される五十年に一度の大祭、白竜の飛来を祝う祭に参加する気らしい。

「俺が行くまで浮遊島が無くならないように、白竜に頼んで青い砂を持っていつてもらうんだ」

「なにそれ、その為に砂を集めてたの？」

呆れた口調でタキが言う。続いて、ユエとケイが順に発言した。

「まあ、ルウらしくていいんじゃない？」

「そうですね。いつか、浮遊島まで行けると良いですね」

ルウはグツと右拳を握り締めて力強く頷く。

「おうよ。浮遊島行けたら、空から手え振ってやるな」

見えるわけないでしょと言うタキの突っ込みを無視し、ルウは元気良くウイズムント魔術学院へ向けて駆け出す。途中、足を止めずに器用に振り返って言った。

「リーユン！ 明日さっそく三人で砂集めしよーぜ！」

リーユンは笑顔で頷いて、再びケイに手を貸しながら歩き出す。賑やかに遠ざかる六人を物陰から眺めながら、カイリッドールが背後

に居る人物へ向けて声を掛ける。

「だ、そうだ」

カイリと同様、六人の様子を伺っていたジユン。エンシエンは憮然とした表情と口調で溜息を吐いた。

「勝手に決めやがって」

悪態を吐いてはいてもまんざらでも無い様に見えるのは気のせいか、カイリは楽しそうにジユンの言葉を聞く。そんなカイリの笑う気配を察知したらしいジユンが、不機嫌を隠さずに問い詰めるようにカイリの眼前に指を突きつけ、

「それより、あんた。いつからそうやって見てたんだよ」

と、低く凄みを利かせた声を出す。カイリはゆっくりとジユンを振り返り、考える振りをしてから肩を竦めて言った。

「ルウが街灯に登りだしたあたりだな」

「見てたんならあんたが止めるよ！」

ジユンは小声で叫ぶという器用な事をやってのけながら、なおもカイリに詰め寄る。

「あんたがあの時あのチビを止めてたら、俺が苦勞する事なんか無かつたんじゃねえか！」

カイリはジユンから視線を外し、飄々とした態度のまましれっと呟く。

「そんな事したら俺が苦勞するじゃないか」

「うつわ、むかつく」

カイリと話せば話す程ジユンの苛立ちが募る様で、「それでも担任か」と騒ぐジユンを「まあまあ」とカイリが宥める。

「そのおかげで今度リーユンとデート出来るんだから、良いじゃないか」

「デ……って、あんたなあ！」

ジユンはカイリのアまりな台詞に言い返そうと口をパクパク動かすが、何を言っても無駄な気がして全てを大きな溜息の塊に変えて吐き出した。しかし、直ぐにキツと視線を上げてカイリを睨み付ける。

「あんたの生徒は多少は認めてやってもいいけどな、あんたの事だけは絶対に認めねえ」

絶対に、の部分に目一杯の力を込めてカイリに言葉を投げつけると、ジューンはさっさと魔術学院へ向けて歩き始めた。一人取り残されたカイリは建物の壁に背を預け、星が瞬く夜空を仰ぎ見る。

「嫌われちゃった。……くすん」

「やかましい！」

カイリは即座に返って来たジューンの怒声に首を竦め、こちらを睨み付けるジューンに対してにこやかに手を振って見せた。ジューンは今度こそ本当に呆れ果てたらしく、もう振り返る事無く足早に進んでいく。その後姿が見えなくなるまで見送って、カイリはおもむろに懐から紙とペンを取り出した。真新しいページに教の日付と生徒の名前を書き込むと、それぞれの名前の横に「+1」と記す。それから何かを思い出したように、ルウの所だけもう一つ「+1」を付け足す。ページの下部に補足として「夕飯遅刻」「当番さぼり」と記入し、満足そうにメモを懐に仕舞い込む。

学院に向けてのんびりと歩き出しながら、カイリは小さく呟いた。「ジューン」エンシエン。やっぱりうちのクラスに欲しいな。あいつが居ると俺は更に楽だろうなあ。……もう一度メムに掛け合ってみるか」

その日、夜の街にジューンのくしゃみが何度も響き渡ったらしい。

第三話 「秘薬」 第六幕（後書き）

第三話「秘薬」はこれにて完結です。お付き合いくださいましてありがとうございます。

引き続き、第四話をお楽しみください。

番外編 「魔女の憂鬱」 (前書き)

第三話「秘薬」 読了後にお読みください。

番外編 「魔女の憂鬱」

天気の良い正午。授業が一段落して生徒達を昼食へ送り出し、漸く一人でゆつくりとくつろげる時間がやって来た。学院から貸与されている南棟の自室へ戻り、MEM「シャウレインドッティは座り慣れた椅子に腰を下ろす。

「……ふう」

知らず知らずの内に小さな溜息が零れ、MEMは眉間に皺を寄せて肩に落ちかかる長い髪を鬱陶しそうに背後へ払った。そうして既に体の一部と化している煙管の灰を慣れた手付きで灰皿へ落とし、新しい葉を詰め直して吸口を唇へ運ぶ。常であれば着火の魔術を使用して火種を灯す所だが、MEMは机の上からマッチを取り上げて火を熾した。燃えた燐特有の香りが鼻腔に届く。その香りのお陰か、MEMは先程よりも多少くつろいだ様子で煙草に火を移し、マッチの火を消して灰皿へ放る。

「フウ ……」

吸い込んだ紫煙を吐き出しながら、今度は長く息を吐いた。細い煙がゆつたりと宙を彷徨い、やがて空气中に紛れて薄くなり、消えてゆく。その様子をぼんやり眺めていると、コココンと聞き慣れたりズムで三度扉がノックされた。MEMはもう一度深く煙を体内へ落とし込み、吐き出すと同時に扉の外へ向けて声を掛ける。

「どうぞ。開いている」

ゆつくりと開かれる扉の隙間から姿を現したのは予想通りの人物で、MEMは非常に胡散臭そうな視線を投げかけながら尋ねた。

「昼時に来るなんて珍しい。何の用だ」

室内に踏み入れて後ろ手に扉を閉める人物、すらりとした長身にボサボサの黒髪が相変わらずなカイリ「ドールは、何かを言いたそうにしながらも入口で立ち止まったまま、口を閉ざしてMEMの様子を窺っている。どちらかと言えば傍若無人に分類されるカイリだ。そ

の非常に珍しい様子にメムは嫌な予感をひしひしと感じずには居られない。カイリが言おうとしている事は、はっきり言って聞きたくない類の物だと思われた。自然、メムの態度や表情には警戒の色が浮かぶ。

「用が無いなら帰れ」

「用ならあるぞ」

メムの先制に、カイリは間を置かずに返答した。蒼と黒の眼差しが絡み合う間が暫し。

「……聞きたくないな」

眉間の皺を深めたメムがぼつりと呟くと、カイリが大仰に傷付いた表情を作ってみせる。

「酷い、メム……。俺がこんなに真剣に悩んでいるのに」

「解った、聞いてやるよ。聞いてやるからさっさと話して帰れ」

「何か引つ掛かる言い方だが、まあいい」

カイリは一度咳払いをしてから、気を取り直してメムの座る机へ歩み寄りつつ言葉を続けた。

「実は、どうしても欲しいモノがあるんだ」

「欲しい、もの……？」

カイリの発言に、メムは強い違和感を覚えて怪訝な表情を浮かべる。「欲しい物があるなら買えば良いじゃないか。ああ、金が足りないのなら貸してやるぞ？」

付け足された台詞にがっくりと肩を落としたカイリだったが、直ぐに顔を起して「ちつがーう！」と叫んでから、おもむろにメムへ詰め寄った。

「これはメムにしか頼めないんだ。俺が欲しいモノはメムが持っている」

珍しくカイリが真摯な表情を見せる。至近距離で顔を覗き込まれたメムは、両肩を掴むカイリの手の強さや布越しに伝わる温度、真っ直ぐに向けられる視線にうろたえた。カイリと初めて出会った時も、この黒い瞳に魅せられた。曇りの無い一対の眼がジッとメムを見据

える。MEMは手に提げたままだった煙管を銜える事でカイリから視線を外し、気持ちを落ち着ける為に殊更ゆっくりと煙を吸い込んで吐き出す。

「わ、私が持つている物でカイリが欲しがる物なんて」

無いだろう、と続けるつもりだった唇の動きが止まる。カイリから逸らした視線の先には、部屋の隅に設置されているアンティークの棚。マホガニーの艶のある滑らかな焦げ茶色が視界に入り、MEMの表情が僅かに強張った。

（いや、まさか。私がアレを持つている事は、院長以外は誰も知らない筈だ）

心の内でそう否定の言葉を繰り返すが、MEMには他に思い当たる物が無いのも事実だった。

「だ、駄目だぞ。それだけは絶対に駄目だ」

MEMはカイリの手を振り払って慌てて立ち上がり、小振りな棚を背後へ隠すように立つ。その様子に啞然としたのはカイリだ。

「……何をしているんだ、MEM」

「駄目だ。何処で聞き付けたのかは知らないが、これだけは手放せない」

「いや、良く分からんが、俺の欲しいモノは多分其れじゃない」

「そ、そうか……」

MEMはホツと息を吐くが、ではカイリが欲しい物とは一体何だと言うのだろうか、と疑問が浮かぶ。棚には収まりきらない物なのか。それともMEMの私室には置いていない物なのか。しかし私室に置いていないMEMの私物など殆ど無いに等しい。

MEMが思考を巡らせていると、いつの間にかカイリが眼前に立っていた。心臓が大きく脈打ち、MEMの白い顔が仄かに朱色を帯びる。煙草の苦みを纏うMEMとは違い、石鹸や陽だまりの匂いがするカイリの体臭が、MEMの胸を締め付ける。何処か懐かしいと感じさせる不思議な匂いだ。MEMはカイリに心音が聞こえはしないかとの内心の焦りを押し隠し、煙管を口にする。そうして一呼吸置いて気持ち

を落ち着けると、きつくカイリを睨み付けた。

「いい加減もつたいぶらずに用件を言わないか」

「ん、えーと、だな。MEM。落ち着いて聞いてくれ」

少々言い辛そうに、カイリはそう前置きして用件を口にする。

「ジューン」エンシエンを隔離教室くわいにくれ」

「一度死んで来い」

「うわ、即答された」

間髪を入れずに言葉を返したMEMに、カイリが物凄くショックを受けた様子で言葉を募った。

「なあ、MEM。もうちょつと考えてくれても良いと思うぞ？」

「考える余地などあるものか、この莫迦者」

MEMは自分よりも背の高いカイリを見下すような眼差しで睨み付ける。うろたえてしまった自分が情けないやら恥ずかしいやら腹立たしいやらで、MEMは必要以上に冷たい表情と声とを作つてカイリに宣言した。

「殺されない内に出て行け」

MEMの本気らしい台詞に冷や汗を垂らしながら、カイリは挨拶もそこそこに退散する。音を立てて閉まる扉を睨み、MEMは本日何度目かの溜息を吐いた。

「……本当に、大莫迦者め」

MEMは薄く自嘲の嗤いを浮かべると、背後の棚を振り返る。

「いや、大莫迦者は私かも知れないな」

腰の位置にある引き出しの一つに右手を伸ばし、素早く開錠アンロックの魔法を使つて封印されていた抽斗ひきたしを開けた。中には大小様々な薬品瓶が仕分けされ、整然と並べられている。MEMはそこから親指ほどの大きさの、赤い液体が満たされた小瓶を取り出した。ややとろみのある液体が、MEMの動きに合わせて瓶の中で揺れ動く。

不老不死の秘薬。

それが事実かどうかは分からないが、この小瓶はMEMが黒魔術師の冠位を授かった時に院長から祝いの品として贈られた物だ。本当に

不老不死の秘薬だと信じている訳では無かったが、院長が齡一五〇を越えているのは事実であり、その院長が言うのだから、少なくとも加齢を緩やかにする効果はあるのだろう。肉体的に女は男と比べるとうしても衰えるのが早い。十代の後半がピークで、二十歳を越えると後は衰える一方だ。

(どうせ飲むならば早い方が良い)

そうと分かつては居ても、簡単に飲み干せる物ではなかった。時間に取り残されると言う苦痛は、想像すればする程、筆舌に尽くしがたい恐怖を煽る。

「……カイリ」

MEMの小さな呟きは、誰に聞かれる事も無く空気に溶けて消えて行った。

） 魔女の憂鬱 終 ）

第四話 「海の王」 第一幕（前書き）

ウイズムントの沖で巨大生物が船を襲ったと報告を受け、4人の魔術師と1人の魔導師が船で調査に向かう。一方その頃、陸の上では不穏な動きが……！？

第四話 「海の王」 第一幕

六月も終わりを迎えようとしていたその日、黒の位を冠する四名の人物に呼び出しが掛かった。ウイズムント魔術学院中央区南棟最上階の院長室に最初に姿を見せたのは、黒いローブをきつちりと着こなした神経質そうな男だった。上級教室担当主任、黒魔術師アレックス・デューガスペリは鳥人族らしい細身の身体を真っ直ぐに伸ばして礼儀正しく一礼すると、部屋の主へ声を掛ける。

「緊急招集を掛けるとは一体何事ですか、院長」

広々とした院長室には今し方訪れたアレックスの他に、窓の外を眺める長い黒髪の若い女しか居ない。ウイズムント魔術学院の理事長兼院長であるスウォン・ヤンユイは窓の外に見える学院の風景から視線を外す事無く、入口付近で佇むアレックスへ返事を返す。

「無論、厄介事じゃ」

二十歳そこそこの女が使う物言いとしてはいささか不自然な言葉遣いであるが、彼女が纏う貫録は外見の若さを裏切るには十分であった。アレックスはスウォンの声に混ざる楽しげな響きを咎めようと口を開くが、諫言を音にするよりも先に院長室の扉が新たな客人を迎え入れる為に開かれた。

長い金髪を無造作に結い上げ、身体のラインを見せないややゆつたりとした作りの黒いローブに身を包んだ上級教室担任、黒魔術師メモ・シャウレインドッティ。黒髪を後ろで一つに縛った小柄な青年、ウイズムントの政を取り仕切る執政官の一人、黒魔導師フェイ・マオシー。扉よりも頭一つ分背が高く頑健な体躯の持ち主で、学院西棟責任者でもある巨竜族、黒魔術師ラキ・ア・ジャッキ。

院長室に三人が入り込み、総勢五名となった室内は流石に少々手狭に感じる。スウォンは口元に薄い笑みを浮かべ、青い風も収まりつつある景色から己の呼び出しに応じた四名へ視線を転じた。

「急に呼び立てて済まなんだのう。お前達には今朝起こった事件を

早急に調査して貰いたいのじゃ」

スウォンの言葉に心当たりがあるのか、頷いて応えたのはラキ「ア
「ジャツキだ。」

「ああ、沖で商船が沈んだというあれか」

「そうじゃ。幸い乗員は軽い怪我で済んだらしいのじゃが、目撃者
の証言が気になってのう」

詳しい情報まではまだ知らなかったらしいラキは、スウォンの言葉
に訝る表情を浮かべる。他の三名に至っては商船が沈没したという
事件すら初めて聞いたばかりだ。説明を求めて押し黙る四人をゆっ
くりと見返し、スウォンが告げる。

「乗組員は皆、口を揃えて海竜を見たと言うとるそうじゃ」

「海竜!?!」

並大抵の事では動じない四人も流石に驚いたと見え、異口同音に声
を上げた。

海竜、海蛇、シーサーペント。呼び名は多々あるが、彼等は総じ
て遙か西方、ルドレイド大陸最西端のギムリギムル山脈より更に西
の海に生息する生き物だ。全長は軽く十メートルを超え、全身が美
しく煌めく鱗に覆われている。その優美で壮麗な姿と強大な力とに、
一部の人々は畏怖を込めて「海の王」と呼んだ。

「西方の海を出ない筈の海竜がウイズムントの沖で目撃され、商船
まで襲ったとなるとただ事ではないですね」

アレッシオが薄い唇を引き結び、顎先に手を当てて眉根を寄せる。
ムム、フェイ、ラキの三人も同様に深刻な表情を浮かべた。

「港に船を用意させておる。一度海へ出て、本当に海竜がおるのか
どうか確認してきておくれ」

スウォンは厳かな調子でそう告げた後、「ああそうじゃそうじゃ」
と途端軽い口調となって思い出したように付け加える。

「既に現場に一人黒魔術師を遣っておるから、詳細はそやつから聞
くがいい」

「カイリ「ドールか」

アレツシオが眉間の皺を深めて嫌そうに呟くのを耳にし、他の三人は思わず視線を合わせて苦笑する。

「取り敢えず真偽の確認が最優先だな。急ぐとしよう」

四人は最低限の打ち合わせだけ済ませると、ラキが年長者らしく促す声を合図に院長室を後にする。思いの外大きな事件に四人とも声も無く思案気な様子で廊下を歩いてしたが、フェイがふと視線を起こして「そつだ」と声を上げ、

「持つて行きたい物があるから、一度工房に寄ってから行くね。港で合流するよ」

と、後半はやや怒鳴るのに近い声音で足早に去って行く。小さくなるフェイの背を見送りながら、残る三人も各々支度を済ませるために、学院から宛がわれている部屋へ足を向ける。

「各自準備出来次第港へ向かおう」

「ああ、そつだな」

「解つた」

「ではまた後程」

アレツシオの言葉に二人が頷き、その場は一度解散となる。

四人が準備を整え現場へ向かっている頃、港は既にウィズムント魔術師団、兵士団によって封鎖されており、団員達は漁船や商船を扱う住人の抗議に対しての説明に難儀していた。港に並んだ沢山の船を見れば、抗議の理由は明らかだろう。

「今船を出すのは危険ですから」

「そつは言つても今日中に荷物を届けないと、こつちも信用問題なんでねえ」

「鮮度が命なんだよ、賠償はしてもらえるんだろうな」

「いつになったら船が出せるんだ」

そんな会話を続ける群衆の中に遠慮なく突っ込んでいったのは港に到着したばかりのフェイ＝マオシーだ。

「ごめんね、ちょっと通してね」

漁師や商人達を相手にしていた魔術師が慌てて止めようとするが、

フエイの顔を確認するや否や驚きの声を上げた。

「これは、執政官殿！」

急ぎ敬礼の姿勢を取る魔術師の青年に笑いかけ、フエイは現在の状況を問う。

「教えて欲しいんだけど、今朝沈んだ商船以外に既に出港してしまった船の数と、その人達と連絡が取れるかどうかと、助けられた船員が居る場所と、先に来てる筈の黒魔術師の所在、知ってる限りで良いから答えてくれるかな？」

一字一句聞き洩らさないよう真剣に耳を傾けていた魔術師は、「はいっ」と元氣の良い返事を返してから答える。

「本日未明から現在までで出港した船の数は八、その内五隻とは連絡が取れています。残り三隻に関してはワジェソレス連邦からの商船ですので、連邦を経由して連絡を取っている最中です。船員は病院へ運ばれましたが、比較的軽傷だった船長が一人、第二ポットに残って事情聴取を受けております。黒魔術師殿は……先程までいらっしやいましたが、申し訳ありません、存じ上げません」
要領を得た簡潔かつ分かりやすい説明に満足し、フエイは若い魔術師を労うように微笑みかけた。

「よく分ったよ、ありがとう。船長さんもなるべく早く病院へ連れて行ってあげて。じゃあちょっと通してもらおうね」

「はい！ お疲れ様でございます！」

魔術師のフエイに対する尊敬しきつた眼差しを複雑な気分で見ているのは、アレツシオ、ラキ、メムの三人だ。港を取り囲むように張られたロープを潜り、先に行くフエイの後に続いて群衆から遠ざかりながら、三人は目の前を歩く青年に視線を合わせた。

「あれの正体は知らぬが仏、か」

アレツシオが溜息交じりにそう呟けば、

「頭が良いのは確かなのに否定できません」

と、メムがしみじみとした様子で同意を示し、

「馬鹿と天才は紙一重と言うからな」

と、ラキが豪快に声を立てて笑いながら締め括る。フェイは言いたい放題な三人を振り返り、引き攣った笑顔を浮かべながら言った。

「聞こえてるんだけど？」

「聞こえるように言っているからな」

綺麗に揃った三人の返答には流石にフェイも気分を害したらしく、くるりと前方を向くと足早に歩きだした。こう言う子供っぽい所が一国を担う執政官としてはどうかと思うのだが、フェイ「マオシー個人としては憎めない魅力のひとつであると、彼を知る者は言うだろう。」

四人が第二ポートに近付くと、それに気付いた兵士が隣に居る部下の魔術師に何事か声を掛けてから四人の元へ駆け寄ってきた。

「現場指揮を担当しております、兵士団のコアン「ソムヒです」

実年齢はともかく、見るからに黒位の四人より年上であるうその男は、礼儀正しく敬礼しながら自己紹介を済ませると、早速簡単に状況説明を開始する。

「襲われた商船船長の話によりますと、海竜と思しき生物はここから西北西に三キロメートル程の地点で現れたそうです。海底深くを移動していたのか、気付いた時には接近されていて船尾に噛み付かれ、転覆。その後も何度か商船を襲ったそうですが、船腹が破損し、航行不能となった所で海竜は海底に姿を消しました。時間にしてほんの数分の出来事だったそうです。被害は船一隻と小麦等の穀物凡そ三十五トンの積み荷、乗員の軽傷です。乗員の怪我は船が転覆した際に負ったもので、海竜に直接傷付けられた者はいない、との事です」

コアンの報告を受け、アレッシオ、ラキ、メムの三人は表情を険しくした。フェイだけが落ち着いた微笑を浮かべたまま、コアンに頷いて見せる。

「わかりました。海竜の調査は僕たちが引き継ぎますので、兵士団、魔術師団の皆さんは引き続き港の監視をお願いします。あ、あと、船長さんも病院へ連れて行ってあげてくださいね」

コアンは再度敬礼すると、先程まで待機していた場所へ駆けて行き、魔術師に新たな指示を出した。それを眺めながら、フェイが「さて……」と紡いで三人を振り返る。

「三キロメートルってかなり近いよね。人間を襲わずに船だけ襲ったっていうのもちよつと気になるし……。まあ、取り敢えずカイリと合流しよつか」

フェイが手の平サイズの通信機を取り出して操作し、カイリ「ドール」の端末を呼び出すが、しばらく待っても応答が無い。

「……もしかして、寝てる？」

「いいや、起きてるぞ、つと、うおお？」

唐突に頭上から降ってきた返答に四人が頭上を振り仰ぐと、倉庫の屋根の上からカイリが落下するところだった。どさつと音を立てて地面と激突したカイリを見下ろしながら、アレッシオは舌打ちを鳴らしそうな調子で吐き捨てる。

「何をしているんだ、貴様は」

「いや、ははは……。フェイに貰った新しい通信機の使い方が分からなくて」

立ち上がり、衣服に付いた砂埃を払いながらのカイリの返答に、アレッシオは更に声音に剣呑な響きを乗せて双眸を眇める。

「私が聞いているのはそんな事ではない」

アレッシオはカイリを見据え、続けて何か言葉を発そうとするものの、結局は言葉を飲み込んで溜息を吐いた。

「……まあいい。我々が調査に使う船はどこに泊められているのだ」
厭味の一つでも来るのだろつと構えていたカイリは、若干拍子抜けした様子で眼を瞬かせてから、視線を前方へ送る。

「第四ポートの、あの白いヤツだ。ばあさんの私物らしい」

アレッシオはそれだけ分かれば用はないとばかり、無言で踵を返して船へ歩いて行った。その後を追いかける様にラキも歩き出す、肩越しに視線だけをカイリへ向けてニヤリと笑いかける。

「俺も、何の用で浜辺へ行っていたかは聞かないで置いてやろつ」

アレツシオとラキの後姿を眺め、カイリはがしがしと頭を掻いた。
フェイがその肩を軽く叩く。

「二人とも優しいよね〜」

「優しい、か。まあ、そうかも？」

フェイの言葉が完全には腑に落ちない様子ながらも、カイリも同意を示しつつ船へ向かう。そんな二人の背中を見ながら最後尾に行く
メムは、気付かれないように小さな溜息を吐いた。

「あの三人の所為で私も尋ねられなくなる訳だ」

どうにもむしゃくしゃとした気持ちが落ち着けられず、メムは愛用の煙管に葉を詰め込んで火を点ける。口に馴染んだ煙をゆつくりと吸い込めば、多少は苛立ちも緩和される様な気がする。メムは歩む足取りを少し速め、カイリを追い抜く際にわざと盛大に煙を吐き出した。

「げほっ！」

「ああ、すまん。わざとだ」

まともに煙を吸って咳き込むカイリへ向けてしれっと謝罪を紡ぎ、足を速めたまま先を行こうとするメムに、カイリが涙目になりながら情けない声をあげる。

「めむう〜……」

「気持ち悪い、近付くな」

甘ったれた声音に心底嫌そうな一瞥を投げ、メムはカイリとフェイを置いてさっさと行ってしまった。

「や〜い、嫌われた〜」

フェイはというと、非常に楽しそうな様子でカイリを指差して笑い、メムの後を小走りで追いかける。一人残されたカイリは大きな溜息を吐き出してから苦笑を浮かべ、衣服に残っていた白い浜辺の砂を払い落とし、船に乗るべく皆に続いた。

第四話 「海の王」 第二幕

時間は少し遡る。まだウイズムントの東の空が薄っすらと明るくなり始めたばかりの早朝、港に近い通りではいつもの如く朝市が開かれていた。取れたばかりの新鮮な魚類や甲殻類、貝類などが露店や商店に並べられ、朝の早い時間ではあるものの、通りは仕入れに訪れる人々で賑わいを見せている。

問屋、店主、料理人、主婦といった人々が多く行き交う中であつて、可愛らしい少女と小竜族の少年という組み合わせは自然と人目を引く。それが有名人であるなら尚更だ。人々の注目を浴びながら、しかしそれも常の事なのか、二人は気にも留めずに目的の物を探して道を進んで行く。暫くしてから、可愛らしい少女、タキィヤンフウが口を開いた。

「うーん、無いわね」

それを受け、小竜族の少年、クウィラールウも頷く。

「こつちも、特に面白いモンはねえな」

タキは軽く溜息を吐いて肩を落とす、「しょうがないわね」と呟いた。

「今日こそはマリアン又ちゃん三号を完成させようと思ったのに、材料になるクラゲが手に入らないんじゃないかね」

「え、あのスライムの材料ってクラゲだったのか？」

驚いた様子で声を上げるルウに、タキは非常に得意そうな笑みを浮かべて目を細める。ルウが「しまった」と思つてももう遅い。

「そうよ。クラゲの体液濃度があの質感と艶を出すのに丁度良いの。以前は本物のスライムを素材にしてただけど、鮮度の良い物を手に入れるのが大変だし、加工も面倒だし、手触りもいまいちで可愛くなかつたのよね。だからマリアン又ちゃん一号からはクラゲを使つてるわ」

生き生きと語り出すタキから一歩退きつつ、ルウは「へえ、そーな

んだ」とだけ相槌を打つ。他に反応のしようがないのもあるが、下手に言葉を挟んでタキの饒舌に拍車が掛っては堪らない。魔法生物に関する話題を振ってしまった事をルウが後悔しても後の祭り、覆水盆に返らず。そうこうしている内にも、タキは初代スライム「フランソワちゃん一号」の時代から熱く語り出し始めた。ルウは流石にげんなりし、右から左へ聞き流そうと視線を彷徨わせる。その視線の先、俄かに騒々しくなり始めた人々が何処かを目指して移動しており、ルウの好奇心をこれでもかと刺激した。

「タキ、あれ何だと思う」

勢いに乗ってきた語りを急に遮られ、少々ムツとしながらもルウの指し示す方向へ視線を移す。そうして騒ぎに気付いたタキもまた、楽しげに眼を輝かせた。二人は視線を合わせて頷き合つと、人混みを掻き分け、集団を追って港の方へ走って行く。

辿り着いた港には、たくさんの商船が荷物の積降を行う為に停泊している。大通りに一番近い大型船が並ぶ第一ポート前には既に人だかりが出来ていた。タキとルウは迷わず人垣を掻き分け、騒ぎの中心に顔を覗かせる。

「事故かしら」

タキが眉を顰めつつ呟く。救助船から降ろされた船乗り達を、医者を生業としているらしい魔導師が手当てしていた。

「船が襲われたらしいぞ」

タキの呟きに応えてか、隣に居た男が言う。それを受けて更に隣の男が口を開いた。

「そう言えば、ホイの爺さんが沖で巨大な影を見たとか言ってたな」

「なんだよそれ」

「まさか、モンスターか？」

瞬く間にざわめきが広がり、集まった人々が不安そうに囁き合つ。そんな中、青い顔をした男が二人、慌ただしく駆け足で去って行くのをルウが目撃した。初めは被害に遭った船乗りを心配する知人か何かだと思っただけだが、どうにも様子がおかしい。ルウはいつもそ

うするうちに、今回も自分の直感を信じて行動する事にした。

「タキ、こつち」

周囲の噂話を興味深そうに聞いていたタキの手を引き、無理矢理人混みの中から引つ張り出す。ルウの視線は建物の角を曲がって行く男の姿を見付け、見失ってしまったわなようにと急いで走り出す。

「ちよつ、なんなのよ、一体」

何の説明も無しに引つ張られたタキは、ルウの後をついて行きながらも小声で抗議する。ルウは直ぐに答える事はせず、男達を追って角を曲がる前に一度立ち止まり、建物の影に隠れて通路の先を窺いながら、ようやく手短に先ほど港の人込みで見た出来事を説明した。「怪しいだろ？ だから、あの事故の事、なんか知ってんじゃねえかと思つてな」

「なるほどね。確かに行動が意味深だわ」

タキもルウの頭上から通路の先を覗き込む。二人組の男は余程慌てているのか、足を緩める事なく先を急いでいる。適度な距離が開いたと見てとつたタキとルウは視線で頷き合い、怪しい二人組を見失わないように尾行を開始した。

自分に尾行が付いている何て事には全く気付かずに、二人の男達は砂浜に近い防波堤までやって来る。防波堤の途中、側面に作られた階段を下り、波消しの為に置かれている巨石の数々を越えて行けば、防波堤が自然の岸壁に取って代わる。その岸壁に沿って更に歩くと、波に削られて出来たのだらう洞窟が現れた。多少人の手が加えられているようだが、一目見た限りではそれ程奥行きが無い、誰も不審には思わない程度の自然の物に見える。二人の男達はその穴の中へ消えて行くのを見届けてから、ルウはタキを見上げた。

「よし、洞窟の入り口をふさごう」

「バカ。何が、よし、よ。もうちよつと様子を見るわよ」

タキとルウの二人がそんなやりとりをしている間に、洞窟の中から男達が姿を現した。タキは急いでルウの首根っこを掴み、積み上げられた巨石の影に潜む。洞窟から出てきた男達は先ほどの二人を含

む四人。新しく現れた二人は大きな木箱を大事そうに運んでいる。手ぶらの男の内の一入、立派な口髭を生やした男が通信機に向かつて何やら捲し立てているのが、波の音に混ざってかすかに届いた。「引き取りの期限はとっくに過ぎてんだろうが。いつまで待たせりや気が済むんだ。もう待てねえ。今すぐ取りに来い！ 十分以内に来なけりやブツは海に放棄する！」

そう怒鳴り散らして忌々しそくに通信を切った髭の男に、木箱を抱えた小男が不安そうに声を掛ける。

「奴らにそんな言い方していいんですかい？」

小男の不安を振り払うように、髭の男が憤りの勢いのままに大声で怒鳴り散らす。

「あいつらは俺達を騙したんだぞ！？ 何が積み荷を運ぶだけの簡単な儲け話だ。何が24時間荷物を管理するだけだ。こんなやべえブツだつて知つてりや引き受けねえよ。畜生、小物だと思つて舐めやがつて！」

怒り冷めやらぬといった様子ではあつたが、髭の男は一度深く息を吸い込んでどうにか気を落ち着けたらしい。四人は会話を切り上げ、比較的面積の広い巨石まで移動して木箱を静かに地へ下ろす。見た目よりもかなり重量があるらしく、運び終えた男達は手首をぶらぶらと振つたり、肩を回したりしていた。やばいブツと表現された荷物の中身も非常に気に掛かるが、何か裏のある密輸めいた雰囲気、タキとルウの二人は息を殺して様子を見守る事にする。

数分後、若干退屈を覚え始めていたルウの聴覚が、かすかなモーター音を捉えた。海面を気にするルウに習い、タキもそちらへ視線を向ける。穏やかな波の上に豆粒の様に小さな物影が確認出来た。それが小舟であると視認出来る頃になれば、タキの耳にもモーターの音が届く。髭の男が通信していた相手だろうか。タキとルウは更に身を小さくして岩陰に隠れ、事の成行きを見守る。

魔導モーターで動くタイプの小舟は波消しの岩の一つに接岸し、船と繋いだロープの先に取り付けられた鉤爪状のフックを岩と岩の

隙間に嵌め込んで、船が流されないように固定する。小舟に乗っていたのは二人の小柄な人物だ。砂埃で薄汚れた生成りの布を頭部から首に掛けて巻きつけ、目元だけを覗かせている。ゆったりとした布地の衣服は砂漠の民を彷彿とさせるが、肌の露出が極端に少なくて人種は分からない。顔もはつきりと見え、男女の判別すらも付かなかつた。小柄な怪しい二人組は身軽な身のこなしで巨岩を渡り、四人の男達へ近付くと、手にしていた布袋を無造作に突き出した。ジャラリと金属製の物が擦れる音が鳴り、中にはコインが入っているのだろうと予想出来る。髭の男もそう思ったのだろう。木箱を二人に示すと、差し出された布袋を受け取ろうとして手を伸ばす。髭の男の手が袋を掴もうとした瞬間、顔の見えない小柄な人物はその布袋を男達へ向けて投げ付けた。

「なっ……!?!」

驚いた髭の男が袋を抱えるよりも早く、布袋を食い破つて内側から何か飛び出す。手の平に乗る大きさの小さな黒い塊が数個、羽音らしき駆動音を響かせながら男たちに襲い掛つた。

タキは躊躇なく岩陰から飛び出し、ルウも後に続いて全身に魔力を満たし、戦闘態勢に入る。タキは素早く術式を構成すると、ターバンの二人組と四人の男達の間にもバレーボール程の大きさの火の玉を放つた。

「ファイアーボール!」

続けざまに二発目を打ち込むと、流星にターバンの二人組も警戒して下がり、男達との間に距離が出来る。全員の注目が唐突に現れた乱入者を集まり、自警団らしからぬその姿に驚いて場が硬直する隙を狙い、ルウは慎重に魔力を調節して編み上げた術を発動させる。

「ライトニングバインド」

細い網目状の雷電が突如男達の頭上に出現し、四人に覆い被さつた。男たちを襲っていた黒い塊は電気に触れ、バシユツと音を立てて煙を噴きながら活動を止め、巨石を転がり落ちる。電流の網に捕らわれた男達は脱出しようと足掻くが、手足が痺れて思うように動けな

い。ターバンの二人組は直ぐに混乱から立ち直り、タキとルウに向き直ると術式を構築し始める。美しいオレンジとブラウンのグラデーションが、少々古めかしい式を描き出す。式を描くスピードは決して遅くは無かったが、二人組が術式を完成させた時にはもうタキとルウの二人は彼らの傍らにまで距離を詰めている。タキの回し蹴りが一人の側頭部に、ルウの右拳がもう一人の鳩尾に決まり、ターバンの二人組は呆気なくその場に崩れ落ちる。

「なんだ、弱えな」

気を失って倒れる二人を見下ろしながら、ルウが拍子抜けした様子で呟いた。タキはそれには何も答えずにただ肩を竦めて見せ、電撃の網に捕らわれて動けない男達に視線を移す。

「さあて、どうして欲しい？」

可愛らしく小首を傾げて尋ねる少女を、男達が怯えて今にも泣き出しそうな顔で見やる。

「ぶっ、怖がられてやんの」

「うるさいわね、ルウは黙ってなさいよ」

思わず嘔き出したルウをひと睨みし、タキは改めて男達に向き直る。美少女が放つ容赦の無い上段回し蹴りの衝撃映像から立ち直ったのか、二人の他愛ない遣り取りを見て落ち着いたのか、髭の男が恐る恐る二人に声を掛ける。

「お嬢ちゃん達、助けてくれた事には礼を言うが、奴らに手を出したのはマズイぞ」

男の声には純粹に二人を心配する響きが有り、タキは一度きよとんと目を瞬かせてから、不敵な笑みを浮かべて見せた。

「平気よ。この二人、『砂の手』の連中でしょう？」

『砂の手』とは、ウイズムントの北に位置する大陸、ルドレイド大陸の中央、ストラス砂漠から東方のワジェソレス連邦にまたがる広大な範囲で活動している密輸組織である。ありとあらゆる御禁制の動植物から人に至るまでを扱い、彼らに頼めば手に入らぬ物は無いと言われている。その代わり法外な報酬を要求されたり、その手法

が酷く強引かつ残虐な物であると言つ話もよく耳にする。そんな組織の名をあっさりと言に出すタキに驚きつつも、男達は彼女の問いに肯定の頷きを返した。

「そうだ。取引を邪魔したと知られれば、あんたらもタダじゃ済まないぞ」

タキは男達の心配を余所に、笑顔のままルウの魔術に捕らわれた彼らを眺め回す。

「私、連邦高官のお嬢様だもの。『砂の手』だつておいそれと手出しなんかできないわ」

タキ「ヤンフウと言つのは母方の姓で、彼女の本名はタキ「リクセント」シエルヴェンと言つ。ウィズムント人の母とサニヤ人の父との間に生まれた混血児である。シエルヴェンと言えば要人中の要人、ワジェソレス連邦の政治を左右するその名を知らない人間は少ない。そんな有名人の名であるからこそ、タキはウィズムントではヤンフウの姓を名乗つていた。

「上段回し蹴りをかますお嬢様つてのもどうなんだ」
そんなルウの呟きに拳をお見舞いしてから、タキは再び男達に向き直る。

「まあ、そういう訳だから、私の心配はいらないの」
タキのその台詞に反応を返したのは男達ではなく、またしてもルウだ。

「俺にはそんなバツクがねえんだから、危険を負う見返りが欲しいぞ。……そうだなあ」

わざとらしく考える素振りを差し挟み、ルウは黄金色の瞳を楽しげに輝かせ、『砂の手』との取引商品であったと思しき木箱を指差す。
「その木箱をくれるってゆーんなら、このまま見逃してやってもらいませ」

タキもポンと手を打って賛成の意を表明する。

「あ、ルウそれナイス」

「そ、それは……」

慌てたのは荷の中身を知っている男達だ。視線を交わし合い、困惑した表情を浮かべて言い淀む。タキはその様子を眺めながら、少しだけ考えを巡らせる様子を見せ、更に条件を付け加えた。

「もしその箱を譲ってくれるなら、父に言っただけの身の安全を保証させるわ。私の身元が確かなのは、これを見てくれれば証明できると思うけど」

そう言っただけで胸元から引張り出したのは、赤い石が飾られ、緻密な細工が施されたペンダントだ。タキが軽く揺らして見せる度、赤い石が朝日を浴びてキラキラと光る。他に類を見ない濃厚な深紅と透明感と艶と照り。ワジェソレス連邦で極稀に産出される最高級の魔石は、連邦の『赤い貴族』に属する印だった。

「……分かった。その木箱は譲ろう」

初めて目の当たりにした『赤い貴族』の印と、身の安全を保証するとの言葉に折れたらしい男が溜息交じりの声を発する。男達に本当に譲る意思があるらしい事を確認すると、ルウはライトニングバインドを解いて男達を自由にした。

「じゃ、そう言う事で」

「大使館には連絡を入れておくから、連邦への亡命手続きは各自でよろしくね」

魔術が解けたとは言え、未だ痺れて体の自由が利かぬ男達を放ってタキとルウは嬉しそうに木箱を抱え上げる。二人は想像していたよりも重い木箱を、どうにかこうにかドール教室のルウの部屋まで運び込んだ。途中道行く人々に不審そうな眼で見られはしたが、タキが大荷物を抱えて歩くのは日常茶飯事なのでそれ程怪しまれはしなかった様だ。

ルウの部屋で二人は木箱を挟んで向かい合う。

「何かの薬品かしら」

運んだ際の感覚から中身は液体だと予想していたタキが言った。

「ま、開けてみりゃわかるさ」

ルウが急いだ様子で木箱の蓋を押さえていた金具を取り外し、蓋に

手をかける。ゴクリと喉を鳴らし、何が入っているのかとワクワクしながらゆっくりと蓋を持ち上げ、

「~~~~~ツツツ!!!?」

危うく大声で叫んでしまうところだったが、タキが咄嗟に自分とルウの口を塞いで事なきを得る。二人は驚きで大きく見開いた視線を持ち上げ、お互いの顔を見つめ合う。それからもう一度視線を箱の中へ戻し、それが幻でない事を確かめた。タキが互いの口から手を外せば、ルウは思い出した様に木箱の蓋を横に置き、そっと木箱の中身を人差し指でつつく。木箱の中には箱よりも一回り小さなガラケースが収められており、海水が満たされていた。そしてその海水の中には、乳白色に煌めく鱗に覆われた、蛇の様な生き物が泳いでいる。全長は凡そ一メートル位だろうか。

ルウにつつかれてくすぐったかったのか、その生き物はキュイと一声啼いて尾鰭で水を跳ね上げた。ルウは滑らかな鱗に触れた自分の人差し指をマジマジと眺めながらタキに尋ねる。

「本物、だよな?」

タキも信じられないと言った表情だったが、ルウと視線を合わせて肯定の頷きを返す。

「ええ、間違いなく……海竜だわ」

第四話 「海之王」 第三幕

タキ「ヤンフウとクウ「ラ「ルウの二人は暫く黙り込んだ。書物などでしか見た事のない生物が、幻でも何でもなく、現実として目の前に存在している。しかもまだほんの子供だ。遙か西方の海にしか存在しない筈の海竜に、まさかこんな形で出会うなんて予想外にも程がある。ルウはもう一度海竜をつついた。ツルツルとした滑らかな鱗は冷たいが、生き物らしい肉の弾力を指先に伝えてくる。海竜は黒い瞳を細め、今一度小さく啼き声を上げた。

「なあ、どうするよ、コレ」

「どうするって、私に聞かれてもわからないわよ」

二人は再び黙り込んだ。

「……海竜って、捕獲禁止指定されてたっけか？」

ルウの問いに、タキは口元に手を当てて記憶を探る。

「そもそも捕獲しようっていう人間が皆無だから、特に明文化されてなかったと思うわ。海竜の捕獲なんて文字通り命懸けなもの」

タキの返答を聞いたルウは、悪戯を思いついた時の満面の笑顔を浮かべて言う。

「じゃあ堂々とペットとして飼えるってわけだ」

これには流石のタキも呆れて言葉が出なかった。ルウは名案だろうとばかりに身を乗り出し、

「海竜がペットだぜ？ かつこよくね？」

とタキに詰め寄る。

「かつこいいとか悪いとか、そう言う次元の問題かしら」

ルウの言葉には、流石のタキも一先ずそれだけを返すのが精一杯だ。タキは暫く口を噤み、黒い眸をじつと海竜へ注ぐ。白く美しい生き物はゆらゆらと揺れる水面に小さな波紋を描いて顔を覗かせては、丸い瞳を瞬かせてタキを見上げてくる。その仕草の愛らしさと真珠の様に煌めく鱗の美しさに視線を奪われ、タキは漸くぼつりと一

言呟いた。

「まあ、面白くはあるわね」

「よっしゃあ、さっそく名前を付けるぜ！」

タキの同意を得て勢い付くルウ。嬉しそうに小さな手を叩いてパンと音を鳴らし、思いつくままに名前を列挙していく。

「ライトニング・オメガ！ エクソダス・ジュニア！ ブレイブ・スペシャル！ ノートリアス・グレイト！ えーっと、それから、えーっとお……」

ルウのネーミングセンスに、タキは深い深い溜め息を吐いた。

「何よそれ。全然可愛くないじゃない」

それから海竜の小さな頭部を指先で撫で、自然と綻ぶ口元に笑みを浮かべながら海竜に話しかける。

「もつと可愛い名前の方がいいわよね。アドリエンヌとか、シヤルロットとか、マリエールとか、ヴィクトワールとか」

タキの並べる名前候補に、今度はルウが異議を申し立てる。

「げえ、そんなのぜってーい・や・だっ！ 呼びたくねえ」

「何だよ。可愛い名前の方がこの子にピッタリ合うじゃない」

「いーや、強そうな名前の方が断然良いね。だってこいつメチャクチャでつかくなるんだぜ？」

「大きくなっても絶対綺麗で可愛いわよ！」

タキとルウはお互い一步も引かず、言い合いはヒートアップの一途を辿る。声をひそめる事などとうの昔に忘れており、結果、ノックの音にもドアが開く音にも気付けなかった。ドアを開いて二人の様子を茫然と眺めていた人物は、小さな水音と、そこに居る見た事のない生物を目の当たりにして驚きに目を見張り、

「あの……さあ、それって、新しい魔法生物か何か、かな」

おずおずと発した言葉に、タキとルウの二人は漸く言い争いを止めて視線を向ける。キツとお互いを睨んでいた眼差しを其の俣送られで、リーコン＝ルルディヴァイサーは二人の剣幕に思わずたじろいでしまったが、部屋を訪れた理由を思い出して何とか其の場に踏み

止まる。

「なあリーユン。こいつに名前付けるとしたら、なんて名前にする？」

ルウが木箱の中の生物を示してリーユンに問い掛けた。それにタキが言葉を続ける。

「絶対可愛らしいのが良いわよね？」

唐突に二人に詰め寄られ、リーユンは何が何やら分からぬままに木箱の中を覗き込んだ。今まで生きてきた中で一度たりとも見た事が無い生物が、水の中を悠々と泳いでいる。乳白色の鱗がキラキラと光を弾き、とても美しい。リーユンはふと思い浮かんだ言葉を口に出してみる。

「……セルパン・デイウー、とか」

タキとルウの二人はリーユンの言葉を反芻するように小さく呟いた。

それから、ふむ、と頷き合う。

「悠久セルパン・デイウーなる蛇、か。悪くないわね」

「そのまんまって感じはするけどな。ま、いいんじゃない？」

二人が木箱の中を覗き込み、何事かと瞳をキョロリと動かす海竜へ向け声を掛ける。

「今日からお前はセルパン・デイウーな」

「愛称はウーちゃんね」

「最後の音を取っただけじゃねえか。普通にセルーでいいだろ、セルーで」

「何と呼ぼうと私の勝手でしょ。ね、ウーちゃん」

語尾にハートマークでも付きそうな程、機嫌の良いタキの声。ルウも海竜を撫でたりつついたりとはしゃいでいる。謎の生物と戯れ始めた二人をやはりぼんやりと見守ってしまったリーユンだったが、伝言を預かっている事を思い出して恐る恐る二人に呼び掛けた。

「えっと、ねえ、二人とも。朝食の事なんだけどさ。カイリ先生が院長先生に呼び出されたから、各自好きに取って良いって言ったよ」

「え、マジで？」

ルウが驚いてリーユンを振り返る。皆で一緒に食事を取る事をルールとして設ける程に優先事項としてあるカイリッドールが、朝っぱらからの呼び出しに応じるなんて非常に珍しい事だ。タキも意外そうな表情を浮かべている。

「何があつたのかしら」

それはもう余程の事なのだろうとの想像は出来るものの、タキの疑問にはつきりと返せる答えをリーユンは持っていない。

「ごめん、先生すごく急いでたから、何があつたかまでは聞けなかつたよ」

「ま、いーじゃん。リーユン、一緒に何か食いに行こうぜ」

リーユンの背負う申し訳なさそうな空気を断ち切るように、ルウが勢いよく立ち上がったと言った。リーユンは隔離教室に入ってから外食する必要が無かつたので、ドール教室のクラスメイトと飲食店へ食べに行くのは初めてだった。

「うん、良いよ」

リーユンは何となく楽しみな気持ちになって、笑顔で答える。それに不服を唱えたのはタキだ。

「何よ、私は置いてけぼりなわけ？」

両手を腰に当て、頬を膨らませて拗ねる幼い様子が可愛らしく、リーユンは思わず吹き出してしまった。

「ちよつと、笑う所じゃないでしょー！」

益々機嫌を損ねていくタキに、リーユンは慌てて両手を振って否定する。

「ち、違うよ。タキを置いていくななんて少しも考えてなかつたから……なら、いいけど」

タキは一瞬不意を突かれた様な表情を浮かべるが、直ぐに不機嫌そうな物に変え、ふいとリーユンから視線を逸らして口を閉ざす。リーユンはタキの様子に不思議そうに首を傾がせるが、どうやら機嫌は直つたらしいので取り敢えずは良しとした。

「んじゃ、行くか」

ルウがポケットから財布を引っ張り出し、中身を確認しながら二人に言い、

「セラーはちよつとの間留守番な」

と、海竜の頭を撫でる。

「あ、上着を取って来るよ」

外出した時其の俣の服装の二人は兎も角、まだ多少青い風が吹くこの季節はケープが手放せない。リーユンが口元まで覆える上着と財布とを取って来ると、三人は隔離教室を出て木々に囲まれた小道を歩く。

「どこで食う？」

「そうね。どうせなら学外まで出ましようよ」

タキがルウの投げた問いに答え、リーユンがそれに頷く。

「今の時間なら、商店街を港の方へ入った所にある『恋するウサギ亭』が焼き立てパンの朝食セットを出してるはずだよ」

港、という言葉聞いて、タキとルウの二人はギクリと動きを止めた。リーユンはそんな二人を不思議そうに振り返る。

「どうしたの？」

リーユンの怪訝な声にルウは勢い良く首を横に振りながら、何とか誤魔化そうと口を開いた。

「や、なんでもねえって。ただ、リーユンが何か店に詳しいのが意外だなあ〜とか思ったりな。ははは……」

リーユンはそんなルウの言葉を素直に受け取ったらしく、軽く頬を掻きながら、どことなく照れ臭そうに視線を落として答える。

「ジユンがね、外食が好きで、よく一緒に食べるに連れて行ってもらったから。お勧めの店とかメニューとか、殆どジユンからの受け売りなんだよね」

「じゃ、じゃあ、他にもたくさん美味しい朝食が食べられるお店とか知ってるの？」

タキも何とか港に向かわずに済むようと、二人の話に加わってき

た。リーユンは少し考える間を挟んでから答える。

「色々あるけど、工房区にある『魔導の心亭』かなあ。青位の魔導師が店主で、食材の組み合わせ方がすごく斬新で面白いよ」

工房区と言えば学園より南東、魔導器工房や魔導器専門店が多く立ち並ぶ地区だ。港とは反対の位置にある。

「そこにしよう！」

タキとルウが同時に力強く頷いた。工房区ならば今朝の連中に鉢合わせする事も無いだろうし、万が一見つかったとしても工房区には魔術師団や兵士団が警備隊として常時配置されている。彼らがきつと何とかしてくれるだろう。

三人は学院を出て大通りの手前まで歩く。そこでタキが思い出したように声を上げた。

「あ、ちよつと紙とペンを買ってくるわ。待ってて」

そう言つて返事も待たずに近くの用品店へと駆け込んで行く。

「あー、手紙か」

ルウが納得したように呟いた。そう言えば『砂の手』の連中に襲われていた下っ端四人組を保護するように親に頼むとか言っていたな、と思考を巡らせるだけの短い時間が経った頃、タキが小さな袋を手に店から出て来る。合流した三人は再び歩き出し、一つ目の通りを左へ曲がって工房区へ向かった。工房区は比較的大型の建物が集まっている。中でも特に人目を引く大きな建造物は、学院の中央棟で開発された魔導器を量産する工房「ウィズムント魔導器製作所」と、魔導器の研究開発製造を行う民間の工房「魔導ファクトリー」の二つだ。後者の「魔導ファクトリー」は別名マオシー工房とも言い、ウィズムント執政官の一人であり、黒魔導師であるフェイマオシーと、その妹、白魔導師リヤンマオシーの二人を中心にして運営されている。工房区中央の一等地を陣取るそれら二つの建物を横目に、三人は工房区の商店が集まる通りを歩いていた。

「あ。あそこだよ」

目的の店を見付けたリーユンが『魔導の心亭』と書かれた看板を指

差して言う。歯車と魔石とコードをモチーフとした看板は、他のどの店舗よりも魔導器専門店らしいデザインで、どう見ても飲食店とは思えなかった。しかし、店に近付くにつれて胃袋を刺激する香ばしい匂いが漂い、タキとルウはその香りで漸く納得したのか、笑顔で視線を交わし合って店の戸を潜る事が出来た。

カラコロと戸に付けられている鳴子が可愛らしい音を立て、店内に来客を告げる。

「いらっしやーい」

店の奥、調理場から店主らしい元気な男の声が三人を迎え、すぐに恰幅の良い女性が現れて三人をテーブル席へ案内する。入口に近い壁際にリーユン、その左隣にルウが座り、タキはルウの前の席に落ち着いた。三人が席に着くのを見計らって、女将らしい恰幅の良い女性がテーブルに水の入ったコップとメニューとを広げて言う。

「今日のお勧めモーニングはリブとペイシスのホワイトスープと、ビツケルの海藻サラダ、魔導の心亭特製カリカリパンのセットだよ」ハキハキとした女将の説明を聞いたタキは、一瞬胡散臭そうな表情を浮かべた。リブとペイシスという辛い香辛料と甘い果実の組み合わせが想像出来なかったのだ。そんなタキの反応は良くある事なのか、女将は気分を害すどころか楽しそうに豪快な笑い声を上げる。

「騙されたと思って食べてみな。やみつきになるよ」

それからルウに対してにっこりと笑いかけると、
「そっちの坊やの口にも合うと思うよ。何せ、巨竜の黒魔術師様だつて食べに来るんだから」

と、軽くウインクまでしてみせる。人とは味覚の異なる竜族までもが食べに来ているとなると、一体どんな味なのだろうか。俄然興味が湧く二人である。

「僕はそれでお願います」

リーユンは最初からお勧めメニューを食べると決めていたらしく、迷う事無く注文する。タキとルウは互いを見やってから、

「じゃあ、同じのを」

と、若干戸惑いながらも声を揃えて頼んだ。

第四話 「海の王」 第四幕

リーユン＝ルルデイヴァイサー、タキ＝ヤンフウ、クウ＝ラ＝ルウ達三人が美味しく朝食を食べている頃、海の上では黒の位を冠する教師達が緊張の面持ちで海面を注視していた。……一人を除いて「うう……」

船の縁にしがみ付き、カイリ＝ドールは青白い顔で唸っている。時々口元を押さえてこみ上げそうになる何かを必死に堪えている様子が分かった。

「いい加減にしろ、カイリ＝ドール」

周囲を警戒していたアレツシオ＝デ＝ガスペリが額を押さえながら、呻くような低い声を出す。これが同じ黒位の魔術師だと思つて頭も痛くなろうと言つものだ。

「孤島であるウィズムントの移動手段として、船は極一般的な物だろう。時化しげてもいない海で船酔いする奴があるか。いつもの振りなら今すぐ止める」

「彼はいつもこうですよ、アレツシオ」

見かねたらしいメモ＝シャウレインドツティが、風で乱れる髪を押さえながら声を挟む。アレツシオは聞き間違いかと一瞬怪訝な表情を浮かべ、片方の眉を跳ね上げた。

「何だと？」

「ですから、彼は船での移動の度に具合を悪くしています」

アレツシオは聞きたくなかったと言わんばかりに深い溜息を吐いてカイリを一瞥すると、其の佻何事も無かったかの様に海面へ視線を戻した。賢明な判断だとメモは心の中でアレツシオの切り替えの速さを称賛する。

「あー、そうだ。カイリにこれを渡そうと思つて忘れてた」

カイリの話題で思い出したらしいフェイ＝マオシーが唐突に声を上げ、上衣のポケットから手袋のような物を取り出した。指先の無い

タイプの黒い革手袋には無数の魔石が取り付けられており、その台座同士が細いコードで繋がれている。フェイはぐつたりと碌に抵抗出来ないカイリの両手に素早く手袋を嵌め、手首のベルトを力チツと金属音を立てて留める。

「……カチツ？」

耳触りな音に、カイリは億劫そうな様子で自らの両手に視線を落とす。革手袋の手首部分、装飾品には無駄に丈夫そうなベルトの留め具に鍵穴らしき物が付いているのが見えた。

「おい」

「じゃ、さつくり説明するね」

カイリの抗議を遮る形で、フェイが嬉々として説明を開始する。

「これは魔術支援型魔導器でね。良く使う術式パターンを幾つか組み込んであるんだ。まあ見て貰えば分かるから、どの魔石にどんな式が入ってるかの説明は省略するね。使い方は魔石に触れながら普段通り術を使えば良いだけだよ。わゝ、すつごく簡単！」

両手をぽんと叩いて笑顔を振り撒くフェイに、カイリは深呼吸を繰り返しながら何とか抗議の声を再開する。

「使い方は、ぶつちやけどうでもいい。俺が、知りたいのは、何故、鍵を掛ける必要が、あるのか、と、言う事だ」

三半規管をやられて具合のよろしくない現状、声を出すのも正直辛いカイリだったが、流石に一言位は言わねばなるまいと声を振り絞る。そんなカイリに対してフェイは変わらぬ笑顔のまま答えた。

「だって、外されるとテストにならないでしょ？」

フェイの台詞を聞いて、周囲に居た人間が密かに二人から距離を取る。

「試作品だと言うのは、分かった。分かったが、動作テストくらいはしてある、よな？」

「昨日完成したばかりだよ？ そんなのしてる訳ないじゃない」
フェイはカイリの祈りにも似た問い掛けを平然とした面持ちで打ち砕いた。周囲と二人との距離が更に広がる。船の舳先で黙々と海上

警戒にあたっていたラキィアィジャツキが、流石に気まづくなつた空気を見かねたらしく、カイリに声を掛ける。

「まあ、黒位がこれだけ揃つてるんだ。お前さんの出番は無いだろ」
ラキは軽い調子で言つてのけ、豪快な笑い声を船上に響かせた。

「どうせ船酔いで使い物にはならないだろうしな」

とは、メムの台詞だ。庇われているのか馬鹿にされているのか判断の付き難い言葉に、何とも複雑な表情でメムに視線を送るカイリだったが、余程具合が悪いのか、ずるずるとその場に座り込んだ。

「じゃ、後は任せた」

後を任された黒魔術師の三人は溜息やら苦笑やらを零しつつ、穏やかな海の警戒に戻る。フェイは不服そうに暫くカイリを揺さ振つて遊んでいたが、冗談抜きでカイリが吐きそうになつたので慌てて退散する。隣にやつて来たフェイに、アレッシオが小声で尋ねた。

「何故、カイリィドールにテストを？」

フェイは船の縁に肘を付き、右掌で頬を支える様にして凭れ掛かる。「んゝ、何があつても死なない感じがするから、かなあゝ」

「確かに防御の魔術に関しては、我々の誰よりも優れているのは認めるが」

「それもあるけど、それだけじゃなくて」

フェイは言葉を探すようにして黙り込んだ。アレッシオは一瞬だけフェイに視線を向け、軽く溜息を吐く。

「言いたい事は、何となくだが理解出来る。私もアレに関しては気に掛かる事も多い」

「あゝ、やつぱり気になるよねえ。まあ、それもあつてカイリに頼んでるんだよ。咄嗟の時つてさ、その人の本当の姿が見えたりするじゃない？」

フェイが悪びれずに笑いながら体を起こすのと同様、今まで穏やかだった海面が大きく波打った。アレッシオはバランスを崩して倒れそうになるフェイを支え、もう片手で縁に掴まって自らの転倒を防ぐ。空は相変わらずの晴天で、青々としたまばゆい色彩に真っ白な

雲が長閑に浮かび、遠く空との境界を描く水平線もなだらかな緩いカーブを描いている。ただ、彼らの乗る船の周囲のみが、嵐の日の様に荒れ狂っていたのだ。

「来たか！」

「ああ、でかいのがかかったぜ」

ラキが深緑色の比翼を大きく広げ、好戦的な笑みで海面を眺めている。その視線の先では、不気味な黒々とした巨大な影が船を取り囲んでいるのを確認出来た。メムは素早く術式を編み上げて船全体を覆う対魔術防御を強化すると、甲板で力なく座り込むカイリの傍らへ駆け寄る。

「ホントに海竜っぱいね。僕、戦闘は専門外なんだけどなあ」

アレツシオの支えを断り、フェイは体勢を立て直しながらホルスタに納めていた魔導器を引っ張り出す。右手には剣型魔導器「ヴラギ」、左手に携えるのは銃型魔導器「ザ・ザ」だ。

「やるしか、ないかな」

「ああ、どうやらその様だ」

フェイの声に答えるアレツシオは苦々しい様子で頷くと、鳥人族と呼ばれる所以である翼を解放した。細身の体に似合わぬ大きな茶色の翼がバサリと羽音を立てる。鋭い視線を甲板へ向け、声を張り上げて狼狽する船員達の避難を済ませると、眼下に広がる黒影を睨み付けた。船が一段と大きく揺らぎ、巨大な水柱が噴き上がる。宙へ投げ出された海水が塊となって皆の頭上に降り注ぐ様は、局地的な台風に見舞われたかのようだ。何とか転覆は免れたが、依然として船の揺れは収まらず、甲板は海水で塗れ濡って足場は最悪だった。やがて海水の豪雨が止むと、四人は濡れた目元を拭い、陽を反射して光る巨大な生物を見上げて啞然とする。

「冗談キツイぜ」

ジャッキが低く唸った。フェイもアレツシオもメムも、生まれて初めて目の当たりにする海竜に言葉も無い。眩しいくらいに輝く乳白色の鱗は虹色のグラデーションを見せ、長く透き通った鰭も、黒く

煌めく瞳も、全てがこの世の物とは思えない美しさだった。噂や伝承で知ってはいたが、実物は想像以上だ。

言葉を失った四人に向けて、海竜がゆるりと身を揺らし、視線を下ろす。ゾクリ、と四人の背筋に震えが走った。未知なる生物への恐怖か、神の造形物に対する畏怖かは分からないが、四人がその瞬間海竜に視線を奪われていたのは確かだ。海竜はそんな四人の様子に構う事無く、殊更ゆっくりと優美に体を揺すり、そして、吼えた。

「!?」
人間の可聴音域を遙かに超える高音の咆吼。空気がビリビリと震えて悲鳴を上げるのが分かる。頭が割れそうな痛みに両手で耳を塞いでみても、効果は無かった。

「何だ？ 喉が……」

最初に異変に気付いたのはアレッシオだ。やけに喉が渴くのは緊張の為かと思っていたのだが、どうやらそうではないらしい。海面に視線を向けると、微かながら海水が揮発しているのが確認できる。

「これが噂に聞く消失の咆吼か！」
エヴァホレイション・ハウリング

「アレッシオ！」

ラキがアレッシオの名を叫びながら、術式を構築し始める。その式を見て、アレッシオとメモも素早く同じ魔術の構成に取り掛かった。

「ホワイトミスト！」

三人はほぼ同時に魔術を完成させる。濃厚な魔力を帯びた白い霧が辺り一面を覆い尽くした。この霧が遮蔽物となり、空気の振動伝播を幾分か和らげる事に成功し、頭痛や渴きは緩和される。

「ただの咆吼を防ぐのに、黒位が三人掛かりか」
アレッシオが忌々しげに呟く。海竜は咆吼が効かないと悟ると、その巨大な口を大きく開いて襲い掛かって来た。濃霧が邪魔をして狙いが定まらない上、風や重力を操る魔術で軌道を逸らされ、海竜の攻撃はなかなか船を直撃する事が出来ない。しかしそうしてかわせたのも初めの数度のみで、徐々に海竜の鋭い牙が船を掠め始めた。二度、三度と大きな衝撃が走る。魔術の壁で持ち堪えてはいるが、

海竜の攻撃は執拗で止める気配は見えなかった。

「諦めて帰ってくれる、と言う事はなさそうですね」
「出来れば無傷で追い返したい所だったが、やむを得まい」

「反撃開始といくか！」

苦々しいアレッシオの言葉とは対照的に、ジャッキが嬉々として応じる。

「だから、戦闘は専門外なんだけど……。やられっ放しっていうのはもつと性に合わないよね」

フェイは両手に携えた魔導器に魔力を流し込んだ。低い軌道音が響き、魔導器が使用可能である事を示すランプが点灯する。

「ヴラギ、久し振りの出番だよ」

右手の剣型魔導器が駆動音を響かせ、細かなライトが刀身に走る。

フェイの右手が剣を高く掲げると、海竜に向けて勢いよく振り下ろした。剣先から巨大な三本の真空派が発生し、空を切って海竜へ襲い掛かる。

「刻めっ！」

「っておい、そりゃちよつとやり過ぎじゃねえか？」

ラキが驚いてフェイを諫めるが、もう遅い。鋭い真空の刃は海竜の真っ白な胴を切り裂いた……。と、誰もがそう思った。しかし魔術の霧と水飛沫とが薄れてクリアとなった視界の先には、攻撃前と何ら変わらない、傷一つ無い海竜の姿があった。真空の刃は海竜の胴体とぶつかり、霧散してしまったようだ。

「すげえな。裂傷じゃなくて打撲かよ」

ラキが感心しきった様子で呻く。

「むっ。……『ヴラギ』最大出力で補助モードに移行。『ザ・ザ』リミッター解除。壱、弐、……参。オールコンプリート。最大口径。目標補足」

魔導器が効かなかった事が余程ショックだったのだろう。フェイは手加減無しの一撃を放つべく海竜に狙いを定める。剣型魔導器は不

気味に低く唸って明滅を繰り返し、銃型魔導器は大きく開いた銃口にエネルギーを溜め込み、充填が完了するのを今か今かと待っている。その濃密な魔力の強さを感じ、ラキは慌ててフェイの背後へ回り、アレッシオとMEMも衝撃に備えるべく魔術の防壁を展開した。

「消し飛べ〜っ！」

「だから、やり過ぎだったの！」

射出の勢いに堪え切れず、フェイの小柄な体が後ろへ飛ばされる。それを受け止めたラキが流石に声を荒げて諫めに掛かった。フェイの魔導器により猛烈な勢いでエネルギーの収縮と放射とが行われ、周囲を暴風が襲う。マストが軋んだ悲鳴を上げ、船が大きく傾いた。銃型魔導器『ザ・ザ』から放たれた眩い光は直線を描きながら空を切り裂き、海竜の白く滑らかな体を掠める。長い鱗が半円状に削れ、乳白色の鱗が弾け飛ぶ。其処から真つ赤な鮮血が飛沫を上げて滴り落ち、鱗と血液とが海面を叩いて盛大に水を跳ね上げた。

「お〜！ 海竜に傷付けちゃったよ〜。これってすごい宣伝になるよね〜」

フェイが物凄く嬉しそうな声でのんきな事を口にする。ラキは思わずと言った態でフェイの頭部を殴った。

「馬鹿か。追いつ返さなきゃならんに怒らせてどうする！」

「だって〜、僕のウラギで打撲なんてバカにしてるよ〜」

「はぁ？ 誰を馬鹿にしてるって？」

「僕と魔導器を、だよ！ 屈辱だよ。僕に対する挑戦だよ！」

「言い争いをしている場合か！」

延々と続きそうだったフェイとラキの遣り取りを、苛々を隠さぬアレッシオの声が遮った。アレッシオは二人を一瞥し、次にMEMを振り返る。

「カイリを起こせ。防御に専念する」

MEMは頷き、甲板に転がるカイリドールの元へ慌てて駆け寄る。横たわるカイリの傍らに膝をつき、カイリの上半身を支えるように抱き上げて軽く揺すった。

「おいカイリ、いつまでもへばつてないで少しは働け」

しかし、カイリはぐったりと瞼を閉ざしたままでメムの呼び掛けに応えない。もしや先ほどのフェイの攻撃でどこかぶつけたかとメムが心配し始めた時、

「……………」

と、何とも心地良さそうないびきがかイリの口から漏れた。

「な、寝……………。…………ツ、この、大莫迦者ッ！」

予想外過ぎる反応に絶句してしまったメムであったが、衝撃から立ち直るや否や耳元で怒鳴り声を上げる。そうこうしている間に、痛みの方に大きく体を揺すっていた海竜が、ふいにその動きを止めた。黒い瞳には怒りも顕わ、鋭い眼差しが小さな船と、その船に乗っている小さな小さな生き物を捉える。

「来るぞ！」

第四話 「海の王」 第五幕

アレツシオ「デ」ガスペリの叫びと共に、海竜が巨大な口を開けて船に襲い掛かる。ムム「シャウレインドツティは必死に同僚を揺り起こそうとするが、元々今までの激しい揺れの中でも熟睡していた男だ、そう簡単に目覚めるとは思えなかった。アレツシオは大きく息を吐いて気持ちを落ち着かせ、素早く上位魔術の構築に入る。黒魔導師フェイ「マオシーは自慢の剣と銃とを手に、黒魔術師ラキ「ア」ジャツキはその巨軀で守る様にして、アレツシオの前に立った。近付こうとする海竜へ向けてフェイが先程よりも遙かに出力を抑えた光線を放ち、海竜が怯んだ処へタイミング良くラキが風の魔術を用いて海水を盛大に巻き上げ、押し退けて距離を稼ぐ。フェイとラキの攻撃に苛立ったのか、海竜は鋭い威嚇の咆吼を上げると尾を激しく海面へ打ち付ける。巨大な水柱と飛沫が上がり、船が木端の様に翻弄された。バランスを崩した二人が攻撃の手を緩めた瞬間を狙い、海竜が再度乗員諸共船を噛み砕こうと真つ赤な口を開く。慌てて攻撃態勢を取るフェイとラキよりも早く、アレツシオが魔術を完成させた。

「グラビティ」

静かに発された声に呼応して、ドンツと巨大な物質が落下した音と衝撃とが辺りに響き渡る。それと同時に海竜が白い喉を晒して天を向き、首の辺りを押さえ付けられた様な不自然な姿勢のまま暴れだす。首を捉える目に見えぬ重圧から逃れようと、海竜は激しく頭部や尾をくねらせた。海竜の抵抗は凄まじく、術を仕掛けたアレツシオの額から頬へ汗が幾筋も滑り落ちる。ヒト相手に術を仕掛けるのとは訳が違う。海竜の動きを封じる術を維持しようと精神を集中するが、いかんせん足場が悪過ぎた。大きく傾ぐ甲板でバランスを保ちつつ難易度の高い上位魔術を海竜の動きに合わせて臨機応変に書き換え、そうして激しく暴れ回る海の王に抵抗出来るだけの魔力

を使い続けるのだ。足場の良い陸上であったとしても至難の業である。アレッシオが海竜を抑えている間に、ラキも術式を展開し始める。

「ちつと、無理矢理にでも大人しくなつて貰おうか」

焼けた鉄の様に赤い術式がラキの周囲に構築されていくのに合わせ、フェイは無防備なアレッシオやメムを保護する為の防御魔術を編み上げた。透明な防御壁が出現するのを確認し、ラキが吼える。

「エクスプロージョン！」

爆炎が海竜を包み込んだ。炎と熱風が半球状に海面を抉り、押しやられた海水が海竜を中心とした円を描くように盛り上がる。その数瞬後には重力に従って戻る海水が大きな波を作り出し、カイリッドールでなくとも船酔いしてしまいそうな激しい揺れが船を襲った。

「や、やりすぎはどつちだよ」

と言うフェイのぼやきはもつともである。白く美しかった海竜の鱗は所々炭化し、剥がれ落ち、痛々しく鮮血を滴らせて酷い有様だった。海竜は力尽きたのか諦めたのか、アレッシオの魔術が作り出した重力に圧されてとうとう海面へ頭部を押し付けられる。本日幾度目かの大きな飛沫が上がった。

フェイは慎重に船の縁に近付いて、生まれて初めて間近に捉えた海竜を観察する。海竜は低く唸り声を発し、黒い双眸に憎悪を光らせていた。

「どうして、船を襲ったの？」

共通語コモンが通じるかどうかは分からなかったが、フェイは海竜の眼を真っ直ぐに見つめながら問い掛ける。しかし返って来たのは予想通り、低い唸り声だけだった。フェイは困った様子で後ろを振り返り、小さく肩を竦めて見せる。アレッシオが少しでも術を緩めれば直ぐにでも襲つて来そうな勢いだ。

さて、どうするか。

その場に一瞬沈黙が降り落ちる。頭脳担当であるアレッシオは術の維持だけで手一杯であるし、フェイは執政官と言う立場の癖にあま

り碌な事を考えない。そしてラキは考えるより先に動くと言う自他共に認める体育会系である。フェイとラキは一度視線を合わせると、爆睡大王の元へ近付いた。

「いつまで寝てるの？」

「起きろ、今直ぐ起きやがれ」

言葉を発すると同時にフェイとラキはカイリを蹴り飛ばす。遠慮無く暴力に訴える二人に呆れながらも、メムはカイリを起こす役目をあつさり放棄して立ち上がった。支えを失ったカイリの上体が倒れ、ゴンツと良い音が響く。甲板に頭部を打ち付けた所に電撃の魔術まで食らわされ、漸くカイリが眼を覚ました。

「……痛い」

たんこぶの出来た頭部をさすり、やや煤けた気のする頬を撫で、よろめきながらも起き上ったカイリは、ラキとフェイを一度睨み付けてから状況を把握しようと周囲を見回す。アレッシオが風の上級魔術を使っている。その視線の先を追って海上を見ると、何とも無残な姿となった海竜が重力の球に押さえ付けられ、暴れまくっていた。カイリは激しい揺れに込み上げる物を宥めつつ、よろよると海竜の傍へ歩いていき、縁に掴まって体を支える。そして暫く海竜を観察してから、皆を振り返ってしかつめらしく言った。

「こりゃ、海の王だな」

「そんな事は先刻から百も承知だ！」

メムが他の三人を代表して呻く。しかしカイリは「そうじゃない」と首を横に振った。

「こいつはただの海竜じゃなくて、海の王に近い者だって事」

ラキとメムは首を傾げた。カイリが言っている違いが理解出来ない。カイリの言葉に顔を青くしたのはフェイとアレッシオだった。

「まさか、レヴィアタン？」

フェイの言葉にラキとメムが驚いて顔を見合わせる。レヴィアタンは伝説上の存在だ。この世の始まりと共に生まれ、大地を支える事を神々に命じられた巨大な生物。海を統べる者。神の御使い。

カイリが珍しく神妙な表情をして言った。

「レヴィアタンの使いか、血を継ぐ者か。……どちらにしろ、怪我をさせたのはまずいな」

今度こそ全員が青褪めた。海竜の、海の王の怒りを鎮められなければウィズムントが沈むかも知れない。いや、下手をすればウィズムントのみならず、その他の大陸をも巻き込む事になる。

「アレツシオ」

名を呼ばれ、アレツシオは視線だけをカイリに向ける。

「術を解いてくれ」

「それは危険だ」

アレツシオの代わりに答えたのはMEMだ。

「術を解いた瞬間に船ごと食われてしまうぞ」

「だが、このままだと話し合いにもならんだらう」

カイリは再び海竜へ視線を向け、聞き慣れない言葉で静かに語り掛け始めた。共通語でも精霊語でも、ローエンシュエント下位古代語でもない。不思議な響きを紡ぐカイリの声が理解出来ているのか、暴れ狂っていた海竜が漸く動きを止めた。カイリがアレツシオを見て頷く。アレツシオは半信半疑ながらもゆつくりと術を解き、その場に崩れ落ちるように座り込んだ。海水と汗がアレツシオの肌を滝の様に滑り落ちる。

「大丈夫か？」

ラクィがアレツシオの傍に駆け寄る。

「ああ。……だが、流石にきつい」

右手で顔を拭い、荒い息を吐きながらアレツシオは答え、視線をカイリへ向けた。カイリは海竜へ向けて真剣に語り掛け続けている。

「ありや何語だ？」

ハイエンシュエント

上位古代語に似てるが」

「恐らく、神聖語だらう」

ラクィがアレツシオを振り返った。神聖語を理解出来る人間なんて、神殿に引き籠って聖書を読み漁っているマニアな高位僧くらいのものだ。それも読み書きが出来る程度が殆どで、流暢に話せる者などほぼ皆無だらう。

「何でカイリがそんなもん知ってるんだ？」

「私が知る訳が無いだろう」

当然と言えば当然な質問だったが、アレッシオに答えられる筈も無い。

と、その時、皆の視線を一身に集めていたカイリが、皆にも理解出来る言葉を一つ漏らした。そう、咄嗟の時に出るあの一言、「あ」である。

四人が見守る中、カイリがゆっくりと振り返った。そうして申し訳なさそうに言葉を続ける。

「余計な事言っちゃった」

「この大馬鹿者！ 役立たず！」

異口同音に怒鳴られ、流石にカイリがムツとして言い返した。

「そんな事言っちゃって、使い慣れない言葉なんだからしょうがないだろう？」

「言い訳している暇があったら魔術壁を作れ、莫迦者」

「あんまり馬鹿馬鹿言つなよ……」

「バカにバカと言って何が悪い」

「ば、馬鹿って言った方が馬鹿なんだぞ」

「馬鹿な事を言い合っている場合か！」

「とほほ……」

軽口を叩きながらも五人は魔術壁を張る為に急ぎ魔力を練り始める。「あゝ、ちゃんと魔術支援型魔導器のテストしてよね」

フェイがカイリの手元を見咎めて睨み付けた。カイリはグローブに取り付けられた魔石に触れない様、手を広げて術式の構築に入ろうとしていたのだ。

「分かった、分かった」

カイリは多数の魔石の内、使えそうだと思った四つの石に指を触れさせ、魔力を縫って術を編み始める。他の四人も同様の、防御の魔術式を編み上げ、ほぼ同時に魔術壁を発動させた。五人が作り出した見えない壁が幾重にも重なり、海竜の牙を阻む。攻撃の衝撃によ

つて船は揺れるものの、流石の海竜も傷付いた体では黒の位を冠する五人の魔術を破ることは出来ない様だ。

だがその時、皆異変に気が付いた。マジックシールドは発動したはずなのに、カイリの編んだ術式は未だ安定せず、それどころか術が発動した後も止まる事無く膨らみ続けているのだ。通常であれば一重に構築される筈の式が溢れ、二重にも三重にも増殖していく。

「おい、カイリ?」

呆然と宙の一点を見つめるカイリに、アレッシオが声を掛けた。詳しく状況を理解しようにも、海竜の攻撃に耐える為に四人は魔術を解く訳にはいかない。カイリが編む式は周囲に立つ四人を包み、船全体を飲み込み、更には海竜の頭部までをも捕らえようとするかの如く膨れ上がった。フェイが取り付けた魔術支援型魔導器の魔石に罅が入る音が響く。

「カイリ、しつかりしろ!」

その尋常ではない様子に、アレッシオは声を張り上げてカイリに呼び掛ける。広がり続ける術式は既にマジックシールドの原型を留めておらず、色とりどりの不可解な式の羅列が周囲を埋め尽くしていた。複雑に絡み合い、それでも一定の法則を保ち続けている式は、とても人間の身で作りに出せる物とは思えない。アレッシオを含め、黒位ですら半分も理解出来ない術式に、無尽蔵に吐き出され続ける膨大な魔力。

この突然の事態に戸惑ったのか、海竜も攻撃も止めて船上の様子を窺う。ムムは海竜の攻撃が止んだのを確認するや否や魔術を中断し、カイリに駆け寄ろうとするが、増え続ける式それ自体に阻まれて近づく事が出来なかった。よく見知った術式ならいざ知らず、未知の魔術は下手に式を書き換えてしまうと何が起こるのか予想も付かない。歯痒い思いのまま、ムムは必死にカイリの名を叫んだ。

「カイリ、駄目だ、それ以上はやっちゃいけない! カイリ!」

ムムの言葉が届いたのか、何も映していなかったカイリの視線が揺らぎ、ゆっくりとムムを振り返る。

「……ムム？」

その瞬間、整然と並んでいた巨大な術式がぐにやりと歪み始めた。カイリの意識が術以外の事へ向けられたからだろう、魔術の制御が崩れたのだ。

「カイリ、魔術を解除するんだ！ 早く！」

周囲の、と言つよりも、己の異変に気付いたカイリは慌てて式を解こうと試みるが、魔力はカイリの意思に反して不安定な術式を構築し続ける。両手に嵌めた魔術支援型魔導器が明滅を繰り返し、魔力を術へ変換していく。カイリの周囲は、カイリの姿が見えなくなる程にぎつしりと魔力による文字で埋め尽くされた。

「だめだ、制御出来ない！ 引き摺り出される……、ムム、助けてくれ、ムム！」

切羽詰まったカイリの声が助けを求めた瞬間、極彩色だった術式は一瞬の内に眩いばかりに輝く白色へと変化した。カイリの絶叫が響く。

「カイリ！」

白く輝く式は繭の様にカイリの姿を覆い隠し、その安否を確認する事は出来ない。ムムは堪らず術式が密集した光の中へ踏み込んだ。が、それはフェイの手によって阻まれる。

「放せ、フェイ。カイリが……、カイリが！」

フェイは暴れるムムの腕をしっかりと掴んで、観察者の視線でジツとカイリの様子を眺めている。冷静と言うよりは冷酷とも取れるその眼差しを見やり、ムムは蒼褪めて愕然とした面持ちで問い掛けた。

「フェイ。お前、まさか……！」

「あの魔導器に何か仕掛けたのか」

アレッシオもラキも、厳しい表情を浮かべてフェイを見据えるが、フェイは堪えた様子も無く軽く肩を竦めて見せる。

「特別な事なんて何もしてないよ。多少魔力を増幅させる機能は付けてるけど、それだけ。他は説明通りの物だよ。誓ってもいい」
右手を挙げて宣誓のポーズを取ったフェイは直ぐに視線をムムへ向

け、普段の緩い調子とは違い、真剣な様子で一気に捲し立てた。

「多少の魔力増幅と、素早い術式の構築を手助けする為にあらかじめ幾つかのパターンが組み込まれただけの魔導器。それを使っただけで、どうしてこうなるのかな。ねえ、MEM。院長の命令でカイリをウィズムントへ連れて来たのはMEMだったよね。搜索中の功績とカイリを探し出した功績とで、MEMは白位から黒位になった。優秀な魔術師を見付けて黒位になった人は他にもいるけど、院長直々の命令って言うのが、ずっと引っ掛かってたんだよ。ねえ、カイリは……」

フェイは其処で一度言葉を切り、泣きそうなのを我慢した様な、笑おうとして失敗した様な表情で言った。

カイリは、何？

「それは……」

MEMはフェイの視線から顔を背け、光の向こう、今は見えないカイリの姿を見つめる。再びカイリの悲痛な叫びが鼓膜を震わせ、MEMはフェイの腕を振り払って光の繭に向けて駆け出した。濃密な魔力と術式が、感じない筈の物理的な抵抗感をMEMへ伝えてくる。踏み出す一歩が重い。崩れそうで崩れない不安定な式に、慎重に指を触れさせ、書き換え、隙間を作り出す。

「危険だ、止める」

皆の制止の声には耳も傾けず、MEMはひたすら奇妙な文字列の解読に意識を向ける。縮まらない距離に焦りだけが募って行くのを感じながら、一本、二本、と式を広げて空間を作り、掻き分ける様にして進んで行く。幾重にも重なる式の隙間からカイリの纏う黒衣が見えた気がした刹那、カイリは彼を覆う術式ごと海竜の巨大な口中へと飲み込まれてしまった。

第四話 「海之王」 第六幕

四人は呆然と目の前の海竜を見つめた。

あまりの出来事に沈黙が降り落ちるが、それも一瞬の事で、MEM「シャウレインドッテイは直ぐさま愛用の煙管を投げ捨てて鋭い牙と黒いローブの端が覗く海竜の口へ手を伸ばす。海竜の口をこじ開けようとする彼女を止めたのはラキ「ア「ジャツキだ。ラキの大きな手がMEMの腕を掴んで乱暴に引き戻すと、ラキはMEMの耳元で怒鳴り付けた。

「バカか！ なに考えてやがる！」

「莫迦はどっちだ、放してくれ！ 早く助けないと……ッ！」

泣きそうな声音で喚きながら暴れるMEMを、ラキは難なく取り押さえ続ける。

「落ち着け。素手でどうにか出来る相手か」

「じゃあ何もせずにカイリが喰われる所を見ていると言うのか！」

「カイリなら大丈夫だ。死んではないない」

MEMとラキの諍い合う声に、アレッシオ「デ「ガスペリの冷静な声が割って入った。アレッシオはジツと海竜の様子を観察している。

そんなアレッシオに興味深そうな視線を送り、フェイ「マオシーが疑問を口にする。

「どうしてわかるの？」

「精霊力だ。生命の精霊が動いている。それに、海竜はカイリを殺すつもりではない様だしな」

精霊など見えないMEMとフェイは半信半疑だ。それでもアレッシオがこんな時に冗談を言う様な男で無い事は分かる。MEMは渋々と言った様子ではあったが、ひとまずは暴れるのを止めて海竜へ視線を戻す。少しでも海竜がおかしな動きを見せよう物なら直ぐにでも飛び掛かりそうな様子のMEMに、溜息にも似た呼気を漏らしてアレッシオが言葉を付け足した。

「ムム、気が付かないか？ 落ち着いて良く観察するんだ」

普段のムムならば容易く気が付いている事だろうに、ことカイリが絡むと冷静さを失うのがアレツシオには理解出来ない。ムムは案の定、アレツシオに言われて初めて気が付いた様子で目を睜った。つい先程まで恐ろしい位に渦巻いていた魔力が薄れている。海竜は、暴走し、必要以上に溢れた魔力を喰らっていたのだ。

やがて、海竜がゆっくりと四人を振り向いて大きく口を開き、意識を失って力無く横たわるカイリを差し出した。ムムは慌てて駆け寄り、両手を広げて強くカイリを抱き締め、受け止めると、その場に力無く座り込む。海水で濡れた衣服越しに暖かな体温と鼓動、規則正しい呼吸とを感じて、ムムはやっと安堵の息を吐く事が出来た。カイリの事はムムに任せれば大丈夫だろうと判断し、アレツシオは海竜に真つ直ぐ視線を注いだまま対峙している。海竜もカイリをムムへ預けた後、その黒く大きな双眸をアレツシオへ移して口を開く。太く低い、言葉らしき音が皆の鼓膜を震わせる。しかし、唯一神聖語を理解出来る人物は意識を失って目覚める気配が無く、アレツシオ、ラキ、フェイの三人は困った様子で視線を合わせた。その三人の仕草で海竜も察したのだろう、言葉を止めて思案気に沈黙を保つ。そうして刹那の静けさが降り落ちる中、アレツシオが海竜を見上げて上位古代語で話し掛けた。

「我々には神聖語が理解出来ない。上位古代語は話せるか？」

上位古代語は神聖語に次ぐ古い言語だ。黒位の魔術師や魔導師ならば下位古代語の基となった上位古代語の学習は必須であるし、上位古代語は神聖語と形態が似通っている。それで、もしや、と思っただが、はたしてアレツシオの予想通り、海竜はたどたどしいながらも上位古代語で話し出した。黒位の中で一番上位古代語に精通しているフェイがそれを通訳する。

「なぜ、W d' v a l l i t? が、力を貸す……わからない。しかし、……Y i e r f、猶予、かな。を、与える。えー、陽が、沈むまでに……K h r e w z? を、持って来い。じゃないと、S i e

Phyre' Duvex……」

フェイの語尾が途絶える。翻訳を頼まずとも、最後の言葉はアレッシオとラキにも理解出来た。

「大陸が沈む？」

言葉の意味を確かめるかの様にラキが呟く。海竜は要件を全て伝えたとばかりに、それ以上の言葉を発する事無く海の中へ姿を消した。海面が晴れ渡った青空に似合いの穏やかさを取り戻した時、漸くアレッシオが口を開く。

「クオレウスとはどう言う意味だ」

言葉と視線を受け止めたフェイは軽く肩を竦め、溜息混じりに返答を返す。

「分かってたら、初めから訳して言ってるよ」

「……」

アレッシオは「それもそうだ」と言う言葉を飲み込んで、代わりに肺の中に溜まった空気を全て押し出した。

「兎に角、一度学院へ戻って院長に報告しよう。院長ならば『クオレウス』の意味を知っているかもしれない」

ラキはアレッシオの言葉に頷きを返し、船をウイズムントへ戻すべく、船員達を呼びに船室へ姿を消した。メムは変わらずカイリを抱き締めたまま動かない。そんなメムを見下ろしながら、フェイはアレッシオの傍らへ近付き、彼にだけ聞こえる小さな声で囁いた。

「ねえ、ウイドヴァルトってどういう意味だと思う？」

「何故ウイドヴァルトが力を貸すのか分からない、か。あの話の流れからするとカイリの事を指しているのだろうか……」

ラキが船員を連れて再び甲板へ姿を見せ、アレッシオは口を閉ざす。船員達は多少の荒事には慣れているのだろう、傷んでしまったマストを手際よく修繕し、ウイズムントへ向けて船を動かした。一通り船の具合を確認したラキが、海水を含んだロープを脱いで絞りながら皆の元へ戻ってくる。

「カイリはまだ起きないのか」

勢いよく広げた黒いローブがパンと小気味の良い音を立てるのを聞きながら、フェイはカイリへ視線を落とす。青白かった顔には僅かながら赤みが差し、呼吸も規則正しく落ち着いている様だ。しかし、未だ目覚める様子は無い。

「かなり消耗してるみたいだね。まあ、流石にあれは、ね……」
空間を埋め尽くす程の術式を思い出し、アレツシオもラキも険しい表情を浮かべる。だがそれもほんの一瞬の事で、二人は直ぐさま思考を切り替えた。

「それよりも、問題は海竜が提示して来た条件だ」
日没までに『クオレウス』を持って来なければ大陸が沈む。

「『クオレル』なら意味が分かるんだけどね」
フェイが顎に右手を当ててぼやいた。それを受けてアレツシオも乱れた髪を掻き上げながら、独り言のように呟く。

「宝、か……」
「案外それに近い意味なのかも知れないぞ。わざわざ西方の海から出向いて来るんだからな」

「や、発音が似てるからって意味まで似てるとは限らないよ」
「何はともあれ、院長の指示を仰がねばならんな」
フェイとラキも特に案がある訳で無く、アレツシオの言葉に同意を示した。いくら黒の位を冠しているとは言え、上位古代語を日常会話レベルで扱えるわけではない。下位古代語であれば共通語に近い程度には話せても、失われた前文明時代の言語である上位古代語は学ぶ事からして容易ではないのだ。参考書や辞書等は存在せず、数少ない古文書を自力で読み解き、遺された史跡や装置を解析して学ぶしかない。未だ説明されていない単語も少なくはなかった。

「ま、船の上にいる間は、なんら打開策はないね」
考える事をあつさりと放棄したフェイは、のほほんとした面持ちで甲板に座り込み、魔導器の手入れをし始めた。ラキも変身トランスを解き、大きなローブを乾かす為に船に渡されたローブの一つへ干しに向かう。アレツシオも漸く緊張を緩め、一度翼を大きく羽ばたかせて飛

沫を飛ばしてから、翼を消した。そして、動かないメムとカイリを見下ろす。

「カイリの様子はどうか？」

問われたと理解するのに少々時間を要し、メムがのろのろと顔を上げる。常では見る事の無い弱々しい表情を見て、アレッシオが僅かに眉根を寄せた。

「大丈夫だと思う。呼吸も穏やかだし、顔色も大分戻ってきた」

「そうか。ならば良い」

アレッシオはカイリを一瞥してから、メムの眼を真っ直ぐに見据える。

「分かっているとは思いますが、全てが片付いた際には詳しい説明を求めろぞ」

「私の口からは、言えない」

思いの外はつきりとした強い口調でのメムの拒絶に、アレッシオは片方の眉を跳ね上げた。

「では、誰の口からならば聞く事が出来るんだ」

「……分からない」

「何だそれは」

アレッシオの声音が呆れとも苛立ちともつかない響きを帯びる。メムはアレッシオから視線を逸らしてカイリを見つめたまま、力なく首を横に振った。これ以上は何も言う気が無いとの意思表示なのだろう。興味深そうにアレッシオとメムの会話を聞いていたフェイも、思わず脱力した様子で言葉を挟む。

「これもまた、院長に聞いてみるしかないのかな」

「俺は、なんとなくだが、わかったかもしれない」

ラキが皆に背を向けたまま、水平線に薄く見え始めたウィズムントの街並みを眺めながらぼつりと呟いた。三人が驚いて振り返る。

「分かった……って、カイリの正体が？」

確認するようなフェイの問いかけに、ラキは一度大きく頷いてから腰に手を宛がい、困った様子で視線を彷徨わせた。

「まあ、かもしれないってだけだがな。だが、もし俺の予想が正しければ、MEMの言うとおり誰に尋ねれば答えてもらえるのかわからないだろう」

「で、その予想っていうのも、教えてもらえないのかな？」

フェイの興味深そうな問いかけに、ラキは肩を竦めて見せ、

「俺の答えが正しかった時の事を考えると、死んでも言えんな」

「ラキ、喋り過ぎだ」

ラキの言葉を遮る様に、MEMが制止の声を挟む。MEMは静かに皆を眺めてから視線を膝上のカイリへ落とした。

「私はカイリにウィズムントに居て欲しいんだ。だから、カイリの正体を明かす事は出来ないし、詮索もして欲しくない」

「……解った。この話はもうしないと約束しよう」

長い溜息の後にアレツシオが言葉を返すものの、フェイはすかさず不満の声を上げる。

「え、勝手に約束しないでよ。要するに、カイリの正体がばれても、カイリがウィズムントを離れないで済むような方法を考えればいいんでしょ」

「そりゃ、そうなんだがな。何もわからんのに簡単に言うなよ」

ラキが呆れを隠そうともせずフェイを見下ろした。

「それは秘密にしてるラキとMEMの都合。僕は諦めないからね」

「フェイ、お前な……」

ラキがなおも言い募ろうとした時、船員の一人が近付いて来る気配と足音に気付いて口を噤む。まだ年若いその船員は、幾分緊張した面持ちで黒魔術師達と対峙する。

「もうじきウィズムント第一ポートへ帰港します。そちらの魔術師さんは大丈夫ですか？」

「ああ、気にする必要はない。我々で運ぶ」

フェイは素っ気無いアレツシオの返答に笑い、船員へ笑みを向けて言葉を付け足した。

「心配しなくても大丈夫だよ。怪我也無いし、眠ってるだけだから

「そうですか。わかりました」

船員は安堵の様子を表情に滲ませ、はにかんだ様な小さな笑みを浮かべてから「それでは、失礼します」とだけ言い残し、慌てて乗降口へ駆けていく。それと同時にウィズムント港へ到着したと知らせる声が聞こえ、船員達は皆それぞれの持ち場で作業に就いた。帆を操り、畳み、ロープを渡して船を固定する様子を眺めながら、アレッシオは院長へどのように報告すれば良いのかと悩んでいた。

「MEM、カイリは俺が運ぼう」

一番体格に恵まれているラキが、MEMからカイリを預かり受けて軽々と肩に担ぐ。港と船を繋ぐ橋が渡され、五人は数時間ぶりに固い地面へ降り立った。

「やれやれ、何日も漂流してた気分だ」

ラキが揺れない足元を満足そうに見下ろし、カイリを抱え直しながらぼやく。それにはフェイも幾度も頷いて同意を示した。

「のんびりしている暇は無いぞ。学院へ戻ろう」

一足先に船を下りていたアレッシオが背後を振り返った丁度その時、激しい爆音と共に地面が揺れる。

「何だ!？」

意識の無いカイリを除く四人が慌てて視線をウィズムントの街へ向けると、もうもうと立ち昇る煙が視界に入る。方角からするとどうやら工房区の辺りの様だった。

「MEMとフェイは直ぐに工房区へ向かってくれ。ラキはカイリを医務室へ運んでから二人と合流。私は院長へ報告が済み次第向かう」

「いや、工房区には俺が行く」

ラキの肩の上、意識を取り戻したらしいカイリが身を起こし、右手で頭部を押さえながらアレッシオの指示を遮った。船上での魔力の暴走を目の当たりにした後では、流石に直ぐ非常事態に当たらせるのは気が咎める。

「大丈夫なのか」

「アレツシオが俺を心配するなんて珍しいな。もしや惚れたか？」

「解った。さつさと死んで来い」

いつもと変わらぬカイリの様子に、アレツシオは呆れた表情となつて追い払う様な仕草を見せた。カイリはラキの肩から下りると、大げさに目元を擦りながら駆け出す。

「アレツシオの馬鹿！俺との事は遊びだったのね、ひどいわああああああ！」

「誤解を招く発言を置いて行くな！」

思わず怒鳴り返してしまつた後、アレツシオはその場で頭を抱えた。黒魔術師として元々名と顔が売れているとは言え、怒鳴つてしまつてはアレツシオが自分であるとわざわざ周囲へ教える様なものだ。頭痛でも起こしそうな様子のアレツシオへ同情の視線を送りながらも、MEMとフェイの二人もカイリの後を追って走り出す。ラキがアレツシオを慰めるかの如く大きな右手を肩へ乗せ、

「取り敢えず、お前は院長へ報告して来い。此処に居る奴らの誤解は解いておくから、な？」

言葉と共にポンと肩で弾む手が離れ、アレツシオは視線をラキから周囲へ移す。出港出来ずに港に集つて抗議していた船乗り達や、港を規制している魔術師団と兵士団の団員数名、その他大勢の野次馬達、皆の好奇心に満ちた視線を一身に集めながら、アレツシオは空を仰いで嘆いた。

「いつそ殺してくれ」

第四話 「海の王」 第七幕

『魔導の心亭』で食事を終えたリーユン・ルルデイヴァイサー達三人は、満足そうに食後の珈琲を楽しんでいた。

「最初はびっくりしたけど、すつごく美味しかったわ」

タキ・ヤンフウは手紙を書く為の紙をテーブルに広げながら声を弾ませる。クウ・ラ・ルウも同意を示すように何度も頷いて見せる。

「俺でもちよつと想像できない味だったな。なかなかイケる」

「気に入ってもらえて良かったよ」

美味しいという自信はあったものの二人の口からはつきりと感想が聞けて、リーユンはホツと安堵の息を漏らして珈琲を口に運ぶ。それから手紙の文面を考え書き出し始めたタキの手元を何となく眺めながら、気に懸っていた疑問を口に出した。

「そう言えば、カイリ先生の用事って何だったんだろっね」

「んー、よつぽどの事じゃねえと食事ほっぽってかないからなあ」
過去、食事の時間に拘って何度も用事を断っていた事を思い出し、ルウも不思議そうに首を傾がせる。つい先日などはワジエソレス連邦からの使者を迎える為、学院長とウイズムントの執政官、黒位の魔術師と魔導師が招集された事があったが、歓迎の食事が催された時もそれを断って隔離教室に戻り、生徒と昼食を取ったくらいだ。
「よつぽどの事、かあ。魔物が出た、とかはさすがに無いかな。ウイズムントは孤島だし」
リーユンが笑いながら言った冗談に、ルウが興味深そうに身を乗り出す。

「いいねえ、魔物の襲撃！俺さあ、一度でいいから魔物と全力で戦ってみてえ！」

「あはは。わざわざウイズムントまで飛んで来る魔物なんて居ないよ」

「そりゃ飛ぶのはちよつと無理かもしんねーけど、海の魔物なら襲

撃の可能性あるだろ」

心底楽しそうなルウの発言を聞き、ハツとして表情を険しくしたのはタキだった。

「ねえ、ルウ。もしかして……」

急に真剣な面持ちで口を開いたタキを怪訝そうに見つめ返し、ルウは大きな丸い目をパチパチと瞬かせる。

「もしかして、何だよ」

察しの悪いルウに苛立ちつつ、タキは一度リーユンに視線をやってから、手元の紙をトントンと叩いた。「砂の手」の連中から下端四人組を保護して欲しいと言う要望書だ。ルウは漸くタキの言わんとする事に気付き、あっと声を上げる。

「そうか。じゃあ今朝の港の騒ぎも！」

「ええ、その可能性が高いわ。たぶん先生はそれを調べに行ったんじゃないかしら」

「……えーと、すごく嫌な予感がするんだけど、先生がわざわざ出向いたのって、二人が関係してるから、なのかな？」

リーユンの物言いたげな視線と台詞に、タキとルウの二人は慌てて首を横に振った。

「違う、違う。朝市を見に行った時に商船が事故ったって騒ぎなんてたからさ」

「そうそう。その時にモンスターを見たとか言ってる人がいたの」「リーユンの言った通り魔物が出たとなると、先生も動くかなあつて。な？」

「ね？」

タキとルウは引き攣った笑顔を浮かべながら視線を交わし合う。リーユンは大きく溜息を吐いてから、困ったような笑みを浮かべて言った。

「そう。二人がそう言うなら僕は何も言わないけど、あんまり無茶な事はしないでね」

心底心配そうな視線を向けられて、二人は少々気まずそうにしながら

らも頷く。

「大丈夫だつて。たぶんきつとおそらくそんな大事にはならないだろうと思うから」

ルウがフォローのつもりか、不安が増しそうな、何とも曖昧な台詞を付け足す。尚更心配そうな表情を見せるリーユンに申し訳なく思いながら、タキは書き終えた手紙の封を閉じた。

「お待たせ、書き終わったわ。そろそろ出ましようか」

「ん、そうだね」

珈琲を飲み干し、『魔導の心亭』の主人と女将に挨拶を伝えて勘定を済ませた三人は、店を出ようと扉を開けた所で動きを止める。正しく表現すると、扉を開けたルウが目の前に立っている二人組を見て動きを止め、動きを止めたルウを不審に思つたタキがルウの視線の先を追つて動きを止め、突然入り口で固まつて見つめ合う四人に戸惑つたリーユンがどうすれば良いのか分からずに動きを止めた。

一番初めに立ち直つたルウが前方に立ち塞がる二人組を突き飛ばし、リーユンとタキに向かつて叫ぶ。

「走るぞ！」

ルウは地面に倒れ伏す二人組を軽快に飛び越え、振り返る事無く駆け出した。タキも直ぐにリーユンの手を掴んで引き、ルウの後を追いつける。

「ちよ、ちよつと。一体何が……」

「話した後！ とにかく逃げるわよ！」

朝食が済んで出勤の間になつて居るのだろう、三人は人通りの増えて来た工房区の通りを駆け抜ける。突き飛ばされたターバンの二人組も急いで立ち上がると、逃げる三人の背中を鋭く睨みつけながら赤く揺らめく術式を編み出した。

「おいおい、こんな街中でやるつてーのか」

咎めるような言葉とは裏腹に、心底楽しそうな口調でルウが言う。

ルウは石畳で舗装された地面を靴底で擦りながら急ブレーキを掛け、振り返りざまに術を発動させた。こんな時だけなんと驚異的なス

ピードである。

「ファイアランス！」

二人組も同時に同じ術を完成させた。激しく燃え盛る紅蓮の火槍が六本、人込みを突っ切って交差する。行き交う人々は突然の出来事に悲鳴を上げ、パニック状態だ。

「ちよつとなに勝手に盛り上がってるのよ。私も混ぜなさい！」

タキが嬉々として、この場に相応しくない間違った台詞を叫ぶ。リーユンが何か言葉を発するよりも早く、タキは得意な炎の魔術をこれでもかと乱射する。逆巻く火炎が広い通りで踊り狂い、熱風が人々の肌や髪をなぶる。石畳は焦げて煤け、あちこちに飛び火し、周辺はパニックを通り越して阿鼻叫喚の様子を呈してくる。

「二人とも！　ここは工房区だよ！？　下手に魔術を使ったら大変な事に！」

リーユンの必死の言葉も全く届いていないようで、四人は益々ヒートアップして高度な術を行使し始める。タキが二人組に向かって駆けながら、自らの身を守るように炎の棘を発動させる。タキの体から発生した炎が生き物のようにターバンの二人組を狙うが、二人はびたりと呼吸を合わせて落ち着いた様子で術を構築した。

「アクアヴェール」

「ケイブイン」

魔術の発動と同時、炎は突如として現れた水の膜に遮られ、綺麗に舗装された石畳の通りが大きく陥没する。急に足下の地面が無くなり、タキは浮遊感を感じながらも新たな魔術を作り出す。

「スネークバインド！」

穴底から勢いよく伸びて来た蔦を足場にして落下を免れたタキ。彼女が体勢を持ち直す前に追撃しようとしていた二人組が、タイムイング良く放たれたルウの落雷に怯む。

「サンダーストーム！」

雷の上級魔術はルウの十八番だ。突如として上空に現れた紫電がターバンの二人組に向けて突き進む。二人組は追撃を諦め、急いで防

御の為の術式を編み上げると、サンドシールドを発動させた。石畳の隙間から勢いよく吹きあがった砂が二人組の周囲を包んで強固な盾となる。ルウの放った落雷は全て砂の表面を滑って地面へ吸い込まれていった。

「何よ。最初に戦った時より断然強いじゃない」

ルウの魔術とサンドシールドで出来た死角を利用して、距離を詰めていたタキが不敵に笑う。握り締められた右の拳には魔力が込められ、砂の盾を打ち砕こうと大きく振り上げられる。僅かな溜めを挟み、力を込めて拳が振り下ろされたその時、周囲の被害を最小限に食い止めようと奮闘していたリーユンが叫んだ。

「タキ！ 避けて！」

「え？」

リーユンの声が聞こえるのと視界の端に銀の光が見えたのはほぼ同時で、タキは咄嗟に体を捻って銀の一閃をかわそうとする。数歩たたらを踏んで下がるものの、左腕に鋭い痛みを感じて視線を落とす。左腕はざっくりと肉が切り裂かれ、衣服に血が滲んでいた。鋭く裂かれた傷口を右手できつく押さえ、タキは二人組と距離を取る。ルウはタキを庇うように前へ躍り出ると、ウォーターズウォームの魔術を編み上げた。大量の水が瞬時に空中に出現し、膨大な水圧でターバンの二人組が構築したサンドシールドを押し流す。二人組の内、左側に立っている人物の手には血で濡れた刃物が握られていた。

「タキ、大丈夫？」

駆け付けたリーユンがタキの腕に手早くハンカチを巻き付けながら、ターバンの二人組を見据える。

「この二人が何をしたのかは知りませんが、少しやりすぎじゃないですか。大人しく自警団へ出頭してください」

静かに発されるリーユンの口調は普段通りの穏やかなものではあったが、タキとルウには何となくリーユンが怒っている様な気がした。ちらりとリーユンの横顔を盗み見て、それは確信に変わる。

(うわ、目が笑ってねえ)

(普段穏やかな人が怒ると怖いって、本当なのね)

口元に形だけ穏やかな笑みが張り付いているのが、より一層恐ろしい。けれど、自分達の為にそれだけ怒ってくれているのだと思うと、二人は何とも言えない気持ちになった。元はと言えば自分で蒔いた種である。タキとルウがお互いに視線を合わせてまごまごしている、ターバンの二人組が初めて口を開いた。小柄だとは思っていたが、声音は子供のそれで、西方の訛りが強い。

「我々は、荷物を返してもらいたいだけだ」

「荷物？」

リーユンは怪訝そうな表情を浮かべ、タキとルウへ視線を送る。二人は思わず顔を逸らした。

「アレを取り返さないと、我々は肅清される」

二人組の切羽詰まった様子と穏やかでは無い台詞に、リーユンは困惑を深めて眉尻を下げた。

「ねえ、二人とも。一体何をしたの？」

「別に、悪い事は……してないわよ」

歯切れ悪くボソボソと呟くタキに、リーユンは怪訝と困惑の浮かんでいた表情に僅か笑みを覗かせた。

「二人が悪事を働くななんて思っていないよ。そう言う事じゃなくて、事情を……」

言葉を続けようとしたリーユンだったが、周囲の人々の視線を痛いほど感じて言葉を飲み込んだ。通りの向こうの方からは魔術師団と兵士団が数名こちらへ向かって来るのが視界に入る。

「リーユン、逃げよう」

ルウがリーユンを急かすが、リーユンは首を横に振って動こうとしない。

「ダメだよ。きちんと事情を説明しなくちゃ」

リーユンとルウの遣り取りで、ターバンの二人組も兵士達の存在に気が付いたらしい。背後から迫る魔術師と兵士に対し、二人組は敵意も露わに術式を編み始める。

「待つて！」

リーユンが慌てて二人組へ駆け寄り、式に介入して構築を妨げるが、攻撃の意思有として魔術師達が臨戦態勢となる。体内に満たした魔力を練り術のイメージを鮮明に思い描く事で魔力に属性を付与する。赤や緑の術式が魔術師達の身を彩り始めたのを視界に捉え、リーユンは一瞬の躊躇いを振り切って二人組の手を取り、タキとルウの元へ駆け出した。

「本当は逃げたくないんだけど」

嫌そうな表情を浮かべるリーユンを見上げ、ルウがニツと悪戯つ子の顔で笑い掛ける。

「逃げるが勝ちって言うじゃねえか」

「何事も話し合いが大切だよ。タキの怪我の手当ても早くしたいのに」

五人は小柄な身を人込みの中に隠しながら、力強く石畳を蹴って通りを駆け抜ける。リーユンは大人しく手を引かれるままに付いて来ている二人組に視線を向けた。

「まあでも、取り敢えずは逃げるしかないんだね」

「ごめんなさい、リーユン。落ち着いたらちゃんと説明するわ」

タキは珍しく落ち込んでいる様子で、視線をリーユンに合わせずに力無い声で呟いた。

「そうだね。兵士さん達に説明するよりも、まずは僕達の話し合いが必要みたいだ」

リーユンはターバンの二人組の手を離して唐突に立ち止まると、驚いて振り返る四人が見守る中で魔術を発動させた。

「ホワイトミスト」

リーユンが紡ぐ呪を合図にして、工房区の商店街に濃いミルク色の霧が立ち込める。

「そんなに長く足止め出来るわけじゃないから、急いでここを離れよう」

突如として発生した濃霧に、再び周囲が騒々しさを増す。魔術師や

兵士もパニックを起こす住民の対応を余儀無くされ、右往左往する人々に阻まれて思うように追跡を続けることが出来ない。魔術師や兵士の視線を逃れ、混雑する通りから細い路地へ入って更に右へ左へと網の目状に入り組んだ小道を進む。先導するのはルウだ。

「こつちだ」

商店街から続く細い通路を曲がり、複雑な路地を進みながら、五人は工房区の中心地へ移動していく。勤務時間中ともなれば裏道には人の姿はほとんど無く、赤煉瓦の壁を背にして五人はようやっと息を吐いた。

「タキ、怪我を見せて」

荒い呼吸を整えながら、リーユンはタキの腕に巻き付けたハンカチを解く。裂けた布地から覗くタキの白い肌には、痛々しい赤い線がはつきりと刻まれている。傷口の周辺をそつと拭い、まだ完全には血が止まっていないがそれ程深手ではない事を確認すれば、もう一度きつめにハンカチを巻き付けた。

「思ったより深くはないけど、ちゃんと先生に診てもらった方がいいね」

「ええ、そうするわ」

タキが頷いたのに笑顔を返し、リーユンは改めて四人の顔を順に見やる。

「で、何がどうしてこう言う状況になったのか、詳しく説明してもらえるかな」

リーユンに促され、タキとルウはお互い視線を交わし合いながら、ぼつぼつと今朝の出来事を話し始めた。朝市へ行くと港が騒々しかった事、そこで怪しい男達がいた事、後を付けた先の海岸で取引現場に遭遇した事、そこでターバンの二人組と戦闘行為があった事、助けた見返りに譲り受けた荷物が海竜の子供であった事。そこまでの経緯を聞いて驚きの声を上げたのは、リーユンではなくターバンの二人組の方だった。

第四話 「海の王」 第八幕

リーユン「ルルデイヴァイサーはクラスメイト二人が語った話を整理するので手いっぱいであったが、突如としてターバンの二人組が騒ぎ出したので思考を中断して二人組を宥めにかかる。そんなリーユンの手を振り払い、二人組の内一人がタキ「ヤンフウに詰め寄った。」

「嘘を吐くな！ 荷物は薬だと聞いている」

「嘘じゃないわよ。リーユンだつてルウの部屋で見たでしょ」

頭ごなしに嘔吐き呼ばわりされたのに腹を立て、タキがムツとした表情ではつきり言い返す。話を振られたリーユンも急ぎ今朝の記憶を掘り起こし、確かにクウ「ラ」ルウの自室で見慣れない白い蛇のような生き物が居た事を思い出す。

「……あれ、海竜だつたんだ？」

「そつだ。俺のペットにしたんだぞ」

リーユンの質問に肯定を返し、ものすごく自慢気にとんでもない事を言うルウに、リーユンは引き攣った笑顔を向ける事しか出来なかった。

「そ、そうなんだ。僕、知らない間に海竜の名付け親になつちゃつてたんだね」

幾分遠い眼差しとなるリーユンに、ルウが満面の笑顔で頷く。

「うんうん、良い名前だよな」

そんな二人の遣り取りに毒気を抜かれたのか、受け取るはずだった荷物が海竜だと分かつてショックを受けたのか、ターバンの二人組は力無くその場に座り込んだ。

「海の王を売買するなんて」

途方に暮れた様子の二人組と視線を合わせるように、リーユンもその場にしゃがみ込む。何と言葉を掛けようか考え、軽く首を傾がせて言葉を紡いだ。

「ねえ、どうして『砂の手』で仕事をしているの？」

『砂の手』と言えばご禁制の動植物を平気で売買し、窃盗、強盗、殺人すら厭わない組織だと言われている。けれど、この二人の反応を見る限りでは言われている程の悪人とは思えなかったのだ。

ターバンの二人組は互いに視線を合わせ、戸惑った様子で暫く黙り込んだ後、意を決したようにリーユンを真っ直ぐ見つめて口を開く。

「買われたんだ」

三人は思わず息を呑んだ。

「我らは、物心付いた頃にはもう『砂の手』に居た。買われた時の事を覚えている訳ではないが、そう聞いている」

「買われた……って、人身売買は四大陸諸国連合の条約で禁止されているのよ？ もしそれが本当なら行政に訴えるべきだわ」

タキは心の底から憤慨しているらしく、きつく握り締めた手指が震え、血の気を失って白くなっていった。

しかし、ターバンの二人組はゆっくりと首を左右に振ると、頭部を覆っていた布を取り外し始める。厚手の布が取り払われ、とても良く似た、タキとさほど年齢の変わらない幼い二つの顔が露わとなった。『砂の手』のメンバーが子供だと言う事も十分驚きの要素ではあったが、日焼けでは作り得ない法浄貴人特有の滑らかな褐色の肌と、頭髪の間から覗く狼人族の証である耳を見て、リーユン達三人は再び沈黙する事となる。

「この世に存在を認められていない我らが訴えても、取りあっても「ここの世にハーフは存在しない」

この世にハーフは存在しない。

それが一般的に信じられている認識であった。たとえ人間と人間、竜族と竜族等の同族同士の交配であっても、人種が違えば子供の出生率は極端に低下する。運良く生まれたとしても、両親のどちらか

片方だけの特徴を受け継ぐのが普通なのだ。そして、奇跡的に二種族両方の特徴を併せ持った子が生まれたとしても、病弱であったり、短命であったり、精神を病んでいたり、その症状は様々だが、何かしらの問題を抱えて生まれてくるのが常だった。そう言った事情もあり、人々は異種族間の婚礼に対して、また、その子供達に対して、あまり良い感情を持ってはいない。

「そうやって諦めて逃げてたら、いつまで経っても何も変わらないわよ」

沈黙を破るタキの声が思いの外力強く、四人はハツとしてタキに視線を向ける。

「たとえ周りがあなた達を居ない者って決め付けても、あなた達はここにこうして存在してるもの。それが紛れもない現実で、あなた達はこれからも、この現実で生きてかなきゃいけないんでしょう？」

「だったら戦いなさいよ。周りに認めさせなさいよ」

早口で捲し立てる間に感情が高ぶったのか、ポロポロと涙を零しながら叫ぶタキの姿を、ルウを除く三人が呆然と見上げる。しゃくり上げ、言葉が詰まって何も言えなくなってしまうタキを引き継ぐ形で、ルウが珍しく真面目な面持ちで言葉を発した。

「少数ってさあ、やっぱ、色々あるよな。でもって、それって大抵自分じゃどーしよーもねえ事が理由だったりして頭来るんだけど、そーゆー時にさ、自分側に付いてくれる奴って必ず居ると思うんだ。俺はその点すっげー恵まれてると思うけど、お前らだって独りじゃねーんだし、お互いの為に何かしてやるうって思わねー？ そう考えると、ちよっとくらい自分がしんどくても、さ。なんつーか……なあ？」

ルウはうんうん唸りながら何とか言葉を続けようとするが、元々考えるのは苦手なのだ。早々に思考を切り上げてパツと顔を起し、続きの言葉を待っていた皆に視線を戻し、

「以上、話終わり」

と、ニツと口端を持ち上げて言った。

「ほんと、ルウはシリアスが長続きしないわね」

落ち着きを取り戻したらしいタキが呆れて溜息混じりに零す。それでもルウの伝えたかった事は理解出来たと、そう伝えるかの様にタキはルウの頭部を優しく撫でた。

「そう……。そうだね、このままじゃいけないよ。だって君たちが此処に居るって、とても素晴らしい事なんだ」

リーユンの言葉に、ターバンの二人組は怪訝な表情を浮かべる。

「珍しい、ではなくてか？」

「素晴らしい事、だよ。だって、それだけ二人のご両親が種族を超えて、お互いを大切にして愛し合っていたって事でしよう？ だから君たちの誕生を望んで君たちが生まれた訳だし。本当に真剣に君たちが必要だったから、奇跡のような確率であったにも関わらず君たちが生まれたんだと僕は思うけど……。って、タキ、どうしたの？」

突然横合いからタキに抱きつかれ、リーユンは体勢を崩して地面に倒れ込んだ。地面に手をつけて上体を起こし、縋りつくタキに視線を落とす。見下ろしたタキはリーユンのロープに顔を埋めて、肩を震わせて泣いていた。

「え……。と、僕、何か酷い事言った？」

リーユンがどうして良いのか分からずにおろおろとタキの様子を窺う。その様子を見て「もしかして」と口を開いたのはターバンの二人組だった。

「もしかして、その子もハーフなのか？」

「え？」

リーユンは驚いた声を上げ、ターバンの二人に視線を向ける。二人は興味深そうにタキを見ており、リーユンも視線をゆっくりとタキへ戻した。そう言われて改めて良く見てみると、タキは黒髪が特徴的なウィズムント人にしては少し明るい、焦げ茶色に近い髪の色をしている。ハーフではないかと言われて体を硬くしている事からも、それが事実なのだろうと推測出来る。リーユンは優しくタキの背中を撫でながら言う。

「色々、辛い事があったんだね。気付いてあげられなくてごめんね」
タキはリーユンの言葉を受けて慌てて体を離し、ブンブンと勢い良く首を横に振って笑顔を浮かべた。

「気付かれるのが怖くて黙ってたんだもの。謝るのは私の方だね。」

「……ごめんなさい」

「教室内で知らなかったのはリーユンだけなんだけどな」

余計な一言を付け加えたルウを殴りつけて、タキは慌ててリーユンに弁解する。

「別にリーユンを信用してなかったとか、そう言う訳じゃないのよ」
「大丈夫、気にしてないよ。僕だって皆に話していない事はあるしね」

「ま、そーゆーのも追々話していけたらいいなって事で、お前らもちよつと吐き出してみねえ？」

ルウに無邪気に笑いかけられ、ターバンの二人組みは悩みつつも小さく頷きを返した。

「んじゃまずは名前からいってみよっか」

「ツヴァイ」

と、二人が声を揃えて答える。「へ？」と間抜けな声を出して、ルウは二人をまじまじと見つめた。そして少しの間の後に問い掛ける。

「えーと、どっちがツヴァイ？」

「我々二人でツヴァイだ」

「一人一人に名前が無い……のか？」

確認するように問うルウに対して、二人は至極当然の事のように頷いた。

「それはいかん！」

ルウが叫ぶ。そして続けた。

「よし、俺が付けてやる」

「それ、ただ単に名前を付けただけだったりしない？」

胡乱気なタキの視線を当然の如く無視したルウは、二人を順に指差しながら嬉しそうに告げる。

「クロとシロ。決まり！」

「髪の毛の色そのままじゃないの！」

タキは思わず突っ込みを入れてしまいが、名付けられた当の本人達は何やらモジモジと照れ臭そうに、嬉しそうにしていた。

「本人が気に入ってるみたいだから、良いんじゃない……かなあ？」
リーユンも少々引き攣った笑顔を浮かべる。

「まあいいわ」

タキは溜息を一つ吐いて気持ちを切り替えると、クロとシロと名付けられた二人に向き直る。

「それで、二人はどうしてずっと言いなりになってるの？ 『砂の手』がどんなに卑劣な集団かは分かっているんでしょう？」

「我々が『砂の手』の一員として働いているのは、買われただけが理由ではないのだ」

そう言って二人はそれぞれの手首に嵌められている鈍色をした腕（せん）を三人に示す。

「これは任務を負って組織を離れる時に付けられる物だ」

期限までに組織に戻らなかつたり、無理矢理外そうとすると爆発する。そして二人の腕釧は少し特別で、身に着けている腕釧がお互いの起爆装置となっているのだ。つまり、自分が組織を裏切るような真似をすると、大切な兄弟を死なせてしまう事になる。それを聞いたリーユン達三人は勿論憤慨した。

「何よそれ。外しなさいよそんな物！」

「や、あの、タキ？ ちゃんと話を聞いてた？」

今にも腕釧に掴み掛かろうとするタキをリーユンが押し止める。
「聞いているわよ。でも魔術師が五人も集まっているんだもの、何とかなるわよ」

「そうそう。二人の腕釧を同時に外して放り投げて、五人でアクアヴェールとマジックシールドを重ね掛けすればへーきだって」

そう言うが早いか、タキはクロの、ルウはシロの腕釧を掴むと、
「せーの」でひっぺがしてしまった。それを後方上空へ勢い良く放

り投げると、二人はそれぞれ術を発動させる。リーユンとクロ、シロも慌てて魔術を展開した。白と淡い黄色のグラデーションを纏う式と薄青い式とか入り乱れ、目に見えぬ壁と水の膜とを作り出すと同時に、放物線描く腕釧が目も眩む程の閃光を放った。

激しい爆音と地響きとが周辺を震わせる。

五人は魔術ごと爆風に吹き飛ばされ、路地を数メートル程転がった。

「いつてえ……」

ルウが壁に打ち付けたらしい頭を押さえながら起き上がる。リーユンも悲鳴を上げる鼓膜に顔を顰めつつ、爆心地を見る為に伏せた姿勢から上体を起こした。そして吹き飛ばされた時の体勢に戻り、目を閉じる。このまま気絶してしまいたいと言う誘惑に駆られるが、溜息を一つ吐いて意を決して立ち上がると、まずは四人に怪我が無いかどうかを確かめた。擦り傷や打ち身はあるけれど、魔術のお陰で皆何とか大丈夫な様だ。タキは出血の止まりかけていた腕の傷から再び血が滲み始めていたが、

「大丈夫よ」

と強い調子で言われてしまい、リーユンはそれ以上何も言えなくなってしまう。

リーユンは気持ちを切り替え、前方へ視線を向けて考えた。巨大な工房はかなり頑丈な作りをしていたらしくて大破する事はなかったのだが、流石に全くの無傷と言う訳にはいかなかった。壁にはぽっかりと穴が空き、現在も少しずつ壁が崩れて落ちている。早く何とかしないと壁がごっそりと剥がれ落ちてしまいかも知れない。そして、穴から覗く真っ赤な炎。何やら有毒な物が燃えているのか、黒い煙がモクモクと立ち上っていた。逃げ惑う人々の悲鳴も聞こえてくる。

建物の崩壊を防ぐのと急いで消化するのと人々を避難させるのと、どれを優先させるのが一番被害を最小限に抑える事が出来るのか。迷ったのは一瞬。リーユンは結局全てを優先する事にした。

「タキはユエとケイさんを呼んで来て。ルウは魔導師達の避難を。クロとシロは僕と一緒に消火活動と落壁の阻止。頼んだよ！」

四人はしっかりと返事を返し、それぞれの役割を果たす為に動き出す。リーユンも魔力を蓄え、術式を編み上げながら、炎を吹き出す穴へと駆け出した。

第四話 「海の王」 第八幕

学院まで急いで戻ったタキ。ヤンフウはそのまま中央の研究棟へ乗り込むと、同じ研究チームの魔導師と相談中だったユエ。ルイエンを無理矢理連れ出した。とにかく工房区へ急いで行けとだけ告げてユエを追いやると、タキは次にドール教室に居るケイの元へ向かう。

「ケイ、一緒に来て！」

娯楽室で静かに読書中だったケイは、乱暴に開け放たれた扉とタキの切羽詰ったような声に驚いて振り返った。それから秀麗な眉を顰めてタキの腕を見る。

「まずは怪我の手当てをしましょう」

「ダメよ、急いで戻らないと！ リーユン達だけじゃきつと大変なもの」

早くと急かすタキに静かに首を横に振って見せ、ケイは棚から薬品の類を取り出してタキに視線を向ける。ケイが儂い外見の割りにかなり頑固である事を知っているタキは、言い争いをするよりもさつさと手当てを済ませて貰った方が早いと判断し、渋々ではあったが大人しくソファに腰を下ろした。そんなタキに微笑み掛けながら、ケイが手早く傷口の消毒をしていく。

「何があつたのか、説明していただけますか？」

手当てをしながら尋ねるケイに、タキは掻い摘んで要点だけを出来るだけ分かりやすく説明した。話が終わるまで黙々と手当てを続けていたケイだったが、タキが全てを話し終えると深い深い溜息を吐いた。

「タキ。貴女が怒るのはもつともですけど、もう少し周囲の事を考えてから行動して下さい」

手当てが済み、ケイは薬品を元通りに仕舞ってからやっとタキの目を見て語り掛けた。

「直ぐにでも腕輪を外したかった気持ちは分かります。ですが、それでもし誰かが命を落としていたらどうするつもりだったのですか？」

それから少し間を置いて、ケイは静かに言葉を続ける。

「リーユンの事、大切なのでしょうか？ 軽率な行動で彼に怪我をさせて、平気なのですか？」

タキは思わず視線を逸らせた。カッと頭に血が上ると制御が利かなくなる性分である事は十二分に承知しているし、カイリッドールからも散々言われている。気を付けているつもりでもちよつとした事がきつかけで暴走してしまうのは、タキにとつても本意では無い。

「……ごめんなさい」

「謝るのは、私にはないでしょう？」

微笑みながら紡がれる優しい声音に、タキは縋る様な視線をケイへ向けた。

「許してもらえるかしら」

その言葉にケイは更に微笑を深くして立ち上がる。

「タキに私達を呼ぶよう指示したのはリーユンでしたね？ 彼は早

くタキに傷の手当を受けて貰いたかったのでしょうか」

クスクスと微かな笑い声を立てながら、ケイは上着を取りに自室へ向かった。それを一瞬呆けた表情で見送ったタキだったが、言われた内容を理解すると、嬉しいと思う気持ちが湧く反面、同時に自己嫌悪も覚えた。

タキは小さく唸った後、ソファから勢い良く立ち上がって気合を入れ直す。

「ウジウジ悩むのなんて私には似合わないわ。そんな暇があったらさっさと戻って手伝うべきよね」

そこへ外出の準備を終えたケイがタキの上着を持って戻って来た。礼を言つて上着を受け取ったタキは、素早く上着を羽織ると玄関へ駆け出す。ケイもその後を追い掛けた。

二人が工房区へ続く通りを走っていると、前方によく見知った姿

を発見する。

「先生！」

タキの呼び掛ける声に、今朝から姿の見えなかった担当教師カイリ「ドールとMEM「シャウレインドツテイ、フェイ「マオシーの三人が足を止めて振り返る。カイリは煤けて薄汚れた教え子の姿を確認すると、心底嫌そうな表情を浮かべた。

「タキ、説明を……いや、やっぱ良い。何も言うな」

とにかく工房区へ向かおう、とカイリが再び走り出すと、ケイがその隣へ進み出る。

「先生、大丈夫ですか？」

全身ずぶ濡れで酷く疲れた様子のカイリを心配そうに見上げながらケイが声を掛けた。一瞬きよとした表情を浮かべたカイリだったが、自らの顔を一撫でして苦笑を滲ませ、ケイへちらりと視線を流し、肩を竦ませる。

「久し振りに船に揺られたからな」

カイリが酷く船に酔うと言う事はケイも良く知っている。顔色が優れない原因として完全的な外れと言う訳では無いのだろうが、MEMとフェイを含め、黒位の三人が三人共疲れきっている事の説明としては些か不十分過ぎた。心配を掛けまいとしているのか、ただ単に説明が面倒臭いのかは判断が難しいが、ケイにはそれが無性に歯痒く感じられた。カイリを挟んでケイと逆サイドを走る教師の存在が、その気持ちに拍車を掛ける。

五人が工房区の爆発現場に辿り着いた時にはまだ幾本かの黒い煙が空へ向かって細く伸びていたが、消火活動は粗方終わっている様だった。工房の壁は魔術で作られた蔦により補強がされていて、消化に使われたのであろう水が周辺の地面を濡らしている。無残な姿となった知り合いの工房を見上げ、カイリは暫く呆けていた。ゆっくりと視線を横へ流すと、とても良い笑顔を浮かべているフェイの姿が映る。カイリはもう一度視線を建物へ向け、何とも情けない、呻き声とも嘆き声ともつかぬ声を漏らした。フェイはそんなカイリ

の様子を心底楽しそうに見やると、嬉々として言葉を紡ぐ。

「後で学院にカイリ宛の請求書を送るから、楽しみにしててね」

「あああああああ………」

その場に膝をついて号泣でも始めそうなカイリを慰めるかの様に、
メムがカイリの肩を叩いた。その視線は前方の煤けた壁に掛けられ
た看板に向けられている。

『魔導ファクトリー』

それはウィズムント国営の工房である。『ウィズムント魔導器製作所』
に匹敵する程の巨大な民間経営の魔導器工房である。経営者は惨状
を楽しそうに眺めているフェイ「マオシーその人だ。」

「ある程度ならば私が立て替えてやるから、そう落ち込むな」

メムの慰めの言葉に更に追い討ちを掛けられた気分になり、カイリ
は盛大な溜息を吐く。そうして気持ちを切り替えるように勢いを付
けて立ち上がり、真面目な面持ちとなつて周囲に視線を巡らせた。

「取り敢えず、状況を確認しよう」

「あ、僕は勝手に行動させてもらうね」

フェイは一言そう言い残し、工房の研究员らしい人物を見付けて駆
けて行った。カイリが複雑な表情でその後姿を見送っていると、カ
イリの姿に気が付いたリーユンとルウが皆の元へ近付いて来る。そ
の後ろからは頭部に布を巻きつけた、褐色の肌をした法浄貴人の子
供が二人付いて歩いてきた。リーユンはカイリの眼前で足を止める
と、カイリの姿を見て不思議そうな表情を浮かべ、首を傾げる。カ
イリは頭から足の先まですぶ濡れで、磯の香りがしたのだ。

「先生、何があつたんですか？」

「それは俺の台詞だと思うが」

「すぐさま返されたカイリの声に、リーユンは少し赤くなる。」

「そ、そうですね。えつと………」

何からどう説明すれば良いのか分からないのか、言いよんどんでいる
のか、リーユンがしどろもどろになっている後ろで隠れるようにし
てくつって居る二人と、カイリの視線が合った。

「そいつらは誰だ？」

二人の煤け具合が今回の惨状の関係者だと物語っている。二人は怯えた様に体を竦ませ、縮こまってリーユンの陰に隠れた。そんな二人をカイリから庇うかの様に、タキが間に割り込んで言う。

「この子達は被害者よ」

それからタキは本日三度目となる状況説明をカイリへ伝えた。港での騒ぎ、怪しい男、怪しい木箱、取引現場、『砂の手』、木箱の身に付けた名前、かなりぼかしながらではあったが、其処まで話した所でカイリが訝しげに呟く。

「セルパン・デュー？」

ギクリとタキの説明が途切れた。

「そ、そうよ。リーユンに名付けてもらったの。可愛いでしょ？」
それでね、と何事も無く説明を再開しようとしたタキを睨み付けて黙らせると、カイリは再び呟いた。

「セルパン・デューとは古の蛇神の名だな」

タキが口元を引き攣らせながら視線を逸らす。カイリはタキを胡乱な眼差しで見下ろしてから、リーユンに向けて問い掛けた。

「で、その木箱の中身って言うのは何だったんだ？」

「海竜の子供です」

何らやましい事の無いリーユンはタキとルウの心配を余所に、あっさりと答えてしまった。流石にある程度は答えを予期していたのだろうカイリは盛大に溜息を吐き、共に話を聞いていたメムは驚きの声を上げる。

「海竜だった？」

その声に反応したのは勿論フェイだ。

「何なに？ 海竜がどうかしたの？」

フェイと一緒に魔導器関係の被害を調べていたユエも興味深そうに会話に参加する。

「海竜ってさつきフェイさんが調べに行ってたってやつ？」

フェイは早速ユエ相手に語って聞かせたらしい。カイリが呆れた表

情を浮かべてフェイを一瞥する。

「おい、院長の指示もまだなのに言い触らすなよ」

「え、別に良いでしょ、カイリの教え子なんだから」

「海竜を調べていたって、どう言う事ですか、先生？」

「それじゃあやっぱり港の騒ぎと密輸って関係があったの？」

「ええ！？　じゃあ沖に出たモンスターって海竜の事だったのか！」

「お前たち少し静かにしないか！」

好き勝手騒ぎ出した皆を一喝して黙らせると、メムは素早く考えを纏めてフェイに問い掛けた。

「フェイ、海竜が言っていた『クオレウス』と言うのはもしかして、海竜の子供の事じゃないか？」

「あ、あり得るね。『クオレウス』が固有名詞だとしたら意味が分からなくて当たり前だ」

「おい、ちよつと待て。何の話だ？」

メムとフェイの会話に付いていけないカイリが怪訝そうに問うと、フェイが「そう言えばカイリは寝てたんだっけ」と海竜が語った上位古代語をそのまま伝える。

「そう言う事は、すぐに伝えて欲しかったぞ」

「寝ている方が悪い」

訴えを一蹴されて落ち込むカイリを無視し、メムはタキに向かって指示を出す。

「海竜の子供を連れてすぐに港へ向かうんだ」

それからフェイに向き直って口を開こうとするが、それを制する様にフェイが片手を挙げた。

「おっけ。分かってるよ。他の執政官にも連絡を入れて、船の入出港をもう一度詳しく洗い直す。多分『砂の手』が絡んでるだろうから、連邦にも協力を要請するね。その法浄貴人の二人とルウ君を借りて行くよ」

指名された三人は驚いた様に互いの顔を見合わせるが、一つ頷きを返して大人しくフェイの後を付いて行く。先を歩くフェイに、ルウ

が纏わり付くようにして話し掛けた。

「なあなあ。執務館のでっけー通信機を使うのか？」

「勿論使うよ。あれじゃないと流石に他国までは声が届かないからね。」

「おー！俺もしゃべりたい！」

そう言うてはしゃぐルウに、クロとシロが不思議そうに尋ねる。

「そんなに大きいのか？」

問われたルウは身振り手振りを交えながら、それがいかに巨大であるかを熱心に説明し始めた。何故ルウが政治に関わる人物しか入れない執務館の内部を知っているのか、この際問わない事にする。

まるで遠足の様な気楽さを醸し出しながら去って行く四人に生温かい視線を送りながら、カイリが口を開いた。

「リーユンとタキ、ケイは海竜の子供を。メムはアレッシオとジャツキ、それから院長にも連絡を取ってから港へ。ユエと俺はもう少し此処を何とかしてから合流する」

教え子達が了承の返事を返す中、一人不平を表したのはメムだ。

「馬鹿者。カイリはとつとと学院へ戻るんだ。此処は私がやるから、お前は大人しく休んでいる」

「しかし……」

「煩い。ほら、お前達。早くこの馬鹿を連れて行け。こいつが大人しく休まない様ならベッドに括り付けるか簀巻きにでもすると良い」
メムがカイリをグイグイとリーユン達の方へ押しやるが、カイリはまだうだうだと言ひ募つて抵抗を見せる。いい加減苛々したメムがカイリの襟首を掴んで力任せに引き寄せると、近い距離で目線を合わせながら低く囁いた。

「私が信頼出来ないのか」

その真摯な響きにカイリは言葉を飲む。それから「分かった」と短く一言残すと、リーユン、タキ、ケイを伴って学院へ戻って行った。ユエはそんな遣り取りを複雑な表情で眺めていたが、それを周囲へ気付けさせないように直ぐに笑顔を作る。

「それじゃ、俺達も働きましょうかね」
ユエの言葉に頷きを返し、MEMも行動を開始した。

第四話 「海之王」 第九幕

学院まで急いで戻ったタキ。ヤンフウはそのまま中央の研究棟へ乗り込むと、同じ研究チームの魔導師と相談中だったユエ。ルイエンを無理矢理連れ出した。とにかく工房区へ急いで行けとだけ告げてユエを追いやると、タキは次にドール教室に居るケイの元へ向かう。

「ケイ、一緒に来て！」

娯楽室で静かに読書中だったケイは、乱暴に開け放たれた扉とタキの切羽詰ったような声に驚いて振り返った。それから秀麗な眉を顰めてタキの腕を見る。

「まずは怪我の手当てをしましょう」

「ダメよ、急いで戻らないと！ リーユン達だけじゃきつと大変なもの」

早くと急かすタキに静かに首を横に振って見せ、ケイは棚から薬品の類を取り出してタキに視線を向ける。ケイが儂い外見の割りにかなり頑固である事を知っているタキは、言い争いをするよりもさつさと手当てを済ませて貰った方が早いと判断し、渋々ではあったが大人しくソファに腰を下ろした。そんなタキに微笑み掛けながら、ケイが手早く傷口の消毒をしていく。

「何があつたのか、説明してただけですか？」

手当てをしながら尋ねるケイに、タキは掻い摘んで要点だけを出るだけ分かりやすく説明した。話が終わるまで黙々と手当てを続けていたケイだったが、タキが全てを話し終えると深い深い溜息を吐いた。

「タキ。貴女が怒るのはもっともですけど、もう少し周囲の事を考えてから行動して下さい」

手当てが済み、ケイは薬品を元通りに仕舞ってからやっとタキの目を見て語り掛けた。

「直ぐにでも腕輪を外したかった気持ちは分かります。ですが、それでもし誰かが命を落としていたらどうするつもりだったのですか？」

それから少し間を置いて、ケイは静かに言葉を続ける。

「リーユンの事、大切なのでしょうか？ 軽率な行動で彼に怪我をさせて、平気なのですか？」

タキは思わず視線を逸らせた。カッと頭に血が上ると制御が利かなくなる性分である事は十二分に承知しているし、カイリッドールからも散々言われている。気を付けているつもりでもちよっとした事がきっかけで暴走してしまうのは、タキにとっても本意では無い。

「……ごめんなさい」

「謝るのは、私にはないでしょう？」

微笑みながら紡がれる優しい声音に、タキは縋る様な視線をケイへ向けた。

「許してもらえるかしら」

その言葉にケイは更に微笑を深くして立ち上がる。

「タキに私達を呼ぶよう指示したのはリーユンでしたね？ 彼は早

くタキに傷の手当を受けて貰いたかったのでしょうか」

クスクスと微かな笑い声を立てながら、ケイは上着を取りに自室へ向かった。それを一瞬呆けた表情で見送ったタキだったが、言われた内容を理解すると、嬉しいと思う気持ちが湧く反面、同時に自己嫌悪も覚えた。

タキは小さく唸った後、ソファから勢い良く立ち上がって気合を入れ直す。

「ウジウジ悩むのなんて私には似合わないわ。そんな暇があったらさっさと戻って手伝うべきよね」

そこへ外出の準備を終えたケイがタキの上着を持って戻って来た。礼を言つて上着を受け取ったタキは、素早く上着を羽織ると玄関へ駆け出す。ケイもその後を追い掛けた。

二人が工房区へ続く通りを走っていると、前方によく見知った姿

を発見する。

「先生！」

タキの呼び掛ける声に、今朝から姿の見えなかった担当教師カイリ・ドールとメム・シャウレインドッテイ、フェイ・マオシーの三人が足を止めて振り返る。カイリは煤けて薄汚れた教え子の姿を確認すると、心底嫌そうな表情を浮かべた。

「タキ、説明を……いや、やっぱ良い。何も言うな」

とにかく工房区へ向かおう、とカイリが再び走り出すと、ケイがその隣へ進み出る。

「先生、大丈夫ですか？」

全身ずぶ濡れで酷く疲れた様子のカイリを心配そうに見上げながらケイが声を掛けた。一瞬きよとした表情を浮かべたカイリだったが、自らの顔を一撫でして苦笑を滲ませ、ケイへちらりと視線を流し、肩を竦ませる。

「久し振りに船に揺られたからな」

カイリが酷く船に酔うと言う事はケイも良く知っている。顔色が優れない原因として完全に的外れと言う訳では無いのだろうが、メムとフェイを含め、黒位の三人が三人共疲れきっている事の説明としては些か不十分過ぎた。心配を掛けまいとしているのか、ただ単に説明が面倒臭いのかは判断が難しいが、ケイにはそれが無性に歯痒く感じられた。カイリを挟んでケイと逆サイドを走る教師の存在が、その気持ちに拍車を掛ける。

五人が工房区の爆発現場に辿り着いた時にはまだ幾本かの黒い煙が空へ向かって細く伸びていたが、消火活動は粗方終わっている様だった。工房の壁は魔術で作られた蔦により補強がされていて、消化に使われたのであろう水が周辺の地面を濡らしている。無残な姿となった知り合いの工房を見上げ、カイリは暫く呆けていた。ゆっくりと視線を横へ流すと、とても良い笑顔を浮かべているフェイの姿が映る。カイリはもう一度視線を建物へ向け、何とも情けない、呻き声とも嘆き声ともつかぬ声を漏らした。フェイはそんなカイリ

の様子を心底楽しそうに見やると、嬉々として言葉を紡ぐ。

「後で学院にカイリ宛の請求書を送るから、楽しみにしててね〜」

「あああああああ………」

その場に膝をついて号泣でも始めそうなカイリを慰めるかの様に、
メムがカイリの肩を叩いた。その視線は前方の煤けた壁に掛けられた
看板に向けられている。

『魔導ファクトリー』

それはウイズムント国営の工房である『ウイズムント魔導器製作
所』に匹敵する程の巨大な民間経営の魔導器工房である。経営者は
惨状を楽しそうに眺めているフェイ＝マオシーその人だ。

「ある程度ならば私が立て替えてやるから、そう落ち込むな」

メムの慰めの言葉に更に追い討ちを掛けられた気分になり、カイ
リは盛大な溜息を吐く。そうして気持ちを切り替えるように勢いを
付けて立ち上がり、真面目な面持ちとなって周囲に視線を巡らせた。

「取り敢えず、状況を確認しよう」

「あ、僕は勝手に行動させてもらうね〜」

フェイは一言そう言い残し、工房の研究员らしい人物を見付けて
駆けて行った。カイリが複雑な表情でその後姿を見送っていると、
カイリの姿に気が付いたリーユンとルウが皆の元へ近付いて来る。

その後ろからは頭部に布を巻きつけた、褐色の肌をした法浄貴人の
子供が二人付いて歩いてきた。リーユンはカイリの眼前で足を止め
ると、カイリの姿を見て不思議そうな表情を浮かべ、首を傾げる。

カイリは頭から足の先まですぐ濡れで、磯の香りがしたのだ。

「先生、何があっただんですか？」

「それは俺の台詞だと思うが」

「すぐさま返されたカイリの声に、リーユンは少し赤くなる。

「そ、そうですね。えっと………」

何からどう説明すれば良いのか分からないのか、言いよどんでい
るのか、リーユンがしどろもどろになってる後ろで隠れるように
してくっついて居る二人と、カイリの視線が合った。

「そいつらは誰だ？」

二人の煤け具合が今回の惨状の関係者だと物語っている。二人は怯えた様に体を竦ませ、縮こまってリーユンの陰に隠れた。そんな二人をカイリから庇うかの様に、タキが間に割り込んで言う。

「この子達は被害者よ」

それからタキは本日三度目となる状況説明をカイリへ伝えた。港での騒ぎ、怪しい男、怪しい木箱、取引現場、『砂の手』、木箱の中身に付けた名前、かなりぼかしながらではあったが、其処まで話した所でカイリが訝しげに呟く。

「セルパン・デュー？」

ギクリとタキの説明が途切れた。

「そ、そうよ。リーユンに名付けてもらったの。可愛いでしょ？」
それでね、と何事も無く説明を再開しようとしたタキを睨み付けて黙らせると、カイリは再び呟いた。

「セルパン・デューとは古の蛇神の名だな」

タキが口元を引き攣らせながら視線を逸らす。カイリはタキを胡乱な眼差しで見下ろしてから、リーユンに向けて問い掛けた。

「で、その木箱の中身って言うのは何だったんだ？」

「海竜の子供です」

何らやましい事の無いリーユンはタキとルウの心配を余所に、あっさりと答えてしまった。流石にある程度は答えを予期していたのだろう。カイリは盛大に溜息を吐き、共に話を聞いていたメムは驚きの声を上げる。

「海竜だった？」

その声に反応したのは勿論フェイだ。

「何なに？ 海竜がどうかしたの？」

フェイと一緒に魔導器関係の被害を調べていたユエも興味深そうに会話に参加する。

「海竜ってさつきフェイさんが調べに行ってたってやつ？」

フェイは早速ユエ相手に語って聞かせたらしい。カイリが呆れた

表情を浮かべてフェイを一瞥する。

「おい、院長の指示もまだなのに言い触らすなよ」

「え、別に良いでしょ、カイリの教え子なんだから」

「海竜を調べていたって、どう言う事ですか、先生？」

「それじゃあやっぱり港の騒ぎと密輸って関係があったの？」

「ええ！？　じゃあ沖に出たモンスターって海竜の事だったのか！」

「お前たち少し静かにしないか！」

好き勝手騒ぎ出した皆を一喝して黙らせると、メムは素早く考えを纏めてフェイに問い掛けた。

「フェイ、海竜が言っていた『クオレウス』と言うのはもしかして、海竜の子供の事じゃないか？」

「あ、あり得るね。『クオレウス』が固有名詞だとしたら意味が分からなくて当たり前だ」

「おい、ちよつと待て。何の話だ？」

メムとフェイの会話に付いていけないカイリが怪訝そうに問うと、フェイが「そう言えばカイリは寝てたんだっけ」と海竜が語った上位古代語をそのまま伝える。

「そう言う事は、すぐに伝えて欲しかったぞ」

「寝ている方が悪い」

訴えを一蹴されて落ち込むカイリを無視し、メムはタキに向かって指示を出す。

「海竜の子供を連れてすぐに港へ向かうんだ」

それからフェイに向き直って口を開こうとするが、それを制する様にフェイが片手を挙げた。

「おっけ。分かってるよ」。他の執政官にも連絡を入れて、船の入出港をもう一度詳しく洗い直す。多分『砂の手』が絡んでるだろうから、連邦にも協力を要請するね。その法浄貴人の二人とルウ君を借りて行くよ」

指名された三人は驚いた様に見えるが、一つ頷きを返して大人しくフェイの後を付いて行く。先を歩くフェイに、ル

ウが纏わり付くようにして話し掛けた。

「なあなあ。執務館のでっけー通信機を使うのか？」

「勿論使うよ。あれじゃないと流石に他国までは声が届かないからね。」

「おー！ 俺もしゃべりたい！」

そう言っではしゃぐルウに、クロとシロが不思議そうに尋ねる。

「そんなに大きいのか？」

問われたルウは身振り手振りを交えながら、それがいかに巨大であるかを熱心に説明し始めた。何故ルウが政治に関わる人物しか入れない執務館の内部を知っているのか、この際問わない事にする。

まるで遠足の様な気楽さを醸し出しながら去って行く四人に生温かい視線を送りながら、カイリが口を開いた。

「リーユンとタキ、ケイは海竜の子供を。メムはアレッシオとジャツキ、それから院長にも連絡を取ってから港へ。ユエと俺はもう少し此処を何とかしてから合流する」

教え子達が了承の返事を返す中、一人不平を表したのはメムだ。

「馬鹿者。カイリはとつとと学院へ戻るんだ。此処は私がやるから、お前は大人しく休んでいろ」

「しかし……」

「煩い。ほら、お前達。早くこの馬鹿を連れて行け。こいつが大人しく休まない様ならベッドに括り付けるか簀巻きにでもすると良い」

メムがカイリをグイグイとリーユン達の方へ押しやるが、カイリはまだうだうだと言ひ募つて抵抗を見せる。いい加減苛々したメムがカイリの襟首を掴んで力任せに引き寄せると、近い距離で目線を合わせながら低く囁いた。

「私が信頼出来ないのか」

その真摯な響きにカイリは言葉を飲む。それから「分かった」と短く一言残すと、リーユン、タキ、ケイを伴って学院へ戻って行った。ユエはそんな遣り取りを複雑な表情で眺めていたが、それを周囲へ気付かせないように直ぐに笑顔を作る。

「それじゃ、俺達も働きましょうかね」
ユエの言葉に頷きを返し、メムも行動を開始した。

第四話 「海之王」 第十幕

学院に辿り着いたリーユン、ルルデイヴァイサーとタキ、ヤンプウは、担任であるカイリ、ドールの身をケイに任せ、ルウの私室へ入り込む。部屋の中央に置かれた木箱の中から顔を出し、物珍しそうに室内を見回していた海竜の子が、二人に気が付いて振り返った。
「キユイ」

セルパン・デイウーと名付けられた海竜の子は嬉しそうに眼を細める。タキは木箱に近付き、少し寂しそうに笑った。

「タキ……」

リーユンに心配そうに声を掛けられ、タキは笑みを深めてみせる。
「すぐく遠い所から心配して来てくれる親がいるんだもの。帰してあげなくちゃいけないわよね」

「うん」

タキは木箱の傍らに座り込むと、真ん丸な目で不思議そうに見詰めてくる海竜に視線を合わせた。

「ウーちゃん、移動するわよ。ちょっと窮屈かも知れないけど、すぐに広い海に帰してあげるからね。少しだけ我慢しててね」

タキは指先で優しくセルパン・デイウーの頭部を水槽の中へ押し込むと、木箱の蓋を閉める。それからリーユンを振り向いて頷いて見せた。

「親は、子供の事を心配するものなんだよ」

リーユンがぼつりと呟いた言葉は海竜の事を言っているのだろう。そう思ったタキは頷きかけたが、リーユンの視線が自分に向けられている事に気付いて動きを止める。少しの間、黙って口を閉ざしてから、タキは小さく笑った。

「そうね。夏休みに一度帰ってみるわ」

リーユンも笑顔を浮かべて頷くと、二人で木箱を持ち上げる。娯楽室のソファで横たわるカイリと、カイリを看病しているケイに「

行つてきます」と告げて、リーユンとタキの二人は港を目指す。

玄関先まで二人を見送ったケイは、娯楽室へ戻ろうとしていた足を止めて食堂へ向かった。カイリに何か体の温まる飲み物を持って行った方が良さかも知れない。湯を沸かし、鎮静作用のあるハーブティをポットへ入れて沸いたばかりの湯を注ぐ。ふわりと漂うハーブの香りを吸い込んで、ケイは深く溜息を吐いた。この香りで落ち着くと言う事は、自分は今まで緊張していたのだからと言う考えに至る。ケイは微かに自嘲めいた笑みを零し、気を取り直す様に温めたカップにハーブティを注いでトレイに乗せた。持ち上げたトレイは酷く震え、カップがカチャカチャと派手に音を立ててトレイから床へ落下する。

「え？」

ケイが驚いて自分の手を見詰める。激しく痙攣する手を強く握り締め、ケイはもう一度ハーブティを淹れ直すと慎重に娯楽室へ運んだ。

「先生、大丈夫ですか？」

控え目に声を掛けながらケイが娯楽室へ入ると、カイリは静かに寝息を立てていた。酷く消耗していた様子だったから、恐らくは疲れが出たのだろう。

ケイはトレイをテーブルに置き、ソファの前に膝をついて心配そうにカイリの様子を窺う。覗き込んだカイリの寝顔は思いの外穏やかで、ケイは安堵の呼気を漏らして視線をカイリの顔から全身へ移す。

カイリの周囲には、常に多種多様な精霊達が当たり前のように集っている。中には相性の悪い精霊が居るにも関わらず、カイリに惹かれて集まる精霊達はいつも穏やかで、調和を保っていた。それは酷く不自然だったが、逆にとても自然に見えた。

「私も貴方達のように穏やかであれば良かったのに」

紡ぐケイの脳裏には、自信に満ち溢れた黒魔術師の姿が浮かぶ。彼女はカイリにドールに信頼されている。ケイにはそれが酷く羨ま

しく思えたのだった。

リーユンとタキは何とか木箱を港まで運ぶと、すぐさま名を呼ばれて声の聞こえた方を振り仰ぐ。濃緑色の髪をした大男が二人に近付き、労う様にポンポンと二人の肩を叩いた。

「MEMから連絡は入ってる。その木箱の中に海竜の子供が居るんだな？」

西棟責任者であり黒魔術師であり巨竜族でもあるラキ「アッジャツキの事は知っていたが、実際目の前で見るとその雄々しい巨体に圧倒される。リーユンはラキの視線の先を追い、慌てて頷きを返した。

「あ、はい。そうです」

肯定の言葉を聞くや否や、ラキは二人が苦勞して運んだ木箱を軽々と肩に担ぎ上げ、リーユンを見下ろす。

「ご苦勞だったな。後は俺達に任せて戻って良いぞ」

勿論、タキはラキの言葉に異議を唱えた。

「いやよ。私も船に乗せて」

「何だつて？」

まさか連れて行けと言われるとは思わなかったのだろう。ラキが怪訝そうな表情を浮かべる。

「その子を拾って保護したのは私よ。生き物を拾ったら最後まで面倒を見なさいって、言われなかった？」

黒位の教師相手に喧嘩腰なタキを止めたいリーユンだったが、タキの気持ちも良く理解出来るのでどうするべきかと悩んだ。悩んだ結果、やっぱり気持ちはタキと同じだった。

「あの、足手纏いだとは分かってます。でも、ちゃんと親の元へ帰る所を見届けたいんです。ほんの少しの時間しか一緒に居なかったけど、セルーは飼い主のタキに懐いてるみたいだったし、僕も名付け親ですから」

必死な様子で言い募るリーユンの言葉を聞いて、ラキは野太い声で盛大に笑い出した。ラキは愉快で堪らないと言う風に一頻り笑い終わると、改めて二人の姿を見やる。

「飼い主に名付け親か！ そりゃ失礼した」

ついて来いと目で合図され、リーユンとタキは顔を見合わせて笑顔を浮かべた。歩幅の大きなラキに置いて行かれない様に、小走りですの背を追い掛ける。ラキはそんな二人を可笑しそうに一瞥してから、視線を空へ向けて小さく一人ごちる。

「海の王の飼い主と名付け親、か。……カイリの教え子は大物だな」
ラキを先頭に、三人は院長の船へ乗り込んで甲板で木箱を下す。

その蓋を開けた所で、上級教室主任のアレッシオ「デ」ガスペリが複雑な表情を浮かべてやって来た。

「ジャツキ、一体どう言う誤解の解き方を」

したんだ、と続ける筈の言葉を飲み込み、アレッシオの予想よりも人口密度の多い甲板を見て眉間に皺を刻む。

「部外者は立ち入り禁止の筈だが」

険しい表情のアレッシオを宥める様に、ジャツキが「まあまあ」と手を振った。

「この二人はクオレウスの飼い主と名付け親だそうだ。無事親元へ戻る所を見たいんだと」

「これだからカイリの教え子は……」

アレッシオは額に手を当てて小さく舌打ち混じりに呟いてから、船長へ向けて声を掛ける。

「船を出してくれ」

「了解しました」

船長の返答を受けたアレッシオはそのまま三人を無視して船首へ移動する。リーユンはアレッシオを怒らせてしまったのだろうかと心配してラキを見上げるが、巨竜族の大男は笑うだけで何も言わない。

「何よあの態度！ 良い歳した大人が格好悪い」

タキが内心の不快を隠す事無くアレッシオの背中を睨みながら憤るのを、リーユンが慌てて宥めに掛かる。そんな二人の遣り取りを見てラキがまた笑った。

「リーユンは苦労性だな」

「え、そうですか？」

当のリーユンは不思議そうに首を傾げている。全く心当たりの無い様子に、ラキは堪らず声を立てて笑い、身を揺する。

「成程、キリからの推薦話を聞いてカイリが喜んでいたらだ」

ラキの言葉にリーユンは驚いて声の主を見上げた。

カイリ先生が自分のドール教室編入を喜んでいたら？

その言葉を頭の中で反芻し、リーユンは小さく微笑んだ。ドール教室の皆とは上手くやっていると思うし、クラスメートから学ぶ事は非常に多くて感謝もしている。リーユンがドール教室に編入して受けた恩恵は数えれば幾つでも挙げられるが、はたして自分は彼らに何かを返せているのだろうか、リーユンは少し不安に思っていたのだ。特にカイリに対しては迷惑ばかり掛けていると反省していた。けれど、そのカイリがリーユンの編入を喜んでいたらというのは、リーユンにとって嬉しい情報だった。

「キユイツ」

甲高い鳴き声に振り返ると、セルパン・ディウーが首を伸ばしてリーユンをジッと見詰めていた。

「どうしたの？」

リーユンがしゃがみ込んで顔を近付けると、海竜の子はペロリとリーユンの頬を舐めて何事か、鳴き声とは別の音を口にする。

「え？ 今、喋った？」

言語っぽい響きであった事に驚いて、リーユンは背後の二人を振り返る。しかしリーユンの問いに答えたのは、リーユンの前方、船首に立つ男だった。

「嬉しいと言ったんだ」

リーユンが視線を向けると、アレッシオは視線を避ける様に前方

の海へ向き直る。

「……本当に懐いているのか」

アレツシオは背に注がれる複数の視線を無視しながら、溜息混じりに口中で呟いた。

気持の良い潮風が吹き抜け、アレツシオの髪を揺らす。船は順調に航行を続け、海の王と遭遇した付近で錨を降ろして船を止めた。

「落ちないように掴まっとけよ」

ラキの忠告通りに、リーユンとタキは片手で木箱を、もう片方の手でマストから伸びる太いロープをしつかりと握り締める。その次の瞬間には船が大きく傾いで、タキが小さな悲鳴を上げた。

揺れは徐々に酷くなり、船首が空を指すほどに傾いた時、船の前方に巨大な水柱が伸び上がる。吹き上げられた海水が滝の様に降り注ぐ中、全身ずぶ濡れになりながらもリーユンとタキはその水柱から目を逸らす事が出来なかった。

「綺麗……」

真珠色の滑らかな鱗は所々傷付いては居たが、光を乱反射する様は例え様も無く美しいものだった。

その強大で美しい生き物に、小さな海竜の子がキューキューと声を上げて水槽の中から首を伸ばす。

「帰りたいのね」

タキが優しく微笑み掛けると、セルパン・ディウーはタキを振り返って答える様に一声鳴いた。大きく揺れる足場に苦労しながら、タキは何とかバランスを保って立ち上がると、木箱を引き摺りながら船首へ移動する。

リーユンもタキを手伝って船首まで辿り着くと、せーので木箱を持ち上げて船の縁へ乗せた。

「元気でね、ウーちゃん」

タキは海竜の白く艶やかな鱗を撫でながら別れを告げる。

「家族を大切にね」

リーユンも小さな頭部を撫でて言葉を紡ぐ。セルパン・ディウー

は二人に向かつて一言告げると、勢い良く海へ飛び込んだ。波音に紛れてしまつて殆ど聞こえ無い位の小さな水音と共に、細い体が海中に沈む。

暫くしてキラキラと煌めく波間から時折見える白い姿が、大きな海竜へ近付いて行くのを確認出来た。近付く我が子を見守っていた海の王が、舳先に立つアレッシオに向けて上位古代語で語り掛ける。アレッシオが応じて答えると、更に二言三言、言葉を交わしてから海竜は満足そうに海底へ姿を消した。セルパン・デイウーは一度船を振り返つてから、親の後を追つて海の中へ潜つていった。

「……行つちやつたね」

「ええ。でも、これで良いのよ。家族は仲良く、でしょ？」

振り返つたタキの笑顔はとても綺麗で、リーユンは思わず息を飲んだ。そんな様子には気付かずに、タキはすぐにアレッシオを見上げて質問を投げ掛ける。

「さつき、別れ際にウーちゃんは何て言ったのかしら」

「ありがとう、と」

「そっか……」

笑顔を浮かべてはいるが、やはりどこことなく寂しそうな娘にどう接して良いのか分からず、アレッシオは困つた表情を滲ませて海水で濡れた額を押さえた。それからラキの肩を叩いて「任せた」と小さく告げると、船員達へ支持を出す為に船首を離れる。ラキはアレッシオを見送つた後、遠ざかる背には聞こえない程度の声量でリーユンとタキに話し掛けた。

「お前らは飼い主と名付け親なんだろ？ だつたらいつでも好きな時に会いに行けば良いじゃねえか。西方の海はちよいと遠いが、繋がってないわけじゃねえ」

リーユンとタキは困惑した表情でラキを見上げた。例え西方の海まで行けたとしても、海竜と出会える確率なんて無いに等しい。運良く出会えたとしても、それがセルパン・デイウーである確率となると更に低いだろう。そんな二人の心の内を見透かしたかの様にラ

キは続ける。

「そんな心配そんな顔をするな。アレツシオがちゃんと約束を取り付けてくれてたから、大丈夫だ」

「約束？」

二人は異口同音に口に出し、顔を見合わせる。何事か上位古代語で会話をしているのは見ていたが、二人にはアレツシオと海竜が何を話していたのか理解出来なかったのだ。

「もしも西方でお前らを見掛ける様な事があれば、あの子に伝えてくれるように、つてな」

「え！？」

リーユンもタキも驚きを隠せず、思わず声を上げて背後のアレツシオを振り返った。アレツシオは視線に気が付いていないのか、気付いていても気付かない振りをしているのかは分からないが、船長と会話を交わしながら通信機で連絡を取ったりと忙しそうにしている。

「ま、会いに行つて意思疎通が出来る程度には上位古代語を勉強しとけよ」

ラキはそう言つて二人の頭をわしわしと豪快に撫でて、アレツシオの手伝いをするべく歩き出す。船首に残された二人は暫く呆然と黒位の魔術師達を眺めていたが、どちらからともなくふと笑い出した。

「やっぱりまだまだ敵わないなあ」

「やっぱりまだまだ敵わないわね」

リーユンとタキは視線を合わせ、楽しげな笑い声を上げた。

第五話 「森の民」 第一幕（前書き）

ケイの身に起きる異変。途方に暮れる彼女の前に現れたのはケイの良く知る人物で……。

第五話 「森の民」 第一幕

気が付けばそこは深い森の中だった。深いとは言っても、生い茂る木々が広げた枝葉の向こうからは柔らかな温かな日差しが降り注ぎ、長い年月を掛けて落ち葉が降り積もって出来た腐葉土は優しく足を包み込む。可愛らしい鳥の鳴き声に、枝を渡る小動物や地を駆ける動物達。植物の精霊トライアド木人が楽しげに歌を歌い、風の精霊シルフ風蟲が音楽に合わせて宙を舞う。

平和その物であるその森が、人々からは『迷いの森』や『惑いの森』、『帰らずの森』と呼ばれている事を知ったのは随分後になってからだ。自分だけでなく、この森に住む民にとってはこの森が世界の全てだった。だから名称など必要なかったのだ、と。そんな事に気付いたのも森を出てからの話で、当時はゆっくりと流れる時間に身を任せ、大人達と同じ様に、ただ朽ちて行くだけの長く退屈な日々を過ごすのだと、漠然とそう考えていた。

そう、あの日、あの男と出会ったまでは。

眩しい朝の光に目を眇め、ケイは寝台からゆっくりと起き上がる。窓硝子越しに注がれる日差しは温かく、すっかり青い風の季節も終わり、初夏の訪れを感じさせた。ケイは寝台の上に上体を起こした姿勢のまま、窓の外に見える新緑の木々を眺める。植物の精霊である木人が心地良さそうに日の光を浴びていた。ケイは寝台から降り、大きく窓を開け放ち、吹き込む爽やかな風を感じ取る。やはり、緑の薫が濃い。

「懐かしい夢を見たのは、この空気の所為でしょうか」

小さな呟きを零し、ケイは夢の続きに思いを馳せる。

無気力は長く生きる種族特有の心の病なのだろう。静かに、大きな喜びも深い悲しみも無く、気の合う者と、あるいは周囲の勧めに

従いつがいとなつて子を成し、自然と共に生きて死ぬ。若いケイにはそれが酷くもどかしく、同時に得体の知れない恐怖を覚えたものだった。大人達はケイや、他の年若いエルフのその思考こそが、若年特有の病だと言う。

ケイは静か過ぎる村の空気が嫌でよく散策に出かけた。その日も例外無く集落を離れて一人で森を彷徨っていた。代わり映えのしない景色ではあつたが、精霊達の楽しげな声や動物達の鳴き声が幼いケイの慰めとなっていたのは確かだ。

「あの日は確か、何か嫌な事が」

ケイは記憶を辿る。確か、そう。長老に言われたのだ。ケイもそろそろつがいを定めて大人となれ、と。ケイは無気力な大人になど成りたくはなかった。だから逃げ出したのだ。

いつもの散策範囲よりも遠くまで足を伸ばした。もしかしたら無謀にも森を出ようと考えていたのかも知れない。知らない木々。知らない空気。知らない精霊。新しい場所の新鮮さに感動出来たのも始めの内だけで、森の外が近づくにつれて変わり果てる空気に気付いて足が震えた。人の生活圏が近付いているのだと分かった。穏やかな森には雑音が混ざり、澱んだ空気が混ざり、精霊はその姿を減らす。

ケイが帰ろうかと考えたその時、前方でガサガサと葉擦れの音が聞こえた。風の悪戯にしては大きく、足音にしては不規則だ。ケイが音の聞こえた方角を見れば、木人や風蟲、土顎ノム等の精霊達がそちらへ向かつて行くのが見えた。属性の異なる精霊達がこぞ一つ一つの物事に興味を示すのは珍しい事だった。ケイは好奇心に駆られるまま精霊達の後を追ひ、そして出会ったのだ。

男は木の根元へ寄り掛かるようにして力尽きていた。噎せ返るような不快な金属の匂いが辺りに充満している。初めて目の当たりにする黒髪の異種族。真っ赤に染まった服。ボロボロの姿。心配そうに男の周囲に集う精霊達。それら全てをケイの脳が正しく処理するのに僅かばかり時間が掛かった。ケイは鉄の匂いが男の流す血であ

ると理解すると、恐怖心も忘れて男の元へ駆け寄り、自らの衣服を裂いて男の血に染まった体をそつと拭う。男は全身傷だらけであったが、中でも腹の傷が一際酷かった。丸く黒く穿たれた穴からは、真つ赤な鮮血が止まる事無く流れている。ケイは血で染まった布切れを四角く畳んで腹の傷へ宛がい、そこに男の手を乗せて立ち上がると、素早く視線を周囲へ走らせて精霊達へ呼び掛けた。

清い湧水のある場所を知りたい。

精霊達はケイの言葉にすぐさま応じ、一番近場の湖まで案内してくれたのだ。そこでまた新たに衣服を裂いて幾つもの布切れを作り、たつぷりと水に浸してから男の元へ戻った。幸いな事に男はまだ生きていた。ケイは濡らした布で改めて男の傷を清め、水の精霊水^{ウシツスイ}乙女の力を借りて止血を施した。村の誰かを呼びに帰ろうかとも考えたが、排他的なエルフ族が異種族の男を手厚く看病する事は考え難く、また、男を動かすのも目を離すのも危険だと判断して、一通りの応急手当を済ませてその場で様子を見る事にした。

苦し気に呻く男の黒髪を、今よりも幼く細いケイの指が梳き上げて、寄せられた眉根。転がり落ちる玉のような汗。けれど顔は青白くて、血が足りていない事が分かる。男の顔は、カイリドールに良く似ていた。いや、この場合はカイリが男に似ていると言う方が正しい表現だろうか。それとも男と良く似た雰囲気を持つカイリの印象に記憶が引き摺られているだけで、本当は全然似ていなかったのかも知れない。

古く曖昧な記憶を手繰りながら、ケイは小さく溜息を吐いた。

「もう、六十年は経ったでしょうか」

ケイはその後一晩寝ずに男を看病し、その甲斐あってか翌日の昼過ぎには男が意識を取り戻した。薄っすらと開いた双眸は黒く、優しげな眼差しはやはりカイリと似ていた様に思う。男はケイに礼を伝え、森に密漁者が逃げ込んでいるので危険だから早く森の奥へ帰る様に説得した。勿論ケイは聞き入れなかった。『密漁者』と言うのがどういった物なのか正しく理解していなかったのもあるが、何

となく男の傍を離れるのが嫌だったのだ。それは彼の周囲に集う精霊達と同じ様な気持ちだったのかも知れない。

結局密漁者との争いでケイは散々男に迷惑を掛けた。非力で足手まといでしかない自分をどうにかしたくて、男が扱う不思議な術に興味を持った。精霊術しか知らなかったケイが魔術と出会ったのもその時だ。彼との出会いが今のケイを形作つたと言っても良い。ケイは村に戻ると自分のつがいと目されていた相手に、村を出て行く事を告げた。村を出て魔術を学び、強くなりたい。外の世界を見たい。

男との出会いが無ければケイの伴侶となっていたであろう相手がその時何と答えたのか、ケイにはもう思い出せなかった。村の事なんてどうでも良くなっていたのだらう。恐らく二度と会うことも無い。ケイは周囲の反対を押し切り、成人の儀だけ済ませて外の世界へ飛び出したのだ。

ケイは再度溜息を吐いた。どうにも感傷めいている。ケイは自分が現在酷く不安定である自覚があった。原因も分かっている。彼女だ。

「黒魔術師メムⅡシャウレインドッティ。ウィズムント魔術学院上級教室担任、通称『幻想の魔女』……、カイリ先生に信頼されている人」

嫉妬も羨望も、森の中に居れば無縁の感情だったのだらう。森を出た事自体を後悔している訳では無いが、ケイは自らの感情を持って余っていた。この鬱々とした気分がどうすれば晴れるのか、さっぱり分からないのだ。

ケイはまた溜息を吐いた。あの日からずっとこんな調子だ。力強く生い茂る緑の木々にも心が晴れない。海竜事件の後、事後処理等で暫くカイリとメムが共に行動していた事も、ケイの気鬱に拍車を掛けた。

どうにももやもやとする気分を洗い流そうと、洗面所へ赴いて冷たい水で顔を洗う。

「こうしていても仕方がないのは分かっているのですけれどね」

自嘲の混ざる呟きを落とし、ケイは手早く身支度を済ませて部屋へ戻ると、窓枠に寄り掛かってドール教室を囲う様に群生している木々を見下ろした。深く息を吸い込んで、豊かな緑の芳香を感じ取る。

「そろそろ朝食の時間ですね。タキに怒鳴られる前に……」

噂をすればなんとやら。ケイが呟く声はドアがノックされる音と、ケイを呼ぶタキの声で遮られた。

「ケイ、起きてる？」

「ええ、丁度食堂へ向かおうと思っていた所です」

扉へ向けて返答を返しつつ、ケイは窓に手を掛けて開け放っていた其れを静かに閉ざす。タキは勝手知ったる他人の部屋とばかり、招き入れる声を待たずにいつもの如く扉を開けてケイの私室へ入り込んだ。

「ねえ聞いてよ、ケイ。今日の朝食はユエがやたらと張り切ってて何だか嫌な……」

予感がする、との台詞を最後まで紡ぐ事無く、タキは唐突に魔術を編み始める。魔術を扱う者の目に捉える事の出来る、色鮮やかな紅の術式。もちろんそれはケイの目にもはっきりと見える訳で、細く縫られた魔力が作り上げる式を読み取り、ケイはそれが攻撃の為の魔術である事を知る。

「……ッ！」

タキの暴拳には慣れている筈のケイも、流石に今回ばかりは驚きのあまり声も出ない。

タキが構築中の魔術はファイアランス。可燃性の気体と熱量への干渉、その出現位置と射出方向とを式より割り出し、ケイは少しかり強引な方法で魔術を阻止する事を選んだ。常であれば防御の魔術で対応する所だが、部屋の中で魔術を使用されると大惨事になる事は間違い無かったからだ。幸い、タキが構築するファイアランスは何度も目にしてよく知っている。ケイは素早く少量の魔力を

練り上げ、タキが編み上げた術式の一部、可燃性の気体に作用する箇所を書き換えた。

「ファイアーランス！」

タキが魔術発動の為の呪を口にしているが、ケイに向けて差し伸ばされた右手から火焰の槍が迸る事は無く、ほんの刹那、小さな火種が弾けただけでそれも直ぐに消え失せる。

構築中の魔術式に手を加えられたと知ったタキは先程までよりも警戒を強めてケイを睨み付けた。魔術が不発に終わってホッと胸を撫で下ろしたケイだったが、今回ばかりはタキの所業を笑って許す気にはなれない。

「いきなり人に向けて魔術を撃とうとするなんて、どう言ってもですか」

自然、ケイの声は厳しさを増すが、タキから返された返答はケイの予想を超える物だった。

「盗人猛々しいとはこの事ね。あなたこそ、何処から忍び込んだのよ。この変質者！」

「……はい？」

ケイにはタキの言っている事の意味がさっぱり分からない。思わず間の抜けた声を零し、ケイの隙を窺っているらしいタキを凝視する。彼女たちのクラスメイトであり、今日の朝食当番でもあるユエルイエンに一服盛られでもしたのかと考えるものの、ケイを呼びに来たくらいなのだから朝食にはまだ手を付けていないはずだった。「変質者よりも変態って言った方が良かったかしら？ 大人しく投降するなら官憲に突き出すだけで許してあげる。もし抵抗するなら……」

言葉と共に、タキの身体に陽炎の様な魔力が揺らぐ。タキが何を言いたいのかは、途切れた言葉の先を聞くまでも無く明らかだった。タキが右足を軽く引き、重心を落として魔術を構築する。先程よりも練られた魔力は少なく、威力が抑えられていたが、それはスピードを重視した結果だろう。

黄色と赤のグラデーションを描く術式がタキの足元より編み上げられ、室内の空間が式に合わせて書き換えられていくのが分かる。タキが手加減する気が無いと知ったケイは柳眉を寄せ、慎重に魔術式の仕上がりを読んでいく。恐らくタキは再度ケイが魔術式に介入してくるだろうと考えている。わざと複雑な術式を編んでいるのはその為だろう。

魔術式は改良に改良を重ねられ、現在ではかなり簡略化・最適化されている。現代の式に慣れた者の目には、無駄の多い過去の術式は馴染みが薄く、構築始めではどの術式であるのかを判断する事が難しい。しかしそれでも、タキが炎系の魔術を扱おうとしている事は分かる。ならば必ず何処かで着火を指示する公式が描かれる筈だ。ケイは素早く思考を巡らせて術式へ意識を集中する。瞬く間にタキの身を包み込む様にして、紅蓮の式が広がっていく。その最後の一節、発火を命じる術式が描き出されると同時、ケイの魔力が上書きにかかる。

「フレイムバースト！」

タキの声にに応じてその両手に表れる筈の手応えは感じられなかった。危うい所で魔術の発動は免れるものの、ケイはすぐさま淡い緑の式を編み上げて室内に緩やかな風を巻き起こす。威力を極小に抑えた風の魔術は空気を掻き乱し、可燃性の気体収集の術式の難易度を上げた。それと見て取ったタキが今度は電撃系統の魔術構築に入ると、ケイは急ぎ床を蹴り、タキとの距離を削って肉薄する。

魔術を扱う技術面に関してはケイに一日の長があるものの、こと威力に関してはタキの右に出る者は居ない。魔術で遣り合うとなるとタキ相手に手加減をする余裕がケイに有る筈も無くて、自分のペースで事を運ぶには接近戦闘に持ち込むしかなかった。

ケイの全身に魔力が満ちる。身体性能を向上させる為に魔力を蓄え、まずは牽制の意味を込めて握り込んだ右拳をタキの顔に向け、紙一重の距離で止める。

いや、止めた筈だったのだが、繰り出した拳はケイの予想に反し

てタキの左頬を捉える距離にまで伸びた。ケイと同じく魔力を纏ったタキだからこそ、その拳を避ける事が出来たのだろう。タキの上半身は右へ傾ぎ、すんでの所で直撃を避けたものの、黒い髪はケイの拳に掠り、数本がハラリと床に落ちた。

タキが言うところの変質者であるケイが想像以上の手練である事に、タキは驚くと同時に闘志を燃やした様だった。軽く斜めになった不安定な体勢から、左膝蹴りをケイの腹部へ向けて放つ。ケイはケイで自分が目測を誤った事に衝撃を受けていたのだが、視界端を過ぎた影と迫る気配とに、本能的に半歩身を下げて膝を避け、右掌で軽くタキの膝をいなした。しかし、軽く当てただけのつもりだった掌は、またしても想像以上にタキの膝を強く打ち、タキはバランスを崩して咄嗟にドアに右肩をぶつける事で転倒を免れる。

「タ……ッ！」

タキ、と咄嗟に名を呼んで駆け寄ろうとしたケイの動きをどう勘違いしたのか、タキが大きく扉を開け放って叫んだ。

「いやああ！ 変態！ 痴漢！ サイエスくん助けて！！」
「な……！？」

サイエスくんとは正式名称をサイエスくん六号と言う、タキが創り出した魔法生物だ。マジッククリエーター白くて丸い、つるんとした金属的なフォルムを持つ四足の生物で、体内に銃身を隠し持っている。実弾は装填されていなが、ゴム弾とは言え当たると物凄く痛いわけで、ケイは右手でタキの口を塞ぎ、左手で急いで扉を閉めた後、そのままタキの身を左手で拘束した。

そこで再びケイは違和感を覚える。タキはケイに比べると確かに小柄ではあるが、はたして頭部の位置はこんなに低かっただろうか。違和感の正体を見極めようと見下ろすケイの視線の先で、タキが必死に暴れて逃れようとしている。口を塞いでいるので何を言っているのか定かではないが、恐らく先程叫んだ台詞の数倍は聞くに堪えない悪口雑言の類だろう。タキの口がもごもごと動く感触を捉えるケイの右手。ケイはそれにも奇妙さを感じていた。タキの顔は片手

ですつぱりと覆ってしまえる程に小さかっただろうか。タキの体を抱き込むケイの左腕も、タキの小ささを訴えていた。タキが縮んだ……訳ではなかった。起きて直ぐは夢うつつの為か気が付かなかつたが、ドアノブの位置、棚の高さ、扉横のポールスタンドのサイズから、ケイは普段見慣れている筈の室内を眺める視点がいつもと違う事を知る。

(まさか……)

ケイはタキを捕えたまま僅かに体をずらし、扉横の壁に掛けている鏡に自らの姿を映し込んだ。黒髪の美少女を捕えているのは見慣れた長い金の髪を持つ、見慣れない赤い眼をした男の姿だった。

第五話 「森の民」 第二幕

鏡に映る金の髪は長く、すらりとした筋肉を纏う肩や背に流れている。白い輪郭は凜として引き締まり、伸びやかな腕が黒髪の少女、タキィヤンフウを捕え、関節がはつきりと節を作る長い指は少女の口元を覆う。少々丈の足りないと感じるズボンの裾から覗く足首のラインは骨や筋が目立ち、ケイは自らの身に起きた変化を確認して愕然とした表情を浮かべた。鏡の中のケイもまた同じ表情を見せているのだが、やはり見慣れた顔とは違っている。

タキは鏡の中で呆然とする男の姿に怪訝な表情を浮かべ、どうにも様子がおかしいと、暴れまくる動きを控えて男の様子を注意深く眺めた。驚きに瞠っていたケイの赤い双眸が揺らぎ、気付けば大人しくなっているタキへゆつくりとぎこちない仕草で流れる。

「……タキ。信じて貰えないかもしれませんが、私は真正銘、ケイです」

普段のケイよりも幾分低い、ハスキーな声。

「どうしても信じられないのなら、サイエスを呼んでも構いません。恐らく魔力の波形は変わっていないと思いますので」

ケイの申し出にタキが驚いて肩越しに振り返る。至近距離から眺めたケイの表情は酷く焦ったような、困ったような色が強く滲んでいたが、それはタキも同様だ。

「なんで、サイエスくんの識別方法を知ってるの」

タキが創り出したサイエスくん六号は、魔術師や魔導師が持つ魔力の揺らぎを測定して個人を識別している。タキとケイの波形は通行許可、ドール教室の男性陣はタキの許可が出る、もしくは特殊な条件下においてのみ通行を許可するようインプットされている。その他の人物に関しては、タキの許可がない限り問答無用で迎撃対象だ。タキが悲鳴を上げた時点でサイエスくん六号が飛び込んで来ない事も、落ち着いて考えればおかしな事だった。

タキの戸惑い交じりの疑問の声は、明確な答えを得る前に第三者の声によって遮られる。

「タキ！ どうした、何があった!？」

階段を駆け上る足音と共に聞こえたのは、切迫したユエ「ルイエ」の声。それに続く足音はリーユン「ルルデイヴァイサーやクウ」ラ「ルウ」の物だろう。複数の足音は階段を上りきり、右側の通路、タキの部屋の前へ差し掛かるうとしている。タキが逡巡したのは一瞬。自分を捕らえるケイの腕を振り払い、ドアノブに手を掛けて勢い良く押し開く。ケイが止める間も無い程の素早さだった。皆の前でどの様に釈明すれば良いのかに頭を悩ませたケイだったが、廊下に飛び出したタキの行動に思わず目を瞠る。

「右側の廊下には入って来ないで、って、何度も言ってるでしょう!」

続いて「サイエスくん!」と高らかに魔法生物に呼び掛け、右手の人差し指をビシッと先頭に立つユエに向けて突き付けた。

「排除しちゃって!」

「ちょ……、おいこら待て、待ちなさい、お願い待って」

タキの悲鳴が聞こえたので来てみれば、その本人からのまさかの迎撃態勢にユエが慌ててたたらを踏んで立ち止まる。続いてリーユンとルウも階段を上った辺りで足を止め、何事かとユエの背中と、その向こうで身構えるサイエスくん六号とタキとを交互に見やった。サイエスくん六号の滑らかな背にスリットが現れ、銃身が競り上がる。銃口は真っ直ぐユエを捕捉し、次の瞬間には勢い良くゴム弾が吐き出された。

「理不尽だ!!」

ユエの叫びはもつともである。しかしながらそんな訴えが通じる相手では無いと半ば悟りを開いた様な心境で、リーユンとルウの二人は事の成り行きを見守った。

初弾を何とかかわしたユエだったが、次々と打ち出される新たなゴム弾と、一度は避けたものの廊下の床や壁で跳弾するゴム弾とが

容赦無く襲い掛かり、ビシバシと非常に痛そうなる音を立てつつユエの身を打つ。

「痛っ、痛いつてば、ちよっ、やめなさい、いだ、いだだだ……っ」

ユエは堪らず撤退するが、サイエスくん六号の攻撃の手が止む事は無い。リーユンとルウは思わずホールドアップの姿勢で左右に避けて道を開けた。階段付近まで逃げて来たユエが、此処まで戻れば話も出来るだろうと振り返ったところ、サイエスくんが放ったゴム弾の一つがユエの足元に打ち込まれ、大きくバランスを崩す。

「げっ」

「ユエさん!？」

「うわぁ……」

傾いだユエの体はまるでスローモーションのように階段へ向けて吸い込まれ、ズダダダダ、と盛大な音を響かせながら階下へ滑り落ちていった。両手を合わせて拝むルウに何とも言えない表情を浮かべるリーユン。

「ちよっとやり過ぎたかしら」

言葉とは裏腹に悪びれないタキへ呆れた視線を送り、リーユンはユエの遺志を継いで問いを投げかける。

「あの、それで、……大丈夫なの？」

「ええ、何でもないわ。ちよっと寝惚けてただけなの。心配掛けてごめんなさい」

かなり無理のある言い訳だったが、リーユンはそれ以上追及せず、に溜息を一つ吐いて見せ、

「何も無いなら良いけど、ユエさんにもちゃんと謝っておいた方が良いと思うよ。タキの悲鳴を聞いて真っ先に飛び出して行ったんだから」

と、小さな子に言い聞かせるような言葉を残し、タキに背を向け、伸びてしまったユエの元へ急ぐ。リーユンの背に「わかったわ」と声を掛けるタキにもようやく反省の色が見え、ルウが面白い物を見

たと言わんばかりの視線をタキへ向けた。

「で？ 飯はどーすんだ？」

ルウの問い掛けに少し考える仕草を見せてから、タキは小さく左右へ首を振る。

「後でケイの部屋で食べるから、みんなは先に済ませてて」

「りょーかい」

タキの返答を受けたルウはひらりと片手を振り、リーユンに続いて階段を下りて行く。残されたタキはルウにならない、此処からは見えない階下のユエへ向けて両手を合わせておいた。それからサイエスくん六号に見張りを言いつけ、ケイの部屋へと戻る。

「……タキ」

扉を完全に閉めたところでケイの申し訳なさそうな表情と声に遭遇し、タキは「気にしない気にしない」と右手をひらひら振ってケイをベッドに座るように促し、自分は椅子を引き寄せて其処に腰を下ろした。

「それで、何がどうしてそうだったのよ」

タキは改めてケイの姿を眺める。寝台に腰掛ける際の優雅な仕草や真っ直ぐ背を伸ばして座る姿勢は確かにケイと同じで、目の前の男がケイであると認めざるを得ない。

「私の眼の色が、赤色になっっているでしょう？」

ケイはどう説明しようかと言葉を探しながら、ゆっくりとした語調で話し始める。

「これは、エルフが成人の儀を済ませる前、つまり、未分化である事の証なのです」

「未分化？」

聞きなれない言葉に、タキが反芻して首を傾がせた。

「ええ。……そうですね、少しエルヴン族についてお話ししましょうか」

エルヴン族とヒト族は元々同じ種であった事。やがて精霊と言葉を交わせる者が精霊界や精神世界と呼ばれる世界と物質世界の狭間

に住み始め、エルヴン族として独自の進化を遂げて行った。それから長い年月を経て、エルヴン族も三つの種族に分かれて行く。精神世界と物質世界の狭間に住まうエルフ。肉体を持ちながらにして精神世界に住まうピクシー。森林から広々とした草原へ住処を移したグラスランナー。

「この辺りの話は広く伝わっていると思いますが、エルフは酷く閉鎖的ですので、その生態となると人よりも長寿であると言う事以外は、恐らく殆どの人間が知らないでしょう」

「そうね。ぱっと思いつかぶのが、長生きで、精霊と言葉を交わせて、耳が尖ってて、森に住む平和主義者……って事くらいかしら」

顎先に指を宛がいながら、タキが思い出す様な仕草でケイに言葉を返す。ケイは小さな頷きを見せて視線を窓の外へ流し、説明を続けた。

「エルフが長命種となったのは精神世界の傍らで過ごす影響なのでしょう。そして長命である為に、私たちには強く激しい感情、そう……、例えば衝動と呼ばれるような突発的な感情を抱いたり、何かに強く焦がれたり、執着したりと言った心の動きは徐々に薄れて行きました。恐らく、長く生きている間にあらゆる感情や感覚に慣れて、麻痺してしまうのでしょうか」

小さく息を吐くケイの横顔が寂しそうで、タキが気遣わしげな視線を向ける。

「けれどそれは、私たちの防衛本能でもあるのです」

タキの眼差しに気付いたケイが、柔らかな笑みを浮かべて視線をタキへ戻した。

「長く生きると言う事は、それだけ多くの事を経験します。それらに振り回される事無く心穏やかに過ごすと言うのは、とても重要な事なのですよ？」

ケイは一度言葉を区切り、タキが渋々ながらも納得した様子を見せるのを確認すれば、一つ呼吸を挟んでから再度口を開く。

「感情の起伏が乏しく長寿であると言うのは、良く言えば保守的、

悪い言い方をすると発展性が無いと言えます。エルフが長寿であるにも拘わらず個体数が増えないのも、そうした要因が理由なのでしようね。そこで、エルフは先天的な性別を失いました」

「……うん？　つまり、生殖能力が退化したって事かしら？」

「いまいち飲み込めないらしいタキの疑問に、ケイは丁寧に答えていく。

「効率化した、と表現した方が正しいでしょうね。先程『未分化』と言ったでしょう？　例えば、好きになった相手が同性であった場合、子供は出来ません。ですが、未分化体であれば相手に合わせて性別を変える事が出来ます」

「なるほど。ケイはカイリ先生が好きだから、女性体になった訳ね」

「え、いえ、別にそう言う訳では。そもそも先生と出会ったのは学院に来てからですし、その時私は既に女性体で……」

「うーん、でも今ケイの性別が無くなってるって事は、カイリ先生の事は諦めたのかしら」

「いえ、あの、原因は私にも分からないのです。成人の儀を終えて一度分化した個体が未分化に戻ると言うのは、聞いた事が……」

「つまり、ケイは女としてカイリ先生の傍に居るのを苦痛に感じた訳ね。それで、もしかして男ならMEM教師に気兼ねなくカイリ先生と一緒に居られるとか思ったんじゃないかしら。違う？」

ケイが差し挟む言葉を聞いていない様子で話し続けるタキの結論に、ケイは思わず絶句してしまった。タキの思考過程と導き出した答えとに、「そうかも知れない」と感じる気持ちがあったのだ。

言葉に詰まってしまったケイをジーツと眺め、タキが盛大な溜息を吐き出す。

「そりゃ、女としてべったんなのを気にする気持ちはわかるわ。MEM教師なんて反則的なサイズだし、スウォン院長と言いつェイママオシーの妹と言いつ、カイリ先生の周りは胸のでかいスタイルが良い人ばかり集まってるわよ。だからと言って、若さで勝負って言っても、ケイは見た目は若いけど実際中身はカイリ先生より遙かに年

上だもの、勝負を投げ出したくなっても仕方がないわ。でもね、それが何だっけ言う……あら？」

視線を起こしたタキの目の前で、これ以上無い程に肩を落として落ち込むケイの姿があった。しかも若干涙目である。

「……ぺったん……、遙かに年上……」

「ケ、ケイ？ や、あのね、違うのよ、だから、大事なのは思いの強さであって、ぺったんで女の魅力に欠けてても、親子以上に年が離れてても気にする事ないわよって言う話だったんだけど……」

タキが言葉を重ねれば重ねる程、見えない棘がケイに突き刺さっていく様だった。両手を胸に宛がってどんよりとした空気を纏い始めたケイを前にして、タキは流石に自らの失言を知って口を閉ざす。それから話題を逸らそうと視線を忙しく動かして、ふと思いついた事柄に言及した。

「あ、そうだ、ケイ。あなた着替えた方が良いわよ。今の姿じゃどう見ても女装の変態にしか見えないもの」

その台詞で止めを刺されたかのように、ケイの身体が傾いで寝台に突っ伏す。タキからはケイの表情を窺う事は出来ないが、もしかしたら本当に冗談抜きで泣き出してしまったのかも知れない。タキの背中に冷や汗が流れた。

「……タキ」

低く、くぐもったケイの声がちよっと怖い。タキは思わず椅子の上で姿勢を正して続く言葉を待った。

「確かに、私は分化前から男として育てられました。ですが、今は、男性でも女性でも無いのですよ。……それ程までに、私には女性としての魅力が感じられませんか、足りていませんか、皆無ですか」

立て続けの質問に半ば脅された心持ちでタキが勢い良く首を横に振り、椅子から立ち上がって突っ伏したままのケイへ近付いて行く。「そ、そんな事ないわよ。だって、ほら、ケイとすれ違った相手は必ずと言って良い程ケイの事を振り返るじゃない？ それってケイが物凄く美形で、思わず目を奪われちゃってるって事だもの」

「エルフの容貌が人の美的感覚に沿うのは事実かも知れませんが、男女問わずの反応と言う事は、それは女性的な魅力とは少し違いませんか？」

「あー、もう、あなた一体何人の男に告白されてんのよ。それで魅力が無いなんて嘆いてたら、大半の同性を敵に回すわよ？」

「……そう、でしょうか」

ぐす、とケイが鼻を鳴らす音は聞こえない振りで、タキは勢い良く頷いて見せた。

「そうよ。……まあ、私もちょっと言い過ぎたわ。ごめんなさい」
ベッドに突っ伏したケイの傍ら、柔らかなマットに腰を下ろして、タキはシーツに流れるケイの長い髪に触れる。それをツンツンと軽く引つ張れば、ケイは洪々と言った様子ながらも顔を起こしてタキと視線を合わせた。

「それにしても……」

ケイの潤んだ紅の双眸を見下ろしながら、タキがしみじみとした口調で呟く。

「これはまた随分と女の子が憧れそうな王子様よね」

「嬉しくありません」

すぐさま返される返答に、タキは思わず声を立てて笑った。

「カイリ先生の好みが王子様だったら良かったのにね。ま、取り敢えずユエの服を拝借して来るから、ちょっと待ってて」

「……あの、表に出ないなら別に服装は何でも良いと思うのですけれど」

ふと思いついた疑問の声は、タキが扉を閉める音によってかき消される。ケイはのろのろと身体を起こして寝台の上に座り直すと、遠ざかるタキの足音を扉越しに聞きながら小さな溜息を吐いた。

「さて、どうやって元に戻りましょうか」

成人の儀では特殊な香を使って分化を促すのだが、その原料も調合方法もケイは知らない。森には戻る気になれないし、仮に向かうにしても一月は掛かる。もっと近くのエルフの森を訪れると言う手

もあるにはあるが、他集落の、しかも俗世に染まったエルフを快く迎えてくれるかどうかは定かではない。

現状これと言って確実な手段は無く、精神統一や瞑想などで様子を見るのが一番だろうか。

ケイが思索に耽っていると、唐突にタキの声が掛った。

「ケイ、これなんてどう？」

いつ扉を開けたのか、考えに没頭していた為にタキが戻って来ていた事に気付かなかっただけ。ケイは慌てて顔を起こし、タキに見せられた衣服を視界に映す。

「……どう、と言われましても」

ベッドの上に広げられる衣類を目で追いながら、ケイは途方にくれた表情を浮かべた。

「少し、その、はしたなくは無いでしょ？」

伸縮性のある生地で作られた濃紺のシャツに、光沢のある細身の黒いパンツは身体のラインがはっきりと分かるだろう物で、それらには部分鎧、所謂プレートアーマーやらプロテクターと呼ばれる防具を取り付ける為のベルトや金具があしらわれていた。寝台の下に揃えられたなめし革のブーツも見るからに丈夫そうである。

恐らくは旅行者向けに作られた物なのだろうが、ユエがこうした衣装を持つている事は驚きだった。

「あのねえ、ケイ。普段着ないような服にしておかないと、ケイだつてバレちゃうでしょ？ それでも良いの？」

それは困る、と納得してしまつたのが運の尽きで、ケイは請われるままにユエの衣装を身に着ける。サイズは少々大きめではあつたけれど、そこはタキが嬉々としてベルトや金具で調整し、見られる姿にはなつていた。

「さ、それじゃあ髪の毛もやっちゃいましょうか」

鏡台の前にケイを座らせ、タキは鼻歌でも歌いそつな様子で長い金糸にブラシを掛ける。それからサイドに細い三つ編みを作り、四つ程の房に分けた髪と共に後ろで纏め上げ、黒い細紐五本を使って

しっかりと固定した。

その一連の行動が終わるか終わらないかと言う所で、ケイが口を開く。

「あの、タキ？ よく考えてみれば、私は外へ出る気がないので、から、こうした変装をする必要は無かったのではありませんか？」

「ついうっかりとタキの勢いに流されてしまったケイだったが、始めに伝えそびれた言葉を改めてタキへ投げ掛けた。

「何言ってるのよ。部屋に引き籠ってて今の姿になったんだから、ここに居たって悪化することはあっても、元に戻るなんて事がある訳ないじゃない」

毛先の流れを指先でちよいちよいと整え、満足そうな笑みを浮かべるタキとは対照的に、非常に物言いたげな眼差しをしたケイは鏡に映る自らの姿を眺めて溜息を吐く。

「分かりました。この衣装はユエの趣味ではなくて、タキの趣味ですな」

そんな呆れ混じりの断言を否定する言葉は無く、ケイはどこからどう見ても男にしか見えない姿のまま、外へ送り出される事となったのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0052/>

魔術学院騒動記

2010年12月18日19時49分発行